

ハイスクールD×D 光と闇のラタトスク

カルパン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

+ 警告タグ

エミルオリ主化

89 話試験的に台本形式無し

ある少年は神の不本意なミスによって死んでしまった
そしてその少年は神によって転生させられた。

チートとも呼ぶべき力を持って・・・

目次

IF もしエミルが英霊となり、FGOで召喚されたら	1
転生剣士のビギニングサーガ	
プロローグ	7
プロローグ2	10
新しい家族、増えました！	12
キャラクター設定1	15
キャラクター設定2	20
旧校舎のディアボロス	
帰ってきました！	23
三大勢力のトップです！	26
転入します！	28
悪魔になります！	32
悪魔の朝は大変です！	37
使いが来ます！	39
悪魔の自己紹介です！	42
シスターと出会っちゃいました！	45
はぐれ悪魔を吹き飛ばします！	47
千年伯爵との遭遇です！	51
聖女さん、助けます！	56
後輩悪魔できました！	61
告られちゃいました！	65
歓迎会開始です！	67
戦闘校舎のフェニックス	

契約取らせませす！	70
部長が帝に夜這いですと？	73
フェニックス？いえ、唐揚げです。	76
修行合宿開始です！	81
修行合宿中です！Part1	84
修行合宿中です！Part2	87
新能力解放です！	90
修行合宿の夕ご飯！	92
入浴の時間です！	95
修行合宿です！ー5日目ー	98
告白します！	100
修行の成果です！	104
レーティングゲーム出れねえよう！	107
恋人、助けます！	110
本気、出します！	114
帝の変化	118
正体、明かします！	121
美優の誘惑	125
眷属の顔合わせ、します！	128
使い魔、ゲットします！	132
帝のお仕事っ！	136
月光校庭のエクスカリバー	140
その悪夢は何を示すか	143
襲撃者	146
攫われし帝	146

悪夢、殺人、それが示すは帝の黒き過去

聖剣、超えます！

残酷なる悪魔

心の温もり

帝とリアスの初デート

停止教室のヴァンパイア

夏です、水着です、修羅場です！

魔王様、訪問です！

魔王様、お泊りです！

二天龍、邂逅です！

普段の学校生活です！

授業参観、始まります！

男の娘な後輩、できました！

兄と妹、恋人（仮）へ

もう許してえ!!!by帝

トップ会談、始まります！

蘇る悪魔

妹に襲われました。

アザゼルの、わくわく！チビチビマシン一号君！（嘘）

魔界転移のラタトスク

過去の愚行に、ただ泣き叫ぶ

諸悪の根源

死ぬと思ったか？残念！死にはしたが蘇るのだよ！by帝

サーヴァント、召喚です！

世界の理を塗り替える禁手

150

152

159

164

168

173

179

182

185

189

193

201

209

214

221

226

234

239

242

248

255

261

266

間の話？そんなものはなかった。いいね？	b y 帝	272
感動の再会……と思ったけど現実是非情だね！	b y 木場	277
砂塵戦争、開幕		282
砂塵戦争 覚醒		286
魔龍、マジでどこ？	b y 帝	291
最近サブタイの方向性とかネタが尽きて来た。	b y 作者	296
キャラが定まらぬ理由、ここにあり！	b y 作者	303
今明かすのは帝の過去		308
もう俺には人としての権利って無いのかな……	b y 帝	314
魔剣士		319
聖女の告白		324
帝、衝撃思考!?		330
目覚める災厄 失われし命		337
なんか、筋肉と筋肉が……	b y 帝	343
覇を越えし龍神		350
このスケコマシツ!!!	b y 帝の中の人達	356
着せ替え人形帝ちゃん		363
聖処女なんて嘘だったんだ（遠い目	b y 帝	369
元凶討伐？		375
開幕シリアス？何を言ってやがるんだね君は。そんなもの、当の昔		380
に俺が殺したよ（b y 帝		387
実は朝滅茶苦茶体が怠かったり重かったり……	b y 帝	393
酷いわ作者ツ浮気はしないって言ってたのに！そんなに私のこと		
が嫌いなのか？教えてくれたら頑張って直すか（r y	b y 帝	

I F もしエミルが英霊となり、F G Oで召喚された
ら

真名

エミル・キャスタニエ

クラス

セイバー

属性

中庸

性別

男

キャラクター説明

訳あつて異世界より召喚されたサーヴァント。生前は、3度世界を
救っており、所有する力は神さえも軽々と屠る。

ステータス

筋力：A

耐久：B

敏捷：A++

魔力：B+

幸運：C

宝具：EX

保有スキル

カリスマ：C-

魅了：C+

千刃：A+

刃を持った武器の扱いの向上。及び敏捷ステータスに+補正

剣聖：A

剣の使用時、ステータスに+の大補正

^{バランス・プレイク}
禁手化：A++

一部所有武器の覚醒 武器によっては定められたステータスに+

の極大補正

ラタトスク化：A+

ステータスに+の極補正 容姿が多少変化を起こす

クラス別スキル

対魔力：D

騎乗：C

宝具

テンペスト・ブレイザー
天地乖離の断界剣

対界宝具

レンジ：10～100

最大捕捉人数：10000

ランク：A++

詠唱：――輝け、光を吞め！光と闇を宿したこの剣から、逃げられ
ると思うなよ！全てを葬れ！テンペスト・ブレイザー天地乖離の断界剣!!!!

(こちらが適応されると思われる)

せんじんおうぎ
千刃奥義

対人・対軍宝具

レンジ：1～10

最大捕捉人数：1～1000

ランクC

カリス・トウ・カルナヴァール
神聖なる絶望の神淵剣

対軍宝具

レンジ：1～100

最大捕捉人数：1～

ランク：B+

詠唱：――これは俺が千刃剣士たる由縁。この剣の雨の前に、生き
残れるかな？さあ、全てを刻め！カリス・トウ・カルナヴァール神聖なる絶望の神淵剣!!!!

ラスティ・フラム
概念消去

対概念宝具

レンジ：1

最大捕捉人数：1

ランク：EX

詠唱：――この剣の権能を以て、汝の力をここに沈めよう。響き、轟

け！ラスティ・フラム概念消去!!!!

ビギニング・フラム
概念生成

生成宝具

レンジ：1

最大捕捉人数：1

ランク：EX

詠唱：ーこの剣の権能を以て、汝に新たなる力を授けよう。共鳴し、湧き上がれ！ビギニング・フラム！！概念生成!!!

絆ランクLv2で解放

過去に友人を殺め、一時期悪の道を走ったが、目的が現実否定のためであり、余りに現実否定を続けた所為で友人を殺めてからそれまでの記憶を失うということがあった。しかし、現在は記憶を取り戻し、過去と向き合って受け止めて認めている。

絆ランクLv3で解放

本来の生まれは、人間であったが、ある時に力に目覚め、龍と精霊の血を流すことに。そして、生前最も愛する女性と出会い、悪魔としての血も宿すことになる。

絆ランクLv4で解放

実の正体は精霊ラタトスクという精霊。世界を見守りながらも世界を守るが、宿主たるエミルとは親密な関係で、最早切っても切り離せない腐れ縁となってしまった。

絆ランクLv5で解放

大切なものは何があっても守ろうとする。そのため、残虐非道になろうと非道徳的な行為を行おうと一切の妥協も躊躇もしない。故にその行動も、仲間への愛の現れである。

降臨時

「サーヴァントセイバー、真名をエミル・キャスタニエと言う。ま、気楽に頼むぜ、マスター。」

会話1

「あー暇だー！マスターどつか散歩に行こうぜ！じゃないと終いにアトミックバズーカぶっぱしそうなんだけど！」

会話2

「あいつら大丈夫かな……ん？ああすまないマスター。少し考え事をしていたみたいだ。気にしないでくれ。」

会話3

「これでも、一時期マスターをやっていたことがあってな。機会があれば先輩マスターとして何か助言をくれてやろう。」

会話4

「おーアニキー！久しぶりじゃねえか！また会えるとは思ってなかったよ！ん？あーすまん、俺のクラスセイバーだからさ、今回はあれ持っていないんだ。またランサーとして呼ばれた俺に稽古付けてやってくれ。」

会話5

「ん？ぐべあつ!?あだだだだだだ！やめろ総司！久しぶりに会えて俺も嬉しいけどダイレクトに鳩尾に入ってるから！」

会話6

「あ、エミヤ！久しぶりだな。元気にしてたか？ハハハ、まあ相変わらずで安心したよ。またいつか一緒に飯作ろうぜ。」

会話7

「おわっ!?……だーれだつて……ジャンヌか？あ、あはははは、はいはい、俺も会えて嬉しいですよ。」

会話8

「よー邪ンヌ。つて、相変わらず辛辣だな。さすがに寛大なエミルくんでも少し傷つくぜ?」

会話9

「ふむ、あれがかの有名な英雄王か。確か世の宝に相当する物を集めまくってたとかだったか。俺も気をつけないと何か奪われかねな。」

会話10

「はあ？アルトリア顔？セイバー殺すう!?ちよつとまで！アルトリア顔って何だよ!?!いやつてか自分以外のセイバー殺すとか言ってるけどあんたセイバーじゃなくてアサシンだろお!!」

会話11

「初めまして、ジル・ド・レエ卿。私の名はエミル・キャスタニエ。重ね重ね、ジャンヌ・ダルクから貴方のことを聞いて……え？俺がジャ

ンヌを誑かしたあり!!ちよつと待て!何かの誤解で……
ぎやああああああ!!!」

好きなこと

!!!!

「好きなこと……か。そうだな、強いて言えば、愛する人、大切に思う人達と平和な日常を過ごすこと……かな?」

嫌いなこと

「嫌いなことか……。どっちかといえば者だが、力も無いくせに大切な人皆を守りたいとほざく者……つまりは自分自身が嫌いつてことだ。」

聖杯について

「聖杯にかける願いか……。実の所、今はこのままの生活で満足している。正直俺は要らないが、マスターが必要なら、話は別だ。」

イベント期間中

「少し外が騒がしいな。少し宝具ぶっぱして黙らせようか?」

絆Lv1

「俺の過去を知りたい、だと?まあ別にいいがあまり聞いていい物とは思えないぞ?」

絆Lv2

「おいおいマスター、あんまり俺に肩入れてたら、もう後には戻れないぞ?」

絆Lv3

「ハア……ここまで来たならもうヤケだ。最後まで付いてくぜ、マスター。」

絆Lv4

「どうやら、俺はアンタを侮つてたみたいだ。俺の負けだ、マスター。粉骨碎身、アンタを守るためにこの身全てを使って、アンタの剣となろう。」

絆Lv5

「無理し過ぎだ。少しは休んだらどうだ?……それと、もう少しは俺を頼れ。無茶ばっかするアンタを心配するこっちの身にもなつてくれ。」

誕生日

「誕生日おめでとう、マスター。何か食べたいものでリクエストがあるなら言ってくれ。腕によりをかけて作らせていただきますとも。」

霊基再臨1

「おお、力が溢れるな。これでより一層、戦闘に身が入る。」

霊基再臨2

「さて、まだまだこれからだ。強化の方、よろしく頼むぜ。」

霊基再臨3

「これは……凄いな、全盛期と同じくらいじゃないか。ありがとよ、マスター。」

霊基再臨4

「まさかここまで至るとはな……。こんな力、感じたことも無い。これも全部、マスターのおかげだな。」

レベルアップ

「よし、また少し強くなったな。」

戦闘不能1

「まだ……終われ……ない……のに……!」

戦闘不能2

「また……守れなかった……のか……!」

勝利1

「呆気ないな。もう少し鍛錬してから出直してきてはどうだ? つていないやつに言っても無駄か。」

勝利2

「もう少し楽しめると思っていたんだが、どうやらの外れみたいだったな。」

転生剣士のビギニングサーガ プロローグ

主人公 s i d e

それはある日曜日の日曜日の昼のことだった。

俺は信号の赤が緑になるのを少し苛立ちながら待っていた。貧乏ゆすりをしながら待っていると、ふと、目の前を小さな影が風船を追いかけて赤の信号をそのまま渡ろうとしていたんだ。俺は危ないなあと思いつつながら周りを見渡すとすぐさま信号に走っていた。そこには、かなり大型なトラックが来ていたからだ。柄にもないな、いつもなら体より先に頭が動くのに・・・。

そんなことを考えながら小さな影の主を突き飛ばした瞬間、体が宙を舞った。そう思うと、今度は肉が地面に落ちた音がした。ああ、なんだか眠くなってきた。もう体が動かないことを確認すると、俺は意識を捨てた。

「なんだこころ？」

まさか俺の最初の一言はこれとは・・・やめよう、なんか虚しくなってきた（；；）

もう一度辺りは真つ暗な以外何も無い。様々な疑問を持つ中、俺の前に1人の女性が現れた。

「ようこそ、死後の世界へ」

女性は微笑みながら言った。

ナンダッテ？死後の世界ダッテ？

「えっと、俺は一体？」

現状を把握する為に、今は最適かと思われれることを言った。すると女性は、

「貴方は先ほど、小さな女の子を庇ってトラックに轢かれてしまったんです。私のお父様のミスも含めてね。」

大体は理解できた。恐らくこの女性は神様なのだろう。

そう言えば、あの子はどうなったんだろうか、俺が聞こうとすると、「大丈夫です。膝を擦りむいただけですから。」

彼女、否、神様は女の子は無事だということを知らせてくれた。

「そうですか、よかったですあ。」

「ふふふっ。」

え？なんかおかしいこと言ったか？

「お優しいんですね。貴方のように、他者を思いやる優しさを持った人は初めて見ました。あ、そおいえばまだ自己紹介がまだでしたね。私はラウ、全知全能の神、ゼウスの娘です。」

まさかかの有名な神ゼウスの娘さんだったとは思わなかった。取り敢えず俺も自己紹介をしよう。

「俺は出雲、晴翔と言います。晴翔かハルと呼んで下さい。」

「それでは晴翔さん、今の状況を説明しますね。」

そして俺は、神ゼウスのミスにより死んでしまったこと、死ぬ直前に、人命を救ったと言う二重の意味をかねて、転生する権利と転生する世界を選ぶ権利、そして、転生の際に、特典を幾つか貰えると言うことを知った。そして今、

「あの、その、えと、・・・あううううう／＼／＼」

俺は笑顔でラウに抱きついていた。何をそんなに恥ずかしがるんだろう？まあ取り敢えず離れるか。

「あっ・・・」

切なそうな声をラウは発する。

「ラウ、俺はもう一度人生を1から始め直したい。」

「わかりました。では、転生する世界をe「ハイスクールD×Dの世界で！」あ、はっはい。」

これには、理由がある。ただ単にイッセーと友達になりたい！以上だ、異論は認めん

「では、特典についててですが、どうしますか？」

そうだなあ、どうしようか。

—考える事1分—

「じゃあ、赤竜帝ドライグと白竜皇アルビオンの所持者は2人ずついて、赤竜帝の1人は俺で。次に、神の力を、最後は、優しさに溢れた親が欲しい。」

何せ俺がいた世界の親は飛んだ屑野郎だったからな！

「わかりました。さあ、この門をくぐれば、貴方は新しく転生できます。貴方の新たな人生に幸あれ！」

「はははっ。大袈裟だな、全く。でも、ありがとう。」

チュツ

俺はラウの頬にキスをした。

「え、あの、その、えと、きゆうくくく／＼／＼」

？何で倒れんだよ、まあいつか。

そして俺は門の前に立ち止まった。

これから、俺の新しい人生が始まるんだ。さて、いくか！

そして俺は再び宙を、いや、宙に飛び込んだ。

To be continued

プロローグ2

転生してから約7年たった。

この7年で何が起きたか簡潔に説明しよう。

まず、俺は皇家の、皇 帝(すめらぎ みかど)として生まれた。父は皇 誠、大手ゲーム企業の開発部門部長として働いている。母は皇 優花、手に職をつけてはいないが、家の中では家事を自分から進んで行うしつかり者だ。余談だが、俺には外国籍もあるらしく、父さん曰く、その方が都合上いい時がある。と母さんと話していた。なんでも、エミル・キャスタニエだとか・・・

4歳・・・一誠と会った。どうやら一誠は父方の従兄弟らしい。美優と言う母方の従兄妹にも会った。帝お兄ちゃんか・・・悪くないな。

5歳・・・一誠と美優が俺の新しい兄弟になった。聞けば、2人の両親は、交通事故に遭ったようで、2人はショックのあまりふさぎこんでしまった。1年かけて、ようやく心を開いてくれた時は、俺は嬉し涙を激流のように流した。そして今では、美優は春川から皇に苗字を変え、一誠も兵藤から皇に苗字変えた。

そんなことがあったわけで、今は、俺たち3人兄妹と父さんと母さんの5人で住んでいる。そう、今は・・・な。

ある日、俺は2匹の猫を見つけた。2匹とも、体が傷だらけで、そのうちの黒い猫は俺を威嚇し、後ろにいる白い猫は倒れている。俺が近づくと、黒猫は俺を引っ掻こうとするが、俺はそれを避けて、黒猫の頭を撫でながら言った。

「大丈夫。俺は君たちを攻撃する気はないし傷付ける気もない。ただその白猫を助けたいだけだ。だから、通してくれないか？」と。

すると黒猫はその場を離れてくれた。正直、物分りが良くてたすかった。そして俺は白猫を抱えると、黒猫に

「お前もついてこい！」と言った。すると黒猫は俺の腕に飛び乗って

きた。こいつもしかして・・・

帝 side out

黒猫 side

この子は一体何者なのにあ？いきなり現れたと思ったら、白音を助
けたいなんて言い出して。この子はバカなのにあ？そんなことを
考えていると、ある1つの何の変哲もない家に着いたにあ。この子の
家なのにあ？何れにせよこの子には警戒しないといけないにあ。

黒猫 side out

帝 side

俺は玄関のドアを荒々しく開けながら、けたたましい声で叫んだ。

「母さん！救急箱！救急箱取って！」

「どうしたの？帝？ってその猫！」

「うん、そうなんだ！だから早く救急箱取ってきて！」

「わかったわ。少し待ってなさい。」

母さんのおかげで、なんとか猫の命は救うことができた。

多分目を覚ますのは明日らしい。さあ、明日はどうするかな。

To be continued

新しい家族、増えました！

黒猫side

目を覚ますと見たことのない景色が広がっていたにや。

ここは一体何処にや？

「え？え？えつと・・・えええええええ！」

声が聞こえた方向を見ると、金髪の少年が目を丸くして腰を抜いていたのにや。

なんでこんなに驚いているのか分からないけど、お礼はしないからね。

「助けてくれて、ありがとう・・・？」

「あ、もしかしたらあんた、さっきの黒猫かい？」

「当たりにや。私は猫又の黒歌にや。隣で寝てる子は私の妹の白音だにや。」

「そつか。じゃあ俺も自己紹介しないとな。俺は皇 帝、もとい、エミル・キャスタニエだ。呼びやすい方で呼んでくれ。」

「わかったにや。さっきは助けてくれてありがとう、帝。」

「どういたしまして。さて、早速だけど話を聞かせてくれないか？」

私は頭を縦に振って、質問された内容について、全てを語った。すると帝は、

「はあー、そっちもそっちで大変だな。あ、そうだ！黒歌、白音ちゃんと一緒に俺の家族にならないか？」と、目を輝かせて言った。

黒歌side out

帝side

俺は今、黒歌と白音以外の家族で、家族会議を行っていた。議題内容は、黒歌と白音を養子として迎え受けるかどうかなのだが、みんなが賛成だったために、謎の脱力感を味わった。俺の思い描いた家族会議は、もつとこう、賛成派と反対派の激しい口論だったのだが・・・まあ考えたら負けだな。そんなわけで、新しく、義姉と義妹ができた。

それからしばらく後の日、俺たち5人兄妹は買い物に、行っていた。だが、ある1つの神社に似た家の前を通ると不穏な空気を感じた。

「ごめん、用事思い出したから、先にみんな帰ってて。」

「うん。でも早く帰ってきてね。お兄ちゃん。」

「ああ、わかってるよ。」

そう言つて、俺はその家に向かった。

そこに感じる気配は、6つあった。1つは怯えきつた気配、もう1つは誰かを守らんとする気配、残る4つは殺意を持った気配だった。これぐらいなら、本気の5%も出す必要はないな。まあ念のためにラタトスク化するか。

「さて、そろそろ突っ込むか！」

ガシャーン！

「グボアア！」

足の裏からは人を蹴る感覚が伝わってくる。おそらく、殺気を放っていた4人中の1人だろう。

「誰だ！貴様はあ！」

「俺か？そうだなあ、名乗るとすれば俺は・・・」

ラタトスクだ！」

帝side out

三人称side

それは誰が見ても圧倒的だった。髪の毛の端が、鮮やかなエメラルドグリーン色に染まった金髪で、右眼は中央が赤く、左眼は中央が赤く、その周りを黒くした少年は、まばたきをすると共に一瞬にして、男達を葬り、何事も無いように、背後にいた1人の女性と、1人の女の子に少年は語りかけた。

「大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です・・・」

ポニーテールが特徴的な黒髪の女性はそう答えると、少年は、「そうですねか。」と言い、去ろうとした。だが、それはある少女によって止め

られた。

「まって！あなたはだれ？」

「言っただろう？俺はラタトスクだ。」

「違うの！貴方の本当の名前を教えてください（涙目）。」

「・・・えつとだなあ・・・」

「ダメ？（涙目＋上目遣い）」

「・・・皇 帝、ただのしがない7歳児さ。」

そして少年は去っていった。

To be continued

キャラクター設定1

皇帝（すめらぎ みかど） もとい、エミル・キャスタニエ
性別：男

身長：175cm

体重：63kg

年齢：7歳↓17歳

誕生日：5月3日

好き：ケーキ等の甘いもの・辛いもの・鳥料理・仲間と認識する人
皆・リアス（好きの領域を超えて愛している）

嫌い：コカトリス・仲間を傷つける者

性格：普段は冷静に見られがちだが、話すときは基本冗談やふざけたりすることが多い。魔界転移のラタトスク編の途中から、一気に色々と碎け、以前より接しやすくなった。また、本人の性格上、少し茶目つきがあり、よくボケに回ったりするが、基本的にはツツコミ要員からは逃れられない

また、冷静に見られがちだが、その実情は、非常に情に厚く仲間想いで、仲間や家族を自分の体や魂までも差し出してまで守ろうとする程で、無茶をしすぎて何度も仲間を泣かせた。

そして、成績優秀でスポーツ万能、持ち前のコミュニケーション能力でクラスのみんなを裏から引っ張り、生徒、先生共に人望が厚く、リアスには、「将来はきつと良い王に成る。」とまで期待される。

また、女性に關しての知識が非常に疎く、好きだと言われても「俺より君に相応しい男は他にいるはず。だから俺のことは諦めた方がいい。」というほどで、元の旅の男仲間からは、唐変木と耳にたこができそうなほど言われた経験を持つ。しかし最近リアスや美優との肉体的な關係を持ち、薄々周囲の女性から好意を寄せられているとほんの僅かに自覚し始めたため、少しずつ女心を理解しようとして努力している。

重度のシスコンで、美優を溺愛している。

武器：ロングソード&ダークソード「TOSラタトスクの騎士仕様」

の二刀流

↓昇華 リベレーター&シャドウ・アイオリオ

ブリス・テッド・ギア
赤龍帝の籠手神滅具

エデン・オブ・アルマ
究極龍王の絶爪「オリ神器」 神滅具級

上記2つの融合神器 龍神帝王の籠手「オリ神器」 神滅具級

↓禁手化 呪いを背負う水紅の皇

↓覇 焔 龍 咎を拒絶す剣神の龍鎧

無の聖剣

イメージ……FF15の剣神バハムートの剣

魔剣イブリース

↓イメージ……刃が銀、裝飾が金となった無の聖剣

鬼神刀・神威「オリ神器」 神器

↓禁手化 神滅刃・神威

↓禁手化第二段階 零滅刃・神威

魔剣創造↓変質 闇を喰らいし深淵剣神器

聖剣創造↓変質 神剣創造神器

上記2つの融合禁手化 神聖なる絶望の神淵剣

雷切

クラウン・クラウン
神ノ道化

ソーサラーリング（使用者が知る限りの属性を扱える。）

トライ・レスト・セスナム
失墜の爪牙

↓烈空の冥海弓

イメージ……ゼルダの伝説 ブレス オブ ザ ワイルドの近衛

の弓

↓緋天穿つ閃光の槍

イメージ……新世紀エヴァンゲリオンのカシウスの槍

↓虚空切り裂く墮罪の大刃

イメージ……ゼルダの伝説 ブレス オブ ザ ワイルドの王家

の大剣

能力：ラタトスク化

神の力（ただし条件付き）

精霊魔法を使える

センチュリオンを介して魔物を召喚できる

幻影の邪眼

二つ名：〈魔神皇〉 〈千刃剣士〉 〈???〉

容姿：TOSラタトスク騎士通りで、髪はポニーテールにしてくくっているが、ライザー戦後、髪を焼かれ、ポニーテール部分のうち、5cmから先がなくなっている。魔界転移のラタトスク編で、白髪だったのを認識阻害魔法で金髪に誤魔化していたのが発覚。本人曰く、恐らく過去での過度なストレスで脱色したのではないかと。精神にも少なからずストレスが影響しているらしい。

普段は緑色の目だが、ラタトスク化するときのみ、赤色に変わる。また、髪もラタトスク化すると、髪の間々がエメラルドグリーンに染まる。また、一呪いを背負う水紅の皇〈カースド・エルレイン・ヴァーミリオン・イグゼクス〉に禁手化すると、左眼は血よりも深い紅に染まり、瞳孔は底の見えない闇のように黒くなり、右眼はダイヤモンドより透き通る水色で、瞳孔は眼の色と同化して見えにくくなる。

備考：帝は、狙っているのかと疑う程のラッキースケベである。しかし何故か本編では上手く発揮されない。

駒王学園に入ってから3日で、学園イケメンランキング第1位に君臨し、〈学園二大王子様〉の1人として認められる。

素の状態でも、全力を出せば上級悪魔の上の中ぐらいで、ラタトスク化すれば、超越者の魔王と渡り合える。月光校庭のエクスカリバー編以降では、素の状態でも最上級悪魔と同等の実力を持っている。魔界転移のラタトスク編の途中からでは、素の状態で魔王クラスになっている。もう世界最強でいいんじゃないかと自棄になりながらも作者も少し調子に乗ってしまったことを反省中。

神の力を使えるが、能力上の話で、身体能力が上がったりはしない。また、発動にはある条件を満たさなければならない。

ラタトスク化・・・全ての能力を激的に上昇させ、任意で発動も解除も出来る。

〈アルト・アルディア・ドラゴン理想を護りし究極龍王ゼノン〉 ドラゴン達の伝説のみにしか存

在を確認されていないドラゴン。圧倒的な力を持つが、実力は無限の龍神オーフィスより少し強い位のドラゴン。

＜赤龍 帝ドライグ＞ ウエルシュドラゴン 原作通りの二天竜。帝のラツキースケベに頭を悩ます。

〔グラン・ヴェンデユル・ドラゴン 終焉導く無叢の龍神ヴォルブ〕全てが謎に包まれた龍神。本当の正体は〈無限の龍神〉と〈赤龍神帝〉のみぞ知る。

ソーサラーリングは込める魔力量によって威力を調整できる様に改造されている。

センチュリオン・・・ラタトスクに従う精霊達。あまり詳しく説明出来るほど、作者の頭はよくないため、詳しく知りたい場合は、Wikiをご参照ください。

ラタトスク・・・世界を見守る精霊で、世界の理を変える程の力を持ち、真なる魔界、ニブルヘイムの門を守るものでもある。（オリ設定）しかしながら、帝本人の本来の性格が影響してか、帝に近い性格をしている。

悪魔王イブリース……イスラム教の悪魔の王。愛称イブくん（ちゃん）。偶々彷徨っていた魂がほいほいと帝の体に入り込んで宿った。

ユダヤ教のサタン、キリスト教のルシファーに相当する力を持ち、帝の身体スペックの高さは、半分以上がイブリースの恩恵だったりする。

一人称はボクで、体はかなり発育がよろしいが、普段からさらしを巻いているので、なかなか女と気づかれない。

夢は、実体を持って帝と子作りをすること

皇 美優（すめらぎ みゆう）

性別：女

身長：169cm

体重：48kg

年齢：7歳↓17歳

誕生日：5月7日

好き：甘い物・帝（好きではなく愛している）

嫌い：帝を傷つける者

性格：誰にでも優しく平等に接する明るい性格の持ち主。学園中に想いを寄せる男子が多く、何度も告白をされたが全員を振っている。また、重度のブラコンで、兄である帝を恋愛対象としていて、積極的に肉体関係を築こうとするが、毎回良いところで邪魔をされる、ある意味可哀想な子である。

武器：なし

能力：魔界の魔法を全て使用可能

二つ名：〈砲台姫〉

容姿：目は至って普通で、髪は黒く長く、頭の右側に色の髪留めをつけている。また身体つきもよく、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる。

備考：魔界の魔法は、全てマルタに教わったものの、独自の発想と改良を取り入れているため、最上級魔法を何度も使え、同時に幾つかも展開できる

次回に続く

キャラクター設定2

皇 一誠 (すめらぎ いっせい)

性別：男

身長：170cm

体重：62kg

年齢：7歳↓16歳

誕生日：1月7日

好き：仲間・牛乳・おっぱい・アーシア

嫌い：仲間を傷つける者

性格：ほぼ性格は原作と変わらない。

兄である帝を尊敬しており、いつか帝のような人間になりたいと考
え、帝の強さを知ったときは、より一層帝に近づきたいという決心を
持った。

武器：赤龍帝の籠手
ブーステッド・ギア

神剣ファルシオン

能力：ほぼなし

二つ名：なし

容姿：原作通り

備考：神剣ファルシオンは、父である皇 誠に譲り受けた。

皇 誠 (すめらぎ まこと)

性別：男

身長：178cm

体重：71kg

好き：家族

嫌い：特になし

性格：誰よりも家族を愛し、息子達である、帝、美優、一誠のことを
めちやくちや可愛がっている。俗に言う親バカである。

武器：神剣ソードブレイカー (ただし、非戦闘員のため、使うこと
はない。)

能力：特になし

二つ名：〈戦神〉 〈勇者〉

容姿：一誠の父親と同じ。違うところは眼鏡をかけていないところ。

備考：一度、魔界と人間界を救っており、ギンヌンガ・ガップにて、ラタトスクと共に、ニブルヘイムの魔族を退け、封印した。

皇 優香（すめらぎ ゆうか）

性別：女

身長：168cm

体重：59kg

好き：家族

嫌い：特になし

性格：誠と同じく、家族を愛し、息子達である、帝、美優、一誠をめちやくちや可愛がっている。

また、美優の恋が実るように、帝に色々と耳打ちしている。

容姿：一誠の母と同じ。違うところは、髪を束ねていないところ。

備考：元々が一般人なので、これといった能力などはない。

リアス・グレモリー

性別：女

身長：172cm

体重：58kg

好き：帝（好きを通り越して愛している）

嫌い：特になし

性格：特に原作と変わらないが、好きになる相手が帝に変わる。また、帝に対して非常にデレる。

本来は我儘な性格だが、帝と付き合い始めてからはすっかりなりを潜めている。しかし偶に出してしまうことも。

武器：なし

能力：滅びの魔力

二つ名：〈紅髪の滅殺姫（べにがみのルインプリンセス）〉

容姿：原作と同じだが、胸が原作より1cm大きい

備考：特になし

マルタ・ルアルディ

性別：女

身長：159cm

体重：44kg

好き：甘い物・帝

嫌い：チャラチャラしてる男

性格：TOSラタトスクの騎士と変わらない。

武器：回転刃のアイアンスピナ「TOSラタトスクの騎士仕様」

能力：様々な魔界の魔法

二つ名：特になし

容姿：TOSラタトスクの騎士と変わらない。

備考：リヒターがギンヌンガ・ガツプとニブルヘイムを繋ぐ門を解放する前に帝がリヒターを倒したので、ラタトスク・コアは未だにひたいに埋まっている。

後のキャラクターはみんな原作通りなので、あまり説明することはないが、オカ研メンバーは戦闘校舎のフェニックス編での10日間の修行で、原作よりパワーアップしている。また、大体のメンバーは、帝に想いを寄せるが、唐変木な帝は知る由もない。

旧校舎のディアボロス 帰ってきました！

三人称視点

ザツ

あるところにポニーテールにした長い金髪を風にたなびかせる青年と幼女体kゲフンゲフン！もとい、触ると折れてしまいそうなスレNDERな少女がいた。

？「ねえ、ここってどんなところなの？」

？「ここはな、俺が生まれ育った町なんだ。さあ、さっさと行こうぜ。」

？「うん！そしてお父様とお母様に挨拶しなくちゃ！」

？「はあ、んなこたあしなくていいから。」

場所は変わってとある一つの家の前

ピンポーン

？「変わらないな、この音も、この家も。」

ガチャツ

？「はいはい、どちら様です・・・か・・・」

？「やあ、父さん。10年ぶりだな。」

？「あんた、み、帝か？帝・・・なのか？」

帝「そうだよ。ただいま、誠父さん。」

青年、いや、帝は、父である誠に微笑んだ。

帝side

帝「ただいま、母さん。」

優香「おかえり、帝。随分成長したわね、この10年間で。」

誠「それで、そちらのお嬢さんは？」

マルタ「はい！私、マルタ・ルアルディです！エミルの彼女やっつますー！」

帝「BAKAYAROU！何いきなり大嘘ついてんだよ！」

マルタ「えー！だって私、エミルのことが大好きなんだもん??」

帝「はあ、もうダメだ。相手にしてたら体力がきれそうだな。それはそうと父さん、黒歌と白音は？」

誠「・・・」

父さんはいきなり黙り出した。嫌な予感がするが、父さんから何があつたか聞かないと！

帝「父さん？父さんってば！」

誠「帝、今から言うこと、よく聞けよ？」

父さんは真剣な顔で言った。多分この話はかなり本気な内容だろう。

帝「う、うん。黒歌と白音に何があつたのか、聞かせてくれ。」

マルタ「エ、エミル？」

帝「マルタ、しばらく黙って聞いていてくれ。」

そして俺は旅立ってから7年後に、黒歌と白音が悪魔になったこと、黒歌が主を殺し、SS級はぐれ悪魔になったことを知った。白音はリアス・グレモリーと言う悪魔の眷属になつたらしい。一誠と美優は、俺が悪魔になることを決めれば、悪魔になるつもりらしい。なんてお兄ちゃんっ子なんだ。

俺が居ない10年の間にこんなことがあつたと思わなかつた。

ガチャツ

？・？「ただいま〜。」

この声、まさか・・・！！

ガチャン！

帝「久しぶりい！我が弟よ！我が妹よ！お兄ちゃんとは会えて嬉しいゾオ〜！うお〜〜ん！」

一誠「もしかして、帝兄さん!?!？」

美優「お、お兄ちゃんなの!?!？」

帝「そうだあー！みんな大好き帝お兄ちゃんだぞおー！」

？「帝兄様、それはあり得ません。」

まさかこの鋭い毒舌は！

帝「ぐおあ！ひ、久しぶりだな、白音！」

白音「お久しぶりです。帝兄様。」

そしてこの後、マルタを含めてみんなでご飯を食った。うっ！女性陣（母さんとマルタを除いた）目線が痛い！何故だ？

そして俺は、10年間で成長した妹たちを見て内心喜んだ。

マルタ「そうそう、明日から私もこの家に住むことになったから。」

帝・一誠・美優・白音「「「えええええええー！ツツツツツ！」」」

マルタ「これからよろしくね？エミル！」

優香「あらあら、これからは一家安泰ね。」

これから大波乱が起きる気がした。

To be continued

三大勢力のトップです！

帝 side

駒王学園に転入と言う名の入学を明日に控えていた俺は、朝早くから父さんに叩き起こされた。

帝「父さん、これから何すんだよ。」

誠「なあに、これからのお楽しみだ。お、かかったかかった。」

父さんは携帯を片手に誰かと話をしている。多分神とか魔王とかその辺りだろ。

誠「おい帝、これから天使のお迎えが来るぞ。」

帝「マジかよ、まだ死にたくねえぞ。」

俺は完全な冗談で返したつもりだが、父さんは25%本気だと思ふ言葉を発した。

誠「お前は10年間も連絡入れないで親に迷惑掛けたんだから、きつと冥界に連れてかれるだろうなwww」

笑えねえよ！マジでそうなりそうで怖えよ！

そんな話をしていると、インターホンが鳴った。

誰だろ？

ガチャッ

帝「はいはい、どちら様ですか？」

？「すみません、皇家はこちらで合っていますか？」

帝「ええ、まあそうですけど。」

そこには、線の細い、優しそうな青年がいた。

誠「よう、ミカエル。」

ミカエル「ええ、お久しぶりですね。誠。」

誠「アザゼルもサーゼクスも久しぶりだな。」

アザゼル「チッ！バレてたか。」

サーゼクス「やあ誠。久しぶり。」

帝「ええ、ええっと取り敢えず中にどうぞ。」

サーゼクス「それでは、お言葉に甘えてお邪魔しよう。」

ーリビングー

なんか凄いいことになったぞ・・・

アザゼル「それでだ、誠。用はなんだ？」

誠「ああ、うちの自慢の息子の紹介だ。ほれ、帝。」

ドン！

イテツ！あといきなり叩くんじやねえよ！ビツクリすんだろ！

ミカエル「なるほど、それではお名前を聞かせていただけますか？」

帝「あ、はい。えっと、皇 帝、もといエミル・キャスタニエです。

一応今代の赤龍帝で、ラタトスクやってます。明日から駒王学園にも転入します。」

サーゼクス「ふむ、リアスが通う学園か。だが誠、何故今まで紹介しなかった？」

誠「いやなんだ、こいつは10年間旅しててな。昨日帰ってきたばっかなんだ。だから今まで紹介できなかった。」

アザゼル「なるほどな。それじゃ、今度は俺らの紹介だな。俺はアザゼル。墮天使の総督をやっている。よろしくな、帝。」

帝「はい、よろしく願います。」

サーゼクス「私はサーゼクス・ルシファード。魔王をしている。これからよろしく頼むよ、帝君。」

ミカエル「私はミカエル、天使達の長を務めています。これからよろしく願います、帝君。」

帝「ええ、お二人もよろしく願います。」

そして俺たちは、父さんを介して知り合った。

帝「あの、連絡先って必要ありますか？」

ミカエル・サーゼクス・アザゼル「必要(だ)(です)!!」

帝「は、はい。」

俺たちは情報交換と言う目的で、ケータイの連絡先を教え会った。何故天使の長とか魔王とか墮天使の総督とかがケータイ持ってるんだよ！俺の心の叫びは虚しくも、三人には届かなかった。

To be continued

転入します！

三人称視点

帝が三大勢力のトップと知り合った次の日、帝とマルタは駒王学園に入った。教室の中からは帝達の担任である山田先生の声が聞こえる。

山田「全員いるなー。よし、HRを始めるが、その前に野郎どもに良い知らせと悪い知らせがある。どっちから聞きたい？」

松田「良い知らせお願いします！」

山田「よしわかった。だが松田。その前にエロ本しまえ。」

松田「ういっす！」

山田「それでだ、良い知らせだが、美少女が転入する。」

クラス全員の男子『よっしやー!!!!』

男子からは歓喜の音がする。

山田「続いて、野郎どもには悪い知らせだが、女子には良い知らせだ。イケメンが転入して来るぞ。」

クラス全員の女子『キャー!!!!』

女子からは黄色い声がる。

山田「よし、じゃあ2人とも、入って良いぞー。」

帝・マルタ「はーい」

山田「じゃあ自己紹介を頼む。」

帝「えー、皇 帝、もといエミル・キャスタニエです。これからよろしく願います。」

クラス全員の女子『キャー!!!!』

山田「はーい落ち着け落ち着け。」

マルタ「えっと、私はマルタ・ルアルデイです。よろしく願いますー！」

クラス全員の男子『キター!!!!』

山田「はーい落ち着け落ち着け。じゃあここからは質問タイムだ。」

? 「はーい。」

眼鏡を掛けてる三つ編みの女子がてを上げた。

山田「よし、桐生」

桐生「皇君とマルタさんってぶつちやけどどういう関係なんですかー？」

帝「えつとだな、tマルタ「恋人です??」はあ、ただの友達です。」

クラス全員の男子『チクショー！俺たち非モテ組の敵めー!!』

帝「あだだだだっ！いてえよ！あとあぶない！」

帝の転入は大波乱となった。

三人称視点out

帝side

やべっ！先生の手伝いしてたら遅くなっちゃった！さっさと帰らねば！周りには誰も居ない。もしかして俺で最後？

？「あの、皇 帝君ですか？」

帝「はい？あの、どなたですか？」

夕麻「私、天野 夕麻です。帰る時に見て、一目惚れしちゃって、あの、だから付き合つてk帝「やだ。」え？」

帝「だって嘘っぽく聞こえんだよ。堕天使さん。」

夕麻「チツ！バレていたわけね。なら、死になさい！」

そして夕麻とか言う奴は黒いボンテージを身にまとった。

こいつは間違いない。こいつは・・・

帝「痴女だ！」

レイナーレ「違う！私は至高の堕天使、レイナーレ！貴方は計画に邪魔だから消えてもらうわ！」

帝「ふうーん。ま、やってみれば？あんたが消えることになるだろうけど。」

レイナーレ「人間風情が！調子に乗るなあー!!」

ブン！

帝「よつと。」

俺は軽く槍を蹴った。すると、

バキン！

えっ？何これ？よつわ！

レイナーレ「馬鹿な、ありえないわ！こんなまぐれよ！」
ブン！

んなもん投げてくんじゃねえよ。ったくう。

帝「いらねえから返す。」

シユツ

グジユウ！

レイナーレ「ギヤアアア！私の、私の羽があああ！殺す！あんたは何があつても殺すっつ！」

？「そこまでよ！」

レイナーレ「だ、誰だ！」

リアス「私はリアス・グレモリー。グレモリー家の次期当主よ！」

あ、やつと来たな。

レイナーレ「く、分が悪いわね、今日のところはここまでにしてあげるわ。皇 帝！貴方だけは許さないからね！覚えておきなさい！」

うっわ、モブキャラ臭半端ねえな、あいつ。

リアス「ねえ、ちよつと良いかしら？」

あ、しまった。つい忘れてた。面倒くさいが仕方がない。

帝「なんですか？」

リアス「貴方はなぜ墮天使を前にしてあんな余裕を出せていたの？そして貴方は何者なの？」

帝「待て待て待て、ちよつと落ち着きましょう。そんないつぺんに答えられませんし。」

リアス「ええ、そうね。少し興奮してしまっていたわ。ごめんなさい。それはそうと自己紹介がまだね。私はリアス・グレモリー。さつきも言った通り、グレモリー家の次期当主よ。」

帝「俺は皇 帝、もといエミル・キヤスタニエです。立ち話もなんですから、俺の家に来ませんか？」

リアス「ええ、そうね、それじゃあ、お邪魔するわ。」

リアス先輩はそう言うのと、ニコリと微笑んだ。ヤベエツメツチャ可愛い！

家に帰り、俺とリアス先輩が一緒に帰ってきたのをマルタと美優と

白音が見て、ものすんごい目で見られた。

T o b e c o n t i n u e d

悪魔になります！

帝 side

俺はリアス先輩を家に呼び、晩飯を食ったあと、俺の部屋で、俺、一誠、美優、マルタ、白音、リアス先輩とで話をしていた。

リアス「じゃあエミル、貴方は何故墮天使を前にして余裕を出していたのかしら？」

帝「何でってそりやああの墮天使が弱いと思ったからですか？」

リアス「そうなのね。次は、貴方が何者なのかということについてだけど……」

帝「やっぱそこですか。まあ、良いでしょう。俺は一誠とおなじ、赤龍帝で、ラタトスクです。」

リアス「何ですって!?!ねえ、エミル、貴方さえ良ければ、悪魔になつてみないかしら？」

帝「うーん、悪魔になるに着いてのメリットとデメリットを聞いたんですけど。」

リアス「うーん、そうね。メリットは、上級悪魔になれば、自分の眷属を持てること、寿命が10000年伸びること、夜には強いこと。デメリットは、光に耐性が無くなって光が弱点になること。だから朝には体がだるく感じるの。あと、転生悪魔になると、自分の身内を悪魔が守って貰えるというのがあるの。それに、例えば兄弟二人が転生悪魔の場合、一人よりも警備が厳重になるの。さて、どうかしら？」

一誠「帝兄さん……」

美優「お兄ちゃん……」

帝「……リアス先輩、俺、悪魔になります。貴方の眷属になります！」

リアス「ありがとう、エミル。実は貴方の弟君と妹さんにも声をかけていたの。」

帝「え、マジですか？」

リアス「ええ、マジよ。それでね、そちらの二人の回答がね、貴方が悪魔になるなら自分達もなるって言っていたの。」

帝「へえー。あ、何で悪魔に勧誘してたんですか？」

リアス「イツセーからは龍の力、美優からは膨大な魔力のを感じたの。それで、マルタさん、マルタって呼んで良いかしら？」

マルタ「はい！どうぞ遠慮なく！」

リアス「ふふつ。そんなに硬くならないで良いわよ。それでね、マルタ、実は貴女にも悪魔になって欲しいのだけれど、どうかしら？」

マルタ「なります！エミルとずっとずっとずうーっと一緒に居たいです！」

リアス「そう。わかったわ。それじゃあみんな、チェスを知っているかしら？」

帝「一応知っています。王<キング>、女王<クイーン>、僧侶<ビショップ>、戦車<ルーク>、騎士<ナイト>、兵士<ポーン>を使うゲームですよね。」

リアス「ええそうよ。私達悪魔はその駒を使って、眷属をつくるの。私達悪魔の中では、悪魔の駒（イーヴィルピース）と呼んでいるの。そして今空いているのが、ルーク1つ、ナイト1つ、ポーン8つなのだけれど、どれが良いかしら？」

帝「リアス先輩待ってください。誰がどれを選ぶかは俺が決めて良いですか？」

何故なら俺は誰がどのような立ち回りをするかは目に見えているからだ。

リアス「それは良いのだけれど・・・みんなはどうかしら？」

俺が後ろを見ると、みんなは首を縦に振っていた。つまり良いということだ。ありがとう。

帝「まず、みんなには、ポーンを選んで欲しい。理由は、みんなの能力と性格上、特にマルタとイツセー、そして俺はポーンの昇格<プロモーション>が必要だ。美優は才能があるから回復魔法を覚えられるだろう。まあまとめると、俺とイツセーは、完璧に前衛タイプ、マルタは前衛も中衛も出来て、美優はかなりの中衛タイプということだ。理解してくれたか？」

イツセー・美優・マルタ「「はい。」」

帝「じゃあ先輩、イーヴィルピースをください。」
リアス「え、ええ。すごいわねエミル。自分の仲間をこれ程に見抜くなんて。」

帝「まあ、長年いれば嫌でも覚えますよ。よしみんな、両手を前に出してくれ。」

ところが、問題発生。イーヴィルピースが体に入らない。

リアス「あれ？ポーン1つじゃあ足りないかしら？」

帝「じゃあ俺に任せてください。久しぶりにいくぞ！ドライグ！」
ドライグ「本当に久しぶりだな。相棒。ずっと暇だったんだからな。」

帝「スマンスマン。んじゃあ行くぜ！ブースト！」

【t h o u s a n d b o o s t !】

帝「かーらーのおーギフト！」

【t r a n s f e r !】

俺はこの場にあるポーンの駒全部に倍加くブーストをかけた。
美優とマルタとイツセーはすんなり入ったが、俺は入らなかった。

帝「ドライグ、また行くぞ。今度は万だ！」

【t e n t h o u s a n d b o o s t !】

帝「そしてギフト！」

【t r a n s f e r !】

5つのポーンの駒に一万回倍加して、5つ使ってやっと転生出来た。

後ろを見ると、みんなこの光景に唾然としていた。

リアス「ねえ、エミル。」

帝「なんですか？」

リアス「貴方の能力を全て話して貰うわよ。」

帝「え？なんでですか!？」

リアス「だってこんな事は前代未聞なのよ!？」

帝「わかりました。じゃあ俺の能力を話します。まず、ラタトスクと赤龍帝の籠手。リアス先輩、イノセンスって知ってますか？」

リアス「ええ、知っているわ。神の使徒の武器、神本体だと言われ

ている武器ね。」

帝「俺はそのイノセンスの所有者です。そのイノセンスの名前は神の道化<クラウン・クラウン>、他には、神を殺す事ができる、鬼神刀神威、魔剣創造<ソードバース>の亜種禁手である、「約束を守りし魔剣士の剣」、聖剣創造<ブレード・オブ・ブラックスミス>の亜種禁手である、「聖母が微笑む勇者の剣」です（姿は完璧にエリユシデータとダークリパルサー）。そしてこれが、究極龍王の絶爪<エデン・オブ・アルマ>です！」

俺は自分の全ての武器を出した。

そしてリアス先輩は驚愕していた。

リアス「エミル、その究極龍王の絶爪という神器は何かしら？」

帝「ドライグが言うには、ドラゴンの伝説のみに存在する、<理想を護りし究極龍王（アルト・アルディア・ドラゴン）ゼノン>と言うらしいです。」

リアス「そうだったのね。何故一万回倍加したポーンが5つ必要なのか理解できたわ。」

帝「まあ、そんなわけで、よろしくお願いしますね、ご主人様。」

俺はそう言って微笑んだ

リアス「／／／ええ、よろしくね／／／」

帝「あー、風呂はいいなあ。」

ガラガラガラ

帝「イツセー、俺はまだ入ってるぞーって！何やってんですか先輩！」

リアス「下僕とのスキンシップも大事な事なの。理解してちょうだい、エミル。ほら、背中洗ってあげるから。」

ムニユン

帝「これじゃあスキンシップどころじゃねえー！／／／／／」

美優「どうしたのお兄・・・ちゃん・・・」

プルプルプル

帝「美優？おい美優!？」

美優「私もお兄ちゃんと入るのー！」

帝「美優、ちよ、おま、やめ、ぎやああああ／／／／／」

t o b e c o n t i n u e d

悪魔の朝は大変です！

帝 side

俺が悪魔になった翌日、またもや大変な事が起きた。

そう、俺の横には、駒王学園のアイドルことリアス先輩と、我が妹美優が裸で寝ていた。ここまででも充分事件だが、更に事件なことがあった。そう、俺までもが裸だったのだ！

帝「にやあああああああ！」

しまった！つい素がでてしまった。

リアス・美優「ううん」

やめろ！胸が！胸が揺れてるから！

リアス「どうしたの？エミル。」

美優「もしかして、私達の裸見ちゃってエッチな気分になっちゃった？」

ギユウ

抱きつかないで！お願いだから！感触が直に來ちゃうの！理性失っちゃいそうなの！

リアス「別にいいのよ。昨日の夜みたいに全部出しちゃっても。」

ヤメテエーーーーー!!! 別の意味だろうけど凄い意味深だからヤメ

テエーーーー!!!

優香「帝！ご飯よー！早く起きなさい！」

待つて母さん！今こないで！待つてええー！！

ガチャツ

優香「ゴ、ゴハンガデキテイマス。ハヤク、オリテキテクダサイ。」
ボタン

優香「お父さん大変よ！国際的！兄妹！」

誠「どうした母さん！取り敢えず落ち着くんだ！」

下からは父さんと母さんの声が聞こえてくる。

帝「終わった・・・何もかもが終わった・・・ガチで・・・」

今の俺はorzだ。完璧なorzだ。

リアス「朝から元気な人達ね。」

誰のせいだと思ってるんだ！

美優「それよりお兄ちゃん。私達の体。どうだった？」

うっ！柔らかくて気持ちよかったなんて言えない！

リアス「今、柔らかくて気持ちよかったって思った？」

ギクツ！なんか心読まれた！

リアス「いいのよ。エミルなら。」

美優「お兄ちゃんのためなら、どんなことだってするよ？」

そう言っつて2人は俺の手を持って、自分の胸を掴ませる。

リアス「エミル・・・」

美優「お兄ちゃん・・・」

2人は俺に胸を掴ませたままこのまま迫ってくる。

帝「ちよ、2人とも！ちゃんと考えて！」

リアス「ちゃんと考えてるわ。」

美優「私達と、お兄ちゃんの子なら・・・」

ヤメテエー！！！！

バタン！

白音「帝お兄様、そんなことしてたら、学校に遅刻しますよ。」

白音ナイス！あとそのゴミを見るような目を止めてくれればお兄

さん嬉しいんだけどなあ。

ふはあ。取り敢えず助かった。

下に降りると、俺をみた父さんは、

誠「帝、そういう恋愛、父さんは有って良いと思うぞ。」

と言ってきた。

父さん、勘違いしないで！俺からやったんじゃないから！

イツセーに至っては何つー目で見てんだ！

今日もまた、騒がしい1日が始まった。

To be continued

使いが来ます！

帝 side

帝「はあく。」

俺は盛大なため息をついた。

朝起きたら裸の美優とリアス先輩に迫られるし、白音にはゴミを見るような目で見られるし、父さんと母さんは変な勘違いするし、マルタは「エミルのバカー！」とか言つてビンタしてくるし、今では学園の目につく男子全員に敵意を剥き出しにされてるからだ。

ところどころでは、「美優ちゃんや白音ちゃんでも飽き足らず、とうりリアスお嬢様にまで・・・」などと聞こえるが知ったこっちゃない。俺から望んだ訳じゃないし。

リアス「それじゃあここまでね。放課後に使いをそちらにだすわ。」
帝「了解です。」

俺、イツセー、美優、マルタは2年の教室に。白音は1年の教室に行き、リアス先輩は3年の教室に行った。

帝「イツセー、もし松田と元浜と一緒に攻撃してきたら、どうなるかわかるよな？」

一誠「そ、そんなことなど滅相もございません！帝お兄様！」

うん、反応が素直でよろしい！

ガチャ

帝「おはよー！」

美優・マルタ「みんなおはよー！」

クラスの中では、「おはよー！」だったり「3人ともおはよー！」とかが聞こえるが、そんな中、俺に向けて拳を放った2人の男子生徒がいた。

丸坊主でぱつと見体育会系のやつが松田で、眼鏡をかけたぱつと見頭が良い奴が元浜だ。

バシッ

帝「危ねえだろテメエら！母ちゃんから挨拶代わりに殴つちやダメよ！つて教えられなかったのか！」

松田「知るか！そんな事より1発殴らせろ！」

元浜「そんな面白味の欠片もない冗談を言う余裕があるなら速やかに殴られろ！」

はぁ・・・何でこいつらとイツセーは中高同じ学校なんだ・・・

帝「イツセーにも言えることだが、お前らは顔は良いんだからそのスケベ根性が無けりやモテるはずだぞ？」

松田・元浜・一誠「「だがこの熱き迸りに従わずして誰が従うか！」「」」

帝「イツセー、昼休みに帝お兄ちゃんとO☆H A☆N A☆S H Iし
ようか。」

そして昼休みのあと、教室に戻ってきたが、何事も無いように平然としている帝と何かに怯えきって足腰がガクガクになったイツセーをクラスの男子は見るや否や、帝に喧嘩売ると、命の危険に晒されると思った。

―放課後―

『キヤー！木場くうーん！』

廊下が騒がしいなあ。

ガチャ

クラスの女子「キヤー！木場君が来たわー！」

木場「皇兄妹の人達とルアルデイさんはいるかな？」

一誠「ケツ。イケメンが。死ぬ。」

・・・こいつはおれが朝言ったことを覚えてないのか？まあ良いだろう。多分木場がリアス先輩の使いだろう。

帝「ここにいるぞー。」

木場「やあ、皇君、って分かりにくいから下の名前で呼んで良いかな？」

帝「いいぜ。美優は？」

美優「大丈夫だよ。イツセーは？」

一誠「うん。いいぜ。」

マルタ「私も下の名前でいいわよー。」

木場「じゃあ行こうか。」

そして俺たちは木場と共に教室をでた。

「アレってもしかして・・・」 「帝君×木場君よ！」

「いえ、木場君×皇だわー！」 「敢えて皇×帝君は？」

腐女子の言葉が耳に痛いが無視だ。そう、無視！

「違うわよー！」

ああ、ありがとう！

「帝君×皇×木場君よ！」 「それだ!!」 「」

前言撤回。さっきの感謝の気持ち을返してくれ。

To b c o n t i n u e d

悪魔の自己紹介です！

木場 side

僕は皇兄妹のみんなとルアルデイさんを連れて旧校舎のオカルト研究部を目指した。

帝「なあ木場、リアス先輩ってオカルト研究部の部長・・・なんだよな？」

木場「うん、一応形としては・・・だね。」

帝「やっぱ俺らもオカルト研究部が入らないといけない奴か？」

木場「そうだね、オカルト研究部の部員はみんな悪魔だから帝君達も入らないといけないだろうね。」

帝君は「マジか・・・」と言いながらうなだれた。もともと彼は部活があるに入ること拒絶していたらしい。

木場「えっと、帝君はなんで部活をそんなに嫌がるんだい？」

何気なく、僕は聞きたかったことを聞いた。

帝「なあ木場、俺は無自覚ではあるが、何でもできてしまうってのは知ってるか？」

木場「うん、聞いたことがあるよ。家庭的でいいじゃないか。」

帝「・・・裏を返せばな。まあなんだ、何でもできちまうせいってこの部活もやり甲斐がない。それに俺が入っても俺が一番という空っぽの名前だけの王座に座り続けるだけ。それに一部のやつは俺を煙たがったりしたり、俺の身内に手を出したりする可能性があるからだ。」

帝君、そんなに家族や他人がどうなるかを冷静に判断できるところがすごいよ。だからきつと女子にはモテモテなんだろうね。

話が終わるとほぼ同時に部屋についた。

コンコンツ

木場「部長、皇兄妹の皆さんとルアルデイさんをお連れしました。」

木場 side out

帝 side

リアス「ええ、入ってきてちょうだい。」

リアス先輩はそう言つて木場は扉を開いた。

中に見えたのは・・・the!オカルト!な感じの部屋だった。簡単な話で言えば、壁や床に魔法陣やら何やらが描かれていた。

リアス「いらつしやい。わたしたちは貴方達を歓迎するわ。」

帝「こちらこそ、お招き頂き、皇兄妹とマルタの代わりに感謝いたします。」

帝・リアス「悪魔として、ね。」

おお、なんかハモった。

リアス「それじゃあ、1人1人自己紹介ね。まずはわたしから。みんなはもう知っているけど、改めて、3年A組のリアス・グレモリーよ。オカルト研究部の部長をしているわ。よろしくね。」

朱乃「3年A組の姫島 朱乃ですわ。オカルト研究部の副部長をしていますわ。以後お見知り置きを。」

木場「2年C組の木場 祐斗です。これからよろしくお願いいたします。」

リアス「白音はしなくてもだいじょうぶね。」

マルタ「じゃあ次は私達ですね。私は2年B組のマルタ・ルアルデイです。エミルの彼j帝「・・・」じゃなくて旅の仲間のマルタ・ルアルデイです。よろしくお願いします。」

一誠「えっと、2年B組、皇家の次男の皇 一誠です!よろしくお願ひします!」

美優「2年B組、皇家の次女で、帝お兄ちゃんの恋b帝「・・・」じゃなくて妹の皇 美優です。」

帝「んで、俺が、2年B組、皇家長男の皇 帝、もといエミル・キヤスタニエです。」

よし!彼女とか恋人とか言おうとしたやつはジト目で黙らした!
帝「んまあそんなわけで、こつから先はよろしくお願ひしますよ。」
俺はそう言うのと微笑んだ。しまった!なんか癖になつてるな。早く治さないと!つてか何でオカ研の女子は顔が赤いんだ?
朱乃「帝君、部長からお話は聞いています。」

帝「あ、もしかして能力がおかしすぎるとかですか？」

朱乃「やつと見つけた・・・」

ギユウ

帝「ふえ!?俺何かやらしましたか!」

朱乃「10年前、貴方に助けていたものだものです。」

帝「ああ、思い出した。確かなんか変なおっさん4人におそわれてたあの子か。」

朱乃「もしまた何処かへ行こうというのなら、私はとめます・・・!」

帝「だいじょうぶ、当分はいなくなりません。それに、もう仲間なんだ。そんなこと黙ってやるかよ。」

朱乃「ありがとう、帝君。」

俺たちの再会は、正直思いがけなかった。

朱乃「うふふ。帝君??」

美優「お兄ちゃん・・・??」

リアス「エミル??」

マルタ「エーミール??」

帝「うぐつ、動けない・・・」

ムニユムニユ

ギユウツギユウツ

ヤメテエ!マジで!

帝「イツセエ、木場あ、白音え、助けてくれえ」

一誠「帝兄さん、逆に羨ましい・・・」

木場「あははははは、これは流石にちよつと難しいかな。」

白音「ここ最近で少し調子に乗っているので帝兄様は少しこれで反省したらよろしいかと。」

あははははは、マジか・・・

帝「え!?ちよつ、シャワールームは、シャワールームだけはあ!

ぎやああああ／／／／

To be continued

シスターと出会っちゃいました！

一誠 side

いつにも増して強く輝く朝の太陽を浴びながら、俺は一人で何時も
の通学路を歩いていった。

ズコツ

？「うう、何でいつも何も無い所で転んでしまうのでしょうか……」
後ろを振り返ると、シスターのような格好をした人が転んでいた。
あ、パンツ見れた！ラッキー！つて、そんな場合じゃねえだろ！しっ
かりしろ、俺！

一誠「えっと、大丈夫ですか？」

そう言つて、俺は手を差し出した。

？「はい、ありがとうございますう。」

彼女が手をとると、少し強めの風が吹いた。そして彼女のベール？
のようなものが飛んでいった。

緑色の眼に金髪……俺は確信した。この子俺のタイプだ！何故か
帝兄さんが脳内で一瞬出てきてしまったが……取り敢えず俺はベ
ール？のようなものを拾ってシスターさんに返した。

一誠「はい、これ。」

？「ありがとうございます。えっと、あの……お聞きしたいこと
があるんですが……」

一誠「ん？聞きたいことがあるなら何でも聞いてくれよ。」

？「では、あの、教会つてどこにありますか？」

一誠 side out

帝 side

俺は今、イツセーに絶賛説教中だ。何故なら、シスターと共に行動
していたからだ。普通の人間ならまだしも、我ら悪魔は、本来教会側
の人間などの組織と共に行動するなど、自殺行為に等しい。大切な弟
を失いたくも無い。

一誠「ごめん、帝兄さん。」

帝「いや、俺も少し言い過ぎた。分かってくれると嬉しいよ、俺と

してはな。あとこのことは部長にも話しておく。」

美優「イツセー、お兄ちゃんに言われたこと、しっかり守るんだよ？」

一誠「わかったよ、美優姉さん。」

帝「よし！こんな辛気臭い話は一旦終わりにして、昼飯くうぞ！」
このとき、マルタはやたらと俺にあらんさせようとしたが、俺は頑なに拒んだ。

放課後の夜、俺たちはぐれ悪魔討伐を目的に、潰れた博物館のよ
うな場所に来た。イツセーはとうとうと・・・

凹んでいた。部長に怒られたようだ。

帝「イツセーよ、立ち直れ。そんなこと気にする程度のやつか？お前は。」

一誠「帝兄・・・」

一応説明しておくが、さん付けだと、何だか他人のような感じがするで、さん付けはいらないと昼飯のときにいった。

建物のなかに入ると、少しばかり鉄と何かが入り混じった酷い匂いがした。

リアス「エミル、イツセー、美優、マルタ、今日はあなたたちには、悪魔としての戦いをみてもらうわ。」

マルタ「ってことは見学っていうことですか？」

リアス「ええ、まあそういうことね。」

帝「まじっすか・・・つまんね・・・いますね。」

？「美味そうな匂いがするぞ？不味そうな匂いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

そして物陰から姿を現したのは、上半身が女性の裸体で、下半身は禍々しい獣の姿で、両手には槍を持った怪物だった。

リアス「はぐれ悪魔バイザー！あなたをグレモリー公爵の名の下に吹き飛ばしてあげる！」

To be continued

はぐれ悪魔を吹き飛ばします！

帝side

リアル「はぐれ悪魔バイザー！主の元を離れて好き勝手にすることは万死に値するわ。グレモリー公爵の名の下にあなたを吹き飛ばしてあげる！」

迫力がありますね、はい。

バイザー「小娘が、小賢しいわあああ！その赤い髪のように貴様を鮮血に染めてくれる！」

リアス「雑魚ほど洒落の効いた冗談を言うものね。祐斗！」

リアス先輩は木場の名前を呼ぶと、木場がかなりのスピードでバイザーの方に走った。イツセー、マルタ、美優は消えたと思つて辺りを見回している。

リアス「祐斗の駒はナイト。特性は凄まじいスピード、そして剣による攻撃よ。」

ザシュツ

バイザー「ギヤアアアアアツツツツ！」

木場はいつの間にかバイザーの両腕を切り落としていた。

リアス「白音。」

白音がバイザーの方に歩き、下のバカデカイ口に食われた。

一誠「白音ー！」

騒がしい奴め、少し落ち着け。

リアス「白音の駒はルーク。特性はシンプルで、圧倒的な防御力と馬鹿げた攻撃力よ。」

白音「・・・ふっ飛べ。」

白音はバイザーの下の口の歯ごとバイザーを吹っ飛ばした。・・・白音には喧嘩売らないで置こう。

リアス「朱乃。」

朱乃「はい、部長。」

バチバチバチツ

ビシャーーン！

バイザー「グアアアアアアアアアアアア！」

朱乃「あらあら、これで耐えるなんて。ではこれでどうかしら?」
ビシャーーン!!

リアス「朱乃はキング意外の特性を持った、無敵の副部長よ。そして同時に究極のSよ。」

うん。見ててわかる。顔を赤らめながら雷落としてんだもん。

バイザー「小娘共が・・・調子に乗るなああっつ!!」

バイザーはそう叫ぶと、部長の両隣にあつた切り落とされた腕を部長に飛ばした。ヤツベツ!

みんなは咄嗟の出来事で反応が遅れていた。

帝「させるか!」

俺は左側に飛び、右側の腕はソーサラーリングに魔力を込めて、爆破属性の魔法を飛ばした。

右側の腕を処理し、左側の腕はクラウン・クラウンで切り刻んだ。

帝「うっわあつぶねえ・・・当たったらどうしてくれたんだ!この木偶の坊が!!後それと部長、大丈夫ですか?」

リアス「ええ、ありがとう・・・さてバイザー、最後に言い残すことは?」

バイザー「殺せ・・・殺せえええ・・・」

リアス「そう。なら、吹き飛びなさい!」

バシユン!

バイザー「グギヤアアア!」

うわあ・・・すつげえ魔法だな・・・あんなの当たったらひとま
りもねえ・・・

リアス「さあ、帰りましょうか。」

リアス眷属『はい!部長!』

帝 side out

三人称視点

ある場所

? 「む・・・これは・・・」

? 「どうしたんだい?ヘブラスカ。」

ヘブラスカ「コムイ・・・日本で・・・クラウン・クラウンを感じた・・・」

コムイ「ということはアレン君が・・・？いや、それはないだろう。ヘブラスカ、場所は分かるかい？」

ヘブラスカ「日本の・・・駒王町というところだ・・・」

コムイ「わかった。それなら神田君とリナリーとラビを現地に送ろう。」

そしてある場所

？「やつと見つけましたヨ??・・・2人目の14番目エエ・・・」

三人称視点 out

帝side

ゴシゴシゴシゴシ

ジャアアア

帝「あの、部長、いつの間に俺の前に？」

リアス「あなたが頭を洗っている最中よ？」

い、いつの間に！つてか部長が風呂に入ってくることに耐性がついた俺もやばいんだが・・・それに・・・

帝「あの、部長・・・当たってるんですけど・・・／／／」

リアス「何が当たってるのかしら？」

ギユウウツ

俺を抱く力を強めてより一層強く押し当ててくる。

少しは耐性がついたものの、俺も思春期真っ盛りの男子だ。それ相応の恥ずかしさはある。

だから俺はこう言いたい。

もうやめて！俺の理性はほぼ0よ！・・・と

だからこの恥ずかしさを解くべく、最低限必要なことを言って離れてもらおうしよう。

帝「だから、その・・・胸が・・・当たってます／／／」

リアス「わざとよ。」

はあ、俺に休息はないようだ・・・

俺が立ち上がると、別にstand up!してたものが部長の胸

に引つかかった。

リアス「あら、これは・・・」

リアス先輩は小悪魔のような笑みを浮かべた。

帝「ウギヤアアアアアアアアア！」

俺は風呂を飛び出して体を神速の如く拭き、着替えも同様に着替えて閃光の如く部屋に戻り、ベッドにダイブしてそのまま寝た。その夕イムは5秒だった。そして号泣しながら俺は晩飯を食う前に寝た。

部屋に来た美優曰く、すごいうなされていたらしい。

ああ、もう嫌だ・・・

そして迎えた朝も同様に最悪だった。

To be continued

千年伯爵との遭遇です！

帝side

さて、一旦落ち着いて現状の整理をしよう！

まず俺が起きた。んで前を見ると顔色が悪くて眼鏡をかけて顎が異常にしゃくれててボール体型の変態がいた。うん。・・・どう見ても普通じゃねえエエエ!!!!

千年伯爵「おはようございマス??我輩は千年伯爵、以後お見知りおきヲ??」

帝「お、おはよう・・・ございま・・・す・・・?」

千年伯爵「ごらごらあんたあ自分も名乗らなくてはいいけなーくて?」

何だこいつ!めんどくさ!

帝「・・・エミル・キャスタニエ。」

千年伯爵「覚えましたヨオ??実はエミル君、今から我輩についてきなサイ??」

帝「いや、何でだよ・・・」

千年伯爵「まま、いいからいいカラ??」

帝「でええい!近づくな変態が!」

千年伯爵「おっと、コワイコワイ??」

俺はクラウン・クラウンを発動させて千年伯爵とか言う変態を切り刻もうとした。

にしても、千年伯爵だと?どつかで聞いたことが・・・あ!

帝「オイあんた、ノアの一族の奴だろ。」

千年伯爵「ご名答??流石は14番目のノアですネ??」

っ!14番目のノア!?そんなやついないはずだ!何故・・・

千年伯爵「おっと、時間ですネ??ではまた会いましょう、2人目の14番目君??」

帝「オイ待てっ!」

クツソ!何なんだ一体!しかも2人目って!もう1人いんのか!

優香「帝くご飯よ」

帝「う、うん！今行く！」

帝 side out

三人称視点

皇 一誠ことイツセーは、深い夜の闇の中、1人自転車を漕いでいる。契約者の元へ急ぐ為だ。実はここ最近で契約を取れる段階にきたのであった。

ピンポーン

一誠「ちわーっす、グレモリー眷属のものですがー。．．．あれ？返事がない．．．？」

流星に怪しく思ったのか、一誠は家の中に入っていく。

一誠「誰も居ないのかなあ？失礼しまーす。」

ガチャツ

一誠「つつ!!何だ．．．これ．．．」

そこには逆さ十字になった死体があった。

？「『悪い人はお仕置きよ』って、聖なるお方の言葉をかりて．．．みましたあ！」

ソファーに座っていた白の少年が答えた。

フリード「んんっ、こーれわこれわ、悪魔君ではありませんかあ。

俺たちはフリード・セルゼン、とある悪魔祓いの団体に所属している少年神父でござんっす。まあ、悪魔みたいにクソじゃないってのは、確かですあ。」

白髪の少年ーフリードは自己紹介する。

一誠「こ、これはお前がやったのか！」

フリード「悪魔なんか頼るのは人として終わった証拠、エンドですよエンド！だから殺してあげたんですう！クソ悪魔に魅入られたクソみたいな奴を退治するのがあ、俺様のお仕事なんデース。」
フリードは懐から銃と柄だけの剣を取り出して、柄だけの剣から、光の剣を出す。

フリード「今からお前にこの刃をぶったてて、このイカす銃でお前のどタマに必殺必中フォーリンラブ！しちやいまっす！」

そう言っつてフリードは一誠に襲いかかる。

ヒュン!

一誠「うお! あつぶnフリード「バキュン!」ぐあつ!」

一誠は光の剣の攻撃から逃げるが、銃によって足を撃ち抜かれる。

一誠「あぐつつぐあつ!」

フリード「エクソシスト特性祓魔弾、お味はいかががつつすかあ?」

一誠「クツソオ、こんのヤロオ!」

ガチャン

【boost】

一誠は神器を発動させる。

フリード「ウツヒヨウ! まさに悪魔。その方が雰囲気が出ますなあ

」

一誠「ウオオオオツ!」

フリード「あらよつと」

フリードは一誠のパンチをかわし、背中を斬りつける。

ズシャツ

一誠「ぐああああ!」

フリード「おやおや、見掛け倒しさんすかあ? そういうのが一番、ム

カつくんつすよ!」

?「キヤアアアアツツ!!」

フリードが光の剣を振り上げると、少女の声が聞こえた。

フリード「おんやあ? 助手のアーシアちゃん、結界は張り終わった

のかなん?」

アーシア「こ、これは・・・!?」

フリード「そうだったそうだった、君はビギナーでしたな。これが

俺らの仕事、悪魔に魅入られたダメ人間をこうして始末するんつす。」

フリードは悪びれもなく説明する。

アーシア「そ、そんな・・・フリード神父、こんなこと、主が御許

しになりません。・・・はっ!」

アーシアは視界に一誠が入り、驚いた。自分に優しくしてくれた恩

人だからだ。

アーシア「イ、イツセー・・・さん?」

一誠「ア、アーシア……」

フリード「なあになに？君たちお知り合い？シスターと悪魔のイケナイ恋とか？」

アーシア「っ！イツセーさん、どうして……イツセーさんが悪魔だなんて……」

一誠「ごめんアーシア……でも騙してた訳じゃないんだ！信じてくれ！」

アーシア「そんな……」

フリード「残念だけどアーシアちゃん、悪魔と人間は結ばれましえーん。ましてや、僕たちは墮天使様のご加護無しじゃ生きていけない半端者ですからなあ……。さっさとお仕事完了させちやいますかねえー。」

ジャキツ

一誠「くっ……」

フリード「覚悟はオケー？なくても行きます！」

？「ちよい待ちい！」

ガキン！

フリード「いやんもう、ヒーローは遅れてやってくるってか？」

そこにはフリードの剣をロングソードで受け止める帝の姿があった。

一誠「み、帝兄！」

帝「ようイツセー、待たせたな。」

三人称視点 out

帝side

危ねえ危ねえ、嫌な予感が的中した。朱乃さんたちに頼んで飛んできて正解だった。

帝「とここでその兄ちゃん。」

フリード「ん？何の用かな？クソ悪魔君。」

帝「あんたにはパイでもつくれてやる！」

ベチャツ

フリード「うわお！なんですかあ！このふざけたやり方はあ！しか

も美味しいから余計に腹立つ！」

帝「部長、イツセーの保護完了しました。」

リアス「ご苦労様。ありがとう、エミル。危うく私の眷属を失うところだったわ。」

一誠「部長、待って下さい、アーシアがまだ・・・」

朱乃「部長、墮天使の反応が複数。」

リアス「ごめんなさい、イツセー。この魔方陣は私の眷属じゃないと転移出来ないの。朱乃、転移魔方陣の準備を。」

朱乃「はい、部長。」

一誠「でも部長！」

帝「イツセー！でももヘツタクレも今は無いんだよ！分かったらとつとと朱乃さんのとこに行け！」

俺はそう言うのとイツセーは黙った。

後ろから赤い光が輝いた。転移魔方陣の準備ができたみたいだ。

フリード「させますかい！」

帝「うるせえ！」

ベチャツ

フリード「あひんっ！」

俺が投げたパイが飛びかかってくる白髪の兄ちゃんの顔に当たって、白髪の兄ちゃんの変な声をあげて床に落ちた。

アーシア「イツセーさん・・・いつか、また会いましょう。」

一誠「ア、アーシア・・・アーシアアアアアア！」

イツセーは手を伸ばしたが、届くことなく、俺たちと共に消えた・・・すまねえ、イツセー・・・

To be continued

聖女さん、助けます！

一誠 side

俺は部長に家で安静にするように言われたが、今は近くの公園のベンチに座っている。帝兄も俺を看病するという建前上で学校を休んでいる。正直に言くと、帝兄は朝から俺を気遣ってくれたが、ありがた迷惑だった。公園にいても何もないので、立ち上がりとしたとき、もう会えないと思っていた少女が、俺に声をかけてきた。

一誠 side out

帝 side

帝「うん、それじゃありがと。」

プツ

俺はある人に電話をかけていた。ある目的のために。

ここは街はずれの廃教会。俺が墮天使の活動拠点と睨んでいる場所、いや、確信している場所だ。あの後、イツセーから色々話を聞いて、あのシスターが墮天使側についていたことが判明した。神器の心配がしたが、どんな神器かわからずじまいだったが、多分墮天使は彼女の神器を何らかの方法で取り出し、自らの力にするつもりだろうから、個人としては、出来るだけ早く防ぎ、あわよくばグレモリー眷属の間になつて欲しいと考えている。さて、誰に説明してるのか自分でもわからないが、さっさと特攻決め込んでしまおう。

ドンツ！

俺が扉を蹴飛ばすと、拠点の中には神父やら墮天使やらがいた。

「な、何事だ!?」「貴様、ここが何処かわかっているのか!」

あー五月蠅い五月蠅い。さっさと終わらせよう。

帝「テメエらに名乗る名なんてねえよ。とつとと失せる。アイン・ソフ・アウル!」

俺が逆手に持ったロングソードからは、禍々しいオーラが宿っていた。俺がそれを振り抜くと、次の瞬間……

帝 side out

アーシ side

私は今日、もう会えないと思っていたイツセーさんと出会いました。イツセーさんに私の過去を打ち明けると、イツセーさんは私の事を親身になって慰めて頂けました。それだけではなく、私をハンバ―ガーシヨップに連れていってくれたり、ゲームセンターに連れて行って頂いたりもしました。ああ：：なんとお優しい方なんでしょう。しかし会えるのも今日で最後かもしれないかもしれません。私は神器を今日抜かれてしまうのですから。イツセーさん、最後に楽しい時間をありがとうございます。。。。

アーシア side out

一誠 side

俺は今、堕天使と対面している。くそっこんなとき、帝兄ならどうするんだ。。。。

レイナーレ「私は至高の堕天使レイナーレ。その下級悪魔、その子を渡しなさい。」

こいつが帝兄が言っていた堕天使か。

一誠「ア、アーシアをどうするつもりだ！」

レイナーレ「下級悪魔の分際で私に口を聞くなんて。。。まあいいわ。今日の私は機嫌がいいから、特別に教えてあげる。その子から神器をとって私の力にするのよ。」

ッ！こいつ、悪びれもなくそんなこと言いやがって！俺は帝兄から聞いたことがある。神器と魂は繋がっていて、神器を抜かれてしまえば、自分の魂も同時に抜けると。

レイナーレ「そういえば貴方、何処かで見ることがあると思ったら私たちのブラックリストに載ってた子じゃない。ちょうどいいわ。貴方もついでに殺してあげる。」

レイナーレが光の槍を出した。刹那、光の槍を投げてきた。

シユンツ

グザアアツ

一誠「うぐっ！グアアアアアアアア!!!」

痛い。。。体の中が焼けるように痛い。。。アーシア、ごめん。。。
今度も俺は君を守れそうにないや。。。。

帝「んなこたあどうだっていい。それよりもちよつとした交渉をしないか？」

レイナーレ「・・・何よ・・・」

俺は足元に転がってる墮天使を指差すとレイナーレは大層驚いた顔をした。

レイナーレ「カラワーナ！ミッテルト！ドーナシーク！」

カラワーナ・ドーナシーク「も、申し訳・・・ごぎいま・・・せん・・・レイナーレ・・・様・・・」

ミッテルト「ウ、ウチらが・・・こんな・・・下級悪魔・・・ごとき・・・」

帝「その下級悪魔ごときにやられたお前らはゴミ虫以下だな。んでその交渉内容が、このゴミ虫3匹を解放する代わりに、そのの嬢ちゃんをこつちによこせてこと。」

まあ交渉内容としては妥当な線だとは思うが・・・

レイナーレ「ふ、ふぎけるんじゃないわよ！大体、下級悪魔ごときが調子に乗るんじゃないわよ！」

レイナーレはそう言うのと、俺に飛びかかってきた。

帝「交渉決裂・・・か。」

俺はそう呟くと、レイナーレの光の槍を躲し、頭を掴んで床に叩きつけた。

レイナーレ「うぐつ・・・あ・・・」

レイナーレは何かを呻くが、おれには関係ない。さらに俺はレイナーレの背中に回り込み、背中を足で押さえつけて、腕、足の順に骨を脱臼させた。

レイナーレ「ぐぎやつ・・・ああ・・・アアアアアアアアアア!!!」

さて、用事は済んだし、さっさとあの人んとこ送るか。

レイナーレ「な・・・なにを・・・する・・・気・・・」

帝「これからお前らには墮天使総督であるアザゼル殿の所に送る。そこで悔い改めることだな。」

レイナーレ「う、嘘・・・よ・・・あんたみたいな・・・下級悪魔が・・・アザゼル様と・・・知り合い・・・なんて・・・」

帝「ま、とりあえずバイバイ。」

そして俺は魔方陣を展開し、アザゼルのおっちゃんのもとにゴミ虫4匹を送った。

アーシア「あ、あの・・・」

あ、いつけねえ、忘れてた。

帝「さ、アーシアちゃん、だっけ？大丈夫？」

アーシア「は、はい。あの、貴方は・・・」

帝「ああ、俺は皇 帝、もといエミル・キャスタニエ。君の身近な人で言うと皇 一誠の兄だ。」

アーシア「そうなんですか。」

帝「さ、手を出して。今から君を保護してくれそうな人の元へ行くから。」

アーシア「あの・・・そこではイツセーさんに会えますか？」

んん？この子もしかしてイツセーが好きなのか？クアア！イツ

セー、兄ちゃんは嬉しいぞ！性欲だけが取り柄のお前を好いてくれる子がいるなんて！

帝「ああ、いるよ。きつと会えるさ。さあ、早く。」

アーシア「ツツツ！はい！」

うお！笑顔が眩しいっ！

俺はアーシアの手をとって、魔方陣を展開させた。そして俺たちを紅い光が包み、光が止むと、俺たちは廃教会から姿を消した。

T o b e c o n t i n u e d

後輩悪魔できました！

一誠 side

一誠「部長、行かせてください。それでもダメなら、俺を眷属から外してください。」

リアス「ダメよ、イツセー。前にも説明したでしょう。」

部長、そんなのわかってますよ。でも、アーシアのあの悲しい顔が頭の中にこびり付いている・・・その顔で放たれた別れを告げる言葉・・・もうどれも、嫌なんだ・・・

一誠「部長・・・やっぱり俺、行きます・・・」

リアス「待ちなさい、イツセー！イツセー！」

すみません・・・部長・・・

俺がオカ研の出入り口のドアノブに手を掛けようとすると、部屋の真ん中から紅い光が輝いた。その光に目を向けると、帝兄と、俺が助けたかったシスターの服を着た少女がいた。

一誠 side out

帝 side out

えー、只今絶賛お説教Timeです。

リアス「エミル、聞いているの。何故シスターを連れて転移してきたのかしら。」

帝「墮天使がこそこそと部長の領土で何やら変なことでもしそうだったの、その計画を叩き潰したらそのシスターと出会いました。」

リアス「あのね、エミル。私たち三大勢力の關係を知っていてやったことかしら？」

部長の声に少しばかり恐怖感を感じる。だが、臆するな、前に進め！

帝「ええ。もちろん知ってますよ。それにアザゼル殿にも連絡はつけましたから。」

俺がそう言うと、部長が一瞬眉を動かした。・・・あかん、これ結構マジなやつ・・・

リアス「それは事実かしら？」

帝「はい、俺のケータイの通話履歴みればわかりますよ。」

俺はそう言い、部長に俺のケータイの通話履歴を見せた。

リアス「どうやら本当のことみたいね。いいわ、これでお説教は終わりよ。さて、アーシアさん。アーシアでいい？」

アーシア「はっはい！」ビクッ

アーシアはピクリと体を震わして、返事した。多分、いきなり話しかけられてびっくりしたんじゃないか？

リアス「あなたさえよければ私の眷属にならない？丁度回復役の子がもう1人欲しかったし、何よりイツセーが精神的に安心できると思うのよ。」

まあ確かにそうだ。回復役が美優とマルタ2人とはいえ、回復が追いつかない場合がある。そういった面では大変ありがたい。イツセーの精神安定剤的な効果もあるのだから、こちらとしては出来るだけ部長の眷属になって欲しいが、悪魔になるかどうかなど、彼女自身が決めることであつて、俺たちが決めていいことではない。

アーシア「私は・・・私は、悪魔になります！イツセーさんに、帝さんに助けていただいたのに、このまま恩返しできないなんて嫌です！」

それが彼女の意思だつた。ならば俺は・・・彼女がイツセーに対してもっと積極的にできるように背中を押すだけだwwww

リアス「そう、わかつたわ。じゃあアーシア、両手を前にだして。あなたはビショップとして転生させるわ。」

アーシアは両手を前に差し出し、部長はビショップの駒を、アーシアの手に置いた。そしてビショップの駒がアーシアの体に溶け込むように入つていった。どうやら成功のようだ。その証拠に彼女からは悪魔の気配がするようになった。

リアス「さあ、アーシア、貴女は今日から私の眷属よ。よろしくね。」

アーシア「はい！よろしくお願いしますー！」

帝「よろしく、アーシア。早速で悪いんだけどもう9時だぜ？」

俺が時計に指差すと、時計の短い針は9時を回っていた。

リアス「あら、もうそんな時間なのね。今日はこれで解散よ。あ、エミルは少し残って貰える？それとアーシア、この旧校舎に仮眠室があったはずだからイツセーと一緒に泊まっていつてちょうだい。イツセー、いいわね？」

一誠「り、了解しました！」

帝「悪い美優、父さんと母さんに俺は遅くなるって言つといて。それからイツセーの分もよろしく。」

美優「うん。でも早く帰ってきてね？」

帝「わかつたよ。白音とマルタもよろしく頼むぞ〜！」

白音「わかりました。」

マルタ「はーい！」

木場「それじゃ、帝君、またね。」

帝「おう、またな、木場。」

朱乃「それでは部長、帝君、また明日にお会いしましょう。」

リアス「ええ、またね。朱乃。」

帝「また明日学校で〜。」

一誠「そんじゃ帝兄、また明日。」

帝「ああ、またな、イツセー。アーシアに手エ出したりすんなよ。」

一誠「んなことしねえよ！」

帝「しそうだから言つてんだよ。それとアーシアもお休み。」

アーシア「はい。帝さんもお休みなさい。」

俺は部長以外のみんなと別れの挨拶をし、部屋に残ったのは俺と部長だけになった。

帝「それで部長、一体何のご用で？」

リアス「エミルって料理とかお菓子作りとかってできたりする？」

帝「まあ、それなりに。」

たまに美優と白音とマルタに作ってやってるしな。

リアス「だつたらよかつたわ。実は明日の放課後にアーシアの歓迎会をしたいの。手伝ってもらえるかしら？」

流石、眷属への情愛が深いグレモリー家だ。俺も同じことを考えていたんだが。

帝「それだったらいくらでも手伝いますよ。」

リアス「ありがとう、エミル。じゃあ少しついてきて。今から家庭科室室に向かうわ。そのの扉を通った先だから。」

そして俺はアーシアの歓迎会のために、部長とケーキ作りをするこ
ととなった。

T o b e c o n t i n u e d

告られちゃいました！

帝side

最近俺の心がおかしい。部長を見るたびに胸の奥が張り裂けそうになって苦しい。この気持ちは何なのか、全くわからない。俺は考えなくても答えても答えが出せなかった。

ドライグ「大丈夫だ。相棒なら答えを見つけ出せるはずだ。」

そう、俺は今、精神世界に寝ながらいる。正確には、体は寝ているが、精神は寝ていないという、自分でも頭おかしいんじゃないの？と思うようなことを、最近できてしまうようになったのだ。

——それはそうとして、ドライグ、聞きたいことがある。ゼノンもこつちきてくれ。

ドライグ「何だ？一体。」

ゼノン「内容次第では主といえど噛みちぎるぞ。」

ゼノンは昨日精神世界に潜ってたら出会った。身体の色は、白と黒を基調した色だ。だからこいつの神器が白黒なのか。

——いや、少し気になったんだが、龍同士の神器を融合させようとするとどうなるんだ？

ゼノン「何かと思えば・・・お前は死にたいのか？」

——どういうことだ？

ドライグ「まあ待て。俺が説明しよう。龍同士の神器を融合させようとするとうなるか。それは大きく分けて3つある。今から言う2つはほぼ失敗だ。まず1つは、死ぬ可能性。もう1つは寿命が大きく減る可能性だ。」

——最後の1つは？

ドライグ「最後の1つは、体の一部を龍の体とする代わりに、死ぬ可能性も寿命が大きく減る可能性もなくなり、完璧に龍同士の神器を融合させることができる。」

——マジか！

ドライグ「だが、最後の1つができる可能性は極めて低い。だから龍同士の神器を融合させようとするのは極力控えてくれ。」

——そっか。教えてくれてありがとな。それじゃ、もう行くわ。
ゼノン【待て、主よ。】

——・・・何だ？

ゼノン【もうじき、俺の能力が開花されるだろう。だが、それは主
の努力次第の話だ。これも一応忘れるなよ？】

——ああ、わかった。

俺はそう言うのと、精神世界から姿を消し、体の方は目を覚ました。

帝 side out

美優 side

美優「お兄ちゃんどうしたの？」

私たち皇兄妹（イツセーを抜きにした）とマルタさんは、いつもの
ように通学路を歩いている。ああ・・・今日もお兄ちゃんはカッコイ
イなあ・・・それにいつもは作らない目の下のクマもちよつと可愛い
??

帝「ん。いや・・・昨日部長に告られた。」

その一言は私の、もしくは私たちの眠気を吹き飛ばすにはあまりに
丁度よかった。

美優「ち、因みにお兄ちゃん、どう告白されたの？」

帝「あー、なんだっけな・・・確か、.. 私は1人の女性、リアスと
して、エミルのことが好きです。.. だっけなあ・・・」

私はそれを聞いた直後、リアス部長に問いただすことに決めたが、
あっさりとその決意は砕かれた。

帝「あんまりこういうことはわかんねえし、・・・その・・・自分の
気持ちも、正直まだわかんねえからその告白は保留にした。」

お兄ちゃんは少し引つかかることを言った。でも、恋のライバルが
増えたことには変わらない。お兄ちゃんは絶対誰にも渡さないんだ
から！

歓迎会開始です！

帝 side

ああああゝ・・・空は青いなあゝ・・・

リアス「どうしたの？大丈夫？」

帝「ん、大丈夫ですよ。」

今俺はオカ研にいる。アーシアの歓迎会の準備のために、美優やイツセー達よりも早くきて、部長と朱乃さんとで、準備している。

帝「朱乃さん、これはどこ置いとけばいいですか？」

朱乃「あちらのテーブルの上にお願ひしますわ。ごめんなさい、帝君。こんな力仕事ばかりお願ひしてしまつて・・・」

帝「いいですよ。こんなときぐらいにしか役に立てそうにありませんし。あははは・・・」

苦笑いして俺はそう言い返す。

リアス「もしかすれば、そうかもしれないわね。」

ぐつ、そんなハツキリ言わなくても・・・

リアス「それでも私は貴方を頼りにしているわ。貴方のおかげで少しずつだけど、眷属が増えていつている。それに貴方は私の可愛い下僕なのだから。」

朱乃「それは私だつてそうですよ。命を救っていただいたのですから、なおさらですよ。ですからそんなに自分を卑下しないでください。」

2人はそう言つて微笑む。

・・・仲間に恵まれるって、こういうことなんだろうな。

誰も彼も疑う癖のある自分が馬鹿らしく見えてきた。少なくとも、信頼に足る人がまた増えたな。さて、さつさと準備しよう。

帝「さあ、さつさと準備済ませちゃいましょう！」

リアス「そういえばそうね。エミルの言う通り、早く済ましましょう。」

朱乃「皆さんの驚く顔が楽しみですわ。」

帝「それと部長、朱乃さん・・・ありがとう。」

俺は2人のほうに振り返り、今までで一番穏やかな微笑みで言った。

リアス「それでは、今日の部活を始めましょう。と言いたいのだけど、今日の部活は無しにして、アシアの歓迎会を始めましょう。」

帝「つつー訳で、アシア、ようこそ！オカルト研究部ことグレモリー眷属へ！」

パーン！

朱乃さんと俺で、クラツカーを鳴らす。そして俺は急いで隣の家庭科室にあるケーキを取りに行く。

リアス「本当は朱乃がケーキを作る予定だったのだけど、今回は私がついてみたの。」

扉の向こうからは部長がケーキを作った理由を言ってるのが聞こえる。

一誠「おお！部長の手作り！」

相変わらずイツセーは反応が大袈裟だなあ。

ガラガラガラ

バタンツ

帝「こちらが部長お手製のケーキです。味は俺が保証する。」

リアス「ちよつとエミルっ！何でそう言うのよ！」

部長はそう言うのと、俺をポカポカ殴ってくる。

部長、無駄だ。そんなの可愛いだけだ。

そうして、ドタバタな歓迎会が始まった。

リアス「エミル、美味しい・・・かしら？」

モグモグモグ・・・ゴクン

帝「美味しいですよ。部長。」

リアス「そう・・・ならよかったわ。エミル、はい、アーン。」

帝「ふえあっ!?部長、自分で食べられますから！」

リアス「それでもよ。アーン??」

・・・引く気は無いようだし、乗ってやるか。

帝「・・・アーン。」

リアス「どう?」

帝「恥ずかしいですけど、自分で食べるよりかは・・・まあ美味しいです／＼／」

リアス「なら、もっとしてあげる。はい、アーン??」

笑顔が眩しい!そして可愛い!

帝「アーン。」

この一連の流れを目にしたオカ研女子メンバーが俺に向かってきたのは、言うまでも無い話だ。何故俺に執着するのはわからないが・・・

帝「はあ・・・」

ここ最近で一番大きなため息だった。

To be continued

戦闘校舎のフェニックス 契約取らせませす！

三人称視点

一誠「帝兄、本当にこれやらなきやいけないのか？」

帝「当たり前だ。第一、契約もろくに取れてないくせにそう言うことは言うな。」

帝と一誠は、あるアパートの前に自転車であつて来た。

帝「それに部長や朱乃さんが言つてただろ？ 契約云々はアレなのに評価は最高つて・・・」

帝は頭を悩ます仕草をしながらそう言う。そして一誠は、項垂れる。

帝「まあ兎に角だ。今日は意地でも契約取つてもらうからな。」

そして一誠と帝はアパートの一室の前に着いた。

コンコン

？「空いてまーすによ。」

帝・一誠「「によ？」」

ガチャ

扉を開けると、そこには、何らかの魔法少女のコスプレをし、服の上からでもわかる程、モリモリの筋肉を持ち、頭にネコ耳を付け、体の周りからは、微々たるものではあるが、覇気を巡らせた漢字の漢に、乙女の女とかいて、漢女（おとめ）と書くような呼び方が相応しい人物が立っていた。

帝は恐怖による汗を流しながら、表情を変えずにその漢女に聞いた。

帝「えつと、悪魔を召喚された方ですか？」

？「うん！ そうだによ！」

一誠「ご、ご依頼の内容は？」

ミルたん「ミルたんを、ミルたんを魔法少女にしてほしいによ！」

その漢女はミルたんとな乗った。

帝・一誠「異世界に転移してください。」

帝と一誠は即答で返した。

ミルたん「それはもう試したによ。」

帝・一誠「試したのかよー!」

ミルたん「でも、そこにはミルたんにファンタジーパワーをくれる人は居なかったによ。」

帝「いや、もう充分ファンタジーです。」

ミルたん「こうなったら宿敵である悪魔さんに頼むしか無いによ!」

一誠「(帝兄!これヤバイ!絶対ヤバイ奴だよ!)」

帝「(グダグダ言うなイツセー!俺もメチャクチャ怖えんだよ!)」

帝と一誠は目だけで話し合う。

一誠「(こうなったらやけくそだ!)で、今回はどのようなことを?」

一誠がそう聞くと、ミルたんは1つのDVDディスクを出した。

ミルたん「まずは魔法少女の入門編として、ミルキースパイラル・オルタナティブを見るによ!ここから始まる魔法もあるによ!!」

帝・一誠「・・・」

そのまま帝と一誠はアニメ鑑賞会にひき込まれ、2人が契約を成立させて外の景色を見ることになるのは夜明け間近のことだった。

帝「イツセー、とりあえず部室に戻ろう。あとミルたんには気をつけとけ。」

一誠「部室に帰るのはいいとして・・・何で?」

帝「あいつ、下手したら最上級悪魔と実力が同等かもしれねえ。それにまだ俺の膝が笑ってやがる・・・」

帝と一誠はオカルト研究部に戻り、成果を報告し、契約の代価となった一冊の本を、リアスに提示した。

リアス「ねえエミル、これって・・・」

帝「・・・恐らく、太古に封印されたはずの禁忌の魔道書かと・・・」
それを聞いたオカ力のメンバーが驚愕の声を上げたのは、また別の話である。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

部長が帝に夜這いですと？

帝 side

ううん・・・なんかとんでもない悪夢を見た気がする・・・そう言えば今日あんまりに寝不足すぎて学校休んでたんだつたな。ええつと、今は1時半か・・・水飲もう。俺がベッドからでて1階に降りようとする、見覚えのある魔方陣が、何も置いてない場所から出てきた。そして出てきたのは部長だった。

帝「部長、どしたんだリアス「エミル、私の処女を奪って。至急お願いするわ!」・・・へ?」

リアス「至らない点はお互い色々あるでしょうけど、頑張つて乗り切りましょう。」

帝「待った!部長待った!一体全体何があつたんですか!」

リアス「祐斗は根っからの騎士だし、イツセーは優しくしてくれなさそうだし・・・それに既成事実さえできてしまえば文句はないはずよ。」

たぶんっ

部長が自分のブラのホックを外し、豊かな双丘が肌を晒す。

帝「待つて部長!話を聞いてよリアス「私に、恥をかかせるつもり?」・・・」

どうすればいい!全思考回路を巡らせて考えろ!・・・あれじゃない!これじゃない!うう・・・くう・・・クツソ!ない!・・・いや待て、あるにはある・・・今は緊急時だから仕方がない!そう、仕方がないんだ!

ギョツ

帝「取り敢えず落ち着いて下さい。悩みなら、俺がいつぱい聞きますから。」

俺は部長の頭と腰に手を回して俺の方に抱き寄せた。過去に美優にやったことがあるが、何しろ10年前のことだから、正直、効くかどうかは分からなかった。だが、意外と俺のが効いたのか、少し落ち着いてきた。

帝「部長、少しは落ち着きましたか？」

リアス「ええ、ありがとう。私も少し冷静でなかったわ。これじゃ、王失格ね・・・」

帝「それは良かった。じゃあ離してくれませんか？」

リアス「だめよ♪」

エ、モウ、チヨトナニ？ゼンゼンモドテナイヤン。

帝「因みに聞きますけど、何故？」

リアス「こうしていると、何だか安心できるの。」

帝「そつすか。じゃ、しばらくこのままでもいいですよ。」

あ、しまった・・・自分が今どんな状況か対処してなかったあああ!!よく考えろ！上半身裸の美女と何の変哲もない一般男子高校生が、抱き合ってる・・・どう見てもアウトだろおお！あう！部長止めて！胸があああ!!あ、でも甘い香りがする・・・部長からかな？それに女の子の体ってこんなに柔らかかったんだ・・・じゃねえ！煩惱退散煩惱退散！そうだこういう時は素数を数えるんだ！1 2 3 5・・・つて、1は素数じゃねえ！ああああ！どうしたら良いんだ！俺が悩んでいると、白い魔方陣がグレモリーの魔方陣が出てきた同じところに出てきた。そして出てきたのは結構美人なメイドさんだった。

？「こんなことまでして破綻に持ち込む気ですか？」

リアス「ここまでしないとお父様やお兄様は私の意見を聞いてくれないわ。グレイファイア。」

グレイファイア「こんな下賤な輩に貴女の貞操を捧げるとなれば、サーゼクス様やジオテイクス様が・・・申し訳ございません、貴方がサーゼクス様がおっしゃっていたラタトスク様、ですね？」

帝「ええ、そうですが、貴女は？それと、何故俺のことを？」

グレイファイア「申し遅れました。魔王サーゼクス・ルシファー様のメイド、グレイファイア・ルキフグスと申します。以後、お見知り置きを。噂はサーゼクス様から色々と聞いております故、気配からして、ラタトスク様と判断致しました。」

帝「成る程、道理だね。」

リアス「グレイファイア、話は私の根城ですわ。朱乃も同伴ですよ。」
グレイファイア「＜雷の巫女＞ですね。良いでしょう。キングたるものクイーンを傍らに置くのは常ですの。」

リアス「ごめんなさいね、エミル。迷惑だったかしら？」

帝「いえ、大丈夫です。ただ、明日に何があつたのか聞かせて頂きますね。」

リアス「ええ、眷属のみんなにも関わる話だから、明日の部活で、ね。それじゃあおやすみなさい。」

帝「はい、おやすみなさい。」

・・・何だったんだんだ？ 一体・・・

To be continued

フエニツクス？いえ、唐揚げです。

帝 side

帝「あいいつちにいい！いいつちにいい！」

一誠「み、帝兄待つて、も、もう無理イ……」

俺と一誠は一昨日から始めた朝練をしている。本来なら部長もいるのだがな。因みに一誠が朝練をしている理由だが、赤龍帝の籠手の使用者であるイツセーは、基礎身体能力が高ければ高いほど、赤龍帝の籠手の使用時をより良く使いこなせる。簡単に言えば、体力やその他諸々一緒に上げて倍加の許容量を上げようというわけだ。

アーシア「イツセーさん、お茶持つてきましたよー。」

帝「よしイツセー、少し休憩だ。」

一誠「は、はい……」

ゴクツゴクツゴクツ

一誠「ぷはあ。」

アーシア「どうですか？イツセーさん。」

一誠「美味しいよ、アーシア。」

アーシアが何故ここにいるのだが、アーシアは皇家でホームステイ中だ。部長も中々粋なことをしてくれるな。さて、時間は……7時か。

帝「イツセー、今度はお前の背中にコンクリブロック4つ乗せて30分間腕立てだ。」

一誠「ま、マジかよ。」

帝「マジだ。ほら、さっさとやる！」

一誠「あ、あんまりだあー！」

—————

帝「なあ木場、部長この頃少しおかしくねえか？」

今は駒王学園。木場やイツセー達と一緒に部室に向かっている途中だ。

木場「んー、僕にはわからないな。朱乃さんなら知ってるんじゃないかな？彼女は部長の親友だし懐刀だからね。」

成る程、後で朱乃さんに・・・誰か来ているな。

木場「帝君、気づいているかい。」

帝「ああ、ついさっきだがな。」

木場「僕としたことが、修行不足、かな。」

帝「ははは、ちとばっかし氣イ抜きすぎてたな。」

美優「え？お兄ちゃん、木場君、どうしたの？」

「どうやら美優、マルタ、イツセーは何のことか理解できないで頭に？を浮かべていた。」

帝「あ、開けるぞ・・・」

ガチャ

帝「グ、グレイファイアさん？」

グレイファイア「こんにちは、ラタトスク様。」

帝「いや、帝かエミルでいいですよ。」

グレイファイア「了解いたしました。リアスお嬢様眷属の皆様がお揃いになられたので私からご説明を。」

リアス「待ってグレイファイア。私から話すわ。実はー」

部長が話そうとしたとき、鳥の鳴き声と共に魔方陣が現れた。

木場「フェニックス・・・」

そして派手に炎を撒き散らせながら魔方陣から現れたのは、赤と白の服を着崩した金髪の下三流ホストみたいな男だった。

？「ふう、久しぶりの人間界だ。会いに来たぜ。愛しのリアス。」

—————

ズズズツ

？「リアスの女王の紅茶はいつ飲んでも美味しいなあ。」

朱乃「痛み入りますわ。」

朱乃さんのいつものニコニコ顔も今回は目が笑っていないかった。あ、おいなに図々しく部長の体に触ってんだ！嫌がつてるだろう！

リアス「いい加減にして！ライザー！私は貴方と結婚なんてしたくないわ！何度も言わせないで！」

ライザー「だがリアス、君だつてわかっているだろう。先の大戦で

純血悪魔がどれだけ減ったかを。」

先の大戦というのは、天使・墮天使・悪魔の三つ巴の戦のことだ。その大戦中に二天龍が乱入し、三大勢力は一時休戦し、二天龍を神器として封印したらしく、その二天龍が、赤龍帝ア・ドライグ・ゴツホことドライグと、白龍皇アルビオンらしい。

リアス「ええ、わかってるわ。もちろん婿養子も迎え入れるつもりよ。でも私が一生を添い遂げる人は私が選びたいの。」

ライザー「リアス、こちらとしても、俺はフェニックス家の看板を背負っているんだ。我が名誉あるフェニックス家の顔に泥を塗りたくないんだ。それに耐え難いんだよ。炎と風を司るフェニックスとして、人間界の空気は最悪なんだ。」

へえ、随分言ってくれるな。そろそろ俺も怒るぞ。

ライザー「俺は君を連れて帰るぞ。君の眷属を燃やし尽くす……まで……」

美優「お、お兄ちゃん……」

一誠「ちよつと待てよ！帝兄！」

帝「美優、イツセー、どうした？」

マルタ「エミル、殺気だだ漏れよ……」

帝「あ、マジか。」

よく見ればテーブルの上のティーカップがカタカタ揺れている。

帝「まあいい。おいライザー、だったか。テメエもう一度さっきの言葉、言ってみろ……！」

ライザー「な、何なんだお前は！」

帝「リアス・グレモリー様の兵士だが、にしてもあんた、結構弱そうだなwww」

ライザー「ぐっ……貴様アツ！下級悪魔ごときがあ！調子に乗るなあ！」

はいはい、フラグ建築お疲れ様です。

ライザー「まあいい。それよりリアス、君の眷属はたったのこれだけかい？」

リアス「そうよ。でも甘く見ないで。この子たちは質が高いのよ。」

ライザー、貴方は？」

ライザー「俺か？俺は15人フルで揃っている！」

ライザーがそう言うと、フェニックスの魔方陣から、ライザーの眷属が現れた。…しかもその眷属が全員女性であった。ねえ部長、こいつ殴っていいですか？いいですよ！てかイツセー、泣くな。理由がしようもない。

ライザー「なあリアス、そこの悪魔君は何故泣いているんだ…？」

ライザーは顔を引きつらせながら部長に聞いた。どうやら少なくとも常識は持っているようだ。

リアス「あの子、ハーレムに憧れているらしいのよ。」

ほら見ろイツセー、部長も苦笑いしてるじゃねえか。

？「えーキモーい。」

緑色の髪の毛の体操着を着たのがそういった。…否定はしないがもう少しオブラートに包んでくれないかな。

ライザー「ははは、面白い。俺たちのことを見せつけてやろうじゃないか。イル、ネル。」

うわあ、婚約者の目の前で堂々とディープなチュウしちやつてるし…部長は嫌そうな顔をしている。まるでゴミを見ているかのようだ。イツセーは…うん、考えるまでもない。一方俺はというと、多分部長と同じような感じだ。サイテーだ、この唐揚げ野郎。

ライザー「ははははは！どうだ？下級悪魔君。君には一生を掛けてもできないだろう。」

一誠「うっせえ！ほつとけ！」

帝「こんな野郎は部長に釣りあわねえな。」

ライザー「何だと？貴様、もう一度言ってみろ！」

あ、何？声に出てた？しゃあねえ、こうなったら堂々と言ってやる！

帝「あんたじゃ部長とは釣り合うないって言ってんだよ。ちゃんと聞いとけよ。どうせあんたのことだ、部長の体目的で結婚したいだけだろ？そしてあわよくば眷属の奴らの体も頂こうって魂胆だろ。」

ハッキリ言つてサイテーだよ。これじゃ、上級貴族の面汚しだな。唐揚げ野郎が。」

ライザー「貴様ア、言わせておけばあ！ミラ！」

棍を持った1人の少女が俺の前にきた。と思つたら俺に突撃してきたが、遅い、遅過ぎる。棍の先端を右手で受け止め、左手で棍を折り、ミラという少女を蹴飛ばす。かかった時間はおよそ2秒だ。

帝「はあ、弱すぎだ。ライザー、あんたふざけてんのか？もう少し楽しめそうな奴だせよ。」

ライザー「くつ、この下級悪魔がああああ！」

グレイフィア「エミル様、ライザー様、これ以上続けるお積りでしたら私がお相手になります。」

このオーラは・・・この人、強い。実力は低く見積もっても魔王級か。

ライザー「最強の女王と称される貴女に言われれば、こちらも手を引かざるを得ませんね。」

帝「こちらも同意見だ。相手の力量を測れない程、俺も馬鹿じゃないんでな。」

グレイフィア「それでは、双方の意見が一致しない場合、サーゼク様より、レーティングゲームで決着をつけるよう、仰せつかっております。レーティングゲームの開始時刻は10日後の午前12時となっております。異論はありませんか？」

リアス「ええ、異論はないわ。ライザー、10日後に貴方を完膚なきまでボロボロにしてあげるわ！」

ライザー「いいだろう、リアス。その勝負乗ってやろうじゃないか。それとその下級悪魔！レーティングゲームの日を楽しみに待っておけよ！」

ライザー達は捨て台詞のように吐くと、魔方陣で部屋から消えた。面白いじゃねえか。返り討ちにしてやるぜ！

To be continued

修行合宿開始です！

帝 side

帝「はあ・・・はあ・・・重い・・・」

重い重い重い重い！えっ？何でこうなっているかだつて？俺たちオカルト研究部はレーティングゲームのために部長の別荘へ修行しに向かっている。今俺はマインドブレスレットという力の制御装置みたいなのをつけているために、現在の力が下級悪魔と同等になっっている。美優、マルタ、白音の荷物を持っているのだが、重いとにかく重い！なんで女の子の荷物ってこう多いんだろう。俺の荷物は筆記用具、10日分の着替えとジャージ、大体このぐらいだ。美優とマルタに聞いてみたが女の秘密という言葉で誑かされた。

一誠「ぬうおおおおああああ！」

嗚呼、うるさい。イツセー、お前が羨ましい。お前の荷物の量は俺の三分の一だぞ。

リアス「さあ、着いたわよ！」

こ、これは別荘と呼んでいいのか？世間一般的にはこれは城と呼んだ方がいい気がする。

一誠「うはああつ！疲れたあ！」

帝「ああ、確かに疲れたが、この後から直ぐに特訓だ。さつさとジャージに着替えるぞ。」

木場「ほら、早めに着替えようか。でも・・・覗かないですよ？」

帝・一誠「木場、テメエ後で覚悟しとけよ。」

木場「あ、あはは・・・笑えないよ、帝君。」

そんなもの、知らんな。

帝「じゃ、修行を始める。が、今日はみんなと手合わせだ。みんなの実力を知っておきたいからな。んじゃ、まずは木場、こい。魔剣でも何でもいいから。」

木場「君と剣を交えることができるなんて光栄だよ。君の2つ名、

マルタさんからきいたよ。」

帝「えっ、マジで教えちゃったのか？マルタ。」

マルタ「えへへ、教えちゃったよ♪」

帝「教えちゃった♪じゃないよ！全くもう。ほら、これ少し持ってきてくれ。」

俺はマインドブレスレットを外してマルタに投げ渡す。・・・よし、取ったな。じゃ、早速・・・発動！

バシャーーン！！！！

辺り一帯から、魔剣と聖剣が地面から現れる。そして近くに生えていた剣を右手に取った。

帝「見せてやるよ！<千刃剣士>の片鱗をよ！」

帝 side out

木場 side

帝「見せてやるよ！<千刃剣士>の片鱗をよ！」

彼の周りには、無数の魔剣と聖剣が生えている。・・・抑えるんだ・・・今は、今だけは！

僕は手に魔剣を創り、彼に向かって走り出した。

木場「はあああああつっ！！」

ガキイイイインツツツツ！！！！

剣と剣がぶつかり合い、バチバチと激しい火花が散る。やはり帝君は強い。僕の全力のスピードとパワーで振るった剣をいとも容易く受け止めるんだから。

帝「木場！お前の全力はこんなもんか！」

木場「まだまだだっ！」

右、縦、斜め、突き、縦！それでも帝君は赤子と戯れるかのように受け、いなし、かわす。

木場「ツツツツ!?!」

バギイイツ！

帝「へえ、今のを退けたか。」

木場「そんなの聞いてないよ、帝君。」

彼の周りには、無数に地面に生えていた剣が浮かんでいた。

帝「俺は剣を創りだせるだけじゃない。遠隔操作だって可能なんだ。ま、さつき木場が叩き斬った奴も合わせれば、今の数が限界だな。」

木場「全く、君は規格外過ぎるよ。〈千刃剣士〉と呼ばれる理由も、今ので分かったしね。」

帝「さあ木場！お前はいつまで保つかな？」

木場「君には勝てそうにないや。でも、せめて一回くらいは当ててみせる！」

僕は再び帝君に向かって走り出す。

ガキイイイインツツツツツ

剣と剣がぶつかり合い、再び火花が舞った。

To be continued

修行合宿中です！Part 1

帝 side

帝「ふう・・・木場、俺の勝ちってことでいいな？」

今俺は木場に剣先を向けている。

木場「まいったよ。でも、本当に君は凄いよ。まさか剣を蹴飛ばすなんて。」

帝「いや、俺の重突進技を受け流してそこから剣を弾いた木場もすげえよ。ほら。」

そうやって俺は手を木場に差し出す。何？前回木場と剣をぶついていたから何があったって？えつとだな、まず俺と木場が鏢迫り合いをして、2人が後ろに大きくバックステップで距離を取り合う。俺が重突進技、ヴォーパルストライクを木場に放ったが、木場はそれを受け流し、俺の剣を弾き飛ばす。弾かれたことにびっくりして後ろに倒れそうになるところに木場が追撃と言わんばかりに剣を振り下ろすが、俺は空中で（後ろに倒れそうになりながらだが）

回転しながら、回転蹴りの要領で木場の剣を蹴飛ばす。すかさず地面に落ちると同時に受け身を取って、近くに浮かべていた剣を手に取り、木場の喉元に突きつけている。というわけだ。OK？

帝「さて、木場。お前へのダメ出しだ。まず1つ、力をつける。あ、筋肉とかの方な。2つ目、剣での戦闘にこだわらず、体術も使え。お前の武器は剣だが、剣を失えばお前は弱い。剣を失ってもう武器がない！つてときに頼れるのは体術だけだからな。最後に、木場、お前は剣の軌道を目で追い過ぎだ。悪いとは言わないが、多方面からの攻撃に弱くなりがちだ。今回の修行では、最悪でも気配だけで攻撃を躲せたりするようになってくれ。」

木場「な、なんだか痛いところばかり突いてくるね。」

帝「仕方がない。これでもまだ甘い方だぞ？」

木場「が、頑張ります・・・」

帝「さて、次は白音だな。こいよ。」

白音「では帝兄様、行きます。」

帝「よし来い！つてうおおっ！」

な、なんだ白音の奴！正確っ！にいっ！体のおっ！中心うおっ！
狙つてえ！くるううっ！

白音「むう・・・当たってください。」

帝「無理無理！こんなの避けないうごはあっ！！」

やべっ鳩尾に入ったらなんか意識が・・・

ー数分後ー

帝「ううん・・・」

美優「あ、お兄ちゃんやつと起きた。おはよ♪」

帝「うん・・・おはよう。」

・・・つて、この感触、まさか！

帝「美優、何やってんだ？」

美優「お兄ちゃんに膝枕してるんだよ？どうか。気持ちいい？」

うぐっ！可愛い妹に膝枕されて気持ちよくないとかいう奴がどこにいるか！と言いたいところだが、しっかりと冷静な兄を演じなければ。

帝「気持ちいいにはいいが、こういうことは好きな人にやってやった方がいいんじゃないか？」

美優「むう、私の好きな人はお兄ちゃんだけだもんっ。」

ぬうああああ！！ドストレートに言うなあ！もんとか言うなあああ！！つとと、キャラ崩壊が著しいな。え？元々こんなキャラ？・・・知るかっ！

帝「気持ちだけで充分だよつと。」

そう言つて上体を起こしてから立ち上がる。

帝「さて、白音。君は・・・正直言つてあまり悪いところはない。今回の修行はただ単純に体を鍛えるだけがいいと思うな。」

白音「・・・はい。」

うーん・・・落ち込んでるな。さっきのことで、かな。

帝「白音、そんなに落ち込む必要はないぞ？」

白音「でも、でも私はー」

帝「もしお前が、自分が悪いと思つていいるならば、そんなことは俺

にしちや迷惑だ。」

白音「・・・」

あーあ、どうしよう。黙りになっちまったな。

帝「ま、避けきれなかった俺が悪いんだ。気にするな。それにだ。俺に当たるとは大したもんだ。成長したな、白音。」

俺はそう言っつて頭にポンと手をのせ、頭を撫でる。あれ？女性陣の皆さんはなんでこっち見てんの？つてか白音の顔が赤いな。熱か？

白音「み、帝兄様、私はここで。」

帝「あ、おう。あんまり無理すんなよな。でだ、次は誰がくる？」
そう言っつて笑みをこぼす俺であった。

To be continued

修行合宿中です！Part 2

帝 side

一誠「帝兄！次は俺とやってくれよー。」

帝「あー、別にいいが・・・ちよつと、な・・・」

何しろ、イツセーは・・・言いたくはないが弱いしなあ・・・あ、そ
うだ。

帝「うーん・・・イツセー。五分だけ時間をやる。1発でも攻撃を
当てられたら、お前に必殺技的なものを教えてやるよ。」

一誠「マジか！よーし、やってやる！」

はははっ。これで当ててくれたら面白いのだが。

ー五分後ー

帝「オイオイ、嘘だろ。背負い投げしただけでもう伸びたちまった
よ。」

一誠「うぎゅーー」

帝「・・・アーシア、頼んだ。」

アーシア「はい。お任せください！」

マルタ「じゃあエミル！次は私と美優ちゃんとよ！」

帝「お、おう。」

ヤバイヤバイヤバイ！この2人の攻撃と言ったら・・・！

美優「マルタさん、行くよ！」

マルタ・美優「ジャッジメント！」

魔界の魔術も、ある程度使っていれば、その魔術を詠唱無しで発動
できる。ってそんな場合じゃない！急いで闇の精霊魔術を！

帝「闇よ、顕現せよ。我が名の下に命ずる。闇よ、
滅ぼせ！」

俺の周りに幾つかの黒い球体が現れた。そしてこれをつ！

帝「イビル・ジャッジメント！」

バシューーン！！！！

美優とマルタのジャッジメントと俺のイビル・ジャッジメントがぶ
つかり合い、巨大な爆発が起きた。

マルタ「まだまだっ！」

美優「これならどう？」

マルタ・美優「ゴディバインセイバー！」

げっ！つくそがあああ！

帝「穿て、我は焰の執行者。我が名の下に命ずる。焰よ、全てを焼き払え！」

両手に焰が現れた。この火力なら！いける！

帝「スカーレット・インフェルノ！」

焰を地面に当て、俺を中心に炎の渦が巻き起こる！

バアアーーーーンンツツツツ！！！！

この爆煙の中を突っ切る！腰に納刀しているロングソードとダークソードを抜く。

帝「ここだあ！！」

スカッ

帝「っ!？」

俺が斬ったのは爆煙と虚空だった。ならどこに？

美優「ここだよ！ファイアボール！」

帝「うぐっ！」

しまった！後ろをつ．．．いや、俺の負けのようだ。

マルタ「ふふんっ。どう？私達のコンビネーションは。」

マルタが俺のうなじにアイアンスピナーを当てていた。

帝「俺の負けだ。ちよつと手を抜き過ぎた。」

美優「本気を出してあれなのにお兄ちゃんの手を抜いてた、かあ。」

帝「うーん、半分本気だったけど、俺もそううかうかしてらんないな。」

マルタ「せっかくエミルに一泡吹かせてやれたって思ったのにい！」

はっはっはあ！もっと精進したまえ。

帝「それでも、半分本気出した俺を相手に一本取る奴はあんまいないと思うぞ？成長したな。マルタ、美優。」

これは本当だ。まさか俺の思考を読まれてたとは思わなかったか

らな。

帝「さて、最後は・・・部長と朱乃さん・・・かな？」
リアス「そうね。さあ、エミル、貴方を少しお仕置きしてあげるわ
！」

朱乃「あらあら、うふふ。帝君に相手をして頂けるなんて光栄です
わ。」

この2人、怖い！なんで!?俺何もしてないよ!?

リアス「さあ、覚悟なさい！」

朱乃「たつぷりとお仕置きしてあげますわ！」

帝「なんで!？」

リアス・朱乃「自分の心に聞いてみなさい（ください）！」

帝「ぬうああああ!!」

俺の叫びが森に響いた。

To be continued

新能力解放です！

帝 side

帝「イテテ、朱乃さん、魔力の使い方教えてくださいよー。」
む？部長と朱乃さんの勝負？負けました。完璧に不意打ちだよ、あれは。

朱乃「あらあら、帝君は既に魔力を使えるのではないのですか？」
魔力を使えるだと？ああ、精霊魔術とソーサリーリングか。

帝「あの魔力はこっちの魔力とは違うものなんですよ。」

朱乃「わかりましたわ。簡易的ではありませんが、魔力の使い方をお教えします。まず、手の平を前に突き出してください。それから、イメージしてください。自分の原動力となるものを。」

んーん、中々難しい。俺の原動力？・・・仲間を守る、か？
ブウン

帝「ふおうあああっ?!」
び、びつくりしたー。いきなりでてくるかよ。

俺の魔力の球は野球ボールと同じくらいの大きさの青紫色の球だ。

朱乃「きれいな色ですね。それでは、あそこのペットボトルに向かってその球を飛ばしてくれますか？」

帝「言われなくてもっ！」
バシユンツ！

朱乃・帝「・・・え？」

ええええ!!?? ペットボトルに魔力飛ばしたら消えたあ!!?? これって部長と同じ滅びの魔力・・・どういう・・・あ、そっか、そういうことか。

帝「朱乃さん、多分これ俺の神器の所為ですよ。」

朱乃「どういうこと・・・ですか？」

朱乃さんは可愛らしく首を傾げた。この時、俺が朱乃さんを可愛いと思っただのは秘密だ。

帝「さっきの部長と朱乃さんの攻撃食らった時に部長の攻撃を究極龍王の絶爪を展開して受け止めたのですが、何らかの能力が発動した

のかと。多分能力からして吸収系かと思いますが。」

ゼノン「ほう、よく気付いたな、主よ。」

ー「オイオイ、推測で言ったのに。」

ゼノン「正確には、相手の魔力攻撃を吸収し、その魔力の特徴を自分の力にできる。」

ー「便利なもんだな。」

ゼノン「だが主の体の許容量を超えると主自身にダメージが行く。日々、鍛練を怠らないことだ。」

ー「はいはい。」

朱乃「二度、部長を呼んできます。簡単な説明をして頂きますが、詳しい話は夜9時からということだ。」

帝「了解です。」

朱乃「それでは一度、失礼致します。」

帝「はい。また後で。」

さて、この魔力に名前を付けてみよう。

消滅の魔力？いや、ベタすぎだ。焼滅の魔力？かつこいいとは思うが・・・崩滅の魔力？・・・無いな。聖滅の魔力？いや、これじゃ天界に特攻しろというようなものだ。星滅の魔力？星を滅ぼしたらダメだろ。あー！どうしたらいいんだ！

帝「・・・瘴滅。」

うん、もうこれでいいやあ。

半分自暴自棄になっていた。

To be continued

修行合宿の夕ご飯！

一誠 side

一誠「帝兄、なんか手伝うことある？」

帝「いや、ないよ。それより向こうで楽しくやってろ。つか休んだけ。」

そんなこと言っつて、本当は自分が一番疲れてる癖に・・・

一誠「わかったよー。」

居間に戻ると、帝兄以外のオカ研メンバーが集まっていた。が、女子メンバー（アーシア以外）は、一箇所に集まって会議的なことをしていた。多分帝兄のことだろうなく。でも帝兄って唐変木だし、ちゃんと伝わるかどうかすら・・・。

木場「あ、イツセー君こっちこっち。」

一誠「ん？何だよ木場。」

木場「実は帝君の弱点を知りたいんだけど、いいかな？」

一誠「いや、それなら美優姉やマルタさんに・・・ああ、なるほど。

つつても、帝兄の弱点は俺もあまり知らないんだ。ごめんな。」

木場「そっか、ごめんね。」

一誠「なあ木場、何でそんなに帝兄にーー」

ガチャ

帝「みんなーご飯できたから運ぶの手伝ってくんねーか？」

一誠「帝兄、俺行くよ。」

帝「おう、あんがと。」

木場「一誠君、僕も行くよ。」

マルタ「あ、私も私も！」

美優「お兄ちゃん、一緒に行こ。」

帝「よし、行くか。」

帝兄がそう言い、俺たちは台所へと足を運んだ。

一誠 side out

帝 side

居間に料理を運んでる、俺、美優、マルタ、木場、一誠だが・・・

帝「あの、み、美優？料理を運ぶのを手伝ってくれるのはありがたいんだが・・・腕を組むことは別にいいんじゃない？」

美優「むー、いいじゃない。お兄ちゃんのこと大好きなんだから。」
帝「そ、そうか、なんかごめんな。」

うん、なんか申し訳ない。後で頭撫でてやるか。

ー所変わって居間にー

帝「ありがとな、木場。おかげでメニューを考えやすかったよ。」

そう、今日のメニューは山菜のかき揚げ丼なのだが、その山菜は今日ここに来るまでに木場が山菜を採ってくれていたのだ。

木場「うん。それより、これはどうやって作ったんだい？すごく気になるな。」

帝「ああ、タレは醤油と砂糖で作った。衣はサクサクになるように小麦粉にマヨネーズを入れたんだ。簡単だろ？」

木場「へえ、そうだったんだ。だからタレが少し甘かったんだ。今度家でやってみようかな。」

しかし、我ながらいい出来だ。

リアス「ねえエミル、今日の手合わせを通して、何かわかったかしら？」

あ、そうだ、隣に部長と美優がいるだった。

帝「まあ仮に俺と美優とマルタがいなかった場合だが、・・・はつきりと言ってこのままじゃライザーには勝てない。美優とマルタがいたとしても、高確率で負ける。それも、例え運を味方にしてもだ。」

全員が沈黙した。それはそうだ。みんながこんなことを言われて悔しくならないわけがない。俺だって本当は言いたくないさ。

帝「だが、そうならないように俺が来たんだ。大丈夫、みんなを勝てるぐらいまで修行を見てやるから。みんなならできるって。な？」

俺はそう言ってみんなを安心させようと笑顔を見せた。あれ？なんかアーシア以外の女性陣は顔が赤いぞ？なんで？

リアス「そうね。エミルの言う通り。だからこの10日間を有意義に使いましょ！」

オカ研メンバー『はいっ部長！』

あ、やっぱり部長が締めるか。まっいいや。

リアス「ね、ねえ、エミル。」

帝「ん？なんですか？」

リアス「その、お腹いっぱいになったから・・・」

帝「はい。じゃあちよつと失礼してつと。」

そうして俺は部長の山菜のかき揚げ丼を食べた。えつ、また部長の顔赤くなってる・・・やっぱり女子って分かんねえな。

To be continued

入浴の時間です！

帝 side

リアス「ほらエミル、背中流してあげる。」

朱乃「あらあら、男の子の背中って遅しいですわ。」

今、俺は・・・部長と朱乃さんに体を流して貰っているが、何分部長と朱乃さんが異様に体を密着させてくる。心臓がバクバクし過ぎて逆に苦しい。故にこう言いたい。

帝「どうしてこうなった・・・」

――10分前――

リアス「ありがとう、エミル。すごく美味しかったわ。」

帝「いいえ、こちらこそ作った甲斐がありましたよ。」

一誠「帝兄この後何する？」

帝「んぐ、風呂にでも入るかな。」

リアス「ねえエミル、実はここのお風呂って露天風呂なんだけれど・・・」

帝「あ、それはいいですね。・・・イツセー、覗こうしたらわかってるな？」

一誠「いつ、嫌だなあ帝兄、ナンノコトカワカラナイナア。」

帝「おいイツセー、覗く気満々ってことでいいんだな。その返答は。」

リアス「それでね、エミル。私たちと入りなさい？」

この時ばかりは自分の耳を疑った。

帝「・・・は？」

リアス「大丈夫。みんなからは同意を得ているわ。ね。」

朱乃「立派な殿方のお背中をお流ししてみたいですわ。」

アーシア「帝さんは私にとってお兄さんみたいな人ですから大丈夫です！」

美優「お兄ちゃんと一緒に体の隅々まで洗いっこしたいなー。」

マルタ「エミルの体って今どんな感じか気になるな。」

この時ばかりは俺は白音を信じた。・・・が、

白音「帝兄様がしつかりタオルを巻いて頂けるなら・・・／＼／＼」
思い虚しくであった。当然ながら俺は抵抗した。

帝「よ、よしイツセー！木場！日本の伝統である裸の付き合いをー」

リアス「ほーらエミル、行くわよ。」

情けなく襟元を部長に掴まれてズルズルと脱衣所まで引き摺られ、現在に至る訳である。ついでに言っておくと、当たり前ではあるが、女性陣のみなさんにもしつかりタオルを巻いていただきました。目のやり場に困ることはあるがだ。

美優「でもお兄ちゃんってこうして見ると女の子みたいだね。」

マルタ「しかも顔も少し女の子みたいに見えるからね。」

この2人が言う通り、俺はゴムで結っていた髪をおろしている。ただこれって結構邪魔なんだよなー。

帝「そろそろ髪切るかな。戦闘の時とか邪魔だし・・・」

リアス「むう、えい。」

ムニユウ

帝「ファツ!？」

腕に柔らかな感触を感じ、その感覚を感じた方へ目を向けると、部長が何食わぬ顔で俺の腕を洗っていた。・・・胸で。

帝「ぶぶぶぶぶ部長何やってるんですか!？」

リアス「何って、見てわからないかしら？それに私だけ置いて話をするなんて酷いわ。」

帝「そうじゃなくってー」

ムニユウ

帝「・・・」

間違いない。この感触は・・・

朱乃「あらあら、部長だけ帝君を独り占めなんてずるいですわ。」

最近アーシア以外の女性陣がやたらと体をくつつけてくるから、その時胸ばかり押し付けてくるから、誰がどんな感触かという変態じみた・・・変態と言ってもいいことを覚えてしまった。

リアス「だめよ朱乃！エミルは私のものなんだから!」

部長、俺って物だったんだ：：あと美優、マルタ、白音、体をくつつけるな！頼むから！

美優「お兄ちゃんは私のだよ！」

白音「帝兄様だけは絶対に渡しません．．．！」

マルタ「ダメー！エミルは私のよ！」

おいおい、とうとうみんなが喧嘩しましたよ！当たってる当たってる！みんなの胸顔に当たってる！これじゃあ疲れが取れるどころか余計に疲れる！

帝「頼むからゆつくりさせてくれー！」

『エミル（帝君）（帝兄様）（お兄ちゃん）は黙ってて!!』

嗚呼、これぞ理不尽の極みなり．．．

To be continued

修行合宿です！ー5日目ー

帝 side

あれから4日がたった。今の俺はイツセーを禁手に目覚めさせるために特訓をつけている。

帝「イツセー、何か体に変化はあるか？」

一誠「帝兄、やっぱダメだ。命の危機に陥らない限りは多分……」
ほう、命の危機……か。試してみるか。

帝「イツセー、今から神威を禁手化してラタトスク化で特訓だ。」

一誠「……マジ？」

帝「マジだ。……ふう、イツセー、行くぞ。禁手化！神滅刃・神威！」

神威を禁手化させると、俺の体が紅い炎、蒼い炎、朱い雷、青い雷を纏った。毛も少し逆立ち、髪の毛の端々はエメラルドグリーンの色に染まる。

鬼神刀・神威は通常、武器としてしか使うことができなく、雷を刀身に纏う以外は何も無いが、禁手化すると、紅と蒼の炎、朱と青の雷を使えるようになり、体の中を電流が走り回っているため、反射神経、反応速度、移動速度がかなり速くなる。まあ某有名ゲームのオニオンナイトみたいなもんだ。実は鬼神刀・神威は禁手化に至るのが1番時間がかかった。

帝「イツセー、行くぞ！千刃・一ノ刃、《穿天裂刺》！」

俺は千刃奥義ー1名前の通り千の数の刀剣類を使った技で、数ごとにその数相手を攻撃する技ー1である、《穿天裂刺》を使った。とは言っても、結構速い突きをするだけだ。

一誠「っ！く、クツソオオオーツツツ！」

イツセーが赤龍帝の籠手を突き出し、防御しようとする、イツセーの赤龍帝の籠手が緑色の光を放った。そして、

【Welsh Dragon Balance Breaker!】

イツセーは赤い鎧を身に纏っていた。

一誠「こっ、これはっ!!」

帝「至ったようだな。そいつはく赤龍帝の鎧（ブーステッドギア・スケイルメイル）だ。取り敢えずはおめでとう。」

なんだかんだ言ってイツセーはやればできるし努力家だから早めに禁手に至れたと思う。と言っても戦闘に関してはまだまだひよっこレベルだ。その点では俺が助言をすればいいだろう。弟の面倒を見るのも兄貴の仕事の内つてな。

一誠「うおおおりやあああああ!!!」

ブンツ!

帝「ツ!?!うぐつ!」

バキイイツ!

イツセーの野郎・・・やっぱ面白え!

帝「来いイツセー!お前の全力、受け止めてやる!つてあれ?」

一誠「帝兄、もう無理・・・」

イツセーは潰れたカエルみたいに地面に倒れていた。

帝「何やってんの・・・」

一誠「・・・ごめん帝兄。・・・俺動けねえよ・・・」

帝「つつはああ・・・」

この後、イツセーに肩を貸して帰った。これからだって時だったのになあ・・・

To be continued

告白します！

帝 side

イツセーと一緒に帰り、みんなで昼飯を食べ、午後からは座学ということで今は講義を受けている。

リアス「エミル、貴方が使っていた魔術・・・だったかしら？それについて教えて欲しいのだけど、お願いできる？」

帝「へーい。ついでにマルタ、お前にも頼む。」

マルタ「はーいっ。」

ホワイトボードの前に立ってと。

帝「じゃ、俺とマルタ、美優が使っている魔術についての講義を始め。まず、俺達を使う魔術は、基本マナと言うものを使う。マナっていうのはこつちで言う魔力みたいなもんだ。俺達や、みんなの体の中にも流れていて、大気中にもマナは流れているんだ。それで、魔術は大きく分けて2種類あるんだ。俺が使う精霊魔術と、マルタと美優が使う魔術に分けられている。まず、魔術からだ。マルタ、頼んだ。」

マルタ「はいはーい。じゃ、まず魔術っていうのはー」

魔術のことについてはマルタは1番詳しい。それに美優に魔術を教えたのもマルタだからな。

ー10分後ー

マルタ「ーっっていうこと。分かったかな？それじゃ、次は精霊魔術についてだよ！」

帝「えー、まず精霊魔術というものは、精霊を介して自分のマナと大気中のマナを使って発動させるんだ。精霊魔術には大きな特徴があつてー」

ー5分後ー

帝「ーっつー訳で、精霊魔術は卓越した魔術の使用者しか使えない。それともし俺が詠唱を始めたら、事前に合図はするが、相手の気を引いてくれると、俺もありがたい。マルタと美優も使えるかもしれないが、精霊魔術は基本チームで戦う時に向いてるってことを覚えておいてくれ。以上で、魔術についての講義を終わる。」

木場「帝君、精霊魔術を使う時はいつでも僕に言っただけ。僕の出来る限りで時間を稼ぐよ。」

帝「それは助かるよ。任せませ。」

そんな他愛のない会話をし、晩飯を食って、風呂に入って、就寝時間になった。

帝「さつてえ、今日の修行はどうしょ．．．たまには身体を休めてもいいよな。」

いつもは裏庭とか森とかで魔物を呼び出して修行しているが、今日は満天の星空。ここ最近で一番綺麗な星空だ。一度屋敷に戻り、テラスへと足を運んだ。

にしても少し寒いな．．．

今の俺の服装は白い無地のシャツを着て、下は黒い長ズボンだ。肌寒さを感じながらテラスに着くと、先客がいた。

帝「レーティングゲームの参考書何かですか？それ。」

リアス「あら、エミル。ええ、そうよ。と言っても気休め程度にしかならないけど．．．」

部長はネグリジエを着ていて、テーブルでレーティングゲームの参考書を読んでいた。多分だが、伊達眼鏡もかけていた。これもこれでまたいいな．．．やっぱ俺は．．．

帝「相手は不死のフェニックス．．．か。」

リアス「そう。レーティングゲームの公式戦では、8勝2敗。この2敗は鼻屑にしている家だったらいいから、実質的には無敗ね。」

帝「倒すには、何度も倒して心をへし折る、か、魔王クラスの一撃を喰らわせるか、だな。」

今の俺ではできないことだ。マインドブレスレットを外せばそんなこともないと思うが。

帝「部長はなんで今回の婚約を嫌だと思ったんですか？」

リアス「私はリアス・グレモリー、よね。」

帝「そう、ですね。」

リアス「私にはいつもグレモリーの名が付きまとうの。グレモリーであることは光栄だけれど、みんなは私を唯のリアスではなくてグレ

モリーのリアスとして見るの。せめて、せめて好きな人は、自分で選
びたいの。私は、私を唯のリアスとして愛してくれる人と一生を添い
遂げたい。これだけは誰にも譲れない小さな夢だけど、それも叶いそ
うにないわね。」

どこか、自虐的に部長は笑った。

帝「・・・勇氣は夢を叶える魔法・・・」

リアス「え？」

帝「俺の恩人の親友がよく言っていた言葉らしいです。貴女が言う
小さな夢でも、俺からすれば立派な夢です。部長があの時、俺に告白
したのも、きつとそれは夢を叶えたくて振り絞った勇氣。違いますか
？」

リアス「違わないわ。私は貴方に唯のリアスとして、貴方に愛して
欲しくて勇氣を振り絞って告白した。」

帝「なら、貴女の勇氣に応えましょう。」

部長の前に座り、彼女の手を両手で握った。

帝「リアス、俺も君が好きだ。こんな俺でも良ければ、付き合っ
てくれるか？」

リアス「ー!?!」

帝「俺は、いつもの威風堂々とした姿も、傲慢でいていつも自信に
満ち溢れている君も、君が見せる優しいところも、たまに見せる女の
子らしい君も、いいところも悪いところも全部ひっくるめて、君が好き
だ。」

するとリアスは、目に涙を浮かべ始めた。

帝「え!?!ご、ごめん! やっぱり俺じゃダメだったか？」

リアス「すんっ、違うのお・・・嬉しくて・・・嬉しくってー!」

よかった、俺じゃダメだったかと思っただけ・・・

帝「じゃ、じゃあー!」

リアス「ええ、こんな私ですが、末長く、よろしくお願いします。」

リアスは笑顔でそう言った。

俺はこの笑顔に惚れたのかな。何時からかわからないけど、俺はリ
アスに恋をしていた。初めてだからわからないけど、昨日美優に聞い

てよかった。俺の告白を受け入れてくれて、本当によかった！

心の中で喜びを噛み締めていると、唇に柔らかい感触を感じ、目の前を見ると・・・

リアス「んっ・・・」

リアスの顔が目の前にあり、俺とリアスはキスしていたことも分かった。

もう君の何もかもが愛しい。あんな奴にリアスは渡さない！リアス、君を絶対に、勝たせて見せるよ・・・!!

To be continued

修行の成果です！

帝 side

今日は修行合宿最終日。みんなの実力を今からもう一度見るところだ。

帝「さあ、先ずは誰からだ？」

木場「それじゃ、ぼくからお願いしようかな。」

最初は木場だった。あれからどう変わったか、実に楽しみだ。

木場「帝君、準備はいいかな？」

帝「んなこたあいいから、さっさと始めようぜ？」

木場「ああ、行くよ！」

フンツ

木場が高スピードで迫ってきた。

前よりスピードが違うな。だが！

帝「俺の前は無駄だあ！」

バシシシシシシシツツツツツツ！！！！

1本の道になるように剣を発生させ、木場がその真ん中を走っていく。

・・・かかったな。

1番後ろの剣から徐々に木場へ飛ばし、俺の1番近くの剣も木場へ飛ばす。

木場「ツ!?魔剣創造！」

バシャーーン!!

バギギギギギギン!!!

木場が魔剣創造を自分を囲む盾のように展開させた。木場へ降り注ぐ剣の雨が止むと、木場が一気に間合いを詰めてきた。

木場「はあああつっ!!」

ガキイイイインツツツツ!!

俺はダークソードを持ち、木場の剣を受け止めた。スピードだけではなく力も木場は上げていたようだ。

帝「つうおらあ!!」

木場を力任せにはね飛ばし、態勢を整えた。

帝「木場、今から少しだけ、本気出してやるよ。・・・神滅刃・神威！」

俺の体を紅と蒼の炎、朱と青の雷が駆け巡る！

帝「千刃・三十六ノ刃、《迦具土》！」

木場へと一気に間合いを詰め、紅の炎と蒼の炎を一撃ずつ切り替えながら木場へと猛炎の刃を与えた。

ズガガガガガガツツツツ！！

ズシシシシシシユツツ！！

木場「ぐっ、うわああ！」

木場が声を上げながら倒れた。だが先ず俺が感じたのは、6回だけ、木場に攻撃を防がれたことへの驚きだった。普通でも・・・俺が言うのもあれだが、俺の刃を防ぐ奴はいない。たとえ見えていても防ぐのはかなり難しいはずだ。そこで俺は木場に問いただすことにした。

帝「木場、お前俺の攻撃を意図的に6回くらい防いだか？」

木場「うん、だけどやっぱり全部は無理だったよ。あはは。」

帝「そっか。大分進歩したようで安心したよ。ほら、立てよ。」

そう言いながら木場に手を差し伸べた。

木場「それで、どうかな。僕の戦い方は。」

帝「うーん、力はまあ及第点だな。スピードと気配での攻撃の防御は合格。今はこれでいいだろ。」

木場「それはよかったよ。これで少しは安心できるかな。」

帝「そうだな。ほら、マルタのところ行ってこい。マルタ、木場の傷治しといてくれよ。」

マルタ「りよーかーい。」

一誠「帝兄帝兄！次俺！次俺！」

帝「分かった分かった。禁手化して魔力弾撃ってこい！」

一誠「分かった！行くぞドライグ！」

!!
〔Welsh Dragon Balance Breaker〕

レーティングゲーム出れねえよう！

帝side

今俺は駒王学園にいる。ん？リアスや美優達の修行の成果？あー・・・うん、みんな強くなつたよ。リアスと朱乃さんは魔力を凝縮して打ち出すことができるようになったし、美優とマルタは魔術の威力が段違いに上がったよ。うん。

だが、今俺はある意味大変な状況になっている。

グレイフィアさんが言うには、今の素の状態でも最上級悪魔クラスに片足突っ込んでる状態だから、ゲームがゲームにならないと言われた。・・・解せぬ。

サーゼクス「まあまあ、帝君少し落ち着きたまえ。」

苦笑いしながら俺を慰めようとしてくれているのは、俺の「義兄」になつたサーゼクス・ルシファア様だ。

帝「うう、修行し過ぎるんじゃないやなかつた・・・」

フェンリルとケルベロス2匹同時に相手にしてさらにマインドブレスレット付けて修行してたからだ。

もういいや、過ぎたことを悔んでも仕方ない。今はレーティングゲームの観戦に集中しよう。

一誠「行くぜ！俺の必殺！」

お？イッセーのやろう、いつの間に必殺技を覚えた？少し興味が・・・

一誠「〈洋服崩壊（ドレスブレイク）！！？〉」

期待した俺が馬鹿だった。

イッセーは魔力を使って女の子の服を吹っ飛ばしていた。

・・・後でイッセーとO☆HA☆NA☆SHIしないとな。

サーゼクス「ははははははははははははっ！面白い！まさか魔力をこんな風にして使うとは！」

帝「兄様、これを見てよく笑えますね・・・」

サーゼクス「当然さ。私はこんな風に魔力を使う悪魔はあまり見た事が無い。ましてや新人悪魔君と来た。これは笑いを堪える方が難

しいよ。」

帝「さいですか・・・ん？」

俺と兄様は話をしている間に大分ゲームが進んだようだ。今は・・・ライザーとイツセーが一騎打ちか？

っ!? あいつ美優を人質につ!? クツソツ!!

俺はギリギリと音が鳴りそうな程に歯軋りをし、手は握り締め過ぎて爪が皮膚に食い込んで血が流れていた。

ライザー「知っているか小僧。レーティングゲームでの死亡は事故死とみなされるってこと。」

まさかこいつ!

ライザー「このまま俺の炎で貴様を焼き殺してやるっ!!」

やめろ・・・それだけはやめろっつ!!!

リアス「リザイン・・・します・・・」

リアスがリザインしたことによってイツセーは殺されることは無くなった。・・・でも・・・負けた・・・

帝「兄様・・・今すぐあそこに行つても・・・」

サーゼクス「ああ、お行きなさい。」

俺は擬似駒王学園への転移魔方陣を開いてリアス達の前に移動した。

帝「イツセー!!」

俺はイツセーの元へ駆け寄った。

イツセーの体はボロボロで、傷だらけだった。

一誠「帝・・・兄・・・俺・・・俺・・・」

帝「わかった。わかったから、もうこれ以上喋るな・・・。」

リアス「エミル・・・私は・・・」

帝「リアス、よく頑張った・・・ありがとう、イツセーを助けてくれて・・・」

ライザー「ははははは！滑稽だな！勝てもしない試合で必死こいて戦うなど！」

ライザーは俺らを見て笑った。

・・・笑った・・・？ 笑いやがった・・・？ イツセーが、どれだけ

悩んで、努力していたかも知らずに？笑った・・・笑やがったな、こいつ!!!

帝「何も知らねえ奴が、こいつを笑うな。」

俺は怒りを込め、いつもより比較にならない程の低い声で言った。するとどうだろうか。俺の尋常じやない怒りを感じとったのか、ライザーは肩をビクツと震わせ、顔を強張らせていた。

ライザー「なっ、なんなんだお前はあつ！そもそも、何故そこまで仲間に執着するっ!!」

帝「・・・大切な人を、お前は失ったことがあるか・・・？救えるはずの命を救えなかったことはお前にはあるか・・・？もう失いたくないんだよ・・・目の前に起きていることに、腰抜かして指を啜えて見ているなんてことに、なりたくないんだ・・・」

俺は過去のことを思い出しながら言った。

帝「そんなことない奴が、俺の家族を、仲間を笑うな。」

そう言っつてライザーを睨みつけると、ライザーは蛇に睨まれた蛙のように固まっていた。

帝「リアス、後のことは任せろ。今は、取り敢えず帰ろう。」

リアスは小さく頷くと、俺の所に来て、一緒に転移した。

覚えてろよ、ライザー。お前には圧倒的な力の差を見せつけてやる・・・！

To be continued

恋人、助けます！

帝 side

リアス達がレーティングゲームで負けた日から3日、俺は冥界にどう入るか考えていた。

ガチャツ

グレイフィア「おはようございます、エミル様。」

入って来たのはグレイフィアさんだった。

帝「・・・何の用ですか？」

無愛想に聞くとグレイフィアさんは1枚の紙を俺に渡して来た。

グレイフィア「結婚式会場へ行くために必要な物です。」

帝「何で俺にこんなもん・・・」

グレイフィア「サーゼクス様から、妹を助けて欲しい、と伝言を預かっております。しかし、ライザー様を殺害される様なことがあれば・・・」

帝「それはどうでしょうね。もしかしたら、殺してしまうかもしれないですね。」

グレイフィア「なら・・・」

帝「でも俺はリアスを助けます。だって俺、あいつの彼氏ですから。それに、好きでもない奴と結婚して、本当の幸せなんて絶対に来ない。本当の幸せな結婚って、好きな人と結婚することだと思いますよ。今俺はリアスが幸せになってくれたらいいだけです。それに、例えば自分がどうなろうと、仲間だけは、俺の大切な人だけは、絶対守るって決めてますから。」

グレイフィア「・・・ふふふっ。」

えっ、笑う要素今の話にあっただか？

グレイフィア「本当に貴方は面白い方です。やはり、サーゼクス様が見込んだ通りです。どうか、リアスお嬢様を救ってください。」

へー、兄様に期待されてるんだ。じゃっ、期待に沿う様に頑張らないとなー。

帝「任せてください。リアスは必ず俺が助けます！」

俺はそう誓い、不敵な笑みを浮かべた。

帝 side out

三人称視点

場所は冥界の結婚式会場。ここには多くの貴族とフェニックス眷属、グレモリー眷属が来ていた。そしてグレモリー眷属に近づく影が1つあった。

？「先日のゲーム、実にいい試合でした。」

木場「お気遣い、ありがとうございます。ソーナ会長。」

朱乃「ですが会長、私達はまだ終わっておりませんわ。」

白音「・・・まだ、私達には後1人います。」

ライザー「名だたる貴族の皆様！お集まりいただき、ありがとうございます！
ざいます！」

ライザーの演説が始まった。

ライザー「今回皆様に集まっていたいただいたのは、私ライザー・フェニックスと、次期グレモリー家当主、リアス・グレモリーの結婚という歴史的快挙を、皆様と共有したいからであります！」

ライザーはまだ知らない。この後に起こることに。

ライザー「それではご紹介しましょう！我が妃、リアス・グレモリー」

？「どうあありやあああ！！！！」

衛兵「グアアアツ！！」

バンツ！

ライザー「貴様は一体誰だっ！！」

帝「俺は皇 帝！もといエミル・キャスタニエだ！俺の恋人、返してもらおうぞ！ライザー・フェニックス！」

そう、現れたのは帝だった。

三人称視点 out

帝 side

間に合った。何とか間に合った！

ライザー「衛兵は何をしている！早く奴を捕らえろ！！」

ライザーはそう叫び、衛兵が俺を囲んだ。

帝「そこをどけ。それとも・・・死にたいか？」

軽く殺気を放つと、衛兵どもは小さくひいっと悲鳴を上げながら後ろへ後ずさった。俺は衛兵など意に介さず、ライザーの元へ歩き始めた。

ライザー「何故あいつが・・・」

サーゼクス「私が呼んだのだよ。」

ライザー「なっ、サ、サーゼクス様!？」

現れたのは兄様・・・いや、サーゼクス・ルシファー様だった。

サーゼクス「ライザー君、君のゲームは実に素晴らしかった。だが、初心者のリアス達にあそこまでやるのは些か問題があると思うのだが・・・」

ライザー「・・・それはゲームにご不満があるとか？」

サーゼクス「いや、そういう訳ではない。魔王である私がそれを指摘すれば、レーティングゲーム自体が意味を成さない。それに彼は唯一レーティングゲームに参加していない。リアスの眷属を全員倒してこそ、初めてリアスに勝ったと言えるのではないかね？」

そしてサーゼクス様は俺の方へ視線を向けた。

サーゼクス「それにただの結婚披露宴ではつまらないだろう。そこ
の悪魔君、今一度私達にその力を見せてくれないかね？」

もちろん、答えは決まってる。

帝「サーゼクス・ルシファー様の頼みであれば喜んでお受け致しますよう。」

サーゼクス「では、君が勝った時の褒美は何がいいかな？巨万の富か？それとも絶世の美女か？」

悪魔「サーゼクス様！こんな下級悪魔ごときに褒美などー」

サーゼクス「黙れ。こちらから願っている以上はそれ相応の対価も支払わなければならぬ。それに彼は確かに下級悪魔だ。だが現時点では、もしかすれば私を超えているはず。下手すれば君は彼に消し飛ばされても可笑しくはない。さて、悪魔君、どうする?」

帝「リアス・グレモリー様を返していただきます！」

サーゼクス「そうか、いい返事だ。いいかね？ライザー君。」

ライザー「いいでしょう。このライザー、身を固める前の最後の炎を散らせましょう。」

待ってる、リアス。直ぐに助けてやるからな！

T o b e c o n t i n u e d

本気、出します！

帝 side

うーん・・・久しぶりに本気出すか・・・？

俺は今凄く悩んでる。何故なら俺が本気出せば今いる決闘場が壊れる可能性があるからだ。

うむむむむ、どうしたものか・・・

ライザー「お前は何故リアスを恋人と言った？」

えっ!? 藪から棒に聞くな!

帝「告白されたから俺も好きだったって言ったただけだが? それよりライザー。お前、もし、もしもの話だが、俺に勝った後はリアスと結婚するんだよな?」

ライザー「? ああ、そうだが?」

帝「お前はリアスをしっかりと愛せるのか?」

ライザー「当然、愛してやるよ。俺のハーレムに加わる1人としてな!」

帝「・・・そうかよ・・・こいよライザー。本気で相手してやる。」
そう言い、俺はラタトスク化した。左手には究極龍王の絶爪を展開した。

【accel!!?】

1度目の加速ー全神経、反応速度、集中力に10秒毎に2倍ずつ加速させる能力ーが完了した。

帝「神滅刃・神威!!」

鬼神刀・神威を納刀状態で禁手した。神滅刃・神威の真価はここにあり、納刀状態でも炎を纏わないが、それ以外の能力は俺の体に流れている。加えて究極龍王の絶爪の加速にラタトスク化だ。つまり俺は最速の剣士となる訳だ。

ライザー「今直ぐ返り討ちにしてやる!」

ライザーは叫びながら火炎球を投げてきたが、俺はすれすれで躲した。

ーんくドライブ、アレやっていい?

ドライグ「なっ!? 止める相棒! アレを使えばお前はっ!」

ドライグが珍しく慌てた。そりやそうだ。下手したら死ぬからな。

「わかってるよドライグ。でもさっき言っただろ? 本気で相手するって。」

ドライグ「・・・ああ分かった。好きにするといい。」

「ーありがとな、ドライグ。」

帝「ライザー、今からマジで本気出していいか?」

ライザー「何? 貴様どういうことだ!」

帝「本気出すって言っつて本気出さなかつたのは謝るよ。少しだけ待ってろ。」

俺は究極龍王の絶爪を解除し、左手を天に掲げた。

帝「ー其の禁忌は、誰もが至らず、誰もが至れない。」

俺を中心に少し強めの風が吹く。

帝「ー我が願いは、終焉を導き混沌を呼ぶ。」

これは呪われた禁忌。決して手を出してはいけない。

帝「ーだが我は求む。其れが我が友を救うためならば。」

決して謳ってはならない。だが俺はその力が欲しい。

帝「ー我が切実なる想いは、我が身を終焉導く夢叢の龍神へと変える。」

だつて俺は・・・

帝「ー其れでも我は禁忌を求む。其の禁忌が、我が身を蝕もうと。」

仲間を絶対守るって決めたから。

帝「ーさあ至れ! そして目醒めよ! 英雄ノ禁手(エリュシユオン・バランスブレイク)！」

その瞬間、俺は黒い炎の渦に包まれた。だが熱さは感じない。それどころか、俺に力を与えてくれる気がする。そして俺の左手が黒い炎を徐々に吸い込んでいった。炎が消え、俺は左手の甲を見た。するとそこには、黒と赤を基調とし、金の装飾が所々されている籠手があった。そして俺は口の端を上げた。

帝「待たせたなライザー。行くぞ! 龍神帝王の籠手(ジエノサイド)・

クロス・ギア) ツツツツ!!!」

【Generate!!?】

ジェネレート、赤龍帝の籠手の倍加と究極龍王の絶爪の加速が合わさった能力。

ライザー「ツツ!! 貴様など俺に勝てない! 勝てるはずがないんだああ!!!」

ゴウウウツツツ!!

ライザーが大きめの火炎球を投げてきた。

ブンツツツツ!!!

だがその火炎球は、俺が軽く腕を薙いただけで消し飛んだ。

ライザー「バカなあ!!!! 貴様ごときに俺が負ける訳がないんだああああ!!!!」

ブンツ

バギイイツツツ!!!

ライザーが俺に向かって突っ込んできて殴ってきたが、それを躲し、腕を掴み、肘目掛けて膝蹴りを放った。多分軽く骨は折れているだろう。

帝「たかが不死ごときで成り上がった君が勝てるはずないでしょ。」

ライザー「があああ!! 俺の、俺の腕がああ!!!」

帝「あれえ? 可笑しいなあ。フェニックスはどんな怪我でも瞬時に治せるって聞いたんだけどなー? あ、もしかして予想外のことが起き過ぎて気が動転しちやっただかな? なら仕方ないよねー。」

わざとらしく俺は言ってみた。

帝「でも恥ずかしいね? 上級悪魔の君が、たかだか最近悪魔になっただばかりの奴に多くの貴族の人の前でこーんな醜態晒してるんだからさあ。慰めてあげよっか?」

ライザー「ふぎけるのも大概にしゃがれええっ!!!」

帝「そっか。じゃ、直ぐに消してあげるよ。」

俺はニコリと笑った。だが俺の笑顔は狂気にまみれているだろう。

ライザー「ひ、ひいっ!!!」

帝「大丈夫。何も感じないように肉片残らず消してあげるから。ね

？」

ライザー「ま、待て！この結婚は、悪魔にとって重要なこと何だぞ！?お前のような何も知らない奴がどうこうできる問題じゃないんだぞ！」

何だよその言い訳は。酷い言い訳だ。

帝「へー、何言い逃れしてんの？俺の妹を人質にして俺の弟殺そうとして、挙げ句の果てには俺の恋人を泣かせて、それで君は無事で済むとか思ってたの？あつまいねえ。ほんつとに甘いよ。もういいから早く消えなよ。」

ライザー「や、止める！俺は、おれはああ！！！！」

帝「じゃあね、バイバーイ。」

ライザー「うわああああああああ！！！！」

おれはライザーの顔目掛けて左手を振るおうとした。

ライザー「あ・・・ああ・・・あ・・・」

が、ライザーは既に気を失っていた。

帝「はあ・・・ま、いつか。」

そして俺は龍神帝王の籠手を解除した。

あれは一体何だったんだ？・・・まるで俺が俺じゃなかったよう
な・・・？

T o b e c o n t i n u e d

帝の変化

帝 side

帝「勝手なこと、と言うのは重々承知しています。ですが、リアスは返していただきます。」

俺はジオテイクス・グレモリーことグレモリー卿とヴェネラナ・グレモリー様に頭を下げている。

ヴェネラナ「どうかお顔をお上げなさってください。」

ジオテイクス「今回は全面的に私が悪かったよ。すまない、皇帝君。」

帝「いいえ、気にしていません。ですがもし、お2人が礼をしたいというなら、お父様、お母様と呼んでよろしいですか?」

ジオテイクス「もちろんだ。それと帝君、リアスをよろしく頼むよ。」

帝「お任せを。必ずや御守りしましょう。さ、リアス。帰ろっか。」
リアス「ええ、そうね。帰りましょう。」

木場「おめでとう、帝君。」

木場が近づいてきた。

白音「その魔物は・・・」

リアス「グリフォンね。」

グレイフィアさんから貰った紙の裏にあった魔方陣がグリフォンの召喚術だとは知らなかった。因みに俺が知っているグリフォンとは少し違う事に驚いていたのはまた別の話だ。

朱乃「あらあら、そのグリフォンで部長と帰ってはいかがでしょうか?」

リアス「そうね。私からもお願いするわ。」

帝「そうさせて頂こう。みんな、また後で。リアス、どうぞ。レディーファーストだ。」

そして俺とリアスはグリフォンに乗り、冥界の空へ羽ばたいた。

リアス「エミル・・・髪が。」

リアスにそう言われて後ろ髪を触ろうとした。

・・・無い・・・いや、確かに髪はくぐられた状態で5cmだけあるがそこから先が無いぞ・・・

帝「ライザーの攻撃躲した時に当たったかなー。まあ髪が全部燃えなかっただけマシだよ。」

丁度終わったら髪を切ろうと思ってたところだしな。

リアス「それにしても、馬鹿なことをしたわね。」

リアスは俺の左腕を見つめていた。そうだ、確かに“能力は解除”したが、腕は龍神帝王の籠手のままだった。

これが体の一部を龍の体にするって奴かな。

帝「酷いなー。流石に馬鹿は無いだろ。」

苦笑いしながらリアスにそう返した。

リアス「でも、ありがとう。助けに来てくれて。」

帝「愛する人を救うのは当然のことさ。」

リアス「それでも本当にありがとう。これはほんのお礼よ。」

リアスはそう言って俺の口へとその柔らかく甘そうな唇を俺へと重ねた。

帝「ンンツ!？」

口の中に生暖かい感触が伝わってきた。つまり・・・

リアス「んむ・・・ちゅ・・・ちゅる・・・んちゅ・・・」

リアスが口の中へ舌を入れ込んできた。これにはおもわず動揺してしまった。

そして口の中を蹂躪されること約二分くらいだろうか。リアスは舌をしまいながら俺とのキスを終えた。

正直に言おう。唾が糸引いててエロかったです。はい。

リアス「その・・・どう・・・だったかしら・・・?」

リアスは頬を赤らめて俺に聞いてきた。

帝「え、あ、うん・・・その、良かった・・・よ?」

先ほどの行為を思い出し、漸く処理しきれた現状に顔が熱くなるのを感じながらそう言った。

リアス「そ、そう。良かったわ。」

リアスは俺に笑顔でそう言ってくれた。

リアス「あ、エミル、私明日から貴方の家に行くわね。」

帝「別に大丈夫だよ。寧ろ歓迎したいくらいさ。でも部屋どうしよう。父さんと母さんの許可も取らないといけないしな。」

むむむむむ・・・帰ってからはやることが多くなるな。

ふとリアスを見ると彼女と視線が合った。

帝「あははっ。」

リアス「ふふふっ。」

何だか可笑しくてつい笑ってしまった。でも、彼女となら上手くやってける気がする。道は果てしなく険しいかもしれないけれど、いつか幸せになれると信じて、今はただリアスの笑顔だけを守ろう。

To be continued

正体、明かします！

帝 side

今日は日曜。リアスは宣言通り俺の家に引っ越してきた。今は荷物運びもひと段落ついて昼食をとっている。

帝「あぐつ、く、があつ、くう・・・」

突如俺の右眼が痛み出した。焼けるような熱さと痛み思わず呻き声をあげてしまった。眼を抑え必死に痛みを抑えていると、父さんは俺を不思議に思っただけか近づいてきた。

誠「帝、大丈夫・・・お前、その眼・・・！」

「どうやら父さんはこのことに心当たりがあるようだった。」

帝「父・・・さ・・・ん・・・これ・・・うつぐあ・・・」

誠「暫く痛みが引くまで休んでおけ。いいな？」

リアス、白音、マルタ、美優、イツセーは心配そうにこちらを見ていた。

帝「大丈夫だよ。こんな痛み、大したこと・・・っ！」

安心させるように笑ってみたが、痛いものは痛い。眼帯でも探してこないと腕も疲れる。

それから少し経ち、痛みも引いてきたので、父さんに聞くことになしたかったが、リアス、白音、マルタ、美優には、俺達の血筋、家系を理解した上で話を聞いて貰わないといけないため、俺のー皇家の正体を教える必要があった。そして俺はソファアに深々と座り込み、自分の正体を、皇家の正体を語った。

帝「さてだ。単刀直入に言う。俺、イツセー、父さんは皇家という勇者の一族だ。・・・因みに言っておくが・・・はあ・・・俺は27代目の勇者の一族の筆頭だ。そして同じく皇家の24代目の筆頭だ。昨日なったばかりだが・・・」

女子メンバーからは予想通り、驚いたような反応を示していた。

自分から「俺勇者の一族の筆頭やつてるんだ〜！」とか、正直言いたく無い。くっそ、父さんめ・・・後で覚えてろよ・・・

帝「さて、この後俺が父さんに聞くことは、皇家の家系を知ってい

る状態でないと結構混乱するだろうから説明しておく。」

その事にみんなが首を縦に振っていた。

帝「まず勇者の一族とは、神剣―神の施しや祝福を受けた剣を唯一扱える一族だ。それ以外の人物が使うと、その剣の真価は発揮され無い、唯のなまくらになる訳だ。そして皇家とは、勇者の一族の中でも秀でた才能を持つ一族だ。」

俺は勇者の一族である事、皇家の者である事に誇りを持っているが、自惚れたりはいし、傲慢にもならない。なるつもりもないし、なりたくもない。だから俺は相手にはある一定の尊敬を持っている。

帝「そして俺の祖父は、かつて勇者の一族最強と呼ばれた、皇龍仙だ。」

リアス「皇龍仙・・・！あの3大勢力の戦争中に入ってきた勇者軍の鬼神・・・！」

帝「その通り。俺達勇者の一族は人類を守る砦と言っても可笑しくない故に、人類を見守っている。人外や怪物共から人類を守るために勇者の一族はみんな数千年単位で生きている。平均寿命が大体2000歳くらいだな。だから俺の祖父多分まだ生きてる。」

美優「でもお兄ちゃん、それだったら何で強制的に悪魔にされている人がいるの？」

そうだ、その質問を待っていた！

帝「勇者の一族は現在進行形で滅びに向かいつつあるんだ。ある日に起きた事件の所為で・・・な。」

マルタ「それってどういうこと？」

帝「勇者の一族は本来、富士の樹海の中にひっそりと暮らす一族だった。だが、ある悪魔によって一晩で壊滅だ。生き残っている人は、人外や怪物を倒した後に帰ってきた人々か、その悪魔に呪いをかけられたかだ。今生き残っている勇者の一族の大半は後者、俺の祖父は前者だ。」

白音「その悪魔の特徴って今は分かっているのですか？」

帝「大体・・・だな。特徴は、まず外見は老人だった。男のな。そして口調はかなり軽かった・・・らしい。そして一番はそいつの力だ。」

勇者の一族を一晩で壊滅させる辺り、かなりの強者と言える。しかも、そいつは暇つぶし程度でやったらしい。多分超越者に数えられている可能性はある。そしてどうやら、そいつは自分を殺さないと解けないタイプの呪いをかけたようだ。呪いをかけられた人らは皆植物人間状態。まともに動ける人は十数人程度だ。」

リアス「それじゃあどうやって勇者の一族の筆頭になったの？」

帝「・・・父さんがLIEで確認取ったようです・・・」

それにはみんな何とも言えない顔をしていた。

帝「んで父さん、俺の右眼が痛み出した事に心当たりがあるみたいだけどどういうわけ？」

誠「帝、お前にはまだ話してないが、お前の婆ちゃん、実は魔眼の一族だったんだ。」

帝「何その厨二病的新設定・・・」

なんか今凄いこと口走った気がする・・・気のせいかな。

誠「リアスさん、詳しい話は昨日こいつから良く聞いたから聞くんだけれど、戦闘中のこいつの右眼に何か変化はあったかい？」

リアス「はい、途中から右眼が黄金に輝いていて、少し性格が変わっていた気がします。」

誠「そう、魔眼を発動させた者はみんな少し性格が変わるんだ。帝もきつとその影響を受けたんだろう。加えて魔眼は開眼したときはまともに動いたケースは少ない。そして開眼してから一週間は不安定で、さっきのお前みたいにいきなり魔眼が開眼した方の眼がいきなり痛み出して発動する場合がある。しかも制御不能に近い状態だからどんな能力が発動するか分からないから、眼帯を着けておけ。」

帝「あーはいはい。どうだみんな。俺が父さんに質問してもあんま驚かなかつたら？」

美優「じゃあお兄ちゃんはもしかして？」

帝「おう、いきなり普通の人間だと思ってた人らが魔眼とか勇者とか言ったら混乱するだろうから、今の内にさっさと自分の正体明かしてから聞いた方がそういうのがなくなるって思ったくらいだ。」

マルタ「流石エミル！私達のこと考えてくれるなんて、やっぱりエ

ミルは勇者様だよ！」

帝「ははは…まあ、俺には勇者を名乗る資格なんて無いけどな…」

白音「…」ジーツ

俺はそう呟くと、白音は俺をジーツと見ていた。彼女は猫又故に耳がいいのだろうか。多分俺の呟きは聞こえていただろう。

誠「それより帝、写真撮っていいか？」

帝「はあ？何で？」

誠「いいじゃないか。眼帯姿の帝なんて貴重だろう？」ジリジリ

帝「ジリジリ寄って来るな。気持ち悪い。」

そう言うと、父さんはがっくし項垂れていた。そう言えば俺の親2人共親バカだった。

帝「美優ー疲れたー。頭撫でさせてー。」

美優「うん、いいよ♪」

あー癒されるー。やっぱ妹は癒しの存在だ。って俺も親のこと言ったらんねえな。

そう思いつつも妹を撫でるシスコンな俺だった。

To be continued

美優の誘惑

帝side

昨日は珍しく寝坊したアーシアに話したことと同じような話をしたら、2人はやつぱり凄いつて言われた。そんなこと無いのになと思う今日この頃。

ドライグ「おいおい相棒、誰に説明している？」

「ーんー、分かんね。それよりドライグ、ちゃんと質問に答えろよ。ドライグ「ああ、能力はしつかり赤龍帝の籠手と究極龍王の絶爪の能力を受け継いでいるぞ。それと、融合させてしまったからもう神器は元に戻らないが、新たな禁手があるようだな。だがそれは相棒次第だ。俺は陰ながら応援させてもらおう。」

「ーあ、そろそろ起きるわ。じゃな。」

ドライグ「暇になったらここに来い。話相手ぐらいにはなってる。う。」

何だかんだ言ってドライグも丸くなったな。

そう考えながら俺は意識を覚醒させた。

「……………」

あ？何だこれ？

もにゆう

？「あ……んん……」

何か柔らかいというか揉み心地がいいというか……

もにゆうもにゆうもにゆう

？「んう……あ……ひやうつ……お兄……ちゃん……あ
んっ！」

え……お兄ちゃん……？もっ、もしかして！

冴えない目を必死に凝らすと、右向きに寝転がっている俺の目の前には一糸纏わぬ妹が。そして俺は妹の胸を揉んでいた。そして気付いたと同時に血の気が引くのを感じた。

帝「あ、あの……美優さん？何やってらっしやるんですか？」

美優「お兄ちゃんに裸で添い寝してたんだけど……嫌？」

反射的に布団に包まって謝罪の言葉を呪詛のように唱えてしまった。

リアス「ふふつ変なエミル。先に行ってるわね。」

扉の向こうからは階段を降りる音が聞こえてきた

美優「むうー、折角いいところだったのにい！」

理性を何とか取り戻した俺は、不貞腐れた美優を苦笑いして見ている。

美優「お兄ちゃん、次こそは一緒にキスしようね？あと出来れば

エッチなことも、ね？」

帝「あ、あはははは・・・はあ・・・」

苦笑いでしか返せない自分に溜息が出てしまった。

To be continued

眷属の顔合わせ、します！

帝 side

現在、駒王学園に登校中だ。だが視線が痛い……。まあ理由は明らかだ。

リアス「くくく」

リアスは俺と指と指を絡ませあう、所謂恋人つなぎをして、俺の肩にもたれかかっており、鼻歌まで歌っているからだ。

駒王学園に着くと、もつと視線が痛くなった。男子はみんな俺を殺すかのように睨んできている。だが今の俺はリアスに甘えられるのに忙しい。そんなことにいちいち反応する暇がないのだ。

リアス「エミル、また放課後ね？」

帝「おう。じゃな、リアス。」

そして各々のクラスへと行った。

ガラガラガラ

松田・元浜「帝おおお!!!ギルテイイイ!!!」

セクハラパラッチこと松田と、スリーサイズスカウターこと元浜が、俺が教室に入った瞬間に殴ってきた。

帝「あはははは。そんなもの当たんないよーん」

バキッ

一誠「ぐべらっ！」

松田「貴様ア！リアス先輩とはどういう関係だ！」

元浜「お前は俺達非モテ同盟の仲間じゃなかったのか！」

イツセーのことは無視なんだ……。イツセー、君の犠牲は忘れな
いよ。

帝「そんな同盟組んだ覚えはない。あとリアスと俺は……。まあ恋人
つてとこかな。」

クラスの男子『死に晒せえええ!!!』

帝「誰が死ぬかああ!!!」

—そんなこんなで放課後—

帝「ああああ……。疲れた。」

リアス「エミルも同じ目にあつたみたいね。」

リアス、確かに同じ目にあつたが俺は十で殺されかけたんだが!?

リアス「エミル、頭撫でて?」

帝「いいよ。リアスは甘えん坊だな。」

リアス「えへへ。」

あー可愛いなあ!もう!?!が見えそうなくらいデレデレしてくれるからいつもの凜とした姿と相まって可愛い!これがギャップ萌ってやつかな?

?「リアス、リアス。」

リアス「はっ!?つてあら、ソーナじゃない。いつから居たの?」

ソーナ「頭撫でて?のあたりからです。」

リアスは赤面した。俺は引きつった苦笑いをした。

リアス「そ、それで今日はどういった用件かひら?」

帝「リアス、もう少し落ち着いて。」

慌てて噛んだリアスに頭を撫でてあげた。

ソーナ「今日は新しくできた眷属の顔合わせをしようかと思いましたが。」

リアス「そうだったの。なら、わたしの眷属を紹介するわ。マルタ!イツセー!美優!エミル!」

マルタ「はい、兵士のマルタ・ルアルデイです。よろしく願います。」

一誠「えと、兵士の皇 一誠です。よろしく願います。」

美優「兵士の皇 美優です。よろしく願います。会長さん。」

帝「兵士の皇 帝、もといエミル・キヤスタニエです。俺ら区別とかつきにくいと思うんでみんな気軽に下の名前で呼んでください。」

ソーナ「よろしく願います。ルアルデイさん、一誠君、美優さん、帝君。リアス、あなた大したものね。」

リアス「?どういうことかしら?」

ソーナ「これだけの人数をたった8つの駒で済ませるんですから。凄いとしか言葉が出ません。」

リアス「それはエミルに言つてあげて。」

ソーナ「何故ですか？」

リアス「実はみんなを眷属にできるようにしたのはエミルなのよ。そう言えばエミル、結局駒はどうなったのかしら？」

ああ、そんなこともあったな。

帝「あれは倍加を譲渡した時に一瞬システムに綻びが生じたからその一瞬で少し手を加えた。体の中に入ると、分裂するようにしたよ。」

リアス「へー。因みにみんなは駒価値はどれくらいなの？」

帝「イツセー、美優、マルタの駒価値は8だな。で俺は+15で×5だから・・・駒価値は115だな。」

リアス「そ、それは・・・。」

あ、リアスが口元ひくつかせてる。

ソーナ「つてリアス！何故平然と話を続けているんですか！彼はあの悪魔の駒を改造したのですよ!？」

リアス「仕方がないわ。エミルは規格外だから。」

ソーナ「そ、そんな・・・。」

会長さーん？キャラ崩壊してますよー？

リアス「あの、ソーナ？来た目的を果たせてないと思うのだけれど？」

ソーナ「あ！いけない！すっかり忘れていました！入ってください！」

会長さんはそう言うと、生徒会メンバーが入ってきた。

ソーナ「サジ。挨拶を。」

1人の男子がこちらに歩いてきた。

あれ？確かあいつ最近生徒会に入った・・・。確か名前は・・・匙ゲンゴロウだっけ？

匙「匙元士郎です。どうぞよろしくお願いします。」

帝「皇 帝、もといエミル・キャスタニエだ。好きに呼んでくれ。よろしく。」

匙「イケメンはあんまし好きになれねえけど、まあよろしく。」

俺が差し出していた手を匙は握り返してきたが、匙はそこそこ強く握ってきた。全力なのか、顔が少し歪んでいる。

匙「お前どんな体してんだ！全力で握ったのに！」
やつぱ全力だったか。ちよつと煽つてみよう。

帝「え、あれで本気？少し強めの握手だと思った。」

匙「ええい！イケメンが調子に乗るな！俺は駒を4つ使ったんだぜ？お前ごときに負ける俺ではないわ！」

おーおー、上手く乗ってくれたな。もう少し遊ぼう。

帝「はいはい、凄いですね。どうせ駒価値115の俺はクソです
ね。」

匙「はっはっは！つて今何て言った!？」

帝「だから、どうせ駒価値115の俺はクソですわって言っただけ
だが、何か文句あるわけ？」

匙「大有りだ！駒価値115とか嘘つくな！」

ソーナ「サジ！・・・ごめんなさい、帝君。どうかサジを許してあ
げてください。」

帝「いいえ、こちらこそすみません。ちよつと調子に乗ってたので
煽りたくなつてしまいました。」

匙「会長、そんなやつー」

ソーナ「お黙りなさい、それに彼は本当に駒価値が115あります。
それにあのライザー・フェニックスを完膚なきまでに倒したのは紛れ
もなく彼です。たとえあなたが逆立ちしても瞬時に負けます。早く
彼に謝りなさい。」

匙「すまねえ皇。俺お前のごと舐めてた。」

帝「いや、俺もやりすぎた。すまん。あと名前は下で呼んでもい
いんだぞ？」

匙「そ、そうか？じゃあ改めてよろしくな、帝。」

帝「こちらこそ頼むぜ、元士郎。」

まあム力つくやつだが許してやろう。

T o b e c o n t i n u e d

使い魔、ゲットします！

帝 side

眷属同士の顔合わせの後、折角だからとグレモリー眷属とシトリー眷属で使い魔のゲットに来ていた。

？「ゲットだぜい！」

『!?』

イツセー、美優、マルタ、元士郎はびっくりしていた。俺に至ってはロングソードに手を当てていた。

リアス「みんな、大丈夫よ。あの人はザトウージさん。使い魔トレーナーのエキスパートよ。」

おいおい、完璧にパクリじゃねえか。何のとは言わんが・・・

ザトウージ「リアスさん、その金髪、黒髪、栗毛美少女と冴えない少年とアホ毛少年が使い魔をゲットしたいやつかい？」

一誠・匙「冴えない言うな！」

何だその覚え方・・・

ザトウージ「まあ取り敢えず歩きながら話そうぜい？」

そうして俺達は使い魔の森を歩いて行った。

ザトウージ「さあどんな使い魔が欲しい？強いのか？速いの？はたまに毒持ち？」

帝「一番のオススメは？」

ザトウージ「フツフツ。そいつはこれだ！」

ザトウージのおっさんは一冊の凶鑑？を差し出してきた。

これは・・・ドラゴンか？

ザトウージ「へ天魔の業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）のティアマト。五大龍王最強にして唯一のメス。実力は魔王クラスだぜい？」

帝「いや待って待って!!他には?！」

ザトウージ「ならヒュドラはどうだ?どんなものも下手すれば主をも蝕む猛毒の使い手だぜい！」

帝「もう少しまともなやつは無いのか・・・。」

余りに異常なやつを勧めてくるザトウージのおっさんに頭を抱え

ていると、リアスが目を輝かせて、

リアス「エミル！ティアマトを使い魔にしなさい！」

帝「リアスさん!?それは俺に死ねと言っているのでしょうか!？」

リアス「だつて見たいじゃない。龍王と天竜のセット。貴方なら簡単でしょう?」

帝「・・・考えてはおく。」

暫く歩き、池に着いた。

ザトウージ「ここは水の精、ウンディーネの住処だぜい。」

イツセーはいやらしい顔をしていた。何故だろう、期待してはいけない気がする・・・。

ザトウージ「お、出てきたみたいだぜい?」

ザパアアアン!!

出てきたのは何と、筋肉ゴリゴリのイメージとはかけ離れたウンディーネだった。

帝「おおう、そう来たか・・・。」

しかし妙だ。ウンディーネとミルたんが似ている気がするぞ?

イツセー「チクシヨオー!!こんなのやってられるかあ!」

帝「あ、おい待て!イツセー!!」

しまった、イツセーが逃走という名の現実逃避しやがった。

俺達はイツセーを追つて、走つた。すぐ近くの開けた場所でorzしていた。

帝「つたく・・・。イツセー、ほら元気だー」

ベチャツ

俺の足元には緑色のブヨブヨした物体が落ちていた。

ベチャベチャベチャベチャベチャベチャツ

あれ!?なんかめっちゃ降ってきたんですけど!?うっわっ!なんか服溶けてくし!?おいちよつと待て、まさか!

リアス「ちよ、ちよつと!やめなさい!」

ザトウージ「これはスライムだな。基本害はないが、女性の服をよく溶かすことで嫌われている。」

うわあ、嫌な予感が当たつたよ。女子の体にスライムめっちゃくっ

ついでるし。

イツセー「こつこれはあ！脳内メモリーに保存しなければ!!」

匙「か、会長の裸が・・・！」

帝「でえい！」

イツセー・匙「ぐばらあつ!!!」

よし、2人の目はスライム投げて封じたぞ！次は・・・あれ？なんか俺、浮いてない？

ザトウージ「これは触手か。確か、女性の分泌液を啜って成長する生物だ。そのアホ毛少年は顔で判断されたんだな。」

どうしよう、そろそろムカついてきた。んあ？何俺の汗啜ってんのか!?

触手「・・・」ペツ

ブヂツ

帝「神滅刃・神威イイイアアアアアツツ!!!」

俺は神滅刃・神威を発動させてまわりついていたスライムと触手を引き千切った。

帝「勝手に人の汗啜っておいて吐いてんじゃねえよ畜生があああ!!!」

そんなこんなで俺は怒り狂いながらスライムと触手を焼き殺した。

帝「はあ、はあ、はあ、イツセー、アーシアから離れろ。」

一誠「い、嫌だ！スラ太郎と触手丸はもう使い魔にするって決めたんだ！」

そうだった、こいつエロに関したらクソ頑固なんだった。

？「ギユピー！」

一誠「ギヤアアアアアアアアアア!!!」

バチバチバチツ！

ザトウージ「あれはへ蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）！オス嫌いだが成長すれば龍王クラスになるレア種だぜい！」

蒼雷龍「クウ〜♪」

チビドラゴンはアーシアの周りを飛んでいた。

帝「アーシア、もしかしてそいつ、お前のこと気に入ったんじゃねえ

か？」

アーシア「？そうなんですか？」

蒼雷龍「クピーー！」

リアス「それだったらアーシア、使い魔と契約しましょうか。」

そして契約の魔方陣の準備が整った。

アーシア「ア、アーシア・アルジェントの名の下に命ず。な、汝、我が盟約に従い給え。」

カッ！

魔方陣は輝き、光が止んだ。

アーシア「今日からあなたは私の使い魔さんですよ？ラッセー君。」
イツセー「ん？何でラッセーって名前何だ？」

アーシア「えっと、雷撃の雷にイツセーさんの名前を少しいただき
ました。」

イツセー「そ、そっか。」

イツセーは後頭部を搔いて照れていた。

チョンチョン

帝「うえ？何だ？」

足元を見ると、蛇の尻尾が生えた鶏が俺の足をついばんでいた。何
だか可愛らしいかったので頭を撫でていた。

ザトウジ「おお、そいつはコカトリスじゃねえか！」

帝「そっかそっか。お前コカトリスだったんだく。へえー……」
バタン

嘘だろ……コカトリスかよ……。

リアス「あれ!?え!?エミル!?どうしたの!?え!!」

マルタ「あく……コレは……」

あはは、リアスが珍しく慌てる。後さ、みんな……俺……コ
カトリス、ダメなんだ……。

そして俺は意識をブラックアウトさせた。

To be continued

帝のお仕事っ！

帝 side

結局俺が倒れた後、今回の使い魔探しは終了した。匙は一応使い魔をゲットしたらしい。そして今・・・

コツンコツンコツン

帝「・・・」

コツンコツンコツン

帝「・・・」

コツンコツンコツンコツンコツンコツン

帝「だああああ!!!鬱陶しい!!!」

なんと、コカトリスが俺についてきていましたあー☆・・・ふざけんな！

帝「あのね、コカトリス君。気に入ってくれたのは嬉しいんだけどね、俺は君らが苦手なわけなんだよ？わかる？」

コカトリス「コケツ？」

帝「確かに君らは苦手だよ？今こうして意識保ってるだけでも凄いだからね？だからどうにか帰ってくんない？」

コカトリス「コケツ。」

帝「あー・・・仕方ない。これで帰ってくれるな？」

リアス「ええつと、エミル？コカトリスと何を話しているの？」

帝「こいつ、俺の使い魔になる代わりに俺に用事がある以外は基本勝手に姿を現さないらしい。つっわけでリアス、契約用の魔方陣用意頼む。」

そして魔方陣の用意が終わった。

帝「ええつと・・・エミル・キャスタニエの名の下に命ず。汝、我が盟約に従いたまえ。」

魔方陣は光輝き、光は徐々に治まっていった。

コカトリス「コケーッ！」

帝「お、おう。これからまあよろしくな？さぶろう。」

俺のつけた名前に皆なんとも言えない顔になっていた。

気にしないでくれ。俺のネーミングセンスは元々こんなんだ。治るはずがない。

帰ってきてから30分・・・8時になって、俺の手の甲が突然輝いた。どうやら契約のお呼び出しのようだ。

帝「みんな、契約のお呼び出しみたいだから行ってくる。」

リアス「行つてらっしゃい。先にお夕飯を作っておこうかしら？」

帝「そうしてくれるとありがたい。じゃ、行ってくる。」

俺は手をひらひらとふつてオカ研の部室からある家に転移した。

帝「今晚はく。あ、ども、花さん。今日はどういったご用件でしようか？」

花「今晚は、皇さん。今日は娘と息子の中間テストに向けて勉強を教えてあげて欲しいのですけれど・・・。」

？「おや、皇君か。今晚は。」

帝「あ、玄さん。今晚はく。」

この2人は舞月ご夫妻だ。片方は舞月 花さん。どこにでもいそうなフレンドリーな方だ。もう片方は舞月 玄二さん。ちよつといかつい心優しい強面おじさんだ。

？「あ、今晚は、帝さん。今日はよろしくお願いします。」

帝「やあ、咲ちゃん。今晚は。」

？「あ、帝さんだ。今晚はく。」

帝「よつ晴君。今晚は。」

花さんと玄さんの後に挨拶してきたのは舞月 美咲ちゃんと舞月 晴久君だ。咲ちゃんはお淑やかで清楚というイメージがぴったりな女の子で、晴君は、まさにスポーツ少年をそのまま表した子だ。

帝「じゃ、2人とも。勉強の始まりだ。」

カリカリカリカリ

帝「あ、咲ちゃん。ここはxに7を代入しないと。」

美咲「あ、ほんとだ。」

晴久「しつかし帝さんっていいよなく。」

帝「ん？俺はそう思われるようなことはしてないけど？」

晴久「いや、大いにしてるよ。頭脳明晰、運動神経抜群。しかも性格も顔もイケメンときた。それに加えてあのリアス・グレモリー先輩の彼氏なんて。」

帝「そっかな？」

そんなことはないと思いつながら俺は頭をぼりぼりとかいた。

晴久「そうだよ。駒王学園二大王子様で、悩みを大人の如く聞いて助言し、常日頃クラスを引っ張って行くことから駒王学園のお兄様なんて名前もついてるらしいよ？高等部だけでなく中等部でも人気だなんて、ほんつと神様つて不公平だよ。」

何を言うか。俺はただ相談を聞いてその人が一番納得できる言葉を言っているだけだ。他意はないぞ。つてかよ……

帝「神様つて、悪魔の俺がいる前でそれを言うか……。」

晴久「あ、ごめん帝さん！帝さんって全然悪魔らしくなくて……。」

帝「はいはい、いいからさっさと勉強だ。いいな？」

晴久「うええ……。」

美咲「あ、帝さん、ここ、少し教えてください。」

帝「ああ、ここはyにxを代入してだ、そこから……。」

—————

花「今日は本当にありがとうございました。」

玄二「今日ありがとう、皇君。また頼むよ。あとそれとこれ。対価の千円。」

結局10時まで勉強を教えていた。そろそろ時間なので授業を打ち切らせてもらった。毎回授業料を受け取る辺り、家庭教師をやっているような感覚に陥りかける。

美咲「帝さん、ありがとうございます。」

晴久「帝さん、また来てくれよな！」

帝「おう、それまで2人とも元気だな。花さん、玄さんもありがとうございます。うございました。では俺はこれで。」

そして俺は舞月家の皆様方に手をふって別れた。さて、明日はどんな1日になるのやら……だな。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

月光校庭のエクスカリバー
その悪夢は何を示すか

帝side

荒れ果てた戦場の跡地のように折れた剣の刃や屍が転がる荒地に俺は1人と立っていた。

ーーんだよ、これ……。

そして俺は見覚えのある死体を見つけた。

ーーリアスツ!!!

リアスの体を抱え、揺すっても反応は無かった。

ーーなんなんだよ！これ！ツ!?

周りを見渡しながら叫ぼうとすると、さらなる追い打ちと言わんばかりに知った死体があった。

ーー美優!?!マルタ!?

そう、俺の仲間の死体が転がっていた。

ーー木場！イツセー！朱乃さん！アーシア！白音！

それだけではない。

ーー嘘だろ!?!父さん！母さん！

親の死体までもがあった。

ボゴツ

地面から3つの影が這い出てきた。

ーーオマエノセイデ、ミンナ、シンダ。

そんなことはない!!!

だが俺は声に出せなかった。いや、声を発すること自体がかなわなかった。

ーーオマエガヨワイカラ……。

やめろ……やめろ……!!

ーーオマエガオレタチヲコロサナケレバ……。

違う違う違う違う!!!

影の1つが刃物を振り上げ、俺に言った。

ーオマエガイルセイデ、ミンナガシヌンダ・・・。
次の瞬間、刃物は振り下ろされ、頭が重力に従って落ちていく感覚
がした。

帝「うわあああああああああああああ
布団を飛ばすように飛び起きた。背中や顔!!!!!!!!
身体中から汗が噴き出
していた。」

帝「はあ・・・はあ・・・はあ・・・夢・・・か・・・ハハツ・・・
ハハハハハハハハハハ・・・。」

夢であつたことを確認すると、乾いた笑いが漏れ出した。

帝「つたく、いい睡眠だったよ・・・クソが。」

不満たつぷりに眩くと、体育座りを少しずつ崩した座り方になつ
た。

帝「マジでなんなんだよ・・・ハア・・・。」

だがこうなるには心当たりがある・・・いや、心当たりがある。『か
もしれない』。それは俺が魔界で過ごした10年の内の空白の、モヤ
がかかった9年間のなかにあるのかもしれない。

帝「つ・・・マジで思い出せねえ・・・。」

結局のところ思い出せなかった。

—————

誠「いやあしかし、リアスさんも料理が上手いことで。」

リアス「日本での生活が長いものですから。それにエミルに相應し
い花嫁になるには当然のことですわ、お父様。」

一誠「はぐはぐ・・・本当に美味しいですよ、リアス姉。」

リアス「ありがとう、イツセー。エミル、私が作ったご飯美味しい
？」

帝「・・・。」

リアス「どうしたの？美味しくなかった？ねえエミル？エミル！」

帝「あ、ああ。美味しかったよりアス。でもごめん、俺腹減ってねえ
から・・・じゃ、先に行ってる・・・。」

リアス「う、うん。行ってらっしゃい。」

リアスが作ってくれたご飯を中途半端に残し、俺は苛立ちを覚えな

が
ら
家
を
出
た
。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

襲撃者

帝side

俺が悪夢を見始めてから1週間がたった。その間に起こったことを説明しよう。

1日目：旧校舎が年に一度の大掃除のため、皇家にて部活。その際、母さんが昔のアルバムを持ってきた。リアスや朱乃さん達が写真を見る中、木場はある写真を見て、とあることを思い出す。

4日目：駒王学園にて球技大会。昼から雨が降り、中止となった。木場はブーツとしていたことをリアスに怒られたが、気にする様子もなく、オカ研部室を後にする。その後、オレの家でリアスの口から、木場が聖剣計画の生き残りだったことを告げられた。

6日目：教会関係者と接触。白いローブを纏った教会側の幼馴染の紫藤 イリナと再開し、青髪に緑のメツシユが入った少女、ゼノヴィアと、黒を基調とし、一部赤いラインが入り、所々金や銀で装飾されたコートを纏った黒の教団の長い髪をポニーテールに纏めた美少年、神田 ユウ、青紫色の髪を少し短めのツインテールに括った美少女、リナリー・リー、赤い髪に、黒色のバンダナをつけ、眼帯をつけた美少年、ラビと出会う。教会側のオーダーは、奪われたエクスカリバーとの接触、及び関係しないこと。因みにエクスカリバーを奪ったのは、聖書にも記されている堕天使、コカビエルだそうだ。黒の教団は、ここ駒王町に、イノセンスの反応があったため、イノセンスの回収、そしてイノセンスが人体に宿っていた場合、イノセンス所持者を説得し、黒の教団に加えさせる、とのこと。検知されたのは神ノ道化、つまり俺の回収であるが、俺はそれを断固拒否。

イリナとゼノヴィアの方はアシアをへ魔女やらなんやら罵つていき、終いにはアシアを切りつけようとする始末。イツセーがその間に入り、ゼノヴィアとイリナに喧嘩を売る。それに便乗して木場も参戦。模擬戦という形で勝負した。が、イツセーはイリナに洋服崩壊をかけようとするも、白音とアシアに洋服崩壊をかけてしまい、白音のパンチでK.O.された。木場は巨大な魔剣を創り、ゼノヴィア

にパワー勝負を仕掛けるも、呆気なく魔剣を折られ、ゼノヴィアのへ破壊の聖剣(エクスカリバー・デストラクション)の柄の部分で殴られ、気絶。イリナ達が去った後、怒るリアスを無視して木場が部屋を去った。

7日目：今日

といった感じだ。今現在は、俺は今回の件に少し疑問があったため、俺の方で単独で調べていた。そして色々わかったことがある。今回の件に関与する人物は、へ神の子を見張る者(グリゴリ)の幹部、コカビエル、聖剣計画の首謀者であり、皆殺しの大主教という蔑称をつけられ、異端の烙印を押されて教会から追放された、バルパー・ガリレイ、天才？少年神父のフリード・セルゼンだ。もう1人いるようだが、そいつに関しての情報が一切なかった。また、聖剣を奪ったのは、天界に喧嘩売って、魔王サーゼクス・ルシファーと、魔王セラフオル・レヴィアタンの妹が管理する土地で暴れ、戦争を再び巻き起こすためらしい。

これだけ情報が集まれば大丈夫だろう。とりあえずはリアスに報告・・・は止めておいたほうがいいか。

帝「・・・！」

ガキイイイン!!

後ろから何者かが攻撃してきたが、特に危なげなくロングソードで受け止めた。

？「へえ、何時から気付いていたんだい？」

帝「少し前からだ。人通りがあまりに少ないことから、人除けの結界でも張っているのかと思つてな。一応警戒はさせてもらった。」

？「ヒュー、流石だね、〃 奴隷君 〃。」

帝「ほう、何処でそれを知った？」

？「簡単さ。僕も君と同じ痣があるからねえ。」

帝「ツ・・・そうか。」

リエル「じゃ、ここで簡単な自己紹介でもしておこう。僕はリエル・アインシュバルトだ。よろしくね、皇 帝君。」

帝「いきなり攻撃してくる奴なんかによろしくしてやれるか。」

リエル「はははっ、それもそうだね。それといいことを教えてあげよう。今、君がはぐれ悪魔バイザーを倒した場所で面白い物が見れるよ。」

帝「おい待てよ、お前一体何時からー」

リエル「それじゃ、まったね〜!」

リエルは終始ふざけた口調でそのまま走り去った。

帝「バイザーを倒した場所で・・・か。嫌な予感がするな。」

リエルの言葉の意味を知ろうと、俺はバイザーを倒した場所へと走った。

リエル「また会おうね、近い内に。今度は一緒に遊ぼう（殺し会おう）ね。」

To be continued

バギンツツ!!!

ザスザスザスザスツツツ

!!!!!!!

金属と金属が強くぶつかる音と、何かが地面に勢い良く刺さる音だった。

フリード「ちょっと！危ないじゃないの！今いいところだったのに！！」

？「大丈夫大丈夫。当たったのはあんたの剣だから。」

後ろから何者かの声がした。でも俺は知っている。その声の主を。その人物は・・・

フリード「おおう!?まさか！」

帝「そう、そのまさかだ。久しぶりじゃねえか？フリード・セルゼン。」

俺の予想どおり、帝兄だった。

一誠side out

帝side

まったく、あいつの言葉通りに来てみれば、すげーことになってんじゃねえか。

フリード「久しぶりの再開だね！嬉しすぎて涙がちよちよぎれまくりっすよ!!」

なんだ、その微妙な台詞・・・

フリード「久しぶりの再開のプレゼントとして、君に死後の世界旅行へご招待！」

ん？こいつこんなに速かったか？・・・いや、違う。十中八九、こいつの持つ聖剣の効果か。

フリードはふざけたことをぬかして俺に切りかかってきた。

ガキン!!

ゼノヴィア「私達も忘れないで貰おうか！」

イリナ「哀れなはぐれ神父に主の御慈悲を！アーメン!!」

ゼノヴィアがフリードの攻撃を受け止め、イリナが日本刀の形状を

したへ擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）でフリードを背後から切りかかった。

フリード「おわっ!? ちよっ!? 卑怯でござせんか!？」

木場「はあっ!」

フリード「おほうっ!?!?!」

フリードがイリナの攻撃を避けたが、避けた先で木場が攻撃をしたが、フリードは変な声を上げて躲した。

フリード「あり? これって俺様大ピンチ?」

バルパー「仕方ない。フリード、撤退だ。」

フリード「了解しやしたぜえ! こんなところでくたばるフリード様じゃないんでね! んなわけでほい、ちゃらば!」

プシューウー

フリードは地面に煙玉を投げ、俺たちが咳き込んでいる間に逃げた。

帝「逃げられると思ってんじゃねえぞ!」

近くの森にまだ気配があったので、走って森の中へと入っていた。

ーーーーー

帝「クソが、逃げられたか。」

結局気配が感知できなくなり、俺は気配が感知出来ない範囲まで逃げられたと判断した。

ボスン

帝「ん? なんだ?」

音のした方へと近づいた。

帝「なんだ、なにもングッ!」

? 「ごめんねえ?」

俺は誰かに口を抑えられていた。

この声・・・!

リエル「実は依頼で君を拉致んなきやならないんだ。」

帝「ングング!! ンガー!!」

リエル「君の口を抑えているこのハンカチ、特殊なスプレーをかけ

ててね？人外にしか効かない昏睡スプレーっていうんだけど、あ、僕はセーフだよ？マスクつけてるし。」

やべえ・・・目が・・・重く・・・

リエル「じゃ、行こっか。コカビーのところに。」

その言葉を聞いた後、俺の意識は闇へ沈んだ。

T o b e c o n t i n u e d

悪夢、殺人、それが示すは帝の黒き過去

帝 side

結局、俺はあいつらを守れずに死ぬのか・・・結局のところ、またあの時のようなことが起きるかもな・・・

ー本当にあの時だけか・・・？

・・・最近姿を見せないと思えば・・・なんだよ、ラタ。

ラタトスク「本当にお前はあの時だけ守れなかったと思ってるのか？」

決まってるだろ。過去未来に置いて、俺が守れなかったのは・・・

あの日だけ・・・なのか？

ラタトスク「いいや、違う。お前はそれよりももつと前に守れなかった奴らがいたはずだ。」

違う、俺は・・・俺は!!

ラタトスク「ならこいつらを見ても思い出せないのか!!!」

そこには、左から、緑髪赤目の少年、赤茶色の髪と金目の少年、金髪碧眼の少女が。

知らない！知りたくもない!!もうやめろ!!!

ラタトスク「お前が思い出すまで俺はやめないぞ!!思い出せ!こいつらはお前が一番覚えて居なければならぬ奴らだろ!!!」

やめてくれ!もういい!もういいから!!

俺は思い出してきていた。だが、俺の脳がそれを認めることを拒絶していた。

ラタトスク「良いわけがないだろうが!!!逃げてる場合じゃねえだろ

お前はまたあの頃みたいに弱虫な甘ちゃんエミルに戻るつもりか

!!!」
違う・・・違う違う違う違う違う!!!

ラタトスク「なら思い出せ!これはお前が一番向き合わなければいけない過去だろうが!!」

嫌だ・・・認めない!認めたくない!!

ラタトスク「思い出せ!ゼフィリム・ヴェルデヴェルデユを!!ルア

画が成功したのだからな。ここはひとつ、なぜ聖剣計画を起こしたか、説明をしてやろう。」

聖剣計画を・・・起こした理由・・・！

バルパー「私はな、聖剣が大好きだったのだよ。様々な悪を次々と薙ぎはらって行くその力に魅了された。いつか自分も聖剣を使いたい。そう思っていた。だが、現実には甘くなかった！私は聖剣を使えないと言われた時はそれはもうショックを受けたさ。だから私は聖剣についての研究に没頭した。そして因子が必要と知ったとき、私は急いで近くの教会の子供達を集め、実験した。まあ、実験は失敗だったがな。そして子供達を処理し終えた後、私は気づいたのだよ。聖剣を使う因子が足りないなら、補えばいいと。そして私は子供達の死体から因子を抜き出した。だが結局、教会は私を異端にした挙句、私の研究成果を盗んでいったのだ。まああのミカエルのことだ。因子を抜き出すだけ抜き出して子供を帰しているのだろう。」

木場「そんな・・・たった、たったそんなことだけのために・・・。
カランカラン

木場「これは・・・？」

バルパー「あの子供達から抜き取った因子だ。既に量産化に成功している。好きに使うがいい。本当はもう1つあったのだがな。」

マルタ「どういうことよ！」

バルパー「簡単さ。そのボロ雑巾のように転がっている小僧に使ったのさ。散々拒絶した挙句、取り込んだが、そのまま衰弱死するだろうな。」

こいつ！

バルパーを睨みつけていると、視界の端で光が起こった。そこには、さっきの聖剣の因子を握り締めている木場と、人の形をした光が木場の周りを囲っていた。

一誠 side out

木場 side

木場「僕は・・・ずっと、ずっとずっと思っていたんだ！僕だけが生き残っていいのかって！僕より夢を持った子がいた！僕より生き

たかった子がいた！それなのに、僕だけがこんな平和な暮らしをしていいのか？」

「僕達のこととはもういいよ。せめて君だけでも生きてくれ。」

声は聞こえなかった。でも、僕には分かる。彼らの言いたいことが。

「「「「♪♪♪♪♪」」」」

僕たちは聖歌を歌った。助けを求め、最後まで追いつた聖歌を。

「大丈夫」

「僕たちは独りだったからダメだった。」

「でも、みんななら大丈夫だよ。」

そうだ、そうだったんだ。みんなは本当は僕が生きてさえいてくれればよかったんだ。

「聖剣を受け入れて。」

「怖くなんかないから。」

聖剣は、僕達を繋ぐ絆だったんだ。

「例え神が見ていなくても。」

「神がいなくとも。」

「僕たちの心はいつだって——」

「「「「ひとつだ。」」」」

その瞬間、僕の中へと光が入り込んだ。本来光は悪魔にとって猛毒。でも、この光は違う。むしろ僕に暖かさを、力を与えてくれる！

？「行け！お前の力、見せてやれ！木場！いや、祐斗！」

ああ、行つてくるよ！帝君！

木場side out

帝side

帝「行け！お前の力、見せてやれ！木場！いや、祐斗！」

目が覚めて早々、何感動的なことしてんだ。ったくよ。

ゼノン【主、あの小僧・・・】

——ああ、至ったよ。あいつは。

なあ、そうだろ？祐斗。

木場「バルパー・ガリレイ。貴方を生かしておけば、第二、第三の僕が生まれる！僕が貴方を倒して、この悲しみの連鎖を断ち切る！」

バルパー「チツ！フリード！」

フリード「あいよ！お任せ！」

一誠「木場アアアア!!お前の仲間との絆、聖剣以上だつて示してやれええええ!!」

リアス「そうよ祐斗！私が騎士ならエクスカリバーごときに負けるはずがないわ！」

朱乃「祐斗君！信じてますわよー！」

白音「祐斗先輩！頑張つて下さい！」

アーシア「木場さん！」

マルタ「木場君！そんなやつけちよんけちよんにやつちやいなさい！」

美優「木場君！頑張つて！」

祐斗は少しハツとした顔になっていた。

やつと気づいたか。あのバカ。

木場「僕は剣になる。仲間を守る剣になる！今こそ、あの時願いを叶えるんだ！僕の想いに応えてくれ！魔剣創造ツツツツツ！！」

祐斗がそう叫ぶと、祐斗の魔剣は徐々に聖なるオーラを纏つて行つた。

そうか、あれが祐斗の、祐斗だけの禁手!!

木場「へ双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）。聖と魔を有するこの剣、とくと味わうといい！」

バルパー「バカな!?聖と魔など、合さるはずがない!!」

さして、そろそろ体動かすか。

ゼノヴィア「グレモリーの騎士、共同戦線はまだ生きているな？」

木場「そう思いたいね。」

ゼノヴィア「ならば共に破壊しようか。」

木場「大丈夫かい？」

ゼノヴィア「大丈夫さ。あれは聖剣であつて聖剣でないほど禍々しい。それにまた破片から作り直せるさ。」

帝「俺も手伝おう。」

木場「帝君！もう動いて大丈夫かい!？」

帝「大丈夫。心配ないさく♪それに、俺とお前は友達だ。親友でもいいがな。そんなやつが壁を乗り越えようとしているんだ。手伝ってやるのは当然だ。それに、新しい力も試したいしな。」

ゼノヴィア「なら少し待ってもらおう。」

帝「じゃ、その間俺も準備するよ。」

ゼノヴィア「ペトロ、バシレイオス、デイオニシウス、そして聖母マリアよ、我が声に耳を傾けてくれ。」

ゼノヴィアが何かを詠唱すると、彼女の近くの空間に歪みが生じた。と思うと一つの巨大な聖剣が。

ゼノヴィア「この刃に宿りしセイントの名において、我は解放する！デユランダルツ！」

バルパー「デユランダルだと!？」

コカビエル「貴様、エクスカリバーの使い手だけでなくデユランダルの使い手でもあったのか!？」

興味のなさそうだったコカビエルが過剰に反応した。それもそうか。デユランダルは現在折れていない聖剣のうちの貴重な一振りだからな。

帝「つてことはゼノヴィア、お前ー」

ゼノヴィア「そう、私は天然の聖剣使い。つまり真の聖剣使いのなごさ!」

帝「聖剣と魔剣の融合が・・・できるかなあ?」

木場「あ、あれ?帝君?」

帝「やってみつか。」

そうして俺は魔剣創造と聖剣創造・・・いや、今は変質して別の名前か。

帝「へ闇を喰らいし深淵剣(アドミレス・フォール・ソード)へ! へ神剣創造(エクス・ファルナ・ブレイド)へ!」

そう、魔剣創造は俺の「ヤツ」への恨み、怨恨を吸収し、変質した。俺の恨みと怨恨を吸収していなかったら「ヤツ」への憎しみとかで

どうにかなってしまいそうだったから、まあ結果オーライかな。聖劍創造は、ヤツが俺に使った聖劍の因子が中で強化化し、そのままくつついた。

帝「――神の祝福を受けし劍よ。

――闇を喰らう魔劍よ。」

――我が元に集いて禁忌を解放せよ！」

すると、呼び出した深淵劍と神劍は互いに互いを喰らい始めた。暫く待ち、そこには一つの劍が刺さっていた。

帝「完成つと。これはさしずめ、へ神聖なる絶望の神淵劍（カリス・トウ・カルナヴァル）〈ってどこかな？〉

バルパー「そんな!? 神聖なる力は魔などと絶対交わらないはずだ！」

フリード「そんな超展開いらないの! つか前置き長いよ！」

フリードはそう叫びながらゼロヴィアに襲いかかった。

ガキイイイイインツツツツ!!!

フリード「受け止めてないで潔く切られるよ！」

フリードは後ろに下がり、姿を消した。4本のエクスカリバー中の一つの能力だろうか。

フリードくんはあいかわらずむちゃくちゃなやろうでした丸

帝「うおつと。」

バキイイイイインツツツ!!!

ふざけて小学生の作文みたいに感想を思っていると、恐らくへ擬態の聖劍で飛ばしてきた刃を神淵劍で叩き落とした。

帝「そこか？」

ザスザスザスザスツツツツ!!!!

フリード「ひいやっ!?!」

あ、逃がした。ま、いつか。

木場「はあああ!!」

フリード「んぐつ、くっ!」

祐斗とフリードが鏝迫り合いをしていた。

ビキビキビキツ

フリード「おいおい嘘だろ!? 天下無双で伝説のエクスカリバーがこんな駄剣に負けんのかよ!?!」

木場「僕たちの想いを舐めるな!」

ビキビキビキツ

バキイイイイイン!!!

ズシャアアアン!!

祐斗は聖剣ごと、フリードを思い切り切った。

木場「みんな、僕たちの想いは、エクスカリバーを超えたよ・・・

!」

帝「・・・おめでどう、祐斗。」

俺は羨ましげに、誰にも聞こえないように祐斗に賞賛の言葉を呟いた。

T o b e c o n t i n u e d

Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!

【Transfer!】

一誠「行くぜ!ドラゴンショット!!」

ドオオオオオン!!!

いつの間にか禁手化していたイツセーは発生させた魔力玉に譲渡して、魔力弾として放った。

コカビエル「フハハハハハハハ!!!いいぞ!実にいいぞ!」

コカビエルは爆煙の中から空へと飛び出した。

朱乃「雷よ!!」

ビシヤアアアアアン!!!

コカビエル「どうした!バラキエルの娘よ!貴様の力はこんなものか!」

朱乃「私の前で、あの者の名を口にするな!!!」

朱乃さんは雷を放ったが、コカビエルに片腕で受け止められ、バラキエルの娘と呼ばれると、激昂した。

コカビエル「貴様の雷、返すぞ!」

ビシヤアアアアアン!!!!

バチチチチチツツ!!

朱乃「きやああああああつっ?!!」

あ、やべえ!これは受け止めないと!

俺は疲れた体に鞭打って、朱乃さんを受け止めるために駆け出した。

帝「ほっ!」

ボスンッ

ズザザザザツ

帝「大丈夫ですか?」

朱乃「え、ええ。ありがとうございます、帝君。」

帝「アーシア!マルタ!朱乃さん頼むぞ。」

コカビエル「しかし、仕えるべき主を失ってなお戦い続けるとは。哀れだな。」

ゼノヴィア「貴様！それはどういう意味だ！」

コカビエル「おおっと、口が滑つたな。仕方ない。貴様らに教えてやろう。これから戦争を起こすのだからな。」

そしてコカビエルは少しの間を置いた。

コカビエル「先の三つ巴の大戦で、神は死んだのだ!!」

全員『ツ!!??』

アーシア「そ、そんな・・・主が・・・!?!」

やはりコカビエルの野郎言いやがったか。皆驚いた顔をしているが仕方がない。これは一部の者しか知らないからな。

コカビエル「本当のことだ。先の大戦にて先代の4大魔王だけでなく、神も死んだのだよ。と言っても、これは各勢力の上の者しか知らないからな。」

ゼノヴィア「嘘だ・・・嘘だ!!」

ゼノヴィアとアーシアは酷く落ち込んでいた。もはや絶望していると言ってもいい。

コカビエル「ミカエルもよくやっている。天使と人間を上手くまとめているからな。神が残した“システム”がある程度働いていれば神への祈りも、神からの祝福も、悪魔祓いも程々に動いているはずだ。」

皆が驚くのも無理はない。俺だって父さんに聴かされた時は皆のような反応を示したさ。だからってそれがどうした。神がいなくてもこの世界は上手くいっているじゃないか。

コカビエル「しかしその小僧、貴様は余り驚いていないようだな？」

帝「当然だ。親から色々聴いたんでね。」

コカビエル「成る程、貴様があ Emil・キャスタニエか。しかし滑稽だ！一度友を殺し、一度人々を見殺しにし、それでもなお貴様は人を求めるか！」

帝「・・・ここで・・・った・・・。」

コカビエル「それほど人を殺したいならば堂々と殺せばツ!?!」

帝「どこで知りやがったって言ってるんだ!!! 言え!! 今すぐ!!! ここです!!!」

心の温もり

リアス side

私達が家に帰ってから、晩御飯を作ってエミルを呼んだけど、結局彼は降りてこなかった。そして今は夜の10時、エミルの部屋の前にいる。

コンコン

リアス「エミル？入るわよ？」

ガチャ

私がエミルの部屋に入って1番先に目に入ったのは、ベッドに腰掛け、何かを考えているエミルだった。私はそんなエミルの横に座った。

リアス「ねえエミル、いきなりこんなこと聞くのはダメだって思うけど、その……貴方に一体何があったの？」

私の質問に、エミルは怯えたように肩をビクリと震わせた。

帝「……。」

リアス「聞かせて？貴方がどんな人だったって私は変わらず貴方を愛せるから。」

帝「……俺は、昔大切な人を、3人、この手で殺した……。」

やっぱりコカビエルの話は本当みたいね……。

帝「一度友を殺し、一度人々を見殺しにしている。さっきだって、俺は皆から拒絶されるのが怖くて逃げた。」

気がつけば私はエミルの顔に手を伸ばしていた。

帝「俺はもう君の優しさを受ける資格なんてない……。穢れてしまったこの手じゃ……。もう君を愛することも、抱きしめることもできない。」

私の手はエミルの顔に触れる前にエミルに掴まれた。そして彼は怯えきつている。その証拠に、声が震えている。

帝「このままじゃ、俺のせいで皆に迷惑をかけるしかない……。だから君の眷属を抜けさせてくれ。そしてもう……。別れよう……。」

リアス「ふざけないで!!」

いつの間にか私は激昂していた。

帝「俺は皆を殺すかもしれないんだぞ？父さんや母さんまで。そんな奴がいれば、尚更迷惑だろ？」

リアス「だからなんだって言うのよ！私達が本当に仲間だと思うなら、迷惑の1つや2つ、かけてみなさいよ！」

帝「……リアス……。」

ギユウ

私はエミルを胸元に抱き寄せた。

リアス「もう、1人で抱え込まないで。私は貴方の恋人なんだから。だから貴方が背負ってるもの、私にも背負わせて？」

胸元に抱き寄せたエミルの頭を撫で、安心させるように言った。

帝「リアス……俺……俺……！」

その瞬間、エミルは私に抱きついた。

帝「本当は……皆を……殺したくなかった……!!」

リアス「ええ、貴方は優しいから、きつと頑張ったでしょう？辛かったわね。」

帝「皆と一緒に……もつと笑って過ごしたかった……!!」

リアス「もう大丈夫よ。貴方は1人じゃないんだから。」

帝「……もつと……俺はもつともつと皆と……!!!」

リアス「頑張ったわね。でも安心して。今は私がいるから。ずっと、ずっとずっとそばに。」

帝「うぐっ……うっ……ひぐっ……えぐっ……!!!」

リアス「大丈夫。さつきも言ったでしょ？貴方の抱え込んでるもの、私も一緒に背負うから。ね？」

その後、暫くエミルは泣き続けた。でも、仕方ないと私は思う。彼は人一倍優しいから、誰にも心配させたくなくて、きつと甘えることができなかった。いつもの凛々しい姿の裏には、こんな弱々しい一面があったなら尚更放ってはおけない。だって彼は私のもので、私は彼のものなのだから。

帝「……すまねえな、こんなところ見せるなんて、拍子抜けだろ？」

リアス「いいえ。気にする必要はないわ。でも貴方、本当は泣き虫

だったのね。」

私は苦笑いして彼に返した。

帝「つるせえ!……一応涙を見せたのは、お前が始めてなんだからな。」

リアス「隠さなくたっていいのよ。もしかしてツンデレってやつかしら?」

帝「くっ、だあもう!わかったよ!俺は泣き虫だよ!」
いつもの何気ないやり取りが戻ってきた。

これで少しは支えになるといいのだけれど……。

リアス「あ、そういえばエミル。何故私の前からいきなり姿を消したのかしら?」

帝「えっ!?あ、いや、その……少し体調を崩してだな……!」

リアス「むう……嘘つき……。」

帝「ツツツ!!?!」

どうやら嘘つきと言われるのはショックだったようだ。私も少しやりすぎたようだし、今回は「アレ」で許してあげようと私は考えた。

リアス「もう、今回の罰は「アレ」でいいわ。」

帝「?「アレ」ってなんだ?」

リアス「教えてあげるわ。「アレ」って言うのはね?」

パサパサパサッ

私は流れる様な手つきで服を脱ぎ、産まれたままの姿になった。

帝「えっと、あの、あれ?ちよつとリアスさん!」

私が近づくと、エミルはジリジリと後ろに後退した。

そんなに下がらなくても良いのに。

リアス「「アレ」って言うのはね……」

帝とリアスの初デート

帝 side

日差しがきつくなり、風が心地よく感じる季節となった。今日、聖剣事件解決から既に8日が経っていた。あの後、神の不在を知ったゼノヴィアは、教会から追放され、破れかぶれで悪魔になった。イリナは聖剣の破片を回収し、教会本部に戻ったらしい。当たり前だが、勿論ゼノヴィアは転校してきた。では今俺は何をしているでしょう？正解は……リアスとのデートです！昨日突然リアスが、恋人らしいことをできていないと言い出したので、明日はオカ研のみんなでプールの清掃ついでに遊ぶということがあるので、駒王学園の近くのデパートで、デートついでに水着を買おうというわけだ。集合場所は駒王駅だ。ま、女性には女性の準備があるんだろう。ああ、因みにだが、今の俺の服装は、黒い半袖のパーカーに、下には白いTシャツを着て、ズボンは紺色のジーンズを履いている。

ちよんちよん

? 誰かな?

リアス「お待ちませ。待った?」

おっと、我が愛しの姫様が来られたぞ。

帝「言うほど待ってない。全くもって大丈夫だ。」

リアス「よかったわ。……それより、その……私、どうかしら?」

ここは褒めなければならぬ重大なポイントだっ!!

リアスは白いワンピースに薄紫のショールを羽織っている。

うん、普通に似合ってるじゃねえか!

帝「いつものリアスとはだいぶ違うイメージだが、可愛いリアスには似合ってるよ。」

リアス「ありがとう。」

うおうっ!? 守ってあげたい! その笑顔!!

リアスはいつもの雰囲気と違い、年相応のデートを楽しむ女の子だ。

チクショウ……俺を萌え殺す気か!?

きゆうく

ん？何、今の可愛らしい音？

音のした方向を見ると……リアスだ……。

リアス「えと、ごめんなさい……朝、少し足りなくて……／＼／＼」
顔を赤らめて恥ずかしそうに笑って俺に言ってきた。

クツソ、なんだこの可愛い生き物は！！

帝「丁度近くに喫茶店があるから、そこ行こっか？」

—喫茶店—

帝「すみませーん。えと、いちこのショートケーキと、紅茶とあとアイスコーヒーっつ。」

店員「畏まりました。」

店員さんは、ペこりとお辞儀し、その場を離れた。

帝「なありアス。」

リアス「何かしら？」

帝「今回のプールの清掃した後にプールで遊んでいっての、やっぱりソーナ会長からか？」

リアス「そうみたいね。お礼として、だそうよ。それはそうとエミル、貴方兵士の昇格、きっちり使いこなしてるの？」

帝「そう言えばそんなのもあったな。今度機会があれば試してみるよ。」

店員「お待たせいたしました。紅茶、いちこのショートケーキ、アイスコーヒー、以上でよろしいでしょうか。」

帝「はい。ありがとうございます。」

店員「では、ごゆっくり。」

さて、アイスコーヒーでも飲もう。

リアス「あら、エミル、このケーキ美味しいわ。」

帝「そりやよかつたな。」

いつも使っているケータイで、ネット小説を見ている。ここ最近の俺の趣味だ。

リアス「エミル、はいアーン??」

帝「ん？いいのか？」

リアス「いいわよ？エミルなら。はいアーン??」
帝「アーン。」

ングング……うん、スポンジがふわふわしてて、クリームもまろやかかつ濃厚で、確かに美味しい。ケーキ屋と比較しても劣っていない美味さだ。

帝「美味しいよ。ありがとな、リアス。」

1番美味しい理由はリアスがアーンしてくれたからだけだな。

—数分後—

店員「ありがとうございます。またのお越しを。」

帝「さて、次は水着を買おうか。」

リアス「そうね。行きましょう。」

あ……人通りが多いな。

帝「リアス、手繋ぐぞ。」

リアス「え？う、うん……／＼／＼」

あ、やっぱり恋人繋ぎですか。まあわかってましたけど。

—服屋 水着売り場—

リアス「ねえ、どうかしら？」

帝「お、おう。い、いいんじゃないか？……／＼／＼」

さて、肝心の水着だが、今はリアスの水着を選んでいるんだが、その……なんだ、布面積が小さいやつばつか選んでくるからこつちも恥ずかしい。少しは俺の気持ちも考えて欲しいものだよ／＼／＼

リアス「エミル、ちよつとこつち来て？」

帝「どうした？何かあつどうわっ!？」

俺はリアスに試着室の中に引き込まれた。

帝「リアス！こういうことはだなー!？」

リアス「ねえエミル。私が着替えているところ、みててくれる？私、恥ずかしいけど我慢してエミルを満足させてあげるから!？」

帝「はあ……わかった。お前がそれでいいなら俺は黙って見てるが、これだけは答えてくれ。誰にそんなこと教えられた？」

今更逃げるなんてことはしたくない。決して下心は……ないわけではないが、少なくとも下心は抑えているから！ちゃんと抑えている

から！

リアス「えつと……美優……から……。」

どうしよ、怒るに怒れねえ……。

帝「仕方ねえな、つたく。」

やっぱりいつまでも俺は甘ちゃんだ。

―数時間後―

帝「ふへえ……疲れた……。」

あの後、俺は黒に緑のラインが入った海パン、リアスは布と布をリングで留めた水着を買った。その後は、2人で服を見たり、アクセサリーを見たり、色々してるうちに、夕陽が眩しい今の時間になった。俺的にはリアスとデートできただけでも大満足だ。

リアス「本当に今日は楽しかったわね。」

リアスが満足したような笑顔でそう言った。

あ、もう元気出たぜ！

帝「リアスと一緒にだとか何もかもが素晴らしく見えるよ。」

リアス「ふえつ／＼／＼!?」

あ、しまった。声に出てた。

リアス「あの、エミル……。」

帝「んあ？どした？」

リアス「その、先週はごめんなさい。悪魔の出生率の低さにかこつけて……その……いっぱいエッチ……しちゃって……。」

う、やめろ……。あ後の日父さんにめちやくちや弄られたんだけど……。

帝「あー……そう思ってるんならさ、その……今日しっかりやり直そうぜ？」

リアス「……うん！」

……やらかした……。しっかり言葉選べばよかった……。しかもリアスの笑顔が曇りのない笑顔なわけで……ぐふおあつ!!!

俺はリアスの笑顔によって罪悪感に苛まれながら、家への帰路をまた一歩踏み出した。

そして夜、めちやくちやした。何がとは言わん。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

停止教室のヴァンパイア
夏です、水着です、修羅場です！

帝 side

さて、俺たちオカ研のメンバーはプールで遊んでいる。が、俺は泳いでいない。何故なら……

帝「……腰痛え……。」

昨日調子に乗ってやりすぎた……。何とは言わんぞ！絶対にだ！

帝「……にしてもなあ。」

俺は左腕を天に掲げていた。俺は腰よりもっと気にしていることがある。それは俺の力だ。記憶を戻した際に「本来の力の一部」を取り戻せたのだが、これがまたタチの悪い力だった。何せ、ゼファイ、ルアン、シエルを殺した時に使った力だからな。余計に気が減入る。

帝「『アレ』を使えるのはまだまだ先……か。」

覇を超えたあの力、神器自体は変わってしまったが、しっかり力が戻ったなら、『アレ』を使うことも可能だろう。

リアス「ねえねえエミル。」

帝「ん？どした？」

リアス「ちよつとオイル塗ってくれないかしら？」

帝「別にいいぞ。ほれ、そこに寝転がってくれ。」

丁度近くにあったシートを指差し、リアスを寝転ばせた。

しかし何故だろう……嫌な予感がするぞ……。

リアス「エミル、前もお願いできる？」

帝「……やるよ……。」

一瞬躊躇したが、あんなことをしたんだ。今更恥ずかしがる必要もないだろう。……言わんぞ！

リアス「んっ……くふっ……んんっ……！」

面倒くさいところからやろうと胸に塗っていたが……やめろ！そんな艶っぽい声出すな！

そんなこんなでなんとか胸を塗り終わり、他の場所を塗ろうとして

いると……。

ムニユン

……嘘だろ……嫌な予感が的中しやがった……。

朱乃「あらあら、部長だけだなんてずるいですわ。」

美優「お兄ちゃんお兄ちゃん、私にも塗って?」

Oh……2人に抱きつかれてるせいで動けねえ……。

リアス「ちよつと朱乃!?美優!?貴女達何やってるの!」

朱乃「何って、私の可愛い後輩とのスキンシップですわ。」

美優「私のお兄ちゃんと触れ合ってるだけだよ?部長。」

リアス「何言ってるのよ!エミルは私の彼氏よ!」

……これが俗に言う修羅場か……。

朱乃「ねえ帝君?今から私達でいいことをしてあげましょうか?」

帝「ふえつ?」

美優「皆で一緒に気持ちよくなれるよ?はむっ。」

帝「ひうつ!」

朱乃さんと美優は一緒に俺の耳たぶを甘噛みしてきたわけで……いきなりだった為に声がつい裏返った。

バンツ!

プールサイドの飛び込み台が一瞬にして壊れた。俺のアホ毛も少し焦げていた。恐る恐る目を開くと、そこには滲み出た赤黒いオーラを身に纏うリアスの姿が……。

うわあああ!超怖えええ!!!

リアス「そろそろいい加減にしたらどうかしら?淫らな雷の巫女さん?ブラコン姫さん?」

朱乃「あらあら、それは酷いんじゃないかしら?紅髪の痴女姫様?」

美優「今のお兄ちゃんに当たったらどうするつもりだったんですか?紅髪の牛姫様?」

朱乃さんは雷のオーラを纏い、美優は色々な魔方陣を展開させていた。

……やばい……逃げよう……!

そう思った瞬間の俺の速さは俺史上最高の速さだった。……情け

ない……。更衣室の方に逃げ込むと、俺は用具室の前の段差に座った。

？「ん？そこにいるのは……。」

帝「帝かエミルでいいぞ。しかし随分時間がかかったんじゃねえか？ゼノヴィア。」

俺のすぐ側には、ゼノヴィアがいた。水着を着るのに四苦八苦していたと聞いたが、今着替え終わったのだろう。

ゼノヴィア「うん、こういうのには慣れていなくてね。どうだろうか、似合っているか？」

帝「まあ似合ってんじゃねえの？」

ゼノヴィア「それはそうとエミル、こちらに来てくれるか？折り入って君に相談があるんだ。」

帝「ああ、別にいいが。」

用具室の中に入るように促された。それほど大事な話なのだろうか？

帝「で？話って何だ？」

ゼノヴィア「ああ、私はなー

君との子供が欲しいんだ。」

帝「……………は？」

ゼノヴィア「先日、リアス部長に悪魔としてどう生きればいいのか聞いたんだ。そして返ってきた答えがー。」

リアス「悪魔は欲を与え、欲を喰らい、欲に生きる者。好きに生きなさい。」

ゼノヴィア「ーというものだったんだ。」

おい待て、これでリアスに責められたら俺は躊躇なくリアスに反撃

するからな。

ゼノヴィア「私は君の強さに惚れ込んでしまっただけ。君との子供を産みたいと思っただけ。大丈夫、できたらできたで、あとは私が何とかしよう。だが偶には顔を見せてやってくれ。その方がきつと喜ぶ。」

ゼノヴィアはそう言いながら、水着を外していく。

帝「待って待って!? 話が飛躍し過ぎだ! それと段階つてもんがあるだろ!? 第一俺は既にリアスと付き合ってる訳でだな――!」

ゼノヴィア「なら私をすぐに捨ててくれても構わない。さあ、早く!」

帝「やめろお! そんなクズみたいなことできるか! ってか人聞きが悪すぎるぞ!」

バタンツ!

用具室の扉が開き、助かった! と思ったのも束の間――

ゼノヴィア「どうしたエミル? 早く子作りを――!」

白音「なっ……!?!」

リアス「子!?!」

朱乃「づ!?!」

美優「く!?!」

マルタ「り!?!」

あ……終わった……。

このあと、鬼の形相をしたリアス、朱乃さん、美優、白音、マルタに怒られたの言うまでもない……。リアスは分かるが他は何故……?

帝「よつと。」

今は夜、俺は急にきたはぐれ悪魔の討伐をリアスに頼み込んで、1人で来ていた。

しかし夜の森は暗いもので、悪魔の暗視能力がなければ道に迷っていただろう。

シユンツ!

俺の横を何かを通った。俺は気配を感じていたため、避けることは容易だった。そしてそこにいたのは、下半身が馬、上半身が人間のケンタウロスだった。

帝「さて、あんたかな？はぐれ悪魔、ブラム・フォージさん？」

ブラム「ほう、我が騎士の全速力の攻撃を最も簡単に躲すか。貴殿、何者だ？」

帝「俺は皇 帝。一応エミル・キャスタニエって名前もある。これでも今代の赤龍帝だ。」

なに、嘘は言っていない。

ブラム「ほう、貴殿があゝの赤龍帝か。歴代最弱と聞いているが、中々やるようだな。まあいい。ここで貴殿を喰らい、その赤き龍帝の力、貰い受けるぞ！」

まあ確かに歴代最弱の赤龍帝はいる。だが、俺は全く別のやつなんだよなあ。

こちらに走ってきたブラムは中々のスピードだったが、攻撃を躲し、足を引つ掛けると、すぐに転んだ。そしてすぐさま、「アレ」を召喚するための詠唱に入った。

帝「―紅蓮に燃ゆるは滅びの刃

―沈みゆく理想は光を失う

―されど理想に眠りし我らが想いは一振りの刃となりて蘇らん

―我らが意思を聞き給え！

―我らが願いを叶え給え！

―今ここに、かの理想郷が滅びと共に蘇る！

〈終の聖剣（エクスカリバー！ファントム）理想郷（アヴァロン）〉!!!
詠唱を終え、左腕を右手で握り、剣を抜くが如く振り抜くと、柄はX字、頭身の付け根はひし形で、その真ん中がひし形に空いている剣が現れた。

ブラム「な、何だそれは!?!そのオーラは聖剣!?!貴様、何故それを扱える!?!」

ザンツ!!

帝「はあ、口動かす前に体動かせよ。じゃないとー」

ブラムの体はずれ、上半身と下半身が綺麗に別れた。

帝「こうなっちまうぜ？」

俺は左右に聖剣を振り払い、手で回転させながら、左腕に突き刺した。そして剣は、腕の中へと収まった。

帝「さて、帰るか。」

そして俺は家へと向かって踵を返して歩き出した。

T o b e c o n t i n u e d

魔王様、訪問です！

帝 side

リアス「冗談じゃないわ！墮天使の総督が私の管轄する地域にいるなんて！」

どうやらリアスはご立腹らしい。とは言っても、イツセーは昨日アザゼルのおっちゃんと接触したらしい。ってか契約者として暫く接していたようだ。コカビエルの動きを察知していたアザゼルのおっちゃんはコカビエルより一足先にこの町に潜伏していたらしい。だがそれより……

帝「リアス、近々天使、墮天使、悪魔の3大勢力会談をすると言うのは本当か？」

リアス「ええ、本当よ。私達グレモリー眷属とシトリー眷属は件の件に関わったから会談に出なければならぬの。」

もしかすれば俺も人間側として、勇者の一族の筆頭として出席しなきゃなんねえな。俺が出る事を前提にした話だがもしかすればこの会談で人間への被害をかなり抑えられる可能性がある。できるなら今回の会談は是非とも出席させてほしいものだ。

リアス「はあ、どうしたものかしら……。頭が痛いわ。」

その心中、察するよ。リアス。

？「まあまあ、アザゼルは昔からああいう男なんだ。許してやってくれ。」

不意に男性の声が聞こえた。この声……。

帝「暫くぶりですね、ルシファー様。」

そう、そこにいたのは魔王サーゼクス・ルシファー様こと兄様とグレイファイアさんだった。

サーゼクス「こちらこそ暫くぶりだね、〈魔神皇〉君。リアスも。」

リアス「ま、魔王様!？」

刹那、グレモリー眷属は兄様に跪いていた。だが俺は跪けないでいた。

帝「……………はえ？なんですか？その〈魔神皇〉って…………。」

サーゼクス「おや、知らないのかい？君は冥界では悪魔以上に残酷で、神のような風格を纏い、人々をまとめる皇としてのカリスマ性を持ち合わせた者と言われているんだよ？それをわかりやすく一纏めにして〈魔神皇〉なのだよ。」

帝「は、はあ……。」

アーシア「(この方が魔王、サーゼクス・ルシファー様。部長さんのお兄様……!)」

サーゼクス「アーシア・アルジエント、だったね?」

アーシア「は、はい!」

サーゼクス「緊張してくれなくていい。今はプライベートで来ているんだから。それと、リアスからは優秀な僧侶だと聞いている。これからもリアスを宜しく頼むよ。」

アーシア「は、はい!頑張ります!」

ゼノヴィア「貴方がサーゼクス・ルシファーか。初めまして。ゼノヴィアと言う者だ。」

サーゼクス「ごきげんよう、ゼノヴィア。あのデュランダル使いが妹の眷属になったと聞いた時は、それはもう驚いたよ。」

ゼノヴィア「生きている内に魔王と会えるのは光栄だ。悪魔に転生してよかつと思うよ。あれ?待てよ?私はそもそも破れかぶれで悪魔になったわけで……うーん……ああ、主よ、お教えくだあうっ!」

ゼノヴィアはアーシアと同じように結構天然だった。

サーゼクス「はははは。今後とも妹共々宜しく頼むよ。」

リアス「それよりお兄様、どうしてここへ?」

サーゼクス「ん?何を言っているんだいリアス。分かりきっているだろう?近々授業参観があると聞いたからね。是非とも妹が勉強に励む姿を見たいと思って来たのさ。」

リアス「ち、ちよつと!グレイフィアね!お兄様に知らせたのは!」

サーゼクス「安心しなさい。父上もちゃんとー。」

リアス「そう言う問題ではありません!第一、いち悪魔である私にそんな肩入れなどしてはー!」

帝「まあまあ、リアス。ここは少し落ち着け。」

リアスの頭の上にポンツと手を置き、頭を撫でると引いてくれた。帝「兄様、他に目的があるのでしよう？そうですね……例えば、今度3大勢力会談をする場所の視察も兼ねている……とか。」

サーゼクス「全く、君の推理力には敵わないね。その通りさ。」

リアス「こ、この駒王学園で!？」

サーゼクス「ああ、この町では、主に龍神帝王こと帝君を中心に事件が発生していると思ってるね。」

帝「龍の強者を呼び寄せる特性ってやつですね。」

サーゼクス「そうだ。そこで、この町で会談を行い、上手く和平が成立すれば、この町を拠点に各神話大勢とも和平を結びたいと考えているのだよ。」

帝「んんっ！魔王サーゼクス・ルシファア様。少しよろしいだろうか?」

サーゼクス「ん?どうしたんだい?そんなに改まって。」

帝「この3大勢力会談、人間側、勇者の一族筆頭の皇 帝として参加させていただきたい。」

サーゼクス「ほう、成る程……いいだろう。ミカエルとアザゼルにも話を持ちかけてみるよ。」

帝「了解した。それでは今度の会談、勇者の一族皆の意見を基に発言させていただく。」

リアス「あの、ちょっとエミル?」

帝「はい！勇者の一族の筆頭、皇 帝さんは3大勢力会談まではお休みだ！ああ、因みにさつきは勇者の一族の筆頭として言っていたことだ。しっかりと公私は分けるさ。」

リアス「そ、そう。ならいいわ。」

しかし授業参観か……波乱が起きそうだぜ……。特に家の親が原因で……。

To be continued

と兄様が言い出した。まあ当然リアスは猛反対。しかし大事な話があるからと兄様が言うと、大人しく引き下がった。そして今は、目元を潤ませ、哀しそうな声で俺の方へと話しかけてきていた。

帝「大丈夫大丈夫。今日だけ別の部屋で寝るだけだ。明日は一緒にくつついて寝ような？」

リアス「……うん。それじゃ、お休みなさい……。」

リアスは名残惜しそうに俺から離れ、部屋から出ていった。

サーゼクス「なんだか今を見てると2人を無理矢理引き剥がしたみたいで良心が痛むよ。」

兄様は苦笑いして俺に言った。

帝「いいですよ。明日になったら何時も以上にイチャイチャしますしね。それで兄様、大事な話って？」

俺がそう問いかけると、兄様は急に真剣な表情になった。

サーゼクス「大事な話と言うのはね、他でも無い……」

リアスの幼少期についてだ。」

な、なん……だと……!？」

サーゼクス「こんなものも用意してあるんだよ。」

兄様がそう言い、カバンの中から取り出したのは2冊のアルバム。

サーゼクス「さあ帝君。今夜はリアスについて語り合おうではないか。」

帝「……いえ、兄様、どうせなら……。」

俺は本棚の方へと歩き、2冊のアルバムを取り出した。

帝「妹について……でしょ。」

サーゼクス「ほう、成る程。しかしいいのかい？自分で言うのもな

んだが、私はかなりのシスコンだぞ？」

帝「ふっふっふっ。そんなこと、分かりきった上で言ってるんですよ。」

バチバチバチバチバチバチバチツツツ
!!!!

俺と兄様との間に火花が散る。

サーゼクス「……語り合おうか……！」

帝「……語り合いますか……！」

その語り合いは、次の朝まで続くのだった。

T o b e c o n t i n u e d

二天龍、邂逅です！

帝side

兄様と妹について語り合い、俺と兄様は同志とも言える仲になった。まあ結果的には、妹こそ至高の癒し!!で意見があつたわけだ。因みにリアスは、兄様とグレイフィアさんにこの町を案内するらしく、学園には遅れるそう。つっても俺も父さんに呼び出されたため、イツセー達には先に行ってもらってる。

誠「さて帝。ここからは悪魔、エミル・キャスタニエと、勇者の一族元筆頭、皇 誠の話だ。」

帝「オーケー。んで、話つてのは？」

誠「実は、お前にこれを授けたいと思う。」

父さんはそう言うのと、固有魔方阵から、1本の刀を取り出し、テールの上に乗せた。その刀は、鞘は青く、柄は雷を連想させるカラーになっている。鞘の外からでもわかる濃い雷の力。しかしその雷には神聖さを感じられる。

誠「お前には、この〈雷切〉をやるうと思う。」

おいマジかよ。刀は神威だけでいいぞ。

バチバチバチツツ!!!

帝「……へえ、これはなかなか……。」

刀を抜くと、雷が刀身に迸った。この刀は雷によって切れ味が増しているのだろうが、それが無くとも、この刀は、下手したら神滅刃・神威以上の切れ味かもしれない。しかもかなり軽い。スピード重視の剣士である俺からすれば、この刀はかなりいい。

誠「これは勇者側からのささやかなプレゼントだ。是非受け取ってくれ。」

帝「ありがたく受け取っておく。それで、何が望みなわけ？」

誠「はっはっは！成る程、ばれてたわけか！」

帝「当たり前さ。悪魔は基本、等価交換で相手の願いを叶えてるわけだし。」

誠「まあ学校が終わったらイツセーに神剣をくれてやるつもりなん

だがな。まあ要求に近いな。1つ、悪魔の駒の技術が欲しい。」

帝「何故に悪魔の駒の技術を？」

誠「帝、それはお前が1番分かっているはずだ。」

帝「まあ……そうだな。」

誠「2つ、人間に無闇矢鱈に被害、及び手を出さないこと。」

帝「ふーん、それで悪魔による人間の無理矢理な眷属化を阻止するため、か？」

誠「そんなところだ。」

帝「まあ安心しなつて。勇者の一族の筆頭、皇 帝として参加する時に全部言おうとした。しかし、それでは悪魔には何も送っていないのにそういった要求をするのはどうかと思っていたところだし。まあタイミングよかつたよ。ありがとな、〈戦神〉殿。」

誠「まあこれから頑張りましたまえ。〈魔神皇〉君。」

帝「じゃあまつ、取り敢えず話はこんなところか。父さん、行つてくるよ。」

誠「おう、行つてらっしゃい。」

俺は家を出ると直ぐに走った。だがその時、既に俺はイツセー達が何者かと接触しているのを感じていた。

無事でいてくれよ、皆！

—————

よーし、ここからは平常心だ平常心。

帝「ぬあー、追いついたあ。」

よく見ると、祐斗とゼノヴィアが誰かの首元に剣を突きつけていた。最初は止めようと思ったが、突きつけられている人物を見ると、人ではないことが分かった。

帝「祐斗、ゼノヴィア、剣を下ろせ。2人じゃこいつには勝てないぞ。」

俺がそう言うと、2人は大人しく引き下がった。

？「ん？君は一体？」

剣を突きつけられていた人物が俺に聞いた。

帝「皇 帝。エミル・キャスタニエって名前もある。」

ヴァーリ「……ああ、思い出した。君がコカビエルの頭を踏みつぶしたんだったね。俺はヴァーリ。今代の白龍皇だ。よろしく頼むよ。」

ヴァーリはそう言って手を出してきた。

帝「ちよ、触んな。俺の力半減して吸収するつもりか。」

が俺は手を取らなかった。

ヴァーリ「もう1人のライバル君は勘が鋭いな。今から君と戦うのが楽しみだ。」

ヴァーリはそう言うと、俺に好戦的な視線を送り始めた。

帝「ここで始める気なら、場所を変えたいんだけどなあ。」

俺とヴァーリの睨み合いが続く。

ヴァーリ「いや、やめておこう。ところで皇 帝。君は、自分が世界で何番目に強いと思う?」

は?こいついきなり何言いだすんだ。

帝「さあ?16番辺りか?」

ヴァーリ「君のラタトスク化……だったかな?あれを使って更に本気を出せば、君は一桁台に入るだろう。俺のライバルがそれほどの強者……俺はそれを知った時、歓喜に震えたよ。」

こいつ……戦鬪狂か?

ヴァーリ「しかしながら、皇 一誠も伸び代がある。2人を大事にした方がいいぞ?リアス・グレモリー。」

一誠「リ、リアス姉!」

俺達の後ろには、リアスがいた。

リアス「白龍皇がこんなところに何の用かしら?」

リアスが口調を強めてヴァーリに問いかけた。

ヴァーリ「二天龍に関わった者はろくな人生を送らない。……君はどんな人生の中を歩むのだろうか?」

ヴァーリはそう言うと、どこかに歩いて去っていった。

しかしあいつの目、本当にただ戦いを求めている。戦う日もそう遠くない話になってきたな。まあいいだろう。今は目先のことだけに

集中しよう。

帝「イツセー、父さんが帰ったら話があるらしいぞ。」

一誠「父さんが？うん、わかった。ってか帝兄はどうしたんだ？」

帝「気にするな。悪魔と勇者殿の話だ。」

一誠「ああ、そう。」

よし、あとで雷切の性能見てみるか。異能的な何かはついてないみたいだから異能封じされたらこれを使うのも手だな。

今後の雷切の使い方を考えながら、俺は駒王学園の敷地内に足を踏み入れた。

To be continued

「普段の学校生活です！」

帝 side

元浜「聞いたぞ帝。あの新入生のゼノヴィアちゃんもオカルト研究部なんだってな。」

松田「だから帝オ……。」

松田・元浜「「歯あ食い縛れえ!!」」

パシン

帝「なあお前ら、このまま手、握りつぶしてもいいか?」

元浜「調子こいてマジスンマセン!お願いですから御慈悲をお!!」

松田「ナマ言つてスンマセンつした!!どうかお許しください帝様ア!!」

「つたく、こいつら……」

帝「え、何?マジでやると思ってたの?スゲー笑えるわー。つて痛い痛い!悪かったつて!」

敢えて2人を煽るような言い方をすると、脛を蹴られた。

帝「つてか大体、お前らなんで俺殴るわけ?全然悪いこととか恨まれるようなことはしてない筈だが?」

元浜「いやーすまん。あまりに君の周囲に美少女が集まるため。」

おいこいつ絶対謝る気無いだろ。

松田「ただ、この憤りをどこかにぶつけたかったただけなんだ!」

帝「で俺がその対象になつたわけだと……。ふざけんな!」

松田「おいイッセー、お前も何か言つてやれよ!」

一誠「まあ仕方無いんじゃないの?」

元浜「ほ、ほう。一応理由は聞いておこう。」

一誠「先ず帝兄は顔も性格もイケメン、最近じゃ外国の大学の問題に手エ出すくらい頭もスゲーいいし、運動神経も駒王学園じゃ一番だし、男女問わず相談聞いているから女子以外にも男子に結構好印象だし……どう考えても俺達じゃ勝てねえよ。」

松田「あ、そうだ帝!数学の宿題貸してくれ!絶対終わらすから!」

帝「嫌だ、自分でやれ。」

松田「うう、チクショー！」

元浜「なあイツセー、本当にこれで性格イケメンなのか？」

一誠「多分お前らにだけこういう反応なんだろう。」

おーい、聞こえてますよー。

元浜「とにかく帝！ゼノヴィアちゃんには手を出していないんだな？」

帝「いやマジで出してないよ。……俺からはな……。」

ゼノヴィア「エミル。」

帝「お、おう、どうしたゼノヴィア。」

ゼノヴィア「先日はいきなりあんなことを言ってすまなかつたな。」

帝「ゼノヴィア、その話はまたあとでー」

ゼノヴィア「だから、今度はこれを用いて練習しよう。」

そう言つてゼノヴィアが取り出したのは……コンドーさんだった。

帝「……。」

松田・元浜「「な、なんだとー!？」」

アーシア「あれ？ゼノヴィアさん何を持ってらっしゃるんですか？」

ゼノヴィア「ああ、アーシアも使うといい。」

ゼノヴィアはそう言つてアーシアにコンドーさんを渡す。

アーシア「ありがとうございます……ごいませう?ところでこれってどういったものでしょうか？」

美優「アーシアさん、あれはコンドー○つて言うんだよ?」

アーシア「こんどー○……ですか?」

おい君達!?!純粹なアーシアちゃんに何やってんの!?

桐生「何々?また帝がやらかしたく?」

帝「何故に俺!?!」

アーシア「桐生さん、これどうやって使うんですか?」

あ、ちよバカ!

桐生「ごによごによごによ……。」

桐生がアーシアの耳元で何かを言うとアーシアの顔はトマトのようになつた。

一誠「おい桐生！ア－シアになんてこと教えてんだよ！」

桐生「でも帝く、いいのかなー？リアス先輩がいる手前ゼノヴィアつちを抱いちやってー。美優ちゃんも悲しむんじゃないかな〜？」

一誠「ちよつと!?俺無視ですか!？」

美優「そうだよお兄ちゃん！それに私なら何時でも襲っていいんだよ！」

……………。

帝「ハハハハハ、ミュウオモシロイジヨウダンダネ。」

引きつった笑顔を浮かべ、喋り方も片言になる。

美優「本当に……………いいんだよ……………」

帝「美優、それは倫理的にアウト！洒落にならないから!？」

松田・元浜「「こんの裏切り者めええ!!」」

帝「ぬああああ!!!お前ら一旦落ち着けえええ!!!」

ああもう、朝っぱらからこんなに疲れるとは……………。

―昼休み―

よし、旧校舎の裏側で雷切を使ってみるか。

そう思い、俺は旧校舎前に来ていた。

リアス「あら、エミルどうしたの?」

帝「ちよつとした野暮用だ。あ、会長、副会長、こんにちは。」

ソーナ「こんにちは、帝君。」

会長さんは俺にぺこりとお辞儀をし、副会長さんも続いてぺこりとお辞儀をした。

リアス「それはそうとエミル、左腕は大丈夫かしら?」

帝「ああ、白龍皇に会った時少し疼いたけど大丈夫。」

リアス「でも少し心配だし、放課後に龍の気、吸い出してあげましょうか?」

朱乃「あらあら、部長、今回は私ではありませんでしたか?」

帝「朱乃さん、今回はリアスですよ……………」

ソーナ「しかし帝君。件の白龍皇は本当に何もしてこなかったのですか?」

帝「あ、はい。どつちかというと挨拶に来た感じですよ。」

リアス「それに彼は墮天使側が首輪をつけている状態だから、下手に暴れることは無いと思うわ。……それに私達にはもつと重要なことがあるわ。」

ソーナ「……ええ、そうですね。では。」

リアス「ええ、ごきげんよう。」

帝「リアス、授業参観が嫌なのか？」

リアス「そう言うあなたも授業参観が嫌そうな感じね。」

帝「ああ、全くだ。」

俺は苦笑いして返した。

絶対なんかやらかすよ……家の親……。

帝「じゃ、リアス、朱乃さん、また後で。」

そう言つて俺は旧校舎の方へ向かった。

To be continued

授業参観、始まります！

帝 side

木下「今日の授業は、先ほど配った紙粘土で好きなものを作ってもらいます。人でも、物でも、何でもいい。ありのままの表現をしてください。そういう英会話もあります。」

そんな英会話ありませんよ!?

さて、雷切の使い心地を確かめてから数日が経った。まあ実は……雷切、折れました……。一回全力で振ったら刀身が綺麗にスポーンと抜けて近くにあった木にぶっ刺さった。今は何とかして旅の途中で仲良くなった鍛冶屋の人から教わった技術を応用して修理している。因みに今日は授業参観だ。凄く憂鬱です。

ん？何作ればいい？

木下「キ、キャスタニエ君……それは!？」

帝「……………ん？」

先生に言われて机の上を見てみると……。

何ということでしょう。何も無かった机の上にはオカルト研究部のメンバー全員の像があるではありませんか。

『おお〜!』

俺の作った像は中々の完成度らしく、クラスの人や、保護者の方々からも驚嘆の声が上がった。

木下「特にリアス・グレモリーさんの像は1番完成度が高い!」

帝「いやいや、大体皆の外見で作っただけですしリアスに至っては手が勝手に作ってたわけでは……。」

桐生「へえ〜。それってつまりさー、手が覚えてるくらいに触りまくってるってわけね。」

帝「おい桐生、そうじゃないとは言えなくもないがそういうことはあまり言わないでくれ。」

松田「帝……。」

帝「どした？松田。」

松田「朱乃さんの像、2万で買ったあああ!!!」

元浜「ならば俺は白音ちゃんの像を1万で買った!!」

「こんな野獣共には売れないわ!帝君!朱乃お姉様の像5万円!!」

「私は白音ちゃんの像を4万円!!!」

帝「おいおい、ちよつと皆落ち着け。」

誠「帝!その像全部210万でー」

帝「あんたは黙つとれい!!!」

「帝君!木場きゆんの像2万円で!!」

「リアスお姉様の像8万円だ!!!お前何時も一緒にいるからこれくらい別にいいだろ!!」

おい、最後のやつ後で屋上こい。お前にはO☆H A☆N A☆S H I ☆がある。

—————
リアス「よくできてるわね。特に私のは。」

リアスが自慢気に言った。

まあ確かに他の皆の像よりかは上手くできてる自信があるからな。

朱乃「あらあら、今度作つてもらう時には私が目の前にいるほうがよろしいかしら。もちろん、お触りだつてありですわよ?」

帝「朱乃さん、作る分にはまだいいですけどお触りはちよつと……。」

視線を逸らして渡り廊下の方を見ると、小走りしている祐斗が見えた。

帝「あ、おーい祐斗!何してんだー?」

祐斗「やあ帝君。体育館の方で魔女っ子の撮影会をしてるらしいから少し覗いてみようと思つてね。」

帝「体育館で魔女っ子の撮影会?……気になるし行ってみるか。」

—体育館—

一誠「ん?あれは!?!」

イツセーが魔女っ子を見ると、驚いた声を上げた。釣られて俺も見ると……。

なつ……あ、あれは……!!

帝・一誠「魔法少女ミルキー・スパイラル オルタナティブ7のコ

スプレじゃないか!？」

帝「あ、イツセー覚えてたのか。」

一誠「そりや嫌でも覚えるよ。あんなインパクトのあるの見せられたら。」

うん、確かにミルたんのあれはインパクトがあり過ぎた。

リアス「あら、2人共詳しいのね。」

帝「それは……聞かないでくれ……。」

多分今の俺は遠い目になってるだろう。

匙「おらおら! そのけそのけ! ここは神聖な学び舎なんだぞ!」

「チツ、生徒会かよ……。」

「折角いいのが取れそうだったのによ……。」

元士郎が現れるや否や、魔女っ子を撮影していた生徒を散らせた。

匙「貴女も貴女です。そんな格好で来られると困ります。来られるならきちんとした正装をお願いします。」

? 「えく、だってこれが私の正装なんだもん。」

匙「ですから……!」

おうおう、元士郎が困ってる困ってる。ここは助け船でも出すか。

帝「相変わらず大変そうだな、元士郎。」

匙「あ、帝! 丁度良かった、助けてくれ!」

帝「は? 何で俺なんだよ!」

匙「仕方無いだろ! 今頼れる同級生はお前くらいしか居ないんだ!」

帝「だからって俺にそれをなすりつけようとすんな!」

俺と元士郎が口論していると、リアスが口を開いた。

リアス「お久しぶりです。セラフオール・レヴィアタン様。」

え……?

セラフオール「やつほーリアスちゃん☆お久しぶりね☆」

どゆこと?

リアス「皆、紹介するわ。この方は現魔王のセラフオール・レヴィアタン様。出身はシトリーからよ。ほら、エミル、貴方も挨拶なさ

い。」

いきなり俺に降らないでって!

帝「うえっ!? え、えつと、兵士の皇 帝です。一応エミル・キヤスタニエって名前もあります。一応、今代の赤龍帝とラタトスクやります。」

セラフオルー「へえ、キミが最近話題のラタトスクちゃんだね。私はセラフオルー・レヴィアタン。レヴィアたんって呼んでね☆」

帝「は、はあ……。」

ダメだ、この人のテンションについて行けねえ!

心の中でそう叫んでいると、セラフオルー様が見定めるようにこちらをじつと見ていた。

セラフオルー「よし決めた! リアスちゃん、この子私にちようだい? 気に入っちゃった!」

リアス「なっ! そ、それはダメです! いくらセラフオルー様でもエミルだけは絶対にダメです!」

帝「セラフオルー様。貴女のお眼鏡に叶ったのは大変光栄ですが、こちらとしては我が主、リアス・グレモリーに生涯を掛けて仕えさせて頂くつもりです。申し訳ございませんが、貴女の眷属になるのは……。」

セラフオルー「ん……。仕方ないわね。今日のところは諦めてあげるわ。」

おい待て!? 今日のところはってことはまた来んのかよ!?

ガラガラガラッ!

ソーナ「サジ! 一体何の騒ぎですか!」

タイミングよく会長さんが入って来た。

セラフオルー「あ! ソーナちゃん見つけ☆」

ソーナ「うっ!? お、お姉様……。」

イツセー「帝兄、どうゆうこと?」

俺に聞くな。俺だって知らない。

帝「リアス、どうなってるんだ? セラフオルー様はシトリー出身だからソーナのご親族に当たる人だとは思うんだが。」

リアス「セラフォル様はソーナの実の姉なのよ。それに私とソーナが幼馴染ということもあって会う機会が多かったの。」

帝「へえ、そーなんだー。ってか会長、何やってるんですか？」
会長さんはいつの間にか俺の陰に隠れるように背中に回っていた。

ソーナ「み、帝君！助けて下さい！」

帝「そう言われても……。」

セラフォル「ソーたん！ここは、お姉様ー！、ソーたん！って言って抱き合う百合百合な展開があってもいいと思うの！」

ソーナ「……………」

セラフォル「ソーナちゃん何で授業参観のこと教えてくれなかったのよー！お姉ちゃん悲しくって天界に攻めこもうとしたんだから！」

ソーナ「ご自重下さいお姉様！」

セラフォル「あ、そうそう、ラタトスクちゃん、ソーたんを助けてくれたお礼として今度ソーたんの小っちゃい時の写真見せてあげるね☆」

あ、会長の顔がトマトみたいに赤くなってきた。

ソーナ「……………も、もうお姉様なんか知りません！お姉様のおたんこなす！」

そう言って会長さんは顔を手で覆いながら渡り廊下の方へ走って行った。セラフォル様も「あつ！ソーたん！待ってー！」って叫びながら走って行った。

まあなんとというか……嵐のようにきて嵐のように去っていく……。会長さん……ドンマイ！

心の中で親指を立てて会長の健闘を祈った。

サーゼクス「はっはっは。今日もシトリー家は愉快だね。リーアたん。」

リアス「もう、お兄様までたんをつけないで下さい！」

美優「今日も平和だね、お兄ちゃん。」

うーん……ここは便乗してみるか。

帝「うん、今日も平和だな、みゆたん。」

そう言いながら美優の頭を撫でた。

「……………」

リアス「……………」

帝「……………」

誠「見るジオテイクス！うちの帝が素晴らしい作品を作っているぞ！」

ジオテイクス「なら誠、こっちは料理中のリアスだ！」

もうヤダ……。何この地獄……。

授業参観が終わった後、家の父さんとお父様がばったり遭遇。何やかんやで兄様とグレイフィアさんとお父様が家に来ることになり、授業参観についての話で盛り上がり、現在に至る。

リアス「エミル、私少し休んでくるわ……。」

あ、ずりいぞ！俺も行く！

帝「待て……俺も行く……。」

上の階に上がり、自分の部屋に入ると、何故かリアスが一緒に入ってきて、そのままベッドにうつ伏せになった。

帝「……………」

リアス「……………」

沈黙が凄く辛いんだが……。

リアス「ねえエミル……。」

帝「何だ？」

リアス「私のこと……本当に好き？」

決まってるだろ、そんなもん。

帝「好き……ではないな。」

リアス「……………」

帝「好き……じゃなくって、その……何ていうんだろ……愛してるよ。」

リアス「貴方は何で私のことを好きになってくれたの？」

いつの間にか起き上がっていたリアスは俺に聞いた。

帝「何だろうな……最初は、ただ人気者だなんて思ってた。お前の眷属になって、何時しか尊敬に……。憧れに……。そして本当に何時

になったかはわからないけれど、それはいつの間にか恋に変わっていた。リアスは何で俺のことを好きになった？」

リアス「私は……最初は興味……だったかしら。少し面白い子がいるなって思った程度。でも、少し触れ合ってその興味が強くなって行って……貴方のことをもっと知ってから、それは恋になったの。」

帝「……そっか。」

リアス「エミル、私……怖い……。いつか貴方が……どこか遠いところに行ってしまうそうで……。」

帝「何バカなこと言ってるんだ。俺はお前のもので、お前は俺のもの……。お前の前から消えないとは断言できない。……。でも、俺はお前の前からは消えたくはない……。」

リアス「でも、貴方が本当に私達のせいで消えてしまったら――！」

帝「……んっ……。」

リアスが言い終わる前に、その口を口で防いだ。

帝「それ以上は何も言うな。もしお前らを守って死んだとしても、俺にとつちや本望だ。それに俺には隠し玉がまだまだあるんだ。そう簡単に死にはしないよ。」

強がりな嘘を吐いた。もう隠し玉なんて数えるほどしかないのに……。でも、リアスには泣いて欲しくない。だから俺は優しくリアスに微笑んだ。それに、いざとなれば覇の力使ってでも、こいつらを守ってみせる。それが、また同じ過ちを繰り返さないように……。もう二度と、大切な人たちを死なせないために……！

リアス「ねえ……さっきの続き……して？」

帝「ああ、いいぞ。何度だってしてやるよ。」

俺とリアスの唇が近づく。そしてそのまま……

サーゼクス「おやおや、随分と励んでいるようだね。」

リアス「お、お兄様!？」

帝「のわっ!？」

……キスすることは叶わず、兄様の介入で阻まれてしまった。リアスは酷く赤面し、俺は困惑した表情を浮かべた。

サーゼクス「すまないね。少しリアスに大事な話があってきたん

だ。」

リアス「大事な話……ですか？」

リアスの顔は急に真面目になった。……まだ少し顔は赤いが。

サーゼクス「ああ。もう1人の僧侶についてだ。」

リアス「あの子に何か問題でも？」

もう1人の僧侶？

サーゼクス「いや違う。ここ最近でのリアスの働きが評価されてね。つい先日、解禁の許可が降りた。明日、その子の元へ行つてあげるといい。」

リアス「了解致しました。」

俺は2人の話についていけず、ただただ混乱するばかりだった。

To be continued

男の娘な後輩、できました！

帝 side

現在、俺たちオカ研メンバーは、KEEP OUT!と書かれたテープを張り巡らせた部屋の前にいた。

帝「いかにも何か封印してますって感じだな。」

リアス「深夜は旧校舎限定で出歩いてもいいと言っているのだけど、中にいる子はそれを拒否してるのよ。」

一誠「それって簡単に言えば引きこもり……っすよね。」

木場「でも実はその子が1番の稼ぎ頭だったりするんだ。」

一誠「木場、それマジで言ってるのか？」

木場「マジのマジで大マジだよ。パソコンを使って契約をしているから、契約主も顔を隠して契約できるから結構安心できるらしいんだ。」

パリンツ

イツセーと祐斗が話をしているうちに、リアスはテープやチェーンに魔力を込め、封印を解いた。

リアス「さあ、開けるわよ。」

ギギギギギツ

扉が軋むような音を立てて開く。そしてその中で俺達を待ち受けていたのは……

? 「ひやあああああああつつつつつつ」

甲高い悲鳴と停止した世界だった。

!!!!!!?????

—————

帝「……あいつら大丈夫かな……?」

現在、俺はリアス、朱乃さん、祐斗と共に三大勢力会談の打ち合わせにある館へ訪れていた。なんでも、兄様以外にミカエルさんも来ていて、俺に話があるとかで俺は連れてこられた。

あ、そうそう。あの悲鳴の主は、金髪赤目の美少女……に見える女装をした、所謂男の娘のハーフヴァンパイア、ギャスパー・ヴラデイという名のやつだ。なんとギャスパーは神器、へ停止世界の邪眼

(フォービトウン・バロール・ビュー)の所有者らしい。だが、ギヤスパーは興奮すると無差別に神器を発動させ、リアスの手に余る力を持つために兄様ー魔王サーゼクス・ルシファアの名の下に、封印の命を下されていた。その証拠に俺らがギヤスパーの部屋に入った時に、ギヤスパーはいきなりでびっくりして神器を発動させた……ということをリアスから聞いた。どうやら自分より実力が格上の者には神器は効かないらしい。だから俺と美優とマルタはあそこでも動けたわけだ。そして今は、ここにいるメンバー以外のやつらがギヤスパーを鍛えている……が心配だ。

リアス「き、きつとイツセイ達なら上手くやってくれる筈よ。」

帝「そ、そうだよなーきつとあいつらならギヤスパーを立派に鍛えてくれるよな！絶対！……きつと……多分………maybe………」

うわあああ………不安しか残らねえ！絶対トラブル発生させるよ！

そうこうしている間にある一室の前に。

コンコン

サーゼクス「入りたまえ。」

中から兄様の声がした。ということはこちらが三大勢力会談の打ち合わせ場所……。

ガチャツ

リアス「失礼します。」

朱乃「失礼致しますわ。」

木場「失礼致します。」

帝「お邪魔します。」

リアスをはじめ、次々と中へと入る。目に入るのは少し大きめの丸テーブルと恐らく俺達が座るであろう4つの空いた席。そして俺達の真正面で面と向かって顔を合わせているのは兄様とミカエルさんだ。

帝「ツ!？」

突然、俺の左腕が疼き出した。これは厨二病的表現じゃない。繰り

返す。これは厨二病的表現じゃない。

ミカエル「どうぞ、その席におかけください。」

ミカエルさんが前の4つの席を指差した。そして入ってきた順に席へと座る。

サーゼクス「さて、今回は三大勢力会談の打ち合わせ……と先に言いたいところだが、帝君、先ずはミカエルから君への話だ。」

ミカエル「お久しぶりですね、帝君。」

帝「ええ、ご無沙汰です。ミカエルさん。」

ミカエル「さて、お話というのは……」

帝君、貴方には是非、神の座についていただきたい。」

リアス・朱乃・木場「!!!」

ミカエル「……と言いたいところですが、今の貴方は勇者の一族、もとい人間側の代表として三大勢力会談に出席していただくのですから、そんなことは勿論しません。ですが代わりに聞きたいことが。」

帝「な、なんでしょう?」

笑顔で俺は答えるが、俺は左腕の疼きを抑えるので精一杯だ。何故かへ終の聖剣「理想郷」が出そうになっているので、それを必死に抑えている。

ミカエル「貴方は、お持ちの武具で他に隠しているものがあるのでは?」

帝「……理由を聞いても?」

俺がそう聞くと、ミカエルさんは一振りの剣を丸テーブルの上に置いた???

ツ!!この感じ、まさか!!???

ミカエル「この剣は〈始まりの聖剣 楽園（エクスカリバー・オリジン エデン）〉。天界が保管している私が見た聖剣の中ではトツプク拉斯の力を持つ剣です。あまりに強力なため、というのを口実に、真の目的たる〈終の聖剣 理想郷〉の所有者にこれを渡すということでもいつも持ち歩いて探していました。つい先日、誠が貴方を紹介してくれた時、この剣が貴方に反応しているのを感じ取りました。本来、この剣は〈終の聖剣 理想郷〉にしか反応を示しませんがこの剣は貴方に反応した。つまり貴方自身こそが〈終の聖剣 理想郷〉の所有者ではないのかと。」

帝「……お見事です、ミカエルさん。その通り、俺は『創世の四神伝説』に登場する、始りと終を司る神が所持していた内の片方の剣、〈終の聖剣 理想郷〉の所有者です。」

ミカエル「やはりそうでしたか……。」

リアス「エミル?その、創世の『四神伝説』って何かしら?」

ん?リアスは知らないのか?

帝「えーつと、『創世の四神伝説』ってのは、この世界のありとあらゆるものを創造した4人の神の物語ってことだ。皆名は無いが、それぞれ司るものが異なっている。先ず、始りと終を司る神、生と死を司る神、天と地を司る神、次元と時間を司る神。そしてそれぞれの神は二振りずつ剣を持っていて、そのうち、ここにある〈始まりの聖剣 楽園〉と、〈終の聖剣 理想郷〉が、始りと終を司る神が所持していた剣だ。」

朱乃「ですが、名前に合った能力が無い気がするのですが?」

帝「はい、何せ俺はこの剣は未だ俺を認めてくれていないんです。」

木場「認めていない?」

帝「ああ、この剣は認めた者にしか本当の力を貸さない。つまり俺はまだこいつに認めてもらってないのさ。」

何故力を貸さないか。それは俺でも分からない。ま、それが分かっ

てるなら苦労しないがな。

ミカエル「何はともあれ、〈終の聖剣 理想郷〉の所有者が見つかったよかったです。帝君、この剣は貴方へ。この間のお礼です。」

帝「……？ああ、はいはいはい、俺が御使いの人に神淵剣と神剣を渡したあれですね。」

ミカエル「はい。是非この剣を魔王のため、ひいては三大勢力のためにお使いください。」

サーゼクス「さて、次は私たちだね。」

兄様とリアスと朱乃さんが話をどんどん進めていく。

ピリリリリッ！

そんな中、いきなり俺のケータイが鳴った。

帝「もしもし。美優どうした？」

美優「お兄ちゃん大変だよ！ギヤスパ―君がまた引きこもっちゃった！」

帝「あ？？」

帝 side out

一誠 side

ギヤスパ―が引きこもって、だいぶ時間が経った。ギヤスパ―が引きこもり始めると、みゆ姉は帝兄にすぐ連絡をかけてくれ、帝兄もすぐ来てくれた。

帝「おいギヤスパ―、そろそろ出てこいよ。」

ギヤスパ―「い、嫌ですうううー！！！！」

こんなやりとりが何回目か分からないが、依然状況が変わらない。

ギヤスパ―「もう僕の大切な人達か止まっているところを見るのは嫌なんです！」

と思っただが、どうやら少しは状況が動いたようだ。

ギヤスパ―「僕は自分のこの力が怖いです……。帝先輩だって自分の力が怖いとは思わなかったんですか？」

帝「自分の力が怖い……。ねえ……。俺はそんなことは一度もなかった。」

ギヤスパ―「自分の力が怖くないんですか？」

帝「ああ、自分の力が怖くない。寧ろ、大切な人を守る為に必死になつて使つていたから、そんなことを考える余裕はなかった。」

ギヤスパ―「どうして……ですか？」

帝「……俺は大切な人を3人……この手で殺した……。次にできた大切な人も、結局俺が不甲斐ないばかりに死んでしまつて、俺が見殺しにした。だからかな……俺は大切な人や仲間に出す奴には一切の情をまかけなかった。仲間を絶対に守り切つてみせる……なんて焦りに近い感情で戦つてきたから、そんなことを一切考えなかつた……としか言えないな。」

そうだ、前にもコカビエルは言つていた。一度友を殺し、一度人々を見殺しにし、それでもなお貴様は人を求めるか、と。帝兄には直接的には聞いていない。いや、聞けなかつた。コカビエルがそれを言つた途端、帝兄からは大量の殺気が感じられた。俺達が聞けば、帝兄はまた同じ感じになるのか、と。みんなはそこに触れないように、必死に平静を装つていた。でも、本当は帝兄にそのことを聞きたかつたはず。でも触れてはいけなないと自分で抑えている。だから俺達はどうするべきか分からない。

ギヤスパ―「どうして……どうしてそんなことがあつたのに、帝先輩は平然としていられるんですか？」

帝「これが平然……か。側から見ればそうかもしれない。でも、これはただ……ただ……ただ過去から逃げているだけだ。」

どんどん空気が重くなつていく。

この空気をどうにかしないと！

一誠「そ、それにギヤスパ―、俺はお前が羨ましいぞ！」
ギヤスパ―「な、なんでですか？」

一誠「決まつてんだろ！時間を止めれるとはそれすなわち！時間が止まつている間は女の子の身体を触りたい放題じゃないか！」

帝「つはあ……お前マジで馬鹿だよな。」

帝兄は溜息をつくつと、呆れた表情でこちらを見ていた。

ギヤスパ―「す、凄いです！僕の力を褒めたと思つたらそんな煩惱の為に使うなんて！」

一誠「な、なんか腑に落ちないなあ。」

木場「お、やってるみたいだね。」

一誠「おお、木場！丁度いい！俺が考えたオカ研男子メンバーの連携作戦を聞いてくれ！」

木場「面白そうだね。是非聞かせてよ。」

一誠「ああ聞かせてやるとも！先ずギヤスパーが時間を停止させ……。」

木場「うんうん。」

一誠「俺が止まってる女の子の身体を触りまくる！」

帝「……は？」

一誠「その間木場と帝兄は迫り来る敵から俺を守ってくれ！」

帝「これはまた……酷すぎる……。」

木場「この作戦ってイツセー君しか得しないよね。」

一誠「い、いいじゃねえか！帝兄は既にリア姉と付き合ってるわけだし木場だって女子にモテるからんなこと気にしねえでもいいだろ！」

木場「そんなことないよ。実際、僕も人並みには性欲があるんだし。」

一誠「ぐぬぬぬ……！そこまで言うならば！第一回、オカ研男子メンバー猥談会！最初のテーマは自分が女の子に外見的な魅力を感じる所！先ず俺はおっぱいだね！」

木場「僕は足かな？」

一誠「ほ、ほう。何故だ？」

木場「女性の鍛え上げられた健康的な足には凄く魅力を感じるんだ。」

一誠「ギ、ギヤスパーは？」

ギヤスパー「ぼ、僕は鎖骨のラインとか肩とかです。」

一誠「へえ、結構マニアックな所だな。」

ギヤスパー「だ、だってしょうがないじゃないですか！鎖骨なんて実際あまり目にもすることも無いし、逆に見れたらドキツとするじゃ無いですか！」

木場「うん、確かにギヤスパ―君の言葉は一理あるね。」

一誠「い、意外と皆性欲がー」

帝「おい待て、俺は無視か。」

一誠「だって帝兄性欲なさそうだし。」

帝「阿保か。俺だって人間であり悪魔だ。性欲がないとは限ら
ぞ。」

一誠「じ、じゃあ聞くけど帝兄はどこがいいんだ？」

帝「うーん……やはり女性の胸かな。」

一誠・木場・ギヤスパ―「え!!??」

帝「女性の胸とは母性の象徴であり、そこをつい気にしてしまうの
も無理はない、と俺は思う。」

驚いた。まさか帝兄にも性欲があつたなんて。

まあそんなこんなで俺は案外と猥談会が賑やかだったこともあつ
て楽しかった。それと今日の発見。

木場も帝兄もかなり変態だった!!!!

To be continued

兄と妹、恋人（仮）へ

帝 side

あー今日は何もない……。何の変哲もない土曜日。今日は珍しくオカ研の活動がないからリアスと一日中話しようと思ってたけどリアスは朱乃さんと買い物、白音とイツセーはギヤスパーのとこだし、アーシアとゼノヴィアとマルタはどっかに出かけてる、父さんは仕事だし母さんは最近始めたパートの仕事でいないし。家にいるのは俺と美優だけ。

つつか最近美優と寝てる時限定で朝起きたら身体中ベタベタなのは何故だ？しかも上半身裸だし隣を見れば例の如く美優は全裸だし……。取り敢えず腹減つたし昼飯作るか。

帝「おーい美優ー。起きろー。」

ソフアーの上でぐっすりと寝ている美優をゆさゆさとゆする。

美優「ん……。んんう……。あ……。やあ……。お兄ちゃん……。そこお……。舐めないでえ……。」

帝「……。……。……。美優起きろー。」

……。今のは幻聴だ。うん、絶対。

美優「ううん……。あれ？お兄ちゃん？」

帝「おはよ、美優。昼飯作るからしっかり起きとけよ。」

えーつと、作るのはごはんと味噌汁と出し巻き卵、あとは適当にハムサラダでいいか。

美優「ねえお兄ちゃん。」

帝「どうした美優？」

美優「今日って私とお兄ちゃんの2人きり？」

帝「ああ。父さん以外は夕方に帰ってくると思うぞ。」

美優「ふーん、そうなんだ。」

料理中の何気ない会話。

帝「なあ美優、この後なんか予定とかあつたりするか？」

美優「ううん。予定は特にないよ？」

帝「じゃあ後で俺の部屋で映画見るか？返却日明日だし。」

美優「うん見るー。」

帝「わかった。飯食つたら俺の部屋で見たい映画選んどいてDVDプレイヤーに入れといてくれ。映画入れてる袋はベッドの隣にあつたはずだから。あい、お待ちどうさん。」

テーブルの上に美優の分の昼飯と箸を置き、昨日の残り物の鮭の西京焼きを冷蔵庫から取り出して電子レンジに入れ、温め開始ボタンを押し、待ち時間に自分の分も用意する。

あー、マジで雷切どうしよ……。何回やつても失敗するからヤケクソで瞬間接着剤つけたらくつついたし……。もういいや。いつその事雷切を使わなければいいんだ……。

チーン

バカなことを思い出し、考えていると、鮭の西京焼きが温まったことを知らせる電子レンジ特有の電子音が聞こえた。

帝「さて、いただきますーす。」

美優「いただきますーす。」

その言葉を合図に、俺と美優は食事を開始した。

食事も終わり、片付けも終わったので俺は自分の部屋に向かった。帝「美優ー、見たい映画選んだ……。か……。か……。」

ドアを開けると、目に入ったのは俺が隠していたアレな本を、顔を赤く紅潮させながらまじまじと見ていた美優の姿だった。

美優「……。／／つてお兄ちゃん!?!い、何時からいたの!?!」

帝「えつと、さつきから……。だけど……。」

美優「……。／／／」

帝「……。」

沈黙が辛い……。あれ?この雰囲気既に既視感が……。

帝「……。……。と、取り敢えず映画……。見よつか。」

美優「う、うん……。／／／」

今見ているのはホラー系の映画だ。しかも日本系の。俺はホラー映画には耐性があるが日本系のはからつきし無理な自信がある。何

故かつて？

「……………ああああああ!!!」

帝「うへえっ!?」

美優「きやつ!?」

……こういういきなりふつとくるのが無理なのだ。まあ美優も苦手なようで、内心ホツとしているのは内緒だ。だがな……

帝「み、美優……近すぎだ……。」

美優「だつて怖いもん〜!」

美優がくつついてくるせいでメチャクチャドキドキすんだよ! あばばばば! やめろ! 強く抱きつくなああああ!!! 胸がああああ! 柔らかい感触がああああ!! 胸が形が変わるくらいに押し潰されて非常に眼福です!! って俺は何言ってるんだああああああ!!!

美優「お兄ちゃん? 顔赤いよ?」

帝「え!? うわ、ホントだ……。」

美優に指摘されて顔を触ると、触れた場所が熱く感じた。

美優「?……ああ、そういうこと。」

美優が何かに納得した素振りを見ると、

美優「お兄ちゃん、今ちよつとエツチなこと考えてたでしょ。」

帝「にやつ!? にや、にやにを言つてりゆのかにや!」

あうう、動揺しすぎてメチャクチャ噛んだ……／／／

美優「もう……んっ……。」

帝「んんうっ!?／／」

いきなり美優がキスをしてきた。

美優「隠さないで素直に言つて? そしたら、して欲しいこと、なんでもしてあげるよ?」

妖美な微笑みで美優はそう言う。

美優「んっ……ちゅ……ちゅぷ……んちゅ……ぷあ……んむ……。」

今度はキスだけでは飽き足りないのか、口の中まで侵食してきた。

帝「うっ……美優、そういう冗談はやめろ……!」

美優「冗談じゃない。これは私がお兄ちゃんに対する本当の気持ち

だよ。私はお兄ちゃんのことを異性として好き。」

帝「っ!?!……………つすう……………」

まさか、そんなことを言われるとは思っていなかった。美優のことは多少女の子としては見ていた。でも俺にとつては美優は可愛い妹止まり。後にも先にもそう思う以外ないだろうと思っていた。美優が幸せに生きてくれるなら俺は美優が誰を選んでも構わないと思っている。勿論今でもそうだ。でも美優は俺を選んだ。正直、俺のことは選んでほしくなかった。俺は1人しか愛せる自信がない。2人となればどちらも均等に愛することができない。

帝「……………本当に俺でいいのか?」

美優「お兄ちゃん以外に選ぶなんてできない。」

帝「俺と美優は兄妹だぞ?」

美優「そんなの関係ないよ。それに私とお兄ちゃんは義理の兄妹だよ?勿論合法的に付き合うことだって可能だよ?」

帝「俺は1人しか愛することができないぞ?」

美優「ならその1人が私になればいいじゃない。」

帝「俺はリアスしか見ていない。リアスしか愛していない。それでもか?」

美優「それでも。私はずっとお兄ちゃんだけを見て愛したい。お兄ちゃんにずっと私だけを見て愛してほしい。」

帝「俺は大切な人を3人殺し、大切な人達を見殺しにした。美優、お前だって殺してしまうかもー」

美優「そんなの関係ないよ。過去なんて関係ない。私はお兄ちゃんを、皇 帝だけをずっと愛するつて、昔に決めたんだから。それに愛する人の隣で、傍で死ぬるなら本望だよ。」

帝「……………はあ

……………まあ、前向きに

検討はしてみるよ。ただ、偏愛的になるかもしれないぞ?」

美優「大丈夫だよ。お兄ちゃんに愛してもらえるだけで私は幸せだから。」

帝「リアスにどう説明しよ……………」

美優「私も一緒に説得してみせるよ。そんなことより、今は私だけを見て？」

帝「はいはい。ったく。」

胸元にもたれかかる美優を、今はただ抱いてやるぐらいしか俺にはできなかつた。

ラタ「この甲斐性なしが。」

耳に痛いです……。

To be continued.

もう許してえ!!! by 帝

帝 side

帝「あのお……スンマセン……マジでスンマセン……。」

リアス「……………」

もうヤダア！リアスが凄く怖い！軽はずみにあんなこと言うんじゃないかった！

さて、今日は日曜。三大勢力会談もとい四大勢力会談は明後日となったわけだ。そして今は昨日結局あのまま寝てしまったので、リアスに説明できなかったのでついさっき昨日のことをリアスに話した。ま、予想通りの結果となったわけだが……

リアス「……………」

はい、リアスさんが凄く怖いです。

俺は本気で許して欲しくて土下座をしている。綺麗な土下座だ。オカ研メンバー最強と呼ばれている俺だが、最強のさの字も見えない程に威厳がない。そう断言できる。

リアス「……………はあ、仕方ないわね。」

帝「ふあつ？」

リアス「事実、貴方に気を寄せる娘は他にもいっぱいいるわ。貴方はあの娘達にとって英雄みたいなものだし。英雄色を好むと言うじゃない？不本意だけれど、私は貴方がハーレムを作れることを許可しようと思うのだけれど……しっかりと私を愛してくれるか心配だわ……………」

帝「……………俺はリアスと付き合った時からリアスだけは絶対にずっと愛し続けるって決めたんだが……………」

リアス「えっ？／／／」

俺はガバツと立ち上がり、リアスの肩を掴み、顔を近づけた。

帝「さつきも言ったが俺はリアスだけは絶対にずっと愛し続ける。今も、そしてこれからだ。例えば何があるうと……な？」

おぶえええ！カッコつけてみたけどやっぱカッコつけないほうがいい。うん、そうしたほうがいい。

リアス「本当に？」

帝「本当だよ。信用してくれるなら何だってするよ。」

リアス「えつと、なら……んっ!？」

帝「んむ……………」

ヤベエ、これ自分の欲求満たしてるようにしか見えねえ……。

帝「ぷは……これでよかったか？」

ねえちよつと!ただの自意識過剰の自己中ヤローだよね!俺!

リアス「う、うん。でも、私はもう少し先もしたい……かな……」

／＼

もう調子に乗るのはやめとこう。後が怖い。

リアスは顔をどんどん近づけてくるが……

リアス「……………んむっ。」

帝「……残念だけど、ここから先はお預けな。」

俺はリアスの唇と自分の唇を一本指で隔てた。

リアスの顔がしゅんとなった気がするが気のせい気のせい。

帝「で、リアス、許してくれる……かな？」

リアス「ええ、許すわ。しっかりと愛してくれるって証拠がとれた

もの。」

帝「……ありがとな。」

女神や……!ここに女神様がおる……!

リアス「そう言えばエミル、朱乃が貴方に用があるって言ってたわ

よ。」

帝「……………俺また何かやった!？」

リアス「いいえ、違うわ。自分自身のことを貴方に打ち明けたいそ

うなの。イツセーも呼ばれているはずだから、一緒についてらっしや

い。」

帝「お、おう。」

うん、アレなんだけど。今日は一日中リアスの傍に居ようと思って

た矢先にそう言われるとなんかアレなんだけど。

……………

帝「大丈夫かーイツセー。へばってねえだろうなあー?」

一誠「帝兄こそ前見て歩かねえと危ねえぞ?」

帝「大丈夫大丈夫へぶっ!」

一誠「ほれ、言わんこっちゃやない。」

痛え……顔から入ったし……調子乗ると痛い目見るって本当だったんだな。つか脛も痛い。まあ踊り場だったただけまだマシだが。

朱乃「あらあら、大丈夫ですか?帝君。」

一誠「ふあっ!」

帝「ご、ご心配なく。」

気配を消して近づいて来ていた朱乃さん。イツセーは驚き、俺も多少驚きながら朱乃さんに返事をした。

帝「おー痛い痛い。」

そう呟き、服に付いた砂埃をパンパンと手で叩く。

帝「えつと、こんにちは、朱乃さん。」

朱乃「はい、こんにちは、帝君。」

よく朱乃さんを見ると、巫女服を着ていた。しかもスゲー似合ってる。

一誠「?朱乃さん、ここ神社ですけど、悪魔の俺達が入っても大丈夫なんですか?」

朱乃「大丈夫ですわ。ここは特別な施しをした神社なので、私達悪魔が入っても全く問題はありませんわ。」

……にしてはさつきから肌がピリピリするな……。おまけにこの先には結構デカイ気配がある。感じからしてミカエルさんか……?

朱乃「帝君はあちらの部屋でお待ちになってください。イツセー君は私の後をつけてください。」

階段を登り、鳥居を潜ると、朱乃さんは神社の本殿の右側の部屋を指し、そこで待機してほしいと言った。

一体何があるんだ……?

~~~~~  
俺は待っている間、暇だったので所持する武器の点検をしていた。

朱乃「綺麗な刃ですね……。」

帝「そうですね。鬼神刀なんて名が似合わない程に……。」

いつの間にかいた朱乃さんにそう返す。

朱乃「粗茶です。」

帝「ありがとうございます。」

暫くの間、静寂が続く。

だからこういうの苦手なんだってば！

朱乃「帝君、墮天使について……どう思います……？」

帝「あー……墮天使か……。」

墮天使には正直いいイメージはない。レイナーレ然り、コカビエル然りだ。それこそ、正に欲に堕ちた天使。自分の欲求を満たすために生き、他の者の命などどうとも思わない。正直なところ最悪な奴らつとところだ。……何処ぞの独身総督を除いて……。

帝「朱乃さん、素直に言ってください。朱乃さんがどんな血を継いでいるか、俺知ってますから。」

朱乃「ッ！いい、いつから……気づいていたのですか……？」

帝「再会した時から……です。抑えていたつもりでしょうけど墮天使特有のオーラを微弱ながら感じましてね。」

朱乃「……やっぱり貴方に隠し事はできませんわね……。」  
バサアツ！

朱乃さんは俺に背を向け、服をはだけさせると、背中から、悪魔の翼。そして鳥のように真っ黒な墮天使の翼が朱乃さんの背中から生えていた。

朱乃「私は最低な女です……。この忌々しい血でのせいで貴方に嫌われたくないから、貴方に必要以上のスキンシップをとった。そんな私には、この薄汚れた翼がお似合いです……。」

帝「……。」

朱乃「……やっぱり、私のこと、嫌いになりました……よね……。」

帝「……そんなわけない……。」

朱乃「え……？」

帝「そんなわけないじゃないですか。朱乃さんは朱乃さんだ。俺達オカルト研究部の副部長で、いつも優しく、いつも笑顔の、俺達の大好きな朱乃さんだ。それに……。」

朱乃「それに……?」

帝「俺が友を殺したと知っても、変わらず俺に接してくれた……。少なくとも俺は朱乃さんのこと、(仲間として)好きですよ。」

朱乃「……そんなこと言われたら、本気になっちゃうじゃない……。」

帝「え?それってどういうってどわあっ!?!」

何を思ったのか、朱乃さんは俺を押し倒してきた!

朱乃「ねえ帝君……。」

帝「なんですか?」

朱乃「今みたいに2人きりのとき、私のこと、朱乃って呼んで……?」

帝「いや、そんな、朱乃さんに恐れ多いことできませんよ!」

帝「タメ口で喋っていたいただいても構いませんから……。ね……?お願い……。」

帝「はあ……。朱乃……。」

朱乃「嬉しい!」

帝「だあっ!?!」

あっちよっ!この体勢で抱きつかないでえええ!!朱乃さんの胸があああっ!!!足がああああ!!!にやあああああ!!!!!!

朱乃「ねえ帝君。」

帝「……今度は何?」

朱乃「私を帝君の3番目にしてくれませんか?」

帝「……。今度は何言ってるんですか……。」

朱乃「3番目……いいポジションだと思いませんか?帝君の両隣はリアスと美優ちゃんて埋まっています。でも、帝君のことは諦めきれませんし……。」

いいポジションだとは思いません。今ただでさえ節操も甲斐性もないのにそういうの言われるとマジでダメです。

朱乃「それに私、年頃の男の子の性欲がどんなものか気になりますの。肉欲のままに体を貪られるってどんな感覚なのかしら……?」  
恍惚とした表情で言う朱乃さん。



やめて！食べないで！食べても美味しくないから！

朱乃「ね？帝君。私を貴方だけの女に……。」

朱乃さんの手は吸い込まれるように俺の下半身に伸びてゆく。そして朱乃さんの手は俺の下半身に……

リアス「朱乃、何してるのかしら？」

触れることはなく、青筋を立てたリアスによって中断された。

朱乃「あらあら、うふふ。帝君、今日はここまで。でもいつから必ず、貴方だけの女にしてくださいね？リアス、私本気になっちゃいました。いつか貴方の位置を私のものにしてみせますわ。」

リアス「やれるものならやってみなさい。ことごとく返り討ちにしておあげるわ……！」

もうヤダ……女の子コワイ……。

—翌日—

俺は現在、ギンヌンガ・ガツプのニブル Heim へと続く門——ラタトスクの間に訪れている。つまりそう、ここは魔界。人と魔物が共存共栄し合う世界だ。魔界と呼ぶのはそういう意味があるからだ。

？「ふむ、久しい顔と思えばラタトスクではないか。」

帝「ああ、本当に久しいな。凶王ネザートレイト。」

俺の目の前にいる、ボロいズボンだけを着た白髪的美青年は、凶王ネザートレイト。嘗て俺が愛用していたネザートレイターの製作者

だ。

ネザートレイト(下記ネザー)「して、ラタトスクよ。今日は何用で私の元へ参った。いや、そもそもここに居座る私の言うことではなきことだが。」

帝「いや何、今日はこいつらを鍛えて欲しくてね。」

そう言つて俺はロングソードとダークソードを引き抜く。

ネザー「ふむ、それ相応の素材が必要となるが?」

帝「素材なら用意している。」

そして俺が取り出したのはダマスカス、ミスリル、そしてオリハルコンだ。

ネザー「ぬ、惜しげもなく使うのだな。特に伝説と言われる鉱石であるオリハルコンをそれほど使うとは……。」

帝「大丈夫だ。エレメンタルの破片なら山ほどある。」

ネザー「そういう問題ではないのだが……まあよい。お主の期待に応えよう。」

帝「そうしてくれ。それと、完成したらこいつに向かつてぶん投げてくれ。」

懐から2枚の紙を取り出してネザートレイトに渡す。

帝「そいつの転移先はそいつらの鞆だ。丁寧にぶん投げてくれ。」

ネザー「無茶苦茶な内容ではあるが……心得た。完成し次第そちらに送ろう。」

帝「すまないな。」

ネザー「いや、ここに居座らせていただいてる礼だと思つてくれればいい。それに私はお主の専属鍛冶士である。雇い主の期待に応えるのが専属鍛冶士としての役目であろう?」

帝「ははは、頼もしい専属鍛冶士を雇ったな、俺は。」

さあ、明日は大事な会談だ。失敗は必ず許されない。心してかかるう。

そう思い、俺はラタトスクの間を後にした。

To be continued.

## トップ会談、始まります！

帝 side

緊張感が張り詰めた一室。ここ、駒王学園の会議室にて、今日、4つの勢力の命運がかかった会議が行われることとなった。

帝「さて、これで参加者は全員揃ったか。」

悪魔側の参加者は、サーゼクス・ルシファー、セラフォル・レヴィアタン、リアス率いるグレモリー眷属、ソーナ会長率いるシトリイ眷属。天使側の参加者は、天使長ミカエル、そして紫藤 イリナ。墮天使側の参加者は、墮天使総督のアザゼル、白龍皇のヴァーリ。そして我が人間側の参加者は俺、皇 帝。……そう、俺だけなのだ……。悲しくない……。悲しくなんてない……。

サーゼクス「まず、この会議は聖書の神が不在と認知している上で行われる。勿論、参加者も含めだ。」

誰も声を出さない。この場合の沈黙は了解と見て良いだろう。

サーゼクス「では、会議を始める。」

その言葉を始めに、会議が始まった。

—————

リアス「……以上が、私、リアス・グレモリーと、その眷属が関与した事件です。」

サーゼクス「ご苦労、下がって結構。」

帝「さて、アザゼル殿。リアス・グレモリーの報告について、墮天使側の意見を聞きたい。」

俺の言葉に、この室内にいる人皆がアザゼル殿を注目する。

アザゼル「その件については、俺ら墮天使中枢組織へ神の子を見張る者への幹部、コカビエルが単独で起こしたものだ。やつの処理は、〈龍神帝王〉と、後からきた〈白龍皇〉が行った。とは言っても、コカビエルは〈龍神帝王〉によって、見るも無惨な姿になっていたがな。その辺りの説明は、この前送った資料に詳しく書いていただろ？それで全部だ。」

悪かったね！そんな時は俺もどうにかしてたの！

ミカエル「説明としては最低の部類ですね。しかし、あなた自身は我々と面倒な事を起こしたくないのは知っています。本当にそうなのでしょうか？」

アザゼル「ああ、本当だ。俺はコカビエルみたいな戦争狂じゃない。寧ろ興味がない。」

アザゼル殿がきつぱりと断言した。

アザゼル「まどろっこしいな。面倒くさい話はやめだ。とっとと和平でも結ぼうじゃねえか。もともとお前らもそのつもりだったんだろう？」

全員「っ!？」

皆が驚いていた。ま、普段真面目に謝ったりしないからな、この人。そんな反応されても無理はない。

ミカエル「ええ、そうですね。原因となった神と魔王はいなくなつたのですから。」

ミカエル殿の言葉に、アーシア、ゼノヴィア、イリナは表情を曇らせる。

サーゼクス「アザゼルの言う通り、我々の本来の目的は和平を結ぶ事であるからな。」

帝「俺も、その意見に賛成しよう。とは言っても、少し条件を出してしまうがな。」

そう言うと、今度は皆俺を見た。

やめろ！皆一斉に見んな！緊張すんだらうが！

アザゼル「そりゃ、どういう事だ？」

帝「まあ聞け。まず、悪魔側に出す条件だ。人間を無闇矢鱈に悪魔へと転生させないで欲しい。身勝手な悪魔が神器持ちの人間を無理矢理転生悪魔にしている事が、俺の陣営の中で長く問題視されてきていたからな。そして2つ、他の種族に継り付かなければ文明を築き続ける事が出来ないくせに転生悪魔を罵るな。」

俺の条件を聞き、サーゼクス殿がうつとこのような表情になった。

帝「そして墮天使側に出す条件。自分達の脅威になるかもしれないというだけで人間を殺すな。また、神器を抜き取ろうとする事も同様

だ。実際、俺とアーシア・アルジェントは被害を被りかけた。」  
続いてアザゼル殿もうつというような表情になった。

ミカエル「わ、私達には何もありませんか?」

帝「ああ、何しろ俺らにしか使えない物を作って貰っていたんだ。それに、ミカエル殿の陣営は唯一人間に実質的な被害を出していない。それでお二方、条件を呑むか?」

サーゼクス「ああ、これで和平を結べるなら安いものだ。早速冥界に帰ったら、喚起するようにしよう。」

アザゼル「右に同じくだ。」

よし、これで人への被害は今できる範囲ならば最大に抑えた。後ははぐれ悪魔による被害だな。

アザゼル「和平を結ぶ前に、俺達四竦みの外に居ながら、世界を動かせる力を持つ、〈赤龍帝〉、〈白龍皇〉、そして〈龍神帝王〉。お前らの意見を聞きたい。まずヴァーリ、お前の考えは?」

ヴァーリ「俺は強いやつと戦えればそれでいいさ。」

典型的なバトルジャンキーの言葉だな。和平については興味なしってところか。

アザゼル「なら皇 一誠、お前さんはどうしたい?」

アザゼル殿はイツセーに問う。

一誠「俺は……俺は……和平に賛成します。だって、俺はまたこのメンバーで戦争とかってなったら、もしかしたら、帝兄やみゆ姉、白音に、父さんや母さんや、他にも、俺の大切な人が死ぬかもしれないんです。もう俺は大切な人や家族を失いたくありません。これが、俺の理由です。」

イツセー……そこまで考えてたのか……。なんつーか、嬉しくて少し泣きそうになったじゃねえかよ。

アザゼル「成る程ね。じゃ、最後に帝、お前の考えはどうだったものだ?」

帝「勿論賛成だ。もしかた戦争とかなつちまえば、俺は大切な人を失ってしまうかもしれない。俺はそれが怖いんだ。何も考えず、命を奪う事よりも……。それに、また戦争起こしたら、今度こそあんな

ら三竦みの勢力は消えてなくなる。あんたらのことも自分のことも考えれば、和平を結ぶ以外の選択肢は出てこない。」

ミカエル「さて、話が十分纏まってきたところで、私もなすべき事をなさなければいけませんね。アーシア・アルジエント、ゼノヴィア。」

アーシア「は、はいっ！」

心なしかアーシアの声が緊張した感じになっている。いきなり呼ばれてびっくりしたのだろう。

ミカエル「私の力不足でお二人に辛い思いをさせてしまい、申し訳ありませんでした。」

ミカエル殿がアーシアとゼノヴィアの前に立つと、頭を下げた。そしてその行動に、イツセー以外の人が皆驚愕していた。きつとミカエル殿が謝っているのは、アーシアが魔女と呼ばれ、教会から追放してしまった事、ゼノヴィアが神の死を知り、それを隠すために異端者の烙印を押して教会から追放した事についてだろう。そう考えると、驚く必要もなかったかもしれない。

ゼノヴィア「頭をお上げください、ミカエル様。私は教会に長年育てられた身。多少の後悔はありましたが、今の生活を満足に感じています。他の信徒には申し訳ありませんが……。」

ゼノヴィアは微笑みながらそう言う。

アーシア「ミカエル様、私は今、幸せに感じています。確かに最初は辛かったです、こんなにもいい方達にたくさん出会えましたから。」  
アーシアは、リアス達と俺を見てそう言った。その言葉を聞けただけで、リアスに黙って助けに行つてよかつたと思う。欲を出せばそのままイツセーと付き合ってくれたらさらにそう強く思うけどね！

ミカエル「寛大なお心、感謝します。」

ミカエルさんがそう言った時だった。俺は不審な気配を感じ、自分の席を立っていた。

サーゼクス「帝君、どうしたんだい？」

帝「何が……来る……！」

その瞬間、駒王学園の時が止まった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.

## 蘇る悪魔

帝 side

時が止まった駒王学園。四大勢力会談中に、いきなり駒王学園の時間が停止し、俺の憶測ではあるが、何者かのギヤスパーを利用した襲撃に遭ったかと。

帝「チツ、今動けるのはこのメンバーだけか。」

現在動けるのは、俺を含めた各勢力のトップ、聖魔剣を持った祐斗、デュランダルを持ったゼノヴィア、へ赤龍帝へのイツセー、俺の声に反応し、丁度良くイツセーに触れていて時間停止を受けなかったリアス、へ擬態の聖剣をを持ったイリナ、へ白龍皇であるヴァーリだ。

ドオオオオオン!!!

イツセー「!？」

帝「今度は何だ!？」

外を見ると、オレンジ色の魔方阵から続々と出てくる魔法使いと思わしき人達、そして……

千年伯爵「さあ、我輩のカワイイAKUMAちゃんたち??もつともーつと撃ちなサイ??」

千年伯爵と、卵に顔と銃口を無理矢理くつつけたような生物?ー対悪性兵器、通称AKUMAが駒王学園に向けて砲撃を放っていた。

帝「ヤベエな……ここも何時まで持つかわからねえぞ……!」

しかもAKUMAの数、目視できる限りでは相当数居やがる。

ゾクッ!

ヤバイ……!何かわからねえが俺の生物的本能が何かを知らせてくる!それも嫌な感じのが!

帝「全員、防御態勢準備!急げ!」

ドオオオオオン!!!

AKUMA達の砲撃が会議室の窓を撃ち破り、俺達は紫色の雨に襲われた。だが、生憎俺は神ノ道化を発動させて、マントのような何かで砲撃から身を守った。

ミカエル「そんな……!何故AKUMAがここに……!」



ミカエルさんが、他の兄様、セラフオール様、アザゼルのおっちゃんと共に防御結界を張りながら言う。

そういえば、黒の教団は一応天界側の団体だったか。まあ父さんから聞いた限りだとかかなり異端とされて黒の教団の関係者は皆腫れもの扱いされているんだとか。

千年伯爵 「また会えましたネ?? エミルくん??」

帝 「こつちとしては二度と会いたかなかったんだがな。」

千年伯爵 「あらあら、これは手厳しい??」

帝 「俺はあんたが気持ち悪いんだよ! とつとつとその面、俺の前から消しやがれ! 神ノ道化、臨界点突破!」

俺はそう叫ぶと、〈終の聖剣 理想郷〉を出す時のように、右手を掴み、剣を鞘から抜くように左手を振り抜いた。そして左手にあるのは、白く巨大な剣。魔だけを浄化する退魔の剣だ。

千年伯爵 「あなたもその気なラ……レロ!」

レロ 「はいレロ!」

千年伯爵は、かぼちやが先つぽについた、浮かびながら喋る傘を手にとると、俺の持つ退魔の剣と対となる黒い巨大な剣を手を取った。

千年伯爵 「ヌウウンツ!!」

帝 「うぐつ!」

ガキイイイイイイインツツツ!!!

千年伯爵はいきなり体型に見合わない程のスピードで俺に近づき、黒い剣を振り下ろす! そして俺はそのパワーにビツクリした。

なんつー馬鹿力だ!?! 地面がミシミシ鳴ってやがる!?

帝 「つらあつ!!」

俺はラタトスク化し、千年伯爵を力任せに遠くに飛ばした。

帝 「皆、奴の狙いは恐らく俺だ! 俺があいつの相手をしてる間に、誰かギヤスパーを助けてやってくれ!」

俺はそう言い残すと、すぐさま全速力で伯爵に近づいた。

伯爵 「お話は終わりましたか?」

帝 「とつくに済ませたよ。後はテメエを潰すだけだ!」

伯爵 「……ネア……あなた、本当は起きているのでしょウ?」

ネア……誰だ……？俺に宿る14番目のノアとやらと関係でも……？

帝「やあ、伯爵……久しぶり……かな？」

!?口が勝手にっ!?しかも全神経の感覚がっ!?

伯爵「ネア……。」

何故か伯爵は涙をポロポロと零していた。

帝「今度こそ……今度こそ……お前を殺して俺が千年伯爵になる……!つて言いたいとこだけど、今はパスしといてやるよ。」

伯爵「……はい？」

帝「興味が湧いたんだよ、今回の宿主にな。前回、アレン同様イノセンスとまた生まれちゃったけど、それ以上に、この宿主の過去に興味があるんだ。」

俺の過去?まさか……な……。

帝「ま、そういうことだ。んじやな、伯爵。」

漸く、俺の体――全神経の感覚が戻ってきた気がする。

伯爵「なら、暫くはあなたに会わなくていいですネ??」

帝「あ、ちよっ、おい待て!」

しかし、俺の叫びも意味がなく、伯爵はどこかに消えてしまった。律儀にしっかりとAKUMAを全部残して。

カチンッ  
ん?今の音……。

腰の後ろをよく見ると、ロングソードが鞘にしっかりと収まっていた。

帝「意外に早かったな。」

そう思い、ロングソードを抜刀した。始めに見た時に思った感想が、綺麗……その一言に尽きた。鉄色のロングソードの刃は、白銀の輝きを宿し、その輝きは、まるですべてを浄化する光のようだった。

帝「……んっ?何だこれ？」

ロングソードに貼られていた紙を剥がして読んでみた。

ラタトスクへ

そちらに無事、剣が送られていれば、私の剣をラタトスクは今見て

いただろう。その剣の名はリベレーターだ。剣の刀身に、縦に長い窪みがあると思う。それは、お主のソーサラーリングに魔力を込めてはめ込み、スライドさせると、全ての属性が付けられるようにしておいた。お主のアイン・ソフ・アウルと合わせるなり何なり好きにするがよい。もう1つの剣は、残念ながらも少し時間がかかる。しばし待たれよ。これは私の中でも、最高傑作となり得る物であるからな。それでは、失礼しよう。

ネザートレイトより

帝「なかなかやってくれんじゃねえか……。リベレーター……。か。……誰だ！」

俺はリベレーターを後ろにいる誰かに突き付けた。

？「うつへえ、もおく帝君、少し怖すぎだよー？」

帝「リエルか。何故ここにいる。」

リエル「何故って言われても気づいてるでしょ？」

帝「はあ……。あまり当たって欲しくはなかったんだがな。」

やっぱりコイツは今回のテロリスト共と共犯、もしくはそのテロリスト共の一員か。

リエル「僕以外にも、あと3人いるんだよ。『あのお方の奴隷』がね。」

帝「……。『ヤツの奴隷』があと3人……。ね……。」

リエル「ちよつと、いくら何でも『あのお方』をヤツ呼ばわりは止めなよ。じゃないと……。殺すよ……。？」

リエルは俺のうなじにナイフのような物を添え、殺気を込めた声で殺すと言う。

帝「やれるものならやって見やがれよっ！」

俺はリエルの鳩尾を狙って蹴りを入れたが、腕か何かでガードされた。しかし、勢いは流石に防げなかったのか、少し離れたところまで吹き飛んだ。

リエル「やるっていうの？」

帝「それ以外にあるか？」

俺とリエルは無言で睨み合う。

リエル「ほっ!!」

帝「はっ!」

ガキイイイイイイインツ!!

先手を打ったのはリエル。俺はリエルのナイフをリベレーターで再び受け止める。

クツソ、やはりナイフだからか手数が多い!動きも不規則な所為で軌道が読めない!

何とか対処できる限りで受け止めるが、少しずつ、切り傷が増えていく。

帝「神滅刃・神威!行くぞ、神ノ道化。」

俺は咄嗟に神威を禁手させ、リエルのスピードについて行けるようにした。俺が神ノ道化を展開させたことにリエルは何か勘付いたのか、俺と距離を離れた。

帝「今度はこっちからだ!」

俺はリエルへと駆け出し、リエルもこちらへ駆け出てきた。そして、お互い、殴ろうと思えば殴れる距離まで近づき……

帝「はあっ!」

リエル「おいよつと!」

互いを通り過ぎ、砲撃準備に入っていたAKUMAの方へと、俺は退魔の剣、リエルは専用?の投げナイフを投げていた。

帝「リエル!誠に遺憾だが、今は――!」

リエル「皆まで言わなくてもわかってるよ!あの卵擬き達を倒せば僕達の邪魔もなくなるし、ずっと銃口向けられてたからさっさと壊したかったんだよ!」

AKUMAの大群へ突撃し、先ほど投げた退魔の剣を、AKUMAから引き抜き、足場代わりに別のAKUMAの元へジャンプ為に蹴ると、AKUMAは丁度よく爆発した。そして、次のAKUMAも、踏みつけながら切り、踏みつけながら切り、これを何度か繰り返した。

帝「よし、これでツ!」

最後のAKUMAを切ろうとしたその時、俺の元へ白い閃光が走ってきた。

ヴァーリ「やはり今のを防いだか。」

白い閃光の正体は、白き鎧を身に纏ったヴァーリだった。

帝「おいおい、ここまで来て反旗を翻す気かよ……!？」

しかし、攻撃されてからわかったが、いつの間にか時間が元に戻っている。それもあの魔法使い共も片付いているな。

ヴァーリ「いや何、コカビエルの騒動の帰りにスカウトに会ってね。アースガルズの主神クラスと戦ってみたいかと。ああ因みに、俺がスカウトを受けた団体、もといこのテロ集団の名はへ禍の団（カオスブリゲード）。トップは無限の龍神、ウロボロスドラゴンのオーフィスだ。」

これは厄介だな……。よりにもよって、神もが恐れた世界最強のドラゴンの一角がトップとは……!

ヴァーリ「さて、改めて自己紹介というか。俺の名はヴァーリ・ルシファー!先代魔王の血族に当たる者だ。」

帝「待て、ならば何故お前は神器を、しかも神滅具をやどしている!？」

アザゼル「前魔王の孫である父と、人間の母を持つ HALF でな。ホントお前は嘘みたいな存在だな。」

魔王の孫と人間の HALF……成る程、それなら確かに合点がいく。

ドライグ【相棒、奴は気をつけたほうがいい。】

ーわわわわわわわわ。なにせ、ヴァーリは恐らく……

ドライグ【過去、現在、そして未来永劫において、最強の白龍皇として名を残すだろう。少なくとも、あれ程の奴とは過去に見た覚えはない】

ヴァーリ「しかし、皇 一誠。運命とは残酷だな。」

一誠「どういうことだ。」

お? 以外とイツセーが冷静だ。

ヴァーリ「俺は魔王の血を引きながら、この身にドラゴンを宿す最強の存在。しかし片やそちらは、つい最近までただの男子高校生だった。これが表す意味がわかるかい？」

一誠「天と地の差、月とスツポンって言いたいのか……!？」

ヴァーリ「そういうことだ。それに、君の過去を少し調べさせてもらったが、幼少期に起きた事件以外は平凡だ。これでは面白くない。」

……胸騒ぎがするな……しかも、普通に感じるような胸騒ぎじゃないぞ……!

ヴァーリ「そうだ、こうしよう!君は復讐者となるんだ!

俺が君の家族を殺すのさ……。」

一誠「ツ!!??」

美優「そ、そんな……。」

予想だになかったことを言われ、驚愕の声を上げるイツセー。昔のトラウマを思い出したのか、膝から崩れ落ちる美優。

させるかよ……もしやって見やがれ……!

一誠「帝……に……い……。」

美優「お兄……ちや……ん……。」

帝「成る程、そんなに死にたいか……。」

こいつらに、父さんや母さんに指一本でも触れて見やがれ……!

帝「なら、殺してくれと泣き叫ぶまでの痛みを味わってもらうか。

まず、爪を一枚一枚剥がさねえとなあ……?」

帝 s i d e o u t

一誠 s i d e

後ろから足音が聞こえる。何かボソボソと喋る声が聞こえる。

一誠「帝……に……い……。」

あり得ない程の殺気、この前のライザーと会った時のアレとは、比べ物にならない……!!そして、眼……だった。帝兄の眼が、ラタトスク化とは、違う眼になっていた。左眼は紅く、血の色よりも、濃い紅色だった。右眼はチラツとしか見えなかったが、まるでダイヤモンドよりも淡く、ダイヤモンドよりも純粋な透明度の高い水色だった。左眼の瞳孔は黒く、闇に引き摺り込まれそうな、見る者全てに絶望を与えるような深い黒。右眼の瞳孔は、見えなかった。いや、無かった。そして何よりも、帝兄の左側の首が緋色に光っていた。

帝「成る程、そうなに死にたいか……。」

声も限りなく低く、聞き取ることさえやつとだ。

帝「なら、殺してくれと泣き叫ぶまでの痛みを味わってもらうか。まず、爪を一枚一枚剥がさねえとなあ……?」

帝兄がそう言うと、帝兄の姿が「ぶれた」。

ヴァーリ「グブアツツ!!」

声をした方向を見ると、そこには、緑と黒の剣でヴァーリの鎧を切っていた帝兄が。

ドライグ「相棒、あの戦いには気が狂っても入ることはお勧めしない。」

「ー何でダメなんだよ。」

ドライグ「お前の兄は、龍殺しの概念を付与させた武器を創造したのだ!」

「ーそれって、アスカロンと同じ感じのやつかよ!」

ドライグ「いや、アスカロンには及ばないが、それでも十分に強力なものだったぞ。」

「ーじゃあ俺達はただ……」

ドライグ「傍観することしか出来ない。あの戦いに混ざれば今の相棒の実力ではお前の兄の足手纏いになるのがいいとこだ」

それ以上は何も言えなかった。そして、今戦っている帝兄の顔は、負の感情を固めたような顔をしていた。しかも、口の端を歪に歪ませた。その顔に、俺は一種の恐怖を感じた。

T o b e c o n t i n u e d .





解放の余波に耐えきれなくなったのか、俺を中心におよそ60m程のクレーターができる。

？「ヴァーリ、撤退命令が出てんぜ？」

ヴァーリ「ん？もうそんな時間か。」

突如、背後から現れた男の発言に、ヴァーリはそう返す。

帝「誰だ。今の俺は凄くご立腹だね。返答によっては殺すぞ。」

美猴「おお、そりや怖い怖い。俺たちは闘戦勝仏ー孫悟空の末裔の美猴。よろしくな、龍神帝王。」

あの猿の末裔か……。つか、なんかこいつの所為つつーかおかげつつーか……。なんか熱が冷めちまったよ。

帝「これからだつて時に……。まあいいか。ヴァーリ。」

ズドンッ！

俺は先ほどに創った、デモニックトローメントー龍殺しの概念を付与した剣をヴァーリの顔のギリギリに投げた。

帝「次に変な事言ったら……。わかるよな？」

ヴァーリ「あ、ああ。肝に命じておこう。流星にさつきのは死を覚悟してしまつたからな。」

ヴァーリはそう言うのと、美猴の魔方陣で帰った。

リエル「じゃねー帝君。」

帝「お、おいリエル！……。行つちまつたか……。……。」

クソ、あいつには聞きたい事が山ほどあつたのに！

思う事は色々あつたが、取り敢えずイツセー達のとこへ戻った。

一誠「えーつと、帝兄、お疲れ。」

帝「おう、お疲れ。つてイツセー、何その腕？」

禁手化していたイツセーの右腕は、何故かヴァーリの鎧のように白かった。

一誠「えー……。非常に申し上げにくいのですが……。ヴァーリの力、こつちに転がってきた宝玉で奪つちやいました……。……。」

帝「何やってんの!?馬鹿かお前は!？」

スパンッ！

何故か創れたハリセンでイツセーの頭を思いつき叩いた。



——呪いを背負う水紅の皇……呪いってどういう事だ？

ゼノン【鏡で見ればよからう。】

やっぱこいつケチだ！

曇りがかった鏡の曇りをシャワーで消し、禁手化と心で念じた。

帝「……逆さ星……？」

俺の左眼に何故か知らないが、首の痣と同じような逆さ星の形が映っていた。

ゼノン【意味がわかったか？】

——ああ、わかりやす過ぎる。呪いって、俺のこの「奴隷の証」かよ……。萎えるわあ……。

ゼノン【まあ、主の過去の所為でそう萎えてしまうのもわかるが……】

——いや、わかる筈がない。あの辛さを知らないから、そう簡単に言えるんだ。

ゼノン【……】

凶星を突かれたのか、ゼノンは黙り込んだ。

——ま、とにかくありがとな。

ゼノン【いや、すまないな、主。知ったような口をきいて。】

——いや、いい。俺も少し言い方がキツ過ぎた。

美優「お兄ちゃん？入るよー？」

帝「え、あ、ああ、いいぞ。」

俺がそう答えると、美優が入ってきた。タオルも巻かずに。

帝「おい美優、入ってくるのは別に許してやれるが、タオルくらい巻け！」

美優「ねえお兄ちゃん……。」

帝「ど、どした？」

美優が、湯船に入っていると、恍惚とした表情で衝撃発言をぶちかました。

美優「私……もう我慢できない……！」

帝「あ、あの……美優さん……？」

美優「毎朝のあれだけじゃ、何時も寸止めだから……もうができな

くなつたの！」

帝「だからって今来るのおかしくないか!？」

美優「今日はリアスお姉ちゃんの番だし……その、お兄ちゃんって正直ヘタレだからこういう密室空間なら逃げにくいかなって……。」

グフツ!?ヘタレ……だと……!？」

帝「ヘタレ……美優にヘタレって言われた……。もうお兄ちゃん立ち直れない……。」

美優「ムウ……お兄ちゃん、早く私の処女……奪って？」

帝「……ヘタレだから無理だよ……。」

そう言つて拗ねる俺。

イジイジしてて女々しいと思うが、これで少しは引いてくれる……  
筈だ。

美優「もうっ!こうなつたら強行突破！」

帝「えっ?あのっ、ちよっ!?またこれか

よおおおおおおお／／／／／!!!」

お父さん、お母さん、結局僕は襲われなければならない運命だった  
ようです……。

To be continued.

アザゼルの、わくわく！チビチビマシン一号君！  
(嘘)

帝 side

美優とアレした(正確には襲われた)次の日、授業が終わり、部室に来ていた。近況報告みたいな感じだが、徹夜で雷切の補強?をし、その際、雷の精霊、トニトルスのコアの欠片を使ったら、なんか治った。原理は一切わからない。まあ徹夜したおかげで授業中寝てしまった。しかも朝から4時限目まで。

帝「おっ、今日は一番乗り……………何やってんのアザゼルのおっちゃん……………」

アザゼル「おう帝。あと今の俺はアザゼル先生だ。覚えとけ。」

帝「はいはい、わかったよアザゼル先生。」

アザゼル「それはそうと帝、和平条約を結ぶための物の交換での内容、覚えてるな?」

アザゼルの…………アザゼル先生がそう言うと、ニヤツと不敵に笑い、ある銃を取り出した。

帝「チツ…………覚えてるよ。俺自身の体を実験の被験体として提供、俺の神器を神器研究の提供……………だろ?……………忘れとけよボケ……………」

アザゼル「おい最後聞こえてるからな!」

最後にボソツと言うと、アザゼル先生は思い切りツツコンできた。

アザゼル「まあ、取り敢えず……………俺の最初の研究の被……………協力者になつてもらおうぞ!」

帝「おい今被害者つてばあああああああああつ……………!!!」

帝 side out

三人称視点

リアス「さて、今日の活動を始めるわ。今日のテーマは……………この馬鹿をどう罰するかよ。」

ここ、オカルト研究部部室にいるのは、何時ものオカ研メンバー、ア

ザゼル、〃2頭身になった帝〃である。もう一度言おう。〃2頭身になった帝〃である。

リアス「そもそも何よ!?この〃チビチビマシーン一号君〃って!?何でこれをエミルに撃つのよ!」

リアスが持っているのは、アザゼルが開発した、〃チビチビマシーン一号君〃である。帝はこれに撃たれ、2頭身になった。開発者のアザゼルは、リアスと美優にボコボコにされ、体を縛られている。被害者の帝はというと……

みかど「くつきーおいひい!」

中央のテーブルの上でちょこんと座り、小さな口を精一杯開けてクツキーを頬いっぱいに頬張っていた。それも屈託のない笑顔で、幸せそうに。

女子メンバー『はううつ?!!』

リアス「アザゼル、今回は許してあげるわ!」

美優「こういうことはあまりしないでね、アザゼル先生!」

女子メンバーは皆、あまりの可愛さに、心を打たれた。しかし、当の本人は、首を傾げていた。

みかど「ゆうとー、かたぐるまー!」

帝は、祐斗の元へひよこひよこ歩き、祐斗の足元で、祐斗を見上げ、無邪気に笑って肩車をして欲しいと言った。

木場「はいはい、ほら、帝君。」

みかど「わーい!たかーい!」

そんな感じで、帝は他のメンバーにも甘え、3時間程経過した。ボンッ!

突如、帝から白い煙が上がり、煙が晴れると、そこには元の姿の帝が。

帝「……………」

リアス「あの……エミル……?」

帝「ふわあああああああああああああ／／／／／／／／／／／／  
!!!!!!!」  
しっかりと3時間の内容を覚えていたのか、帝は顔を真っ赤にして



## 魔界転移のラタトスク 過去の愚行に、ただ泣き叫ぶ

帝 side

帝「よし、魔界に行こう。」

全員『へ?』

なにちよつとコンビニ行ってくるみたいな感じで言ってるんだろ。俺でもわからん。

今は夏休みの1日目。本来なら、リアスの実家に眷属共々帰る予定らしかった。

アザゼル「でもいいのか帝。俺らも俺らで予定があるんだが。」

帝「心配するなアザゼル。こつちと魔界とじゃ時間軸がまるつきり違うからな。」

アザゼル「具体的には?」

帝「こつちの1日は、魔界じゃ1年なんだ。詳しい説明は後々する。」

あの一件以来、俺のアザゼルへの信用がダダ下がりした。それ以来、俺は尊敬もせず、アザゼルと呼び捨てで呼び始めた。あと、こつちと魔界の時間軸の違いは、ちよつと面倒くさいので割愛。

木場「でも、どうやって行くんだい?」

帝「ん?生き方なら簡単だ。部屋の隅の壁と壁が交わる場所で十字を切ってそこに突撃するだけだ。もっと簡単な方法もあるが、ただあれは……な、マルタ。」

マルタ「そうね。あれは……ね。」

一誠「あれって?」

帝「いや、俺、一定の空間に魔力を押し留めて無理矢理次元の狭間への穴開けれるんだ。ただ魔力の消費がヤバくてね。前使った時はぶっ倒れたのよ。今は体がふらつく程度だけど。つー訳で行くぞ。」

一誠「理由の筋が通ってないんだけど!」  
知るかそんなもの!



帝「開け、次元の扉！」

そう言うと、俺の数歩前の空間が縦に割れた。

帝「あの、皆!?ぼけつとしてないで行くなら行くでさっさと通ってくれない!?維持してる間も魔力食うから!じゃ、取り敢えずお先!」  
そう言つて、割れた空間へと入った。

—————

一誠「おおおお!!」

始めて見る景色なのか、イツセイや一部のやつらが驚いていた。

帝「ようこそ!人と魔物が共存共栄し合う世界、魔界へえええ

……イエエエエ!!」

マルタ「え、えーつと……。」

リアス「エミル?マルタ?どうしたの?」

帝・マルタ「「ハハハハ!?」」

全員『……え?』

いやおかしいって!前見たメルトキオと違ってなんか高層マンションとか建ってるんだけど!?城下町とかも無かったよ!?どうしてこうなった!?!いや、確かにこっちの時間軸に合わせたら90年くらい

来てないけど！来てないけど！どんだけ文明が発達してんだよ!?もう意味わかんねえ！

帝「……………開け境界の扉ああー！」

全員『なああああ!?!』

現実逃避したくなり、全員を巻き込んでアルタミラまで境界の扉を開いて転移した。皆からすれば理不尽だと思う。だが今は少し俺の現実逃避に付き合っただけで欲しい。

そして着いたのはアルタミラ。青い海、白い砂浜、入ってすぐに見える大きなホテルにモノレール。最後に見たアルタミラと同じだった。

帝「良かった……………！ここまででは侵食されてなかった……………！」

マルタ「良かった……………！最後に見たアルタミラと同じだよ……………！」

リアス「えつと……………エミル、状況を説明してくれる？状況の把握がイマイチできないわ。」

皆の方を見ると、皆が揃ってうんうんと頷いていた。

帝「至って簡単。すつごくシンプル。単にさっきの場所が最後に見た姿とまるで違っただけ。」

一誠「ごめんよくわかんない。」

ごめん俺もよくわかんない。つてかもうわからない奴に詳しい説明はしません！俺も少し脳内の整理したいです！

マルタ「エミル、この後どうする？」

帝「あ……………取り敢えずはレザレノカンパニーに行ってリーガルさんに会いに行くか？」

そんなわけでレザレノカンパニー行きのモノレールに乗ることになったが……………

ギヤスパ「ひやああ！僕の紙袋が！」

帝「ここに来てまで被る必要ないだろお前。」

定員が7人までなので、男子メンバー＋α、女子メンバーとで分けてレザレノカンパニーへ行くことに。

あ、女子メンバーも来たみたいだ。

「レザレノカンパニー本社へようこそ。本日はどういったご用件で

「しょうか？」

帝「すまない、エミル・キャスタニエというものだがリーガル・ブライアン社長はいらっしゃるか？できればお会いしたいのだが。」

「エ、エミル・キャスタニエ様……というとの……!？」

帝「ん？何のことかわからないが……。それよりもー」

「し、少々お待ちくださいー！」

なぜそこまで慌てる必要がある？まさか一緒に旅してたやつか？いや、ないな。あいつらの面影が微塵も感じられなかった辺り、やっぱり初対面だろうか？

「お、お待たせしました！どとどとどとどとどとどとどこちらのエレベーターへ！リーガル社長は社長室にておとおおお待ちです！」

帝「あ、ああ。すまない、助かったよ。ありがとう。」

終始わからず仕舞いでエレベーターで社長室へと向かった。

—————

帝「ども、リーガルさん。お久しぶりです。」

リーガル「こんにちわ、エミル。久しぶりだな。」

俺の目の前にいる、水色の髪、渋い？顔立ち、ガタイがよく筋肉質な大柄の男性は、リーガル・ブライアン。ここ、レザレノカンパニーの社長だ。

リーガル「おや、そこにいるお嬢さん方と少年達は？」

帝「ああ、紹介するよ。こちらの紅髪の女性はリアス・グレモリーだ。」

リアス「初めまして。リアス・グレモリーと申します。」

リーガル「ふむ……エミル、君はいい女性に恵まれたな。」

帝「ええ、本当に俺には勿体無いくらいにいい彼女でして………リーガルさん、何故それを……？」

俺がリーガルさんにそう聞くと、やつぱりなというような表情になった。

リーガル「いや何、少し鎌をかけたつもりだったのだが、まさか当たるとはな。リアス殿、エミルは少しばかり自分で何でも背負い込む癖があるのでな。できるだけ支えてやって欲しいんだ。どうかよろ





## 諸悪の根源

帝 side

あのあとは夕方まで空をずっと、ゼファイ達と過ごした日常を思い出しながら見ていた。現在の時刻は……7時とでも言っておこうか。時間軸が人間界とかと違うからあんまわからん。そんなことを考える俺は、リーガルさん達と、リムジンのような車でメルトキオまで移動していた。もう文明の発達云々についてはツツコまない。一回一回ツツコんでたらキリがない。目的は、リーガルさんが旅の仲間達をメルトキオに呼び込んだので、俺達はそこまで移動している。しかし気のせいだろうか、どこかで魔族の気配がするが、微弱なために正確な位置がわからない。

「皆さん、目的地に着きました。」

運転手さんはそう言って、運転席から車のドアを開けた。

リーガル「ああ、ありがとう。先に帰っていてくれ。今夜はここで宿をとろうと思う。」

「了解しました。それではまた後日。」

そして運転手さんとリムジン？は来た道に戻って帰って行った。

帝「リーガルさん、気になる事があるから少しこの草原の

先に行つてくる。」

リーガル「ああわかった。だが気を付けるんだぞ。なんとと言っても今夜は、凶月だからな。」

「凶月」、ふりがなを振って読むと、「まがつき」だ。凶月とは、この魔界における、気性の荒い魔に通ずる生物が活性化し、より凶暴になる夜の事。月は黄色の月と違い、赤黒く光っている。その赤黒い光が、気性の荒い魔に通ずる生物を凶暴にする。

帝「ああ、わかってる。皆はリーガルさんについて行ってくれ。俺も後から行く。」

そう言って先の草原へと走った。

—————

帝「おいおい、嘘だろ……!?!」







帝「はっ！それ位テメエの玩具がポンコツだったってこつたる？

魔神王ヴェルフリート!!!」

ヴェルフリート「これはこれは、よもやこんな雑魚にバレておつたとはな。褒めてつかわずぞ？ 奴隷よ。」

魔神王ヴェルフリート。この魔界において最も絶対悪に近しき存在にして、俺に奴隷の証を刻み、ゼフィを、ルアンを、シエルを俺に殺させた屑野郎!!!」

帝「どうやって復活した!! 大体お前は何千年も前に数億年の封印を施されていた筈だ!!!」

ヴェルフリート「ふん、私の再臨を祝うのか？ ならば教えてやろう。……封印を解いたのだよ。我が愛しの奴隷、貴様以外の奴隷共がな！」

リエル……あんのヤロツ！ 覚えとけよ……次会ったらあの巫山戯た顔面に1発ぶち込んでやるからな……!」

ヴェルフリート「ああ因みに、貴様の血を用いて復活した所為か、貴様の容姿と被ってしまつてな。我は中途半端が嫌いなのだよ。だから貴様の魂を殺し、その体を我が頂こう！」

帝「んな変な理由でこつちくんじゃねえツ!?!?」

瞬間、ヴェルフリートが巻き起こした衝撃波に襲われ、体が宙に浮いた。

帝「傍迷惑だな本当に！」

そして俺は、今出せる限りの本気を出し、受身を取って着地する。

帝「こいつで……墜ちろ！」

自分の影を残像として一気に詰め寄り……

帝「ハアツ！」

両手の剣を一気に振り下ろす！

ヴェルフリート「ほう、雑魚にしては中々……？グツ！」

帝「なっ!？」

しかし、俺は幻影を見せていた。しかし、横薙ぎに振るった剣は、ヴェルフリートの皮膚によって弾かれた。

帝「うぐっ!？」

ヴェルフリート「今のは中々痛かったぞ。しかし残念だったな。我が皮膚は万物をも寄せ付けず、万物をも防ぐ。その程度の攻撃など痛い程度で済むのだよ。」

俺はヴェルフリートに首を掴まれ、宙吊りにされている。

ヴェルフリート「それでは、その体を頂くとしよう！さらば！我が愛しの奴隷よ！我のためにその体を捧げよ！」

ズブツ！

グザツ！

帝「ガアツ……ハツ……!!!」

ヴェルフリート「貴様……まさかあの一瞬にして……我が心臓と眼を突き刺すとは……！」

俺はヴェルフリートに手で心臓を貫かれ、俺は今まで微弱ながらもずっと溜めていた剣の魔力を一気に爆発させ、ヴェルフリートの眼と心臓を貫いた。

帝「幾ら……あん……たでも……少しばかりは……再び眠る必要が……あるだろ……」

ヴェルフリート「……このままでは……体を乗り換えたとしても……死にかねぬな……貴様の言う通り……暫く眠りにつく……としようか……」

ヴェルフリートはそう言って、黒い煙のようなものを出して消え

た。

帝「ハアツ……ハアツ……ハアツ……ハハハ……ごめん……皆……俺あもう……ダメ……みたいだ……」

そう言うのと、ボタンと勢いよく後ろに倒れた。

帝「……雪……か……」

気がつくのと、周りには雪が降っていた。

恐らく今はまだ冬かな……

そんなことを考えながら、空を見上げていた。そもそも俺は雪が好きだ。暗い夜に降るほんの少しの粒が、月の光に照らされて白銀の光を宿す。そして地面や人肌に着けば解ける。たった一瞬であつても美しく輝き、地面や人肌に触れれば儂く散る。そんな雪が俺は好きだ。

帝「グボツ！……ハアツ……ハアツ……ハアツ……皆……俺がいなくても……ちゃんとやってけるかな……？」

口からは勢いよく血が噴き出し、口の中からは異常な程に血の味がある。それと同時に俺は走馬灯を見ていた。

帝「……いや、あいつらなら……上手く……やってけるだろう……」

ごめん……リア……ス……美……優……もう……俺……長く……ねえわ……」

嗚呼、凄く寝たい。このまま寝てもいいだろうか……

帝「ごめん……イツセー……お前……を……強く……してやれ……なかつたよ……頼りない……兄貴で……済まねえ……な……」

今まで頑張つて来たんだから、別に……いいよな……？

帝「ごめんゼファイ……ルアン……シエル……お前……らの……仇……とれ……なかつたよ……」

もう俺は限界だった。もう我慢が利かなかつた。

そして少しずつ……瞼を閉じる……

帝「ごめん……皆……ちゃんと俺の……こと……言えなくて……でも……ありがとう……こんなやつに……ついてきてくれて……こんなやつを……信じてくれて……本当に……ありがとう……皆……俺……皆のこと……」

段々と意識が遠のいて行く。そして、残った意識を集中させて、最後の言葉を放った。

帝「皆の……こと……」

大好きだよ

そして俺は、この世界から旅立った。

T o b e c o n t i n u e d .



帝「へ？」

目を擦ると、確かに何かの液体に触れた感覚がした。

シエル「それよりミカド？私達、ずっとあなたのこと見ていたけど……」

ゼファイ「この後何が待っているか、賢いお前はわかるよな？」

帝「あ、あの2人も？眼が笑ってないんですけど!?ちよっおまつ、こ、こっち来んなあぎやあああああああ!!!」

ルアン「……………」

ルアン「いやー、でもミカドがここまで僕ら<sup>!!!</sup>の<sup>!!!</sup>こと大切に思ってたなんてね〜。」

ゼファイ「まあ、確かに。でも今思えば結構そんな兆しは確かにあったな。」

シエル「これって所謂……」

その一言で涙目で体育館座りをする俺をバツと見る3人。

帝「だからその目で見んなっつってんだろ!？」

3人『……』ニヤニヤ

帝「テメエら燃やされたいか!？」

3人『あ、ハイ、マジスンマセン。』

帝「なんでお前から生きてた頃とそう変わんねえんだよ……。まあ安心できたからいいけど。」

ゼファイ「およ？ミカドが露骨にデレてる。こりや明日槍でも降るな。」

ルアン「ふむふむ、ミカドはツンデレ主人公系キャラからデレデレ主人公系キャラになったと。」

帝「おいゼファイお前いつまでそのネタ引き摺る!?あとルアンお前は お前で何メモってんの!？」

シエル「ま、まあまあ、少しは落ち着いたらどう?」

帝「だが断る。」

シエル「折角人が気を利かせてあげたのに何よそれ!？」

帝「はっはっはっはっはー!」

シエル「2人も何か言つてよお!」

ゼファイ「シエル、人に何かを押し付けるってのはよくないと思うんだ。うん。」

ルアン「姉ちゃん……僕は弟として悲しいよ……。」

シエル「あれえ!?いつの間にか私が悪いことになってるのよ!?そもそもあんな態度を取ったミカドが悪いでしょ!」

帝「それを言うなら俺を殺したヴェルフリートが悪い。てかそもそも話相手があの俺だぞ?」

3人『確かに!』

帝「いやお前らそれで納得すんなや!」

なぜだろう、これが日常茶飯事だったのにメツチャ疲れる。これを毎日やってたとなると……

帝「過去の俺マジリスペクト。」

3人『うわぁーないわー!』

うわぁい、この子達マジムカつくー。

ゼファイ「んんっ!さて、巫山戯るのはここまでにしようか。ミカド、今君は大変危険な状態だ。」

帝「ほん、どゆこと?」

ルアン「自分の体見た方が手っ取り早いよ。」

ルアンにそう言われて体をよく見ると……

帝「んん!?!何かさつきより体のいろ薄くなってきたんだけど!?!」

ゼファイ「そう。君は今まさに消えかけている。そこで、俺達が合体して1つになって再び実体を持って蘇るんだ。」

シエル「やだゼファイ、合体なんて……!」

帝「ひいつ!?!どうせ俺をメチャクチャにするんだろ!?!○○同人みたいに!くっ!いつそのこと殺せ!」

ゼファイ「何でそうなるのかなぁ!?!」

帝「ルアン気イ付けろよ。もしかしたらゼファイの野郎男色が……!」

ルアン「わっ、ちょ!?!ゼファイこっち来ないでよ!?!姉ちゃん守ってー!」

ゼファイ「だからそうじゃないって!」

3人『必死に否定する辺り怪しい。』

ゼファイ「ああもういいよ！続き言うぞ！」

チツ、ゼファイノリ悪いなあ」

ゼファイ「舌打ちしたよこの人!？」

あ、ヤツベ、声に出たよー(棒)」

ゼファイ「もういいよ……ぼくお家帰る……。』

シエル「そもそも帰る家ないでしょ。』

帝「スマンスマン」

ゼファイ「絶対悪いと思っけてないよこいつ……。』

笑って謝罪したが、予想通りの反応を示してくれた。

ゼファイのグヌヌ顔マジメシウマです。

ゼファイ「まあえつと、俺達が今の君と一体化して、俺達の今持てる魔力を使って実体を持って生き返ってもらうってこと。いいね？  
じやいくよー！」

帝「おいまていきなりとかごふあつっ!!!」

—————

俺、皇 帝ことエミル・キャスタニエは黄泉返(蘇)るとある土地に踏み入っていた。

帝「おいゼファイ、蘇らせてくれたことには感謝する。』

ゼファイ「どういたしまして！」

多分胸を張ってえへんとするゼファイ。

帝「だけどなあ……」





帝「ゼファイ、テメエいつかその素晴らしい頭にタライ落としてやるからな。」

ゼファイ「やれるもんならやってみごふっ!!」

よし、マジでタライ落としたから暫くゼファイは起きないな。ん？復讐？やめだやめだ。あんなもん。やつても碌なことになんねえ。それによくゼファイ達の性格考えたら復讐なんて望んでないし、実際に聞いたら……

3人『復讐？別にいいよそんなもん。』

と軽く退けられた。

帝「つてかここ仲間いないとヤバイ！」

ゼファイ「ミカド、俺達がー」

帝「戦力になる仲間がいないとマジヤバイ！」

ゼファイ「Σ（。D。111）ガーン」

帝「顔文字やめい。あとそれ口で言うなや。」

そんなことを言いながら、適当な魔方陣を書いた。とりあえず5つ書いた。

つてかどうしよう。ここ異常に花粉多い。1つ一回くしやみしたんだけど……。

帝「まあいいやとりあえず魔力を込めてつと。」

5つの魔方陣に魔力を送り、暫く待つ。

帝「へくちっ！だあ、マジ花粉ヤベエ。花粉症か？」

若干魔力が乱れたが気にしない。

そして魔方陣は白く眩しい光を発した。

帝「んんんんん！。成……功……？んふあああん!!」

光が止み、そこに居たのは

なんかよくわかんない人達だった。

To be continued.

サーヴァント、召喚です！

帝side

沖田「新撰組一番隊隊長、沖田総司、推参しました。」

エミヤ「サーヴァントアーチャー、真名エミヤだ。よろしく頼む、マスター。」

クー「ランサーのクー・フリーンだ。ま、気楽にたのむわ。」

ジャンヌ「ルーラーのジャンヌ・ダルクです。これから共に戦いましょう、マスター。」

邪ンヌ「アヴェンジャー、ジャンヌ・ダルク・オルタ。あんたが私のマスター？随分ひ弱そうだけど、まあ精々上手く私を使ってみなさい。」

あ？何？この人達？どゆこと？サーヴァント？マスター？なんだ？取り敢えず……

帝「グボアッ！」

5人『!?!』

吐血した。

？「あのーすんませーん。テイツシユ持って……」

あれ、なんか見た目が俺と同じ奴がいるけど……まさか？

帝「ラタ？」

ラタ「エミル？」

帝・ラタ「……………」

暫く沈黙が続き……。

帝・ラタ「「なんでそこ（俺ここ）にいの!?!」」

ラタ「なんで俺ここに居んだよ!?!つか既に実体持ってる!?!」

帝「お、落ち着けラタ!こ、こういう時は……そ、そうだ!」  
パチンッ!

帝・ラタ「「グボアッ!?!」」

取り敢えず現実逃避のために互いに同時に頬にビンタした。

ゼファイ「「なんでラタトスクがそこに……まさかシエル!?!」」

シエル「わ、私じゃないわよ!?!そう言うあなたがやったんじゃない

の!?!」

ゼファイ【俺じゃねえし!まずそもそもいつやったって確証があるんですか!?!何月何日何時何分何秒地球が何回回った時!?!】

ルアン【ゼファイ、言ってることが小学生と同レベルだよ……。じ、じゃあここは僕が悪いつてことで……】

帝・ゼファイ・シエル【「うん、じゃ、ルアンがやったってことで。」ルアン【何で!?!】

うん、控え目に言ってカオスだわ。(白目)

—————

帝「ふむふむなるほど。つまり君らは聖杯戦争というところで戦うべき存在であるが、何の因果かわからないがなんかこっち来た、と。」

特に目立った異常点は……異常点は……俺の魔方陣のミスと送る魔力の量の調節ミスしかなかった。

帝「もうこれ全部俺の所為じゃないですかヤダー!」

ラタ「ま、まあ頑張れよ、応援してっからさ。って何だよその顔?いや何って……お前何言ってるのって顔だけど……。」

帝「ラタ、一緒に頑張ろうぜ!」

俺はラタの肩に手を置いて清々しいほどに爽やかな笑顔でラタにそう言う。

ラタ「クツ!離せ!これはお前自身の問題だろ!」

帝「お前俺の半身だろ!誰のおかげで生きてけると思ってたんだゴラア!そもそも俺とお前は一心同体、生涯のパートナーだろが!俺の責任はお前の責任でもあるんだよ!」

帝・ラタ「グヌヌヌヌヌヌ……!!!」

ゼファイ【あ、ミカドがホモ発言ー】

帝「ホモシヨタ野郎は黙ってる。」

ゼファイ【何か1つ増えてない!?!】

帝「あ、すまねえ。さつきから何回も蚊帳の外にしちまったな。一応自己紹介しとく。皇 帝だ。エミル・キャスタニエ、って名前もある。今は便宜上、エミルと呼んでくれ。」

エミヤ「い、いや、つい圧倒されていたよ。では改めて、アーチャー

のエミヤだ。弓での後方支援ができるが、白兵戦も行える。よろしく頼む。」

赤い外套を纏った白髪の青年、エミヤ。これからの戦闘では色々と世話になりそうだ。

クー「ランサーのクー・フリーン。槍使いなら俺が鍛錬つけてやるよ。ま、取り敢えずはよろしく頼むぜ。」

青い髪に全身青タイツの青年、クー・フリーン。何となくアニキと呼びたくなったので、あだ名はアニキで。

沖田「セイバーの沖田総司です。マスターのために沖田さん、全力で頑張っちゃいますよー!こふっ!？」

新撰組の羽織を着た、薄い桜色の髪の毛の少女、沖田。剣技についての話とかだと馬が合いそうだ。病弱というのが玉に瑕だが。

ジャンヌ「ルーラーのジャンヌ・ダルクです。皆さんのお役に立てるよう、精一杯尽力させていただきます!」

鎧を纏い、長い金髪を三つ編みに編んだ髪型の少女、ジャンヌ。健気で何となく癒されてしまう。

邪ンヌ「ジャンヌ・ダルク・オルタ。アヴェンジャーよ。ま、よろしくしてあげるわ。」

短めの白い髪の少女、邪ンヌ。なんかジャンヌと色々と反対だな。帝「つと、まあそのマスターつてのにはまだ未熟だとは思いがよろしく頼むぞ。」

1人1人差し出してきた手を握って握手をする。嫌そうな顔をして手を差し出す人もいたが。

帝「うん、現状、ここは安定しているし、ニブルヘイムにいる間はここを拠点にでもしようか。って、そろそろ飯時かな。じゃあ少し狩りにでも行ってもらいたいんだが、誰か行きたい奴、挙手。いなかったら俺が勝手に班わけする。」

クー「じゃ、俺が行ってくるわ。」

エミヤ「では、私も同行しようか。」

はい、お肉確保班は決定!

帝「次は……ベースキャンピング作成班だが、これは俺がやる。」

ラタ「あ、俺もやる〜。」

帝「お前がいるとなんか混乱しそうだから却下。」

沖田「はいはい！私やります！マスターのお側に是非沖田さんをお願いします！」

帝「あ、ああ。その……大丈夫か？」

沖田「大丈夫ですとも！これくらいやらなければ落ち着きません！」

そんなわけで、俺と沖田のベースキャンプ作成班は、建材を確保するために、後ろの森に入ってしまった。

ルアン「あ、そだ！ミカド！自分の首元見てみて！」

ルアンの言葉に従い、首元を見ると、十字架の首飾りが俺にかけられていた。

沖田「うわー、綺麗な首飾りですね、マスター。」

帝「そうか？まあいいや。沖田、ノコギリ渡すからどつかの木デキトーに切ってきて。」

沖田ははい！と元気に答えて、こつちに手を振って離れていった。

あ、転けた。

帝「んで、何だ？この首飾り。悪魔の俺からしたら毒なんだが。」

首飾りに触れた瞬間……何かが脳内に流れて来た。

ズキッ！

帝「あ痛ててて……。」

うん、キャパオーバー。許容量超過。まだ巫山戯半分で言えるくらいならまだいいけどさらに酷いと脳がパーになるからな。ああ恐ろしや恐ろしや。にしても、使い方？

帝「装填、〈烈空の冥海弓〉。」

そう眩くと、首飾りが光り、黒い大弓へと形を変えた。

帝「うっわ!?ゆ、弓!?にしてはデカ過ぎないか!?ってこれゼフィの！」

ゼフィ「そのとおーり！よくわかったな！」

帝「まあ、ゼフィは一応戦闘での司令塔だったからな。よく後ろで

チクチクしてたの覚えてるよ。あとゼファイ最近ウザい。」

ゼファイ【ミカドが最近酷い……シクシク……】

何か言っているが無視した。

帝「次はつと、屠れ、へ緋天穿つ閃光の槍。」

現れたのは、アニキの武器に似た槍。

帝「つと、これはルアンのか。無駄に槍使うの上手かったんだっけ。」

ルアン【無駄には余計だよ、ミカド。】

帝「すまね。でも結局ルアンに槍術では勝てなかったなあ。さて、次で最後か。潰えよへ虚空切り裂く墮罪の大刃。」

槍から形を変え、槍は大剣へと姿を変えた。

帝「あ、シエルの大剣か。確かシエルって純血エルフの種族の中では一番の腕力があつたんだっけな。」

シエル【一応言っておくけど私、ちゃんと魔法も使えますから。】

帝「わかつてるけど……最初に見た時はビビったわ。体の細い女の子が自分の身の丈の2、3倍近い大剣を片手でぶん回してたからな。取り敢えず、大剣で木を切る事になった。」

いや、だって……あるゲームじゃ、大剣の一撃で木が切れてたし。

ゼファイ【ミカド、それってゼルダの\*\*？】

ーやめろアホ！あと何気に心を読むな！

ゼファイ【いいじゃんいいじゃん。減るもんじゃへぶっ!?!】

またゼファイにタライを落とした俺であった。

To be continued.

## 世界の理を塗り替える禁手

帝side

時間は過ぎて今は夜、とは言っても深夜だが。

帝「あー寒っ!!」ガタガタブルブル

それもそうか。だって俺がいるとこ……

“犬小屋”だもん!!

あのあと、木をある程度集め、錬金術を使える魔物を呼び、小屋6つ、犬小屋1つ作ってもらった。部屋決めは簡単にジャンケンだった。そう、ただのジャンケンだったのだ。勝った人は小屋、ビリの方は犬小屋。言わば罰ゲーム。だが、1つの失態を犯したからだ。実は俺、生まれてこの方ジャンケンで一回も勝ったことがない。最近ジャンケンしていなかったとは言え、かなり致命的なことを忘れたことに反省。

まあもう少し奥に入ったら亜空間に入れるんだけど。というよりもともとそうしてたし。別に狙ってないもん。



帝「……そうだ……！」

俺は犬小屋を出て、少し歩いたところに薪を置き、ソーサラーリングに魔力を込めて火をつけた。

帝「あああゝゝええわあゝゝ……！」

暫く温まっていると、少し瞼が重くなってきた。体が温まって、眠くなるのは仕方ないことだ。俺は強烈な睡眠欲に誘われて、意識を落とす――

ジャンヌ「あれ？マスターではありませんか。」

ちよつとお！今すんごい気持ちよく寝れそうだったのに！

帝「お、おおう、ジャンヌか。どうした？」

ジャンヌ「いえ、外から明かりが見えたものですから。」

帝「ダメだぞジャンヌ。夜更かしは美容の大敵だぜ？」

冗談交じりにそう言ってみた。とは言っても実際、リアスや美優も寝る時は寝る時で早く寝てたし。

ジャンヌ「そう………なんでしょう？今まで戦場を駆けてきた所為か、そういうことには疎いと言いますか何と言いますか……。」

帝「そ、そりやすまねえ。」

そしてジャンヌは俺の横に腰を下ろした。

ジャンヌ「マスター、何故マスターは私達サーヴァントを人と同じようにして接するのですか？」

帝「えっ、いや、急にそんなこと言われてもな……。」

ジャンヌ「私が知っているサーヴァントの使役者は皆、サーヴァントを道具のように、己の願望を叶えるための道具にしか使っています。でも、貴方は違う。今日会ったばかりですが、私達に接するところからは、愛情――優しさが見えました。それは一体、何故なのかと。」

成る程、今までの使役者と違う対応に少し戸惑っていると。

帝「ジャンヌ、お前は……お前達は、俺の過去を知っているだろうか？」

ジャンヌ「はい、ここに来る前に大体のことを。」

帝「つまりはそういうことだ。大切な人を失いたくないから戦う。」

大切な人を傷付けたくないからそう接する。そしてそれでいてその人のことをよく知れるようにする……。もう復讐なんてする気はないが、どうもまだそのことだけは引きずってんだ。多分、心の何処かで。一度、いや、二度闇に堕ちてしまった俺だからできること……。なのかな。はは、なんか笑えねえよ。まだ仲間を失う恐怖が、手に、脳に、心に残ってる。仲間を殺してしまった自分への怨恨が、まだ心の何処かにこびり付いている。いつか、自分がその恐怖に、怨恨に吞まれてしまうかもしれないって思うと……。その時の狂気に体を奪われ、仲間を殺してしまった、なんてことがあつたりすれば……。」

「どんどん気分が沈む。それはジャンヌも同じようで、表情を沈ませている。」

帝「……まあその……。なんだ……。ジャンヌ、お前は碌な人生を送らなかったら？だからよ、今お前には、救国の聖処女ジャンヌ・ダルクではなくて、ただの女の子のジャンヌ・ダルクとして生きて欲しいんだ。お前が幸せそうにしてくれると、俺も嬉しいからさ。」

「思うことはいろいろあるが、今は過去と向き合いながら生きたい。復讐はしない。ヴェルフリートは殺す。俺のケジメをつけるため、俺と同じ過去を辿る人を無くならせるため、ヴェルフリートによって散る必要の無かった人達のため、そして、またリアス達の前で、笑顔でただいまと言えるように。」

ジャンヌに微笑むと、ジャンヌは、驚いたように眼を大きく開いた。そしてすぐ後に、ジャンヌは俺と同じように微笑んだ。

ジャンヌ「辛かったでしょうね。」

帝「辛かったよ、本当に。でも、その代わり、今の俺がこうしてられるのもそれのおかげかもしれない。皮肉なものだな。一番忌み嫌う記憶、経験が、今の自分を形作ってるんだから。」

ジャンヌ「もし今、耐えられないなら、私の胸に飛び込んでもいいですよ?」

帝「大丈夫、耐えられる。女に縋り付いてピーピー泣くほど俺も落ちぶれちゃいないさ。」

ジャンヌ「マスターは本当に……。本当に強い心をお持ちですね。闇

に生きたからこそでしようか？」

帝「かもな。つてかジャンヌ、いい加減マスター呼びはやめてくれないか？なんかスゲーむず痒いんだよ。」

ジャンヌ「マスターがダメなら、エミルくん、はどうでしょう？」  
帝「うん、くん付けはまああれだがマスター呼びよりかは何倍もマシだ。」

それから、俺とジャンヌはいろいろなことを話した。俺はリアスやイツセー達のことを。ジャンヌは、祖国と共に戦った人のことを。そして今は趣味とかになっちゃってしまっている。

ジャンヌ「ふふふ、エミルくんってやっぱり年相応の男の子ですね。とても暗い過去を経験した人とは思えません。」

帝「そう言うジャンヌこそ、しつかりと女の子してたよ。可愛らしかった。」

ジャンヌ「そうでしょうか？あ、そう言えば確かさつきエミルくんは私に救国の聖処女ジャンヌではなくただのジャンヌとして生きて欲しいって言ってましたけど、どういう意味ですか？」

帝「ん？そのままの意味だけ？まああれだよ。戦場を駆けてただ祖国のために戦った聖女様が火炙りで殺されるというなんとも悲しい最後に少し思うところがあつてな。真つ当な人として生きれなかつた分、幸せになつて欲しい。ただそれだけだよ。」

ジャンヌ「ええつ、あつ、え、えつとその……ありがとう……ございます……／＼／＼」

帝「？ま、どういたしまして。……ふああ……。」「  
ジャンヌに笑顔を向けると、ジャンヌは顔を赤くした。  
熱でもあるのか？つてかマジで眠い。

ジャンヌ「もしかしてもう眠たいのですか？なら寝ても大丈夫ですよ。エミルくんが寝るまで、私が付いてあげますから。」

帝「おう……じゃ……そうさせてもらおうわ……。」「  
そして俺は、そのまま瞼を落とした。

ジャンヌ「エミルくん、もしかしたら私、エミルくんのこと、好きなかもしれないね。」





間の話？そんなものはなかった。いいね？by帝

帝side

帝「だああ、まあた外したよ。遠距離狙撃って結構難しいのな。」  
エミヤ「いや、最初に比べれば、幾分かは様になっている。それに何の強化もしていない眼でしているんだ。外さない方がおかしい。」  
現在、エミヤの指導の元に、遠距離狙撃の訓練を受けている。やはりエミヤはアーチャーというだけあって、狙撃が上手い。俺なんか足元にも及ばない。

帝「しかし、こんなにでかいのになんでこう軽いのか、ねっ！」  
矢を番え、弦を引き、放つ。大弓なので、弦を引く力もかなり要るし、偶に指に弦が食い込んで痛い。しかしその反面、弓はデカイクセに軽い。見た目と軽さが一致していない。

エミヤ「うむ、今度は当たったようだな。それも綺麗に頭を撃ち抜いている。」

帝「いやあ、動いている物相手に狙撃は結構キツイ。」

エミヤ「そうは言っているが、マスターの要領の良さは眼を見張るものがある。そろそろ私の立ち位置も危なくなってきたし、弓の技術を上げないとな。」

帝「やめてくれエミヤ。まだあんたとの差は散々あるのにこれ以上離されたくはないの、よっつー！」

再び矢を放つ。当てたのは鳥だ。

帝「さてと、今日はこれで終わりかな。」

そう言つて俺は〈烈空の冥海弓〉から、十字架の首飾り、トライ・レスト・セズナム〈失墜の爪牙〉に変える。

エミヤ「ああ、このあとはランサーの元に行くのだろうか？猪や鳥は私が回収しておくから早く行ってやるといい。どうせ家で暇を持て余しているんだろう。」

帝「そこそこ酷いな、お前。」

苦笑いし、別れを告げると、俺はアニキの元へ赴いた。

帝「うーっす。アニキ、いるかー？」



な理由だった。それもそのはず、ここのニーズヘッグは巨大な魔龍。その巨軀に似合わないスピードと、絶大なパワーを誇る。その上、龍殺し系統の武器が効かないと来た。こんなの勝てるはずがない。

ジャンヌ「えっと、皆さん流石にこれはやりすぎでは……。」

クー「いいんだよ嬢ちゃん。男つてのはこんぐらいの無茶しねえと強くなれねえんだよ。」

帝「こんのスパルタ！鬼！鬼畜！マジモンの悪魔！あの陰険ジジブラエえええい!!?」

しかも素の状態でやれつて言うんだぜ？こんな死ぬわ！

帝「ぬあおう!?クツソ、調子に乗りやがって！千刃、二の刃、へ双雷二閃<!!」

ニーズヘッグの懐に潜り込み、腹に二閃の斬撃を浴びせる！  
……が、

帝「うわあ、効いてる様子が見えねえ……。」

確かに血は出ていた。だが、ピクリとも効いていないようで、寧ろニーズヘッグの動きは激しくなるばかりだった。

テネブラエ「えー、ラタトスク様……ご無理なようでしたらもう本気出しても構いませんので……。」

俺の横に出てきたのは燕尾服を着たような姿の犬。闇を司る、センチュリオン、テネブラエだ。

テネブラエ「誰が犬ですか！誰が！」

帝「テネブラエ、心読まないで。あと五月蠅い。ウザイ。話しかけないで。気が散る。」

もお！めんどくさい！何なんこの犬！マジ巫山戯とんちやうぞ!!生きて帰ったら簀巻きにしてどつかの崖から突き落とすぞワレエ!!

帝「うおお危ね！っ へ零滅刃・神威<!!」

これ、結構体に負荷かかるんよねえー。疲れるし。まあ死んだら元も子もないけどね！

帝「行け、神淵剣！」

ババババババババババ!!!

神淵剣を無数に生やし、ニーズヘッグに向けて飛ばす！やはり修行



の成果か、最後に使った時よりもスゲエ増えてる！

「ガアアアアアアアアアア!!!」

ニーズヘッグの体に弾かれるも、ニーズヘッグの眼に突き刺さり、ニーズヘッグが悶えた！やはり体内までは硬くないようだ！

帝「じゃ、最初からこうしたほうが速かったかな？ま、これから死ぬやつに聞いても意味ないよな！じゃあなニーズヘッグ！アイン・ソフ・アウル!!!」

ニーズヘッグの顔に近づき、ニーズヘッグの口内に向けて闇の波動を飛ばした！そしてそのまま顔を抉り、頭を失ったニーズヘッグは、力なく倒れて行った。

クー「おおおい嘘だろ!?こつちくんあぬおあああ!!!」

エミヤ「ランサーが死んだ!」

沖田「この人でなし!」

帝「あれ?なんか俺が悪い感じ?」

ジャンヌ「大丈夫ですよ。こういう時って案外ランサーさんは生きていらつしゃいますから。」

なんかあれだ。よくわかんない!

邪ンヌ「まあよくやったんじゃない?あんな恥ずかしいポーズを決めただけあるわ。」

帝「それ関係ないだろおお!?!やめて!もうそのネタで弄らないで!俺のライフはとつくに0よ!?!」

そんなこんなで魔界に戻ることに。端折り過ぎだつて?何があつたつて?……知らんな。

帝「つてわけで帰つて来たわけだけど、ヴェルフリースの配下とかにバレるとヤバイしローブでも被つて行こう。」

因みに、エミヤやアニキ達は霊体化している。

ネザー「お主は何を言つておる?まあそれは兎も角として、できたぞ。名はヘシャドウ・アイオリオン。一応私の最高傑作だ。大切に扱つてやつてくれ。」

ネザートレイトから受け取ったのは、ダークソードが強化された剣、ヘシャドウ・アイオリオン。1種の芸術品と見てもいいぐらいに

煌びやかな輝きを持っている。やはり、最高傑作というだけある。重量は前より少し増えたものの、それを補うかのように斬れ味がいい。帝「んじやな、ネザートレイト。次は何時になるかわからんが、そんな時はよろしく。」

そう言つて俺はラタトスクの間を出た。目指すはメルトキオ、そこにリアス達がいる。俺は久しぶりに仲間達と会うことへの期待に胸を躍らせ、魔界の大地へと一歩踏み入れた。

T o b e c o n t i n u e d

感動の再会……と思ったけど現実是非情だね！by  
木場

一誠side

帝兄……兄貴が俺達の前から姿を消して、8ヶ月が経った。眼の前から兄貴がいなくなったということにショックを受け、グレモリー眷属の活動はほぼ不能状態。唯一動けるのは俺と木場の2人だけだ。現在は、お世話になっっている宿の食材を買いに来ている。

何処ほつき歩いてんだよあのバカ兄が……こつちの内情も知らないで……！

ドンツ

一誠「のあっ!?!」

? 「す、すまない!大丈夫か?」

考えごとをしていると、ローブを深く被った恐らく男と思う人につかった。

? 「あーすまない。全部拾うよ。」

そう言っつてローブを着た男は林檎やパンが入った袋を拾っていく。そして、ふと強い風が吹いた。

? 「あつ、やつべ……!」

一誠「あ、兄……貴……?」

帝「えーつと……久しぶり……だな、イツセー。」

ローブを被った男、俺の兄は、バツが悪そうな顔をして、頭を掻きながら俺の顔を見てそう言った。

一誠side out

帝side

リアス「うう……グズツ……エミルう……エミルが帰ってきたよお……!」

美優「ふえくん……もう何処かに行かないでよお兄ちゃん……!」

帝「ほ、ほらほら、2人とも泣かないでくれよ……。あとで何でも

言うこと聞くから……。」

そう言った瞬間、俺の腕に抱きついていた2人の眼がキラーン!と輝いた。

やべ、地雷踏んだ。

リアス「何でも……?」

帝「お、おう。何でもだ。」

美優「後で嘘とか言わない?」

帝「当たり前よう!お、漢に二言はないって言うし?そそそ、そもそもそんなにやらかなきゃ俺も漢じゃないし?」

リアス「つていうことはエミルと○○○○なことや○○○○をやっても……。」

美優「○○○○なことや○○○○なことをお願いしても……。」

リアス・美優「全部許容してくれるってことよね……?うふ、うふ、うふ。でゆふふふふふ……!!!」

やべえよ!女の子がしちやいけない笑い方してるよ!うん、やっぱり何でもすると不用意に言わなければよかつた。

エミヤ「ははは、マスターも罪作りな男だ。」

クー「うっわ、坊主に想い寄せてるやつ多いな……。こりや俺の生前の愛人の数より多いぜ……!」

帝「君らちよとうるせえよ!エミヤは笑ってないでどうにかしてくれよ!あとアニキもアニキで何を比べてんだ!」

ジャンヌ「ああ主よ、私はこの方達に勝てるのでしょうか?どうかお答えください……!」

邪ンヌ「あんた……控え目に言つて最低ね。是非煉獄の業火に焼かれることをお勧めするわ。」

沖田「むむむむ……ライバルが多い……!」

帝「ジャンヌさん!?あんたは何を神様に聞いてんのかな!?邪ンヌさんはそな物騒なことはやめてよ!お願いだから!!!あと沖田も何を競ってるの!」

ゼファイ「うわあ……ミカドって結構女の子待らしてるね。」

ルアン「これはラノベシステムの主人公に値して……な、何!?それ以上

だ?!」

シエル「ミカド……その……頑張つて？」

「君らほんつとぶれないねえ!? 尊敬するよほんと!!

3人【「いやあ／＼。】

「褒めてないからな!」

もうやだ、僕ボケに回っていい?

一誠「……………」

帝「どした? イッセー。」

一誠「いや、その人ら、誰?」

帝「あ……むっ、魔族の反応! 逝ってくる!」

一誠「いやそれ字が違うから!」

—————

そこそこの魔族が群れを成してこちら側に猛スピードで迫ってきた。

帝「うん、結構なお手前で。」

一誠「お茶飲んだ後みてえなこと言うなよ。」

帝「もーいーじやーん。こんなんすぐ終わるつてー。」

そう言つて俺は魔族の気配のする群れに剣群を発生させた。

帝「ほらな「キシヤアアツツ!!」うっさい、邪魔。」

俺は飛びかかってきた魔族を、槍ごと貫いて消した。

木場「ず、随分見ないうちに差をつけられたね……。今のだつて槍の穂先に槍の穂先をぶつけて貫いていたし、技量が果てしなく上がっている気がするよ……。」

帝「まあそこらへんは気にするな。なにせ俺だし。」

木場「それもそうだね!」

一誠「木場が投げやりになった!」

帝「イッセー、もう……諦めろ。ツツコミなんてただ疲れるだけだぜ…………?」

一誠「なんで悟ったような顔してんの!」

帝「……今度ドライグを介して俺の精神世界に来い。そこで全てがわかる。」

遠い目で俺はそう言う。だってあいっら……ツツコンでもツツコンでもキリがないもん。

帝「まーとりあえず、あれだ。俺の家来るか？」

全員『へあ？』

まあなんとも間の抜けた声が出ることで。

――――

帝「うん、ニラが挟まった。」

先程、食事処でニラの肉炒めを食べたが、上手い具合に歯にニラが挟まった。

リアス「本当？少し見せて？」

帝「うん、別にいいけど。んあ……。」

リアス「ちゅっ。」

帝「なっ……!?!」

なんと、少し口を開けた時にリアスがキスをしてきた。

帝「つたく、不意打ちはやめろよな。こっちだって心の準備があるんだからよ。」

リアス「ふふっ♪」

そんなことは気にしないと云わんばかりに腕に抱きつくリアス。諦めて、仕方ないといった表情で空いた手で頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。

ゼファイ「うわあ、バカップルぶり炸裂だね。」

ーはっはっは、黙りたまえホモシヨタ腐れニート君。

ゼファイ「どんだん俺の扱いが酷くなってるよね!?!確信持つて言えるよこれ!?!」

いや、だって……ゼファイだし……。あ、ニラ取れた。

ルアン・シエル【オロロロロロロ……さ、砂糖がオロロロロロロロロ……!】

ーねえ何!?!俺が悪いの!?!

シエル【いやだって……ねえ……?】

ルアン【あんなラブコメよろしくイチャイチャバカップルぶりを見せつけられたら誰でも嫌でも砂糖を物理で吐くよ。】

え、マジ!?今物理で砂糖吐いてたの!?

もーなんか頭痛くなってきた。

まあなんやかんやあり、俺達は俺の家に着いた。

帝「よーし、開けんぞー。」

鍵を挿し、ドアのロックを外す。そしてゆっくりと扉を開ける。

帝「ひぶちいつ!?うっわ、なんだこれっぷちっ!?!」

中は埃塗れだった。

帝「おいロイド、確か俺、お前に掃除任せてたよな?」

俺は旅の仲間だった、赤い服をきた、ツンツン髪の子の青年、ロイドにドスを効かせた声で聞いた。

ロイド「い、いや違うんだエミル!これには海よりも山よりも深い理由がー。」

帝「……ロイド……。」

ロイド「……はい……。」

帝「後で君には俺特製の激辛麻婆を作ってしんぜよう。」

その後、掃除を終えた家で、1人の青年の声にならない悲鳴が響いた。

To be continued.

## 砂塵戦争、開幕

帝 side

帝「さて、状況報告とでもいこうか。まず俺の方だがー。」

メルトキオでの自宅、キヤスタニエ邸のリビングで、ここ7ヶ月の状況報告となった。当然俺は、質疑応答も織りまぜながら、死んだ後のこと、ニブルヘイムでのことは包み隠さずゲロった。

帝「ーというわけだ。まあ確かに常識とかそういう範疇を超えた話で非情に信じ難い話だが、これもまともな一種の現実だと思ってくれ。さて、アザゼル、何か聞きたそうだが。」

アザゼル「……帝、お前は新しく、禁手を超えた禁手、禁手第二段階を会得したと言っていたな？それは木場やイツセー、ギヤスパーにも出来そうか？」

帝「本人次第、としか言いようがないな。神器は宿主の想いに応えてより強力になる、という特性を最大限に発揮した結果が禁手第二段階だ。ま、幸いグレモリー眷属は異例が多いんだ。もしかすれば、イツセーと祐斗、そしてギヤスパーは近い内に至れるかもな。」

アザゼルにそう言うと、そうか。と言って何かを考え始めた。

リアス「こちらの状況も伝えるわ。まず、貴方が私たちの前から消えた直後のことだけどー。」

そこからはリアス達の状況報告となった。どうやら、俺が死んだ後、俺が倒れていた場所に兵士の駒が落ちていたらしい。ちなみに今はリアスが嚴重に保管しているとのこと。それと、その日を境にこちらの世界中で、異常気象と自然災害が相次いで発生しているらしい。最早これは厄災レベルとメルトキオの王は判断し、王から直々に、厄災対策として、Sea view the world leaseaver S E L L を設立。ロイドやリアス達は既にそこに加入済みだそうな。

だからロイドとかはイヤホンマイクみたいな装置をつけてるのか？

リアス「ーというわけなの。エミル、貴方はこの現象について何かわかるかしら？」



帝「……………もしかすればヴェルフリートが存在がその現象を引き起こしたのかもしれない。先程話したように、ヴェルフリートは現在力を再び蓄えるために眠りに付いている。それに恐らくマナが使われ、なんらかの形で自然のバランスが崩れ、このような事態が発生している……といったところか。それについては、俺はマシにさせるくらいの方法なら知っている。」

アザゼル「どんな方法なんだ？」

帝「地方地方には、ある神殿があつてな。俺の配下のエイトセンチュリオンが眠っていた神殿だ。その神殿の最奥には祭壇がある。その祭壇は、その地方の龍脈やらなんやらに繋がっているな。8つの地方を巡り歩く必要があるが、その地方の祭壇で、俺がその地方のセンチュリオンと共に、マナを流し込む。それで少しはその現象もマシにはなるはずだ。」

一誠「龍脈やらなんやらって、スゲーハッキリしないんだけど……………」

帝「正直言つたところ、俺もどうやって何と何に繋がっているかはわからない。この全てを見透かす〈テイステイニー・アイ〉をもつてしても……………」

一誠「は!?! 兄貴そんな能力あつたのかよ!?!」

帝「いや、言ってみただけだけど？」

一誠「んなつ!?!」

とはいえ、これは世界規模で危ない。ヴェルフリートが眠っているだけでもこれ、ということは目覚めれば更に状況が酷くなる。ならば神宮へ行くしかー

ウーツウーツウーツ!

「ロイド・アーヴィング様、ロイド・アーヴィング様御一行はいらつしやいますか! トリエットより緊急救援要請が発せられています! 至急現地への移動をお願いします! 繰り返しますー!」

俺の考え事を遮断するかのようでサイレンが鳴った。

ロイド「エミル! 話は後だ! トリエットに行くぞー!」

急かされて俺はトリエットへの魔方陣を開いた。

やはり異常気象のせいか、トリエツトは前回訪れた時よりも非常に暑い。そして、肝心のトリエツトだが、巨大な竜巻がこちらに迫っていた。

帝「マルタ！メルトキオへの転移魔方陣を町の入り口に設置！リアス達は住民の避難、そしてパニックに陥れないように！俺はどうかしてあの竜巻を止める！ぶっつけ本番だが頼むぞ！解散！」

そう叫び、俺達は解散し、マルタは指示通りに町の入り口へ、リアス達は住民の避難、俺は町を出て、どうにか竜巻を止める方法を模索した。

テンペスト・ブレイザーは……ダメだ、上手く相殺させるには出力が足りない！神淵剣で壁を……これも無理だ！どうすれば……!!

帝「ハハハ……ハハハハ……巫山戯んじゃねえぞクソが!!!」

俺が遠目で目にしたのは、無数の龍——魔龍クラスの龍だった。ティアマト、ファブニール、ワーム等の多数の龍だった。本来、ここにははならない魔龍だが、ヴェルフリートの復活により、ニブルヘイムとの境が曖昧になったのだろう。それよりも思っていたのは倒したはずのニーズヘッグがここに存在していたことだった。それに前回倒した時より、マナの量が非常に多い。

クー「で、どうすんだよ坊主？」

帝「幸い、竜巻の進行速度はほぼ一定。しかもそれなりに遅い。となれば、一番脅威となるのはあの龍共だが……倒すしかねえんだろうな……。邪ンヌ、どうにかできねえか？一応曲がりなりにも竜の魔女なんだろう？」

邪ンヌ「あんたの魔力を媒介に召喚ならできると？」

帝「やっぱ遠慮しとく。……考えても仕方ないな。行くぞお前ら。ま、精々竜巻に巻き込まれないように頑張んな。最悪囮にでもなつてくれてもいいし。とにかくまあ生きて帰れや。」

エミヤ「ふむ、心外だな。そこまで私達は頼りないかね？」

帝「何を言うかと思えば……少し命の心配をしてやったぐらいで何を言う？お前らはこんなところでくたばるほど軟弱でもないだろう？」

ジャンヌ「いざとなったら宝具を使って皆さんを守ります！」  
帝「さて、マスター命令だ！魔龍共を一匹残さず駆逐しろ！」  
俺はそう叫び、転移魔方陣が刻まれた剣を魔龍の群れに投げた。  
T o b e c o n t i n u e d .



それと、君の質問についてだが……うん、下らないわけではないけどまああれだよ、ヴェルフリート様が僕らに提案してくれた遊びだよ。」

帝「ほう、人の命を散らすことが遊びと？」

軽く俺は無表情のまま青筋を浮かべた。

リエル「やだちよつと、勘違いしないで下さいます？ヴェルフリート様からはただ人間を恐怖に陥れて来いって言われたただだよ！それのどこが悪いんだい！」

帝「悪いところしかないからな!?んんっ、そろそろちゃんとな俺の質問に答えて貰おうか？」

リエル「あらく、やっぱ逃げられないか……。うん、あれはね……量産型の龍と量産型の魔龍だよ。」

帝「何？量産型の魔龍だと!？」

リエル「うん、そだよ。ヴェルフリート様が粗方、型を眠りながらも作ってくださるんだよ。しかもご丁寧に僕達の言うことには絶対服従するようにしてくれているからね。ホント、ヴェルフリート様には頭が上がらないよ。」

まったく、傍迷惑な遊びだな。こっちの苦労とかも考えろってんだ。

帝「だが、そんなことをして何になる？まさか人の負の感情によって復活への時期が早まるとかか？」

リエル「……君のことが気持ち悪く見えてきた僕はおかしくないよね？何というか……君の推理力は化け物じみてるよ、本当に。」

帝「いやまあ、そこは俺だからってことで納得しー」

リエル「ないからね!？」

帝「むう、ノリ悪いな。まあ兎も角目的がわかった以上……見す見すお前を見過ごすわけには行かないな。」

その一言で、俺は顔を引き締めた。

リエル「……帝君、家に来ないかい？今ならヴェルフリート様も君のやったことには目を瞑ってくれるよ。だから……どうだい？」

帝「わかりきってるだろう？俺の答えなんて、聞くまでもないんじゃないか？」

リエル「そりやそうかい。わかった。何となくは予想していたよ。でもこれで……全うな遊び殺し合いができるよ。」

暫くの沈黙の後、俺とリエルは一気に詰め寄り、互いに刃を打ち交わした。

帝「くっそ、やっぱナイフとじゃ分が悪いなっ！」

リエル「そう言う割には結構防いでるじゃないかっ！」

互いに激しく刃を打ち付けて何度目かの時、リエルの刃を防いだ時、言いようのない悪寒に襲われた。

帝「っぐっ!？」

急いでバックステップをしてリエルの元を離れた。

リエル「あく、やっぱわかってたか。」

リエルの左手には、白と黒が混ざった剣があった。

帝「全く、笑えないことばっかだな。よりによって、ソウルキャリバーの魂の聖剣があるとか……。」

リエル「ははは、そこまでわかってのか。」

魂の概念に干渉することのできる創造の四神伝説に登場する剣。確か持っていた神は生と死を司る神……だったか。あいつに触れられれば、死の運命からは逃れられない。何故ならあの剣は、生と死、どちらかの概念を剣に纏わせて敵を斬ることができるから。擦り傷をつけられた程度でも死の運命からは逃れられない。一撃、浅いのを貰ってもゲームオーバー。残機などはない。正直、性質の悪いゲームでもこんな鬼畜じゃない。

リエル「さて、今度は僕からだ！」

そして始まったリエルの猛攻。一撃一撃、特に〈魂の聖剣〉の攻撃には特に全神経を集中して躲す。武器で防ぐなどはできない。〈魂の聖剣〉は、万物の生と死を選ぶことができる。それは生物以外のものも例外ではない。つまり、今ここで武器での防御に徹しても良いが、武器を壊すことは覚悟しなければならぬ、ということだ。

リエル「ほらほらどうしたんだい!!君だって持ってるんだろ!? だったらそれを使いなよ! この剣に対抗できるのは同じく創造の四神の剣以外ないんだからね!」

帝「簡単に言ってくれるな！俺が使いこなせていないのは知ってるだろ！」

リエル「そうか……だったら潔く死ぬといい！」

リエルはそう叫び、俺に〈魂の聖剣〉を振り下ろしてきた。

ここでまた死ぬってのか？……つぎけんな……巫山戯んじゃねえよ……!!!ここで死んだら、また何もできなくなるだろ!!!過去とのケジメをつけるまで、死ねない……死ぬるわけねえんだよ!!!

その時、俺の左手がほんの少しの光を宿した。俺はその光に可能性をかけ、剣の名を叫んだ。

帝「〈終の聖剣 理想郷〉!!!」

振り抜いた剣は、リエルの剣を受け流し、リエルの剣はそのまま地へと振り下ろされ、爆発音にも似た音を立て、大きく砂煙を起こした。

帝「たく、生意気な剣だ。今だけは力を貸してやるとか……面白え、調教し甲斐があるじゃねえかよ。」

俺は悪態を付きながら砂煙を剣を振って吹き飛ばした。

リエル「なんだい、嘘をついてたのかい？！しっかり使えてるじゃないか。」

帝「うっせ、御都合主義で発動したんだよ。」

そう言いながら、〈始りの聖剣 楽園〉を魔方陣から取り出す。

帝「あ？自分らを合体させろお？……あっちよおまつ?!体勝手に――

――友を護り行く我が覚悟、今刮目して聞き給え！

――滅びを纏う煉獄の刃

――光を宿す嵐の刃

――相反せし双極の刃は始りと終の名の下に！

――目醒めよ！我が意思を以て！

――我が名は皇帝！

――汝の道は、今我が決意によって決定された！さあ今ここに、我が覚悟と意思の元に、汝、始りと終を司る刃となれ！

――〈無の聖剣〉!!!  
エクスカリバー・ゼロ

剣に意識を一時的に奪われ、剣は本来の姿となった。刃は黄金に輝

き、刀身は黒く染め上げられ、ちらほらと銀の装飾が施された剣。

帝「おまつてめマジ巫山戯んなよ！このクソ駄剣ー！ん？あ、そ、それは……ナマ言つてスンマセンっした!!!」

俺と剣との遣り取りに、言葉を失ったのか、リエルは話しかけてこなかった。

リエル「君……怖いもの知らずだね……いつかその剣に寝首かかれるよ……!!」

帝「知るか！意識ある以上、俺たちと同等に扱わなければこいつがなんか可哀そうだろ！」

リエル「ま、そんな異常性の高い君にはもう慣れるしかないね。さて、続きを始めようか！」

帝「あつだから待つて！コンビネーションとかそんな無茶苦茶な状態でこつち来ないでええええええ!!!」

To be continued.



## 魔龍、マジでどこ?・by帝

サーヴァントside

エミヤ「しかししぶといな。数が多すぎるというのも考えものだな。」

そう言いながら手に携えた夫婦剣で龍を斬るエミヤ。

沖田「マスターぐらいの強さになれたらいいんですけどね。まあマスターじゃないので無理でしょうけど。」

クー「その意見には賛成だ。ってか何だよ!?!素でサーヴァントと互角とか笑えねえわ!?!マスターの癖にやたら戦闘能力が高いわ、サーヴァントより強いわ……。」

ブツブツとクー・フリーンは愚痴を零しながら龍の心臓部に当たる場所を得物で突く。

邪ンヌ「あーもう!面倒臭いわね!何で私達まで巻き込まれなきゃいけないのよ!絶対あのバカのせいよ!決めました、帰ったら絶対にあのバカに絶対に美味しい物を作ってもらいます!」

ドオオオオオオオンツ!!!!

何かサーヴァント達の元に飛んで来た。

エミヤ「何事だ!?!」

パラパラと土埃が空を舞う。そしてその土埃の中心にいたのは、

帝「痛ええええ!マジで容赦ないよな彼奴!あんにやる、去り際に変な爆弾持たせやがって!覚えとけよ!次会う時は丸刈りにしてやっかんな!」

右腕から血をダラダラと垂れ流しながらこの場にいないリエルに向けて怒りを飛ばしていた帝だった。

サーヴァントside out

帝side

剣と剣が何度も交錯し激しい剣戟を織り成していた。

リエル「さて、ここからクライマックスだんぬ?ちよつと待ってね。どつたのアラン?」

いきなりリエルは耳元で魔方阵を展開させてアランという名の誰

かと会話をしていた。

リエル「えええ!?何で!?今丁度良かったのにい!!……な!?わ、わかった!すぐ行く!」

何を聞いたのか、リエルはいきなり目の色を変えた。

リエル「ごめん帝君!ちよつと用事できちった!また遊んでね!あ、これお土産!」

リエルはそう言うと、何かを俺に渡してそそくさと帰って行った。

帝「……どうすんのよこれ……。」

一気に興奮ぎめしてしまったので、渡された何かを確認するために右腕を開くと……

「リエル君特性爆破式玩具ナイフ!」

という文字が書かれた紙と玩具のナイフがあった。

よく観察しようとナイフの全体をまじまじと見ていると……

ピッピッピッピッピッ

帝「ゑ……………」

裏面にはタイマーがついた液晶があった。

「注意!このナイフの爆発は腕一本持つていく可能性があるので使用の際は十分に注意すること!」

帝「……………!!わかりやすいところに書け

やああああああああ!!!」

急いでナイフを投げようとしたが時既に遅し、ナイフが右腕から離れた瞬間に爆発した。俺は爆風に飛ばされて後ろへと飛んで行くこととなった。

帝「痛ええええええ!マジで容赦ないよな彼奴!あんにやる、去り際に変な爆弾持たせやがって!覚えとけよ!次会う時は丸刈りにしてやつかな!」

ジャンヌ「エ、エミルくん!?大丈夫ですか!」

帝「大丈夫だよ。なんか右腕痛いけどなんとか。」

ジャンヌにそう答え、ポーチからスペシャルグミを取り出した。

帝「あああ、生き返るう。」モキュモキュ

スペシャルグミを食べたことにより、先ほど失っていた体力や魔力

が戻ってきた。

「ボアアアアッ！」

帝「おうつと!?危ないなっ！」

つて待て!?なんか人型もいるんだけど!?龍に跨ってるんだけど!?あれか竜騎士か!?龍関係ならなんでもいいのか!?

帝「……ツツコミ所は色々あるけど、取り敢えずはここ切り抜けな  
いとな。よし、休憩は終わりだ。」

そう言つて俺は雷切を抜刀した。

エミヤ「マスター、安静にしていってくれ。君が倒れてしまえば、私  
達は動けなくなるんだぞ。」

帝「ごめん、どうにも俺、守られるのは性に合わねえんだよな。」

クー「……それが坊主の答えなら、俺らはただ従うだけだ。だが、こ  
れだけは約束してくれ。死ぬな。」

帝「分かつて……ああ、約束するよ。」

「ガアアアアアアッ!!」

竜騎士は俺に槍を突き出す。しかし、俺は槍を受け流し、受け流し  
た動作のまま竜騎士を斬った。

帝「絶刀の型、叢雲の構え……さあ、俺に一撃でも入れられるかな?」  
その言葉を発した瞬間、龍達が押し寄せてきた。

絶刀の型、叢雲の構えは、敵の攻撃を受け流しながら攻撃する、常  
時カウンター状態となる。動きを最小限に抑えるためにエネルギー  
の消費効率は非常にいい。しかし、極度の集中状態になるため、精神  
的にかなり疲れる構えだ。

そして、龍達の波が、俺を覆った。

—————

帝「疲れた!主に精神的に!」

龍達が灰となつて消えてゆく中、俺は地面にへたり込んでいた。

エミヤ「お疲れ様だ、マスター。それはそれとして、あの竜巻、如  
何に治めようか。」

帝「……皆、これで俺ぶつ倒れたら運んで貰うぜ。」

皆が思案している中、俺はそう言つて〈無の聖剣〉を取り出し、竜

卷へと駆けた。

竜巻を構成するのは主に風。つまり風の概念を消せばいいんだよ

！

帝「唸れ……概念消去！」ラスティ・フラム

俺が竜巻を斬ると、次元の歪みが発生し、竜巻の風は瞬く間に次元の歪みに吸い込まれた。

帝「……なんか呆気なかったな。」

〈無の聖剣〉を戻し、少し落胆を覚えながら踵を返した。

帝「あれ、そう言えば魔龍は？」

—————

ジャンヌ「わあ……すごく白くてドロドロしてますね。」

帝「うん……あ、手に付いた。ベタベタする……。そこそこ匂いキツイ……。」

ジャンヌ「エミルくん、私もう待ちきれないです！」

帝「はいはい。どうぞ。」

そう言つて俺は白いドロドロの付いた棒をジャンヌに差し出す。

ジャンヌ「い、いただきます……はむっ！」

ジャンヌは、白いドロドロを口に含むと、味わうように咀嚼して飲み込んだ。

ジャンヌ「凄く温かいです。でも、濃くって喉に絡みつきます。」

帝「そう？はい、水。」

ジャンヌ「んっんっんっ……ぶあ……！」

俺が水を渡すと、ジャンヌは喉を鳴らして水を飲んだ。

ジャンヌ「美味しいですね、マシユマロ。」

帝「うん、美味しいな。チョコフォンデュがあればもつといいんだが。」

ん？何々？表現が紛らわしい？いや……事実じゃん。

あの竜巻騒動の後、メルトキオに戻り、まだ時間も余っていたので、各自自由行動とした。俺は家で久しぶりの休息を満喫していたのだが、ふと、マシユマロが食べたくなったので、リビングに行くと、ジャンヌもいたので一緒に食べることにした。

帝「さつて、マシユマロ食ったらまた料理の勉強でもするか？」

ジャンヌ「はい、今日もよろしくお願いします。」

実は、ニブルヘイムでの修行中、ジャンヌが料理の勉強をしたと言い始めた。まあ生前女の子らしいこととかあんまりできなかったからだろうと思って教えているわけだが、なかなか？み込みが早く、こちらも教え甲斐があるというものだ。

帝「……熱アツ!？」

どうやら舌を火傷したみたいだ……。痛い……。

To be continued.

最近サブタイの方向性とかネタが尽きて来た。 b y  
作者

帝 s i d e

帝「うつ、臭え……。」

そう言いながら、ベッドから出る俺。何故か横には裸のリアスと美優。そして下半身に何も纏わぬ俺。

これってもしかしなくても……。

帝「ハア……。」

ため息を吐きながらファブオーズで部屋の中をファブる。

ー精霊さんと龍のお二人さん集合お！

ラタ【ケツから】

ドライグ【屁が出る】

ゼノン【3秒前!】

ラタ【3!】

ドライグ【2!】

ゼノン【1!】

ー出ねえから!ってかドライグとゼノンそんなキャラだったか

!?

ドライグ【相棒、俺達龍だつて】

ゼノン【偶にははっちゃけたいのだよ。】

ーあ、そうなの?つてそうじゃなくて相談がある。最近右腕が妙に骨に響く感じで痛むんだが、何か知らないか?

ドライグ【いや、特に俺は知らんぞ?】

ゼノン【右に同じくだ。】

ラタ【……いや、これといって該当するものは無い……。な。(確かエミルの右腕にはイノセンスがあったはず。もしかすればイノセンスとあの反応が共鳴して同調しつつある……。?いや、ないな。あれは既にクソ神共に全部奪われたはずだ。)】

ーそうか、何も無いか。すまん。

一通りファブったら、リアスと美優に再び布団を掛け直し、白い無地のTシャツとジャージ下に着替え、タオルも取り出し、リビングへと降りて行った。

エミヤ「おはよう、マスター。昨夜はお楽しみだったようだな。」

帝「おはよう。寝てる間にやられてお楽しみもクソもあるかよ。」

違和感無くエプロンを着込み、朝食を作る我らがオカン<sup>エミヤ</sup>。

エミヤ「マスター、せめてオカンのようなオトンにしてくれないか？」

帝「心の中を勝手に読むなよ。じゃ、少し走り込んで来る。」

そう言って俺は家を出た。目指すは城下町の外。城下町の外に沿って10周。これを毎日だ。やはり、俺は体力が些か今の神器を扱いきるには足りないらしいので、こうやって自分で体力をつけたいといけない。

帝「……よし、行くか。」

顔をパンパンと叩いて未だに残る眠気を追い出し、気合いを入れ直して地を蹴った。

—————

帝「ハア……ハア……ただいま……。」

首から下げたタオルを濡らして、俺は家へと戻ってきた。

ジャンヌ「お帰りなさい……きやあ！／＼」

帝「ん？何かおかしいところでもあんのか？」

ジャンヌ「い、いえ……その……服が張り付いて……濡れて透けていると言いますか……／＼」

帝「ああ、ごめんごめん。すぐ着替えるよ。」

赤面するジャンヌにそう言って部屋へ戻ろうとすると……

美優「お兄ちゃん、おかえり。」

リアス「お帰りなさい、エミル。」

ランニング中に起きたであろう2人が俺に抱きついてきた。

帝「あの……動きにくいんだけど……って匂い嗅ぐな……、うっ

……おうふ……やめろよ、くすぐりたいだろ……。」

リアス「エミルの匂い……エミルの汗の匂い……♡」

美優「お兄ちゃん……お兄ちゃん……♡」

……どんどん甘ったるい声になってらっしやるんですけど……。  
エミヤ助けて……。

エミヤに救いの視線を送ったが、エミヤはただニヤニヤと笑い、諦めるマスター、と言わんばかりに視線をこちらに配らせていた。

この薄情者め！

帝「……リアス、美優。今から真剣なお話。俺が寝てる間に君達……やったでしょ。」

リアスと美優を目の前で正座させる。

リアス「はう……。」

美優「ごめんなさい……。」

帝「せめてやるなら一声くらいかけてくれてもいいんじゃないか？俺だつて心の準備とか必要だし、そういう快樂とかに興味がないわけではない。そもそもそういう行為は、互いの同意の上でやった方がいいと思うんよ。そうじゃないと、独りよがりなものになってただ虚しいだけじゃないのか？」

リアス「おっしやる通りです……。」

美優「ごめんなさい……。」

反省の色は十分に見られるし、少しは許してあげようかな？半年以上会えなかった分、俺だつてそれなりに溜まってたと思うし。

帝「ハア……もういいよ。リアスと美優だつて溜まってただろうしな。……ま、言ってくればたっぷりと可愛がつてやるから……？」

リアス・美優「~~~~~つつつつ!!!」

最後は2人の耳元で囁くように言うと、2人がこちらに期待するような少し蕩けた視線を向けた。

帝「ははは……流石にここじやダメだよ。」

そう言いながら、2人の頭を優しく撫でる。

ゼファイ「うっわ！流石天性の女ったらし！」

ーはっはっはっは……。 teme は後でタライ地獄だ。

ゼファイ「いやあああああ!!! タライはもう見たくない





木場「……なら、これはどうかかな！」

祐斗はそう叫ぶと、両手に巨大な剣を創り出して俺に斬りかかってきた。

帝「ぬあつぶね!？」

横薙ぎの一撃目を体を反らして躲し、二撃目は手に持ったリベレーターとシャドウアイオリオンをクロスさせて受け止めた。

帝「驚いたな。まさかそんな剣創って振るってもあんまりスピードが変わらないとは……。そこそこ成長したんじゃないか？」

木場「帝君はやっぱりちよつと驚くだけだったか……。」

祐斗は悔しそうに顔を少し歪める。

ゼノヴィア「私のことも忘れないで貰おうか！」

帝「チツ！つらよつと！」

祐斗の剣の刃を無理矢理折り、今度はゼノヴィアが振り下ろしてくるデュランダルを受け止めた。

帝「相変わらずの脳筋だな。誰にでもできる技術でもいいから習ってみたらどうだ？」

ゼノヴィア「わかりきってはいるけど、やっぱり君に言われると自信を無くしそうだっ！」

帝「そうだな……例えば、この引っ込んでる部分に引っ掛けて後ろに弾き飛ばすとかかな！」

デュランダルを受け止めたまま、ゼノヴィアとの距離を詰め、デュランダルの引っこみ部分に剣を引っ掛けて後ろに弾き飛ばした。

ゼノヴィア「何っ!?!……エミルに敵わないとは思っていたけど、いざそうなると少し落ち込んでしまうね。」

帝「まあそこはゼノヴィアの努力次第だな。」

木場「じゃあ帝君、僕と正々堂々一騎打ちといこうじゃないか。」

祐斗の申し出を受諾し、ゼノヴィアを少し離れたところへと離れさせる。

帝「……神淵剣！」

木場「そう来ると思っていたよ！行け！聖魔剣！」

帝「はあっ!?!」

俺が神淵剣を地面から射出すると、祐斗もそれに従って地面から聖魔剣を射出した。

帝「嘘おん……技完璧に盗まれてるし……。」

木場「君の技、すっかりと盗ませて貰ったよ。とは言ってもまだまだ頑丈さが足りないけどね。」

帝「……面白い……。いいだろう、ここまで成長を見せてくれたんだ。一発、ご褒美でもくれてやるよ。それとも一言……死ぬなよ。……零滅刃・神威……！」

木場「それが……禁手第二段階……！」

祐斗は最大限に警戒を示した。

帝「……静寂に響き、月陽の因果をも反転させる。其は千刃の極意なり。今、十三の内一つの刃が、汝に牙を剥く……！千刃秘奥儀、第壹ノ刃……〈月光陽闇〉！」

居合の構えを取り、迸る白炎と黒雷と、体や自然からの生体エネルギーを神威へと集め、一気に斬撃として解き放つ。

木場「っ!? 拙いっ!?」

祐斗は本能的になのか、聖魔剣で厚い壁を創り出す。しかし、聖魔剣は紙のようにスパスパと折れる。

帝「おーい、祐斗ー生きてるかー? 生きてんならそこから早く離れろよー。」

木場「えーつと……帝君、腕、どうしたの……?」

俺が言った通りにその場から離脱した祐斗は俺の元に駆け寄ってきた。

帝「見てわからんか? だれてんだよ。」

木場「いや、そうじゃなくてだね……。」

帝「冗談。実はあの技使ったら俺の腕が強烈な筋肉痛起こす。マジ痛い。死ぬ。」

木場「じゃあ帝君は剣を握れないってことだからー。」

帝「甘いわこの小童が!」

木場「うわっ!? 危ないよ帝君!」

俺はまるで弱音を吐く弟子を叱る師匠の如き迫力で木場の顎を蹴



キャラが定まらぬ理由、ここにあり！by 作者

帝 side

帝「っ!!」

リアス「ど、どうしたのエミル!？」

夕食を取っている時だった。俺は嘗て感じた事のある気配を感じ取った。

帝「この気配……クソツ！」

気が付けばドアを飛び出し、平原へと向かっていた。

帝「テンペスト・ブレイザアアア!!!」

闇の波動を前方に飛ばし、空かさずスペシャルグミを食べた。

ヴェル「随分な挨拶だな、奴隷よ。」

帝「テメエ、何故ここに……!あの傷なら、あと一ヶ月は休む必要があつたはずだ。……まさかお前、この大地の生命エネルギーを……!？」

ヴェル「貴様の推理は未恐ろしいな。リエルも言っていた通りか。最早その域まで達すれば、一種の思考の読み取りとも言えるな。……さて、前は思いも寄らぬ事態が起きたが、今度こそは、その体を貰い受けようか！」

帝「戯言を……今すぐここで沈めてやる!<sup>バランス・フル・ブレイカー!</sup>全開放禁手!!!」

一気に全ての神器を禁手化させ、ヴェルフリートの元へと距離を詰めた。

帝「つらあっ!!」

手に携えた無の聖剣を一気に振り下ろした。

ヴェル「ほう、よもやそこまでに至っておるとはな。どれ、我も少しばかり本気というものを見せてやろうか。」

ガキイイイイインツツツ!!!

帝「なっ!?ク……ソがあああああ!!!」

突如魔力で創られた剣に受け止められるも、俺は獣の如く咆哮を上げ、押し潰さんと腕に力を入れた。

その後、無駄だと判断し、一度ヴェルフリートの元から離脱し、再

度突進する。全力を込めて、ヴェルフリートに剣を打ち付けるも、俺の速度をも超えて悉くを防ぐ。縦、横、払い戻し、袈裟斬り、逆袈裟斬り、右斜め下ろし、左斜め上げ、突き、遂には周りを跳躍し、移動しながらあらゆる方向からの斬撃を繰り返すも、ただ無情に打ち返されるばかり。

帝「ダアツラアツ!!!」

無の聖剣から、終の聖剣と始りの聖剣に戻し、蹴りも取り入れて手数を増やすも、それさえも防がれる。

帝「ハアツ……ハアツ……ハアツ……クツ……!」

ヴェル「フハハハハハハハハハハ!!!良い、実に良く面白き余興であつたぞ!では、褒美でも遣わそうか。」

息を切らしながらもヴェルフリートを睨むが、ヴェルフリートは気にも留めず、高らかに嗤った。

ヴェル「そうだな、ここは一つ、サーヴァント共を呼び出してやろうか。」

帝「……まだそんなモン隠してやがったか……くっ!」

不意に背後から迫っていた武器をなんとか躲す。

?「ほう、ヴェルフリートの実力の一角をも引き出すだけでなく不意打ちまで避けるとはな……貴様、名を名乗れ。此度は特別に、我が名乗ることを許可してやろう。」

帝「エミル・キャスタニエだ。」

現れたのは、黄金の鎧を身に纏い、逆立った金髪をもち、傲慢な態度を取る赤目の青年。

?「……………」

次いで現れたのは、黒いオーラと鎧を身に纏い、目が見えるはずの所からは赤い光を出す騎士のような格好を取った人型。

?「まさかヴェルフリート殿の手を煩わせてしまうとは、不覚であつたな……。貴殿、相応の覚悟はできているのだろうか?」

右目の斜め下に泣きぼくろをもった、赤い長槍と黄色い短槍を持った美形の青年。

?「おお、そこにいるのはもしや……我が麗しき聖処女、ジャンヌ

……!」

ギョロつと飛び出た目をした、襟巻きのようなものが付いた黒いローブを着た大柄の男の言葉に後ろを向くと、リアス達がいた。

ジャンヌ「ど、誰方……ですか……?」

ジル「まさか……お忘れになられたと言うのですか! 私です、私めでございます! ジル・ド・レエでございます!」

ジル・ド・レエ……確かジャンヌと共にオルレアン包囲網で戦い、幼い少年を殺すことに性的興奮を覚えるド変態だったか。

ジャンヌ「ジ、ジル……本当にジルだと言うのですか……?」

ジル「ええ、真正正銘ジル・ド・レエでございます。さあ、参りましょうジャンヌ。そして今こそ……今こそあの忌々しい神への復讐を果たす時です!」

ジャンヌ「ジル……私は……エミルくん?」

帝「止め、ジャンヌ。あいつからはいい気配がしない。」

スペシャルグミをまた食べて回復した俺はジャンヌの前に腕を伸ばして制止させた。

ジル「ほう、貴方、私達の邪魔立てをするとでも?」

帝「だったらどうするつもりかな? ド変態が。」

ジル「グギギギギ……貴様アアアアアアアア!!!」

挑発するように笑うと、ジル・ド・レエは激昂し、ヒトデのような気持ち悪い生物を召喚した。

帝「うおっ!? なんじゃこりや!? キモッ!」

何故か執拗に俺を狙うヒトデを二刀を使って斬り、神淵剣を空から降らせる。

帝「……はあ……自己再生能力持ちか……。こりや厄介だな……。」

ジル「如何でございますでしょうか? 我が可愛いペットの海魔達は。さあ、得体の知れないものに吞まれるという恐怖を示すがいい!」

?「A a a a a a R r r r r r r S A a a a a a a!!!」

帝「ツ!?!」

ガアンツ! と剣同士がぶつかったとは思えない程の鈍い音が響いた。よく見れば、黒い騎士は、黒くなり、赤い罅が入った神淵剣を持つ

ていた。

海魔とやらを斬りながら黒い騎士の相手もする。その動作の一つ一つが激しくなっていてしまい、体に負担がかかる。今だって、口の中に鉄の味が広がっている。

帝「ペツ……やつぱ本体を叩くしかないか……いや、行けるな。行くぞ！幻影の邪眼！」

右眼が金色に輝き、辺りに幻影が写し出されて行く。

まあ、少しグレードアップして実体のある幻影になった訳だが。そして幻影が海魔を殲滅して行く中、金ぴか野郎が動いた。

？「我だけ除け者とは、面白い。何れ、ここは一つ、その雑種共を玩具とするか。さあ、散りざまでこの我を楽しませろ。」

帝「ツ！ソルム！獣招来ツ！神淵剣！グウツ……!!」

金ぴか野郎が、空間から無数の武器を射出していたのを見て、俺は地の精霊ソルムの力で防御力を上げて神淵剣を壁の様に出して防ぐも、幾つか俺の体に刺さった。

帝「――此の世の全ての精霊とその眷属達よ、精霊の王、ラタトスクが命ずる

――汝らに流るる魔力の奔流を我に託し、その命の輝きの光をも託し給え

――天地をも穿ち、世界を揺るがし、如何なる悪をも寄せ付けん

――鳴らせ、共鳴の刃……天廻ハルケ・ギニアの光……！」

精霊魔術を取り入れた光を二つの剣に宿し、大地と自分、精霊の生命エネルギーを流し込み、作られた光の刃を、前方へと振り下ろした。振り下ろされた刃は、地面を抉りながら相手方のサーヴァントに迫る。

帝「全員！離脱するぞ！」

そう叫んで、俺は移動用魔法陣を展開させた。

帝「ガボアツ！グア……ハア……ハア……」

口内に貯めていた血を吐き出し、腹部からも込み上げてくる血も吐く。洗面所の給水器から、水を出して、口の中を濯ぐ。ふと、鏡を見



れば、自分の金髪は、ただ白いばかりの白髪に変わっていた。

全く……折角の認識障害魔法も意味ねえじゃねえか……

息が整ったので、リビングに出ると、俺の姿に驚く者、俺の体を心配する者、余りわかりやすい反応をしない者と、三者三様だった。

帝「さてと、今の俺の状況、そしてアイツと俺との関係性、……そして俺の過去……、それを皆は聞きたい……と思ってたんだろ？」

椅子に腰掛け、ある程度話を進めて皆に問いかける。皆はその通りと、首を縦に振って肯定した。

帝「……そつか……うん、そうだな。よし、いいだろう。心して聞けよ？今から話すのは、何も守れなかった愚かな男の物語だ。」

多少の抵抗を感じながら、俺は過去を語り出した。

To be continued.

## 今明かすのは帝の過去

—10年前—

帝（過）「うわああああん!!!ちよつと待ってコレ無理ゲーだろおおおお!!!つつか何この数!鬼畜仕様にも程があるだろうが!俺そんな被虐趣味じゃないから!どっちかと言えば加虐趣味だから!」

そう言つて叫んで、アホ毛をびよびよこと動かし、涙目で魔物の群れから逃げるのは、まだ髪が金髪だった時の幼い俺。

今思うととんでもない性癖暴露って待て待て待て!ちよつと何メモしてんのかなあ君たち!?んな恥ずかしいこと覚えなないでいいから!……え?いやいやいや、俺が満足できるように頑張るってお前……頑張るところ間違ってるからな!?別んどこで頑張ってくれよ!!

えつとどこまで行つてたか……あ、そうだそうだ、特にこの時は地道に体とか鍛えてたりしてただけだし面白味のない場面ばつかだから2年後までカットで。

で、その2年後のある日だ。どこかは忘れたが、山の獣道を歩いてると小さな女の子が倒れていた。まあこれがまさか俺が守れなかった人達との初めての邂逅になるとは当時の俺は想像もしなかったわけだが。

帝（過）「だ、大丈夫か!」

? 「はい……なん……とか……」

帝（過）「帰り道はわかる?なんなら送つてくけど……?」

? 「えつと……じゃあ少しだけ、お言葉に甘えさせていただきます……」

と、その瞬間だった。背後から地に響くような轟音が聞こえてきた。地響きもそれに伴つて起こり、段々とこちらに近づいてくるかのよう激しくなっていた。

帝（過）「……はあ、どうしてここまで運が悪いんですかね、俺は……」

巻き込まれないようにとつとつとその場から俺は逃げ出した。

帝(過)「あつ、ちよつと待つて!? 案外早いんだけど!」  
……この時はよく逃げ切れたよ……。

帝(過)「ゼエ……ハア……ゼエ……ハア……マジ巫山戯んな……!  
少しは空気読めつてんだよ……!」

?「えつとまあ……お疲れ様。それとありがとう、シエルをここま  
で運んでくれて」

そう言うのは、緑髪赤目の少年、俺の頼れる兄貴分(笑)の、ゼフィ  
リム・ヴェルデヴェルデユ。

?「姉ちゃーん、大丈夫ー? 死んでないよね?」

俺が運んだ、床で横になっている金髪の少女、シエル・エスターニヤ  
と、彼女の頬をペチペチと叩く赤茶の髪と金目の少年、ルアン・エス  
ターニヤ。

帝「う、うん、多分死んではないよ。それはそうと俺も自己紹介  
をしてなかったね。俺は皇 帝って言うんだ。気安く帝って呼んで  
よ」

ゼフィ「ああ、こちらからもぜひお願いするよ、ミカド」

とまあ、そこから俺らの関係は始まっていった。そこからの生活は  
本当に楽しいものだった。

ゼフィ「ミカドミカド、アイスに醤油かけてみなよ! プリンの味に  
なるぞ!」

帝(過)「へえ、どれどれ……ブフウアツ!? まっず!? お前嘔吐くん  
じゃねえよ!」

ある時は弄られて……

シエル「はいミカド、喉乾いたでしょ?」

帝(過)「おう、牛乳か。……ブベアツ!? ぎ、牛乳に炭酸とは……貴  
様、計ったな……!」

またある時は弄られて……

ルアン「はいミカド! キンキンに冷えたコーラだよ!」

帝(過)「サンキュ、ルアン……ゴホツ!? ゲホツゲホツ! み、水で薄  
めた醤油じゃねえかコレ!」

はたまたある時は……ってちよつと待てえ!?俺の思い出は弄られたことだけか!?

あー、まあとにかく、そんなある日だった。

ハイマと呼ばれる山の隣の山の頂上で、大の字に寝そべって夜の空を見上げていた最中だった。

ゼファイ「ミカド、君は何のために強くなりたいんだ?」

帝(過)「みんなが話してくれたら俺も話すよ。」

ゼファイ「うーん……俺はさ、正体を隠して、メルトキオの王様直属の騎士団の軍師になりたいんだ」

ゼファイには似合う役柄だった。でも一つ疑問に思うことが。

帝(過)「ん?何で正体を隠す必要があるんだ?」

ゼファイ「……俺、本当は貴族なんだ。ヴェルデヴェルデュ家のご子息様つてやつ。正体がバレちゃうとき、家の親が五月蠅いんだ。何かある度に貴族たるもの貴族たるものって。鬱陶しいったらありやしない。そんな生活が嫌で、家を飛び出して今に至るって感じ」

帝(過)「へえー、そーなんだ。シエルは?」

シエル「わ、私!?うん……その……ね?私さ、一族の中では結構罵られててね。ハーフだから、人間の血が混じってるからってだけで。だからどうにかして一族のバカちん達に私を認めさせたかったの。それで行き着いた先が強くなるってこと」

帝(過)「ルアンはどうなんだ?」

ルアン「んー僕は姉ちゃんと同じかな。何とかしてあのおバカちやん達に僕の存在を認めさせたい。ハーフだからってなんだ、お前達よりよっぽど凄いなぞーって。そう言うミカドはどうなのさ?」

その時の問いには少し戸惑ってしまった。皆は強くなる理由がしっかりあったのに、俺にはなかったからだ。

帝(過)「俺は……そうだな……うん、そうだな……」

でも、答えを出すには、そう時間はかからなかった。

帝(過)「……護る人になりたい……自分の手の届く範囲で、家族や、友達や、仲間の幸せを護る人に、俺はなりたい……」

この4人で過ごした日々は何物にも代え難いかけがえのないもの







もう俺には人としての権利って無いのかな……by  
帝

帝side

帝「俺の髪が白いのは……きつと、その1年の間にストレスでなつたんだろうな。つとまあ、こんなもんか。」

お話の続きは是非ティルズオブシンフォニア ラタトスクの騎士で！

それはそれとして、俺の過去の話はこれで終わり。周りをよく見れば、涙を流す者、苦虫を潰したような表情の者とだった。

いや、わかっではいたさ。こんなどんよりとした重い空気になるとぐらい。それよりも問題は、この話を聞いて皆が俺をそれでも受け入れてくれるかどうかだ。

アーシア「そんな……酷い……酷すぎます……！」

一誠「あんまりだろ……なんで兄貴ばかり苦しまなくちゃいけねえんだよ……！」

エミヤ「何度聞いても、あまりいいものには聞こえないな……」

邪ンヌ「あんたは……復讐しようとか思わなかったわけ？」

帝「……復讐……か。確かにしようと思つたさ。この記憶を思い出した時にな。でも、前に言つただろ？今度は、復讐ではなく過去の決着をつけるためにあいつを殺す。これ以上、俺と同じような人を生まないために」

ーそれに、あいつを殺せるのは俺達しかいないからなあ？ラタトスク……いや、元精霊神ギアレポスさんよ？

ラタ「やはりバレていたか。だが、今その名前で俺を呼ぶな。イライラする」

おつと、こりや失礼したね。

そんな中、ふと、俺の後頭部が柔らかい何かに包まれた。

ジャンヌ「もう……苦しまないください……これからは……私達が守ります……だから……！」



どうやら、俺はジャンヌに後ろから抱かれていたようだ。

帝「……やめてくれ、ジャンヌ。今ここで君たちの優しきを受けるには……少し俺の罪が重すぎる。だから待っていてくれないか？俺がしっかりと過去との決着をつけた時、またこうやって……その……俺に優しく接して欲しいんだ。だから……な？」

ジャンヌの抱擁を振りほどき、ジャンヌにも向けて全員に言う。  
でもそれは叶わないかもしれない。今度の戦いで……恐らく俺はまた死ぬだろうから……

—————

一誠「さあ開幕しました！」

木場「皇 帝の！」

一誠・木場「チキチキ！第一次正妻戦争ー！」

一誠「ポロリはないよ！」

エミヤ「正妻戦争!? 聖杯じゃなくて!？」

………何やってんの………？

俺の過去を皆に明かした翌日、何故か変なクイズ大会が開かれていた。

一誠「司会は私、赤龍帝皇 一誠と！」

木場「実況解説は私、聖魔剣創造の木場 祐斗でお送りしまーす！」

呆れながら見ていると、参加者が目に入った。1番左から、リアス、美優、マルタ、朱乃さん、白音、ゼノヴィア、ジャンヌ、邪ンヌ、沖田、と、ほぼ女性陣が参加していた。

いないのは……アーシアだけか。まあアーシアはイツセーの嫁ですしおすし。

さて、少し部屋にこもらせて貰おうかね。

—————

帝「……やつぱり深淵剣は相手の神性が高ければ高いほど攻撃を通しやすくなるのか……」

俺が部屋で行っていたのは、神淵剣の性能実験だ。

何故か、神淵剣の元の深淵剣の能力を発揮し切れていないと思ひ、自分の体で実験することにしたが、どうやら予想は当たっていたらし

く、俺の右腕と左腕にある傷の量は同じだが、深さが違う。

正直アニキ相手でも良かったが……なんだろう……アニキに使ってはいけない気が凄くする……

帝「つ……傷に染みるなあ……」

水で消毒し、傷軟骨を傷口に塗るが、大分傷に染みる。例えるならば、蚊に刺されたところを掻きむしったあとにムヒを塗るようなあのヒリヒリとした痛さだ。

実験もそこそこに、部屋の片付けをして夕食の準備でもしようかと思つたその時、ドアがコンコンと、誰かによって叩かれた。

帝「?どうぞー」

ジャンヌ「し、失礼します」

ジャンヌ?こんな時間に入ってくるとは珍しい。

帝「どうしたジャンヌ?変なクイズ大会みたいなのが終わったのか?」

ジャンヌ「え、ええ……まあ……」

煮え切らない答えだが……ハッ!?もしかして!?

帝「腹減つたのか?それなら今準備するから少し待つててくれないか?」

ジャンヌ「エミルくんの中の私の人物像はどうなっているんですか!?!つてそうではなくて……その、さっきのクイズ大会、優勝したんです……」

帝「お、おおう、そうか。えーつと……おめでどう?」

ジャンヌ「それで……優勝景品が……エミルくんになんでもお願いを聞いて貰えるというものでして……」

おい待て!?!俺の意思は無視か!?!Why!?!人権とは何処へ!?!

ジャンヌ「それで……その……」

……頼むから無理性的なお願いはやめてくれよ……

ジャンヌ「できれば、明日から勉強を教えて欲しいな……なんて……」

帝「うんOK」

こんなまともなお願いなんて今まであつただろうか?いや無い!

ジャンヌ「あ、ありがとうございます！」

即答で俺が答えると、ジャンヌは花のような笑顔を浮かべた。

うん、やっぱり女の子が笑ってる顔っていいよね！」

帝「まあお安い御用だよ。ただし、やるからにはビシバシとやるかな？」

ジャンヌ「はい！明日からよろしくお願いしますね、先生！」

巫山戯るように笑うと、ジャンヌも同じく便乗してノってくれた。

んー……そうなるかと筆記用具が必要だな……自分が使いやすいと思う鉛筆やシャーペン、ボールペンにノート……そうだな……

帝「よし、ジャンヌ、明日一緒に出かけるぞ」

ジャンヌ「え？そ、その……2人つきりでですか？」

帝「まあ別に2人つきりでも構わないけど……もしかして俺とだと嫌か……？」

ジャンヌ「いい、いいえ！そんなことは決してありません！主に誓つて！……エミルさんと2人つきり……えへっ♪」

ぬー……何か言ってるのは聞こえるけどなんて言ってるのかは聞こえねえ……

バリーイインツ！！

帝「危ないっ！！」

ジャンヌ「えーきやあっ!?!」

その時だった。何か窓を突き破り、部屋の壁へと突き刺さった。すんでのところで察知したので、すぐさまジャンヌを押し倒す形となってしまったが、場所がジャンヌの頭とほぼ同じ位置だったので、大事には至らなかった。

帝「……ねえなんで矢文？」

窓を突き破った物の正体は矢文だった。そう、YABUMIです。俺は立ち上がり、矢に手をかける。

帝「あ、あれ？ぐ、ぬぬぬぬぬ……！」

思っていたよりも深く突き刺さっていたため、ちよつとやそつとの力ではびくともしなかった。

帝「もういいかこれで」

普通の部屋に矢が刺さっているというなんともシユールな絵になるが、この際仕方ない。

カバン掛けとかに丁度いいんじゃないか？これ。

帝「うんと、何々？……………ふむ……………」

ビリビリと紙を破き、顔を未だに赤くさせるジャンヌのところへと行き、そつと手を差し伸べた。

帝「大丈夫か？ジャンヌ」

ジャンヌ「大丈夫……………と言いたいところですが、少し腰を抜かしちゃいました。エミルくんは先に行つててください」

帝「んな訳にもいかねえしな……………ちよつと失礼するぜ……………よつと」

ジャンヌ「え……………な、何を……………？きやあつ／＼／！？」

ジャンヌの膝の裏と腰に手を回し、ゆつくりとジャンヌを持ち上げた。

帝「ん？どした？まさかどつか痛かったりしない!?大丈夫!？」

ジャンヌ「い、いえ……………ただ、その……………こういう感じで抱えられたことは今までになかったので……………／／／」

帝「お、おう、そうか。……………なあジャンヌ、明日、2時くらいに出かけねえか？」

ジャンヌ「はい、構いませんよ。何か準備とかですか？」

帝「うん、まあそんなとこだよ」

リビングに着いたので、ジャンヌを席に座らせ、料理の準備を始めた。

あれ、ちよつと待って？俺がジャンヌにしたのって……………ああうん、今度リアスにも機会があつたらしてあげよう。

明日の午前についても考えながら、黙々と今晚のメニューである麻婆茄子を作る俺であつた。

T o b e c o n t i n u e d .

## 魔劍士

帝 side

時刻は大体夜明け前……かな。パルマコスタ近郊にある王朝跡という遺跡の最奥部に来ていた。

そして奥のちよつとした広場にいる、薄めの甲冑を身に纏い、地面に剣を刺し、その剣に手を置いて待つ男がいた。

帝「あんたがああ矢文の差出人のダンテ……で間違い無いんだな？」

ダンテ「ああ、その認識で間違い無い」

ダンテに確認を取ると、俺は思っていて、言いたかったことを口にする。

帝「なんで矢文なわけ!?普通に街ですれ違った時俺に聞こえる程度の声でここに来て言って言えばよかったんじゃないのかな!?危なかったからな!?気付くのが遅かったらジャンヌ死んでたからな!?多分だけど!」

ダンテ「……あつ……」

帝「あつ……じゃねえよ!!もしかして思いつかなかったわけ!」

俺がそう言うのと、ダンテは微弱ながら俺の顔の正面から自分の顔を逸らした。

帝「今、絶対に目逸らしたろ!?マジかよおまえ……」

ちよつとこの人どっか抜けてなあい!?その威厳のありそうな態度も今のであんまり示しがつかないんだけど!?

と言いたいが、ここは我慢して呑み込む。何時まで経っても要件を済ませることができない。

帝「はあ……もういいよ。それで、何の用だ?」

ダンテ「エミル・キヤスタニエ、この世界を二度に渡って救った千刃の英雄よ、この魔劍士ダンテと手合わせ願う」

まあたそういう系のやつかよ……俺の周りって意外と戦闘狂が多いんだけど……

帝「別にいいが、もし自分を騎士とでも言うのなら騎士道なんての

は捨てるよ？でないと俺とまともに勝負できないからな」

ダンテ「ふん、愚問だ……そんなくだらんもの、当の昔に棄て去った」

帝「だといいたがな」

そして2人の間で睨み合いが始まる。

何処からか垂れた水滴が水面にポチャンと落ちると、互いに互いの元へと駆けた。

帝「はっ！流石に魔剣士を自称するだけの腕はあるなっ！」

ダンテ「貴様こそなんだ！千刃剣士ではなく千刃剣聖とでも名乗ればいいだろうに！」

一瞬のうちに5度ほど剣を打ち合い、互いにギリギリと鏝迫り合いで刃を鳴らす。

そして遅れて5度の剣戟音が周囲に響く。

帝「生憎、俺の心持ちの問題なんで早々変えはしねえよ！」

そう叫ぶと、ダンテの上下に神淵剣を発生させるが、ダンテはそれを後ろに飛んで避けた。

そしてふと、雷切に目を向けると、刃がボロボロになっていた。

……？おかしい、毎日整備はしているし研いでもいる……昨日だったし……まるで時間を奪われ……まさかあの剣……!?

帝「クソツッ！どうしてこうも俺の相手は面倒臭いヤツばつかなんだよ！」

雷切を鞘に収め、無の聖剣を腕から出す。

ダンテ「これほど早くに俺の剣の危険性を見極められるとはな。であれば、もう大方検討も着いているだろう？」

帝「未だ憶測の域ではあるが、雷切にはまるで使い込まれたようなボロさが出ていた。これを仮に時間を奪われたとして考えるとお前の剣が時間を奪ったことになる。俺の知る限り物体の時間を奪う剣なんてもんは聞いたことも目にしたこともない。そして創造の四神伝説に登場する神のうちの、時間と次元を司る神、そしてその神が持っていたとされる剣、時間を奪うとは即ち時間に直接的に関係する。以上のことを踏まえて考えればその剣の正体は大体わかる」

ダンテ「ご名答。やはりリエルの言った通り、恐ろしい程の推理眼だ。なるほど、ヴェルフリート様がお前に一目置くのも頷ける」

……当たって欲しくはなかったがやっぱりこいつもあいつの奴隷か……。

ダンテ「しかしやはり、お前は戦士としては俺が知る限り1番の脅威だ。素の状態でその身体能力、剣聖……いや、剣神と謳われてもおかしくはない程に高い剣の技量、無駄なものを一切切棄てた体つき、ヴェルフリート様でも恐れる推理力の高さ、そしてその剣の担い手でもある……正直、お前が本気を出そうものなら俺は一瞬で負けるとさえ思っている……」

帝「そりやどうも。敵に褒められると色々と複雑なところだが……」

喜んでいいのかどうかわからず複雑な表情を浮かべて、左手で頭をポリポリと掻く。

ダンテ「だが、次からはこちらにも本気だ。精々根を上げないでくれよ！」

帝「はっ！それがブーメランにならないといいな！ってぬおっ！」  
そう言つて剣を構えると、ダンテは剣で次元を歪め、上空から剣を力強く振り下ろしてきた。

咄嗟の判断で両手で剣を持って受け止めるも、手足が先程の衝撃で痺れてしまったせいも、上手く力が入らない。

帝「くっ……！チイツ!!」

剣を上手く傾けて受け流し、攻撃に移ろうとするも、ダンテの第二波の攻撃がそれを許さなかった。

帝「まだあんのかよっ！……クツソテメエやっぱチート使つてんだろ！」

ダンテ「1番お前に言われたくなかった言葉だな!」

ダンテの左手に握られていたのは天と地を司る神の持つ剣、スベリオルム・ベネグラム開星の聖剣だった。

帝「まさか創造の四神の剣のうちの二振りを1人が持つ……流石に予想はしなかったな……!」

嫌な冷や汗が俺の頬を伝い、ポトリと地面に落ちる。

帝「……シツ!!」

気を引き締め、剣を飛ばすと共にダンテへと向かう。

ダンテ「どうした！こんなものでは倒れんぞ！まさか万策尽きたとは言うまいな！」

ダンテは自分に当たるかもしれない剣を数本弾き、ダンテがそう叫ぶ。

数本の剣がダンテを通り過ぎたのを確認すると、剣の軌道を変えた。

ダンテ「つくあつ!!?!」

ダンテの背を剣が裂くのを音で確認し、短く飛んで、宙で縦に一回転し、その勢いを乗せて剣を振り下ろした。

帝「んんん??万策がどうかしたのかな!あ”っ!?!」

ダンテは俺の攻撃を右手に持つ時クロノ・キャニクス元界の聖剣で受け止め、左手で持った開星の聖剣で俺の足元を斬ると、地形が変わり、地面が急激な隆起を起こした。

帝「チツ!面倒臭え能力だな!どうにか出ねえとヤバイな……!」  
地面はそのまま、俺を包むかのような丸になり、ちよつとした檻を作りだした。

帝「ツ!?!嘘だろそりや冗談キツイな!!!」

突如空いた穴から、剣閃が閃いた。

そのまま剣閃は数を増やし、段々と俺の体に傷を付けていった。

帝「つはあ……はあ……く……はははは……面白え……!ここまですりぢりぢりしたのはヴェルフリートを除けばアンタが初めてかもな!」  
檻から解放され、ボロボロの血だらけになりながらそう言い、ダンテも、背中からボタバタと血を垂れ流していた。

ダンテ「こちらのセリフだ……!しかしこのままでは罅が開かねえ。次で最後……互いの最高の技を打つけ合うのはどうだ?」

俺はダンテの問いに剣を構えることで承諾の意を示す。

帝「行くぞ……!」

――天を廻りし光を宿し、闇黒に煌めく滅びを宿す



「ー全てを呑み込むこの刃の名は……」  
手に持つ無の聖剣に、天廻ハルケ・ギニアの光とテンペスト・ブレイザーのオーラ  
が混ざり合い、蒼きオーラが発生する。

ダンテ「ー我が全てを呪うがいい

ー世界を憎むこの剣の名は……」

ダンテの持つ二振りの剣が、薄紫のオーラを宿す。

俺とダンテは互いに剣を上段に翳す。

帝「闇黒グロウリアス・エーテル・ワイズに煌めく神なる刃ツツツツ!!!」

ダンテ「救世デイ・マイ・デイ・アス・カリ・パーを望まざる創造の剣アアアアツツ!!!」

そして次の瞬間、俺たちを爆煙が覆った。

To be continued.

## 聖女の告白

帝「ゴフツッ！……ハア……ハア……あのクソめ……王朝跡を直すだけ直してそのまま行きやがるとか……真剣勝負した相手を労う気持ちとか……ねえのかよ……！」

壊れたはずであろう王朝跡の最深部に、地に膝を付けて、勢いよく帝は血を吐く

体は傷だらけで、血が所々から流れ出ている

帝「グツ!?アアッ!?ガアアアアッツツツツツ!?」

突如、帝の首の星形の痣が赤く光り体内から発せられる熱に首を抑えて悶え苦しみだした

だがそれだけでなく、右腕も同じ反応が起きた

体がどんどん別のものになっていつていることも、どんどん蝕まれて行くことも、苦しさの所為で帝は気付くこともままならなかった

帝 side

帝「あくいい……ただいまあ……！」

エミヤ「おや、マスター。今まで一体どこに行っていたのかね？」

玄関のドアをガチャリと開けて、1番先に声をかけたのはエミヤだった。……と言つても、エミヤ以外誰もいなかったが……

帝「なんでもござあせーん……少し寝てくる……！」

エミヤ「うむ……そうしたほうがいい。少しやつれて見える。朝食ができた際にこちらから呼ばせてもらうが構わないか？」

帝「おう……そうしてくれつとスゲー助かる……じゃあおやすみい……zzz……！」

安心したことにより、急に襲いかかってきた疲労感と睡魔に抗う暇もなく、俺は意識を底に手放した

帝「……んう……おはよ……ごぎます……！」

リアス「おはよう。どう？すっかりと眠れた？」

帝「ぬおう……リアスか……。うん、気持ちよく熟睡できましたよ……。」

後頭部から伝わる柔らかい感触を名残惜しく感じながら上体を起こした

リアス「ん……ちゅっ……ふふっ、おはようのキスよ♪」

帝「……頼むから公衆の面前でやらないでくれ……恥ずか死ぬ……」  
／／／

リアス「そうね、私が貴方を好きじゃなくなったら考えてあげるわ」  
それって半永久的に終わることないだろ!?

なんて言葉を敢えて言わずに、いい香りが漂ってきた台所に顔を向けた。

エミヤ「全く、見せつけてくれるな。危うく砂糖を物理で吐きそうになったではないか。お互いに好き同士なのは分かるが、少し限度というものを考えたほうがいいぞ?」

呆れた顔で、しかしして微笑ましいとばかりに微笑みをこちらに向けてエミヤがそう言う

帝「物理で砂糖を吐いたら、丁度いい砂糖の補充になると思わねえか? なんなら試してみるか?」

エミヤ「いや、やめておこう。体内から出された砂糖など誰も使いたがらないだろうからな」

軽口をエミヤと叩き合いながら俺は起き上がり、食器やエミヤの料理を運ぶことを手伝うことにした

—————  
ジャンヌ「お待たせしました。それでは早速参りましょう」

帝「……」  
ジャンヌ「エミルくん? エミルくん!……マスター!!」

帝「!? あ、ああ、ジャンヌか。ごめん、少し考え事してた」  
おうう……まだ頭痛いからさっきのがスゲー頭に響いた……それに、考え事と言っても、今度ヴェルフリートと殺り合う時には覇龍を

使っておかないといけないってくらいのモンだったのだが……どうするべきかね……

ジャンヌ「……へえー、マスターは私より考え事なんかの方が大事なんですわね……」

帝「ん？あー……ごめん、そういうつもりじゃなかったんだ。どうしたら許してくれるかな……」

ジャンヌ「じゃあ……」

ジャンヌはそう言うと、自分の手で俺の手を握った。

ジャンヌ「今日外にいる間は……ずっとこうして手を繋いでいてくれませんか？そうしたら許してあげますよ？」

帝「……おう。んじゃまつ、そろそろ行きますか！」

ジャンヌ「はい！（リアスさんと美優さんに聞いてやつと気付いたこの想い、絶対に今日で叶えて見せます！）」

先ほど見せられた笑顔に見惚れてしまったのは黙っておこう

「……………」

帝「うえーい……買った買ったあ……」

ジャンヌ「ふふつ、変な溜息を吐くんですね」

右手にはノートや参考書、鉛筆やシャーペンに消しゴムやボールペンも。結構な量でなかなか肩が疲れる

対する左手は、ジャンヌの手を繋いでいた

帝「しかしなんで消せるボールペンまで……いや、もうこの技術の進歩や発展についてはもうツツコまないと決めたんだ……」

ジャンヌ「でもすごいですね。消しゴムでもなかなか消せないインクをあかも簡単に消せるなんて。しかも消しカスも出ないのですごく環境にいいですね」

帝「うん、確かにゴミがでないから環境にいいな。でもあれって実はインクの色を透明にしてるだけで本当に消してる訳ではないらしいぞ？」

他愛のない雑談に、ちよつとした雑学？を交えながら話す

マジでそうらしいよ？なんで消えてるのは知らないけど

ジャンヌ「その、大丈夫ですか？少し疲れてるように見えますし、やっぱり私が……」

帝「いや、その必要はないよ。女の子に重い荷物を持たせるなんて俺の主義に反する」

ジャンヌ「……やっぱりエミルくんは優しいですね。だったら少し

休んで行きませんか？」

ジャンヌのその言葉にコクンと頷き近くの公園にあったベンチに行った。

帝「ほい、ジャンヌはミルクティーでよかったか？」

ジャンヌ「あ、はい。ありがとうございます」

公園にあった自販機で買ったミルクティーをジャンヌに手渡し、俺は同じく買ったカフェオレを飲んだ

帝「……はあ……」

ジャンヌ「……」

俺の軽い溜息が、俺とジャンヌを包む静寂に響く。

あれ？これ前もなんかあったよね!?大丈夫かな!?いや……相手はジャンヌだから大丈夫!……なはず!

自分の周りの女の子の貞操観念が大分緩いことに気付かず、寧ろそれを基準としてしまったことに気付くことすらできていない状態で心の中で不安な叫び声を発した。

ジャンヌ「エミルくん、私のこと……いえ、私たち女性陣のこと……

どう思いますか……?」

帝「……それは友人として……か?それとも……異性として……なのか……?」

友人として……ならば問題は無い。寧ろ今のままで充分だ

ただ異性として……ならば……俺はどう答えていいのかわからない

ジャンヌ「どちらも……というのはだめでしょうか?」

帝「……できればどっちかにして欲しかったんだがな……」

回答に困る出され方をしてしまい、暫く考え込む

帝「そうだな、友人としてならば、皆本当にいい人ばかりだよ。俺には勿体無いくらいに」

ジャンヌ「では異性としては……?」

残る片方の回答に、ジャンヌは期待と不安を抱えた眼差しでこちらを真剣に見ていた

帝「……異性としては……正直、不摂生と言うかなんと言うか……



いで帰ってしまつた

帝「……………お返事待つてます……………か……………」

ふと、まだ柔らかさの残る唇に触れる

まだ顔が熱いのは、きつと昼に散々照つて残つた暑さと夕陽のせい  
なんだろう

T o b e c o n t i n u e d .

## 帝、衝撃思考!?

帝 side

帝「そう言えばお前ら夏休みの宿題やってんのか？」

その言葉は唐突だった

俺の質問にみんなは黙り、それどころか目を逸らす始末

つまり十中八九……

帝「……はあ、全員持つてこい。ある程度の範囲までなら教えてやるから……」

駒王学園に通う者は、皆、「はい」と声を揃えて自分の部屋に教材を取りに行った

帝「物のついでだ。ジャンヌも勉強道具と教材持つてこい」

ジャンヌ「……ふえっ？あぁ、はい……」

どこか気の抜けた様な返事をしてから、ジャンヌも自分の部屋へと行った

邪ンヌ「ん、他のはともかくなんであの白いのまで？」

帝「いやほら、前にあったじゃん、正妻戦争……だったっけ？それの優勝景品が俺に何でも願い事を聞いて貰えるってやつだったらしいじゃん？俺は許可出していないけど。んでその俺へのお願いつてのが勉強を教えて欲しいって内容だったんだ」

邪ンヌ「……へえーそう。ふうーん……」

邪ンヌはそう言うと、俺に何かを求めるようにこちらを何度もチラチラと見る

帝「どうした？勉強教えて欲しいなら教えてやらんでもないが？」

邪ンヌ「なっ!?!バツ、バツカじゃないの!?!誰があんたなんか教えて貰うもんですか!……ま、まあどうしてもって言うのならまあ吝かではありませんが……」

帝「教えて欲しいなら教えて欲しいで素直に言えよな、全く……今度食材の買い出しに行くからついて来い。教材やらノートやら買う必要があるだろ」

なんだかんだ言いながらも結局は受けるんだな……と言うのは野



暮だろうか？

つて、そう思えばジャンヌのやつ、思えば帰ってきた時からだったか？何を聞いてもずっと上の空であんな調子だ

恐らくは昨日の告白が多分関係してるんだろうが……

帝「……っ……ダメだな……」

気を抜くと昨日の告白をすぐに思い出してしまふ……。それにすぐ顔が熱くなる……。正直あんな方法だと困るのはこっちなんだが……

そんなこんなで、皆が自分の夏休みの宿題を持ってきた

木場「あれ？帝君はやらなくていいのかい？」

帝「配られたその日か翌日に全部終わらしてるから問題無し」

俺が少しだけドヤ顔気味に言うのと、祐斗は、やっぱりねと言わんばかりにため息を吐いた。解せぬ

一誠「そう言えば兄貴つてどんくらいまでの勉強の範囲教えられんだ？」

帝「あー………：少なくともオックスフォード大学までなら行ける………が、あまり期待するなよ？模試でギリギリ合格できた程度だから」

白音「……ハーバード大学じゃないんですね。帝兄様なら行けると思いますが」

帝「いやあ、無理無理、絶対無理。オックスフォードでギリギリ合格なのにハーバードとかマジ無理。っつーかまずハーバード行けるやつの脳がどうなってるのか知りたいよ……」

今度取っ捕まえて解剖でもしてみるか……

ゼノヴィア「なあエミル、この熟語の意味はこれで合ってるか？」

ジャンヌ「エミルくん、どうですか？できましたよ！」

美優「お兄ちゃんお兄ちゃん、ここの式の公式の確認したいんだけどいい？」

帝「ああもうーお前らそんないっぺんに来るな！ほらえーつとまずゼノヴィアからだな」

冗談に聞こえない冗談を心の中で呟いてから、仕方ないと少し呆れ

た表情になりながらも世話を焼くこととなる俺であった

「……」  
さて、皆さんは迷いの森と聞いて何を思い浮かべるだろうか？いや、正確にはどうやって迷うと思うだろうか？

人によつては、怪物が迷い込んだ人を攫う、方向感覚が麻痺または可笑しくなってしまうetc.と、まあ様々な意見があるだろう。そんなわけでビバ！迷いの森！つっても今回はあるものの調査とその調査対象の回収なんだが

ん？宿題？そんなもんエミヤに押し付けて来たよ。まあエミヤも満更でもなさそうだったが

帝「しかしなんでアルケイデス流星群の隕石の1つがここで落ちたんだか……」

まさかとは思うがこの強力な磁場に引き寄せられたとか……？  
久しく存在さえ忘れていたマインドブレスレットを摩りながら、そう考えた

帝「♪♪♪あだつ!？」

退屈凌ぎに鼻歌を歌いながら歩いていると、足に何か引つかかつて前のめりに倒れてしまった

鼻にクリーンヒットしたので痛い

帝「何これ……紐？……ッ!？」

振り返りざまにリベレーターを振るうと、何かがぶつかったような衝撃が腕に響いた

帝「くっ！ああクソが！どっから来てんだ！」

バク宙をしながら、その何かを2つ斬り、その勢いのまま後方から迫っていたものを斜めに斬り、シャドウ・アイオリオンを逆手に持ち、左右から飛び出したものを、上下に振って斬り落とす

??「動かないでー!」

周囲を警戒し過ぎて、誰かが近づいているのがわからなかった。これぞ正しく灯台下暗しというやつか

帝「お、オーケーオーケー……わかった、ここはひとつ話をしよう。争いで解決できないことだってあるんだぞ？」

非常に焦った顔で、冷や汗や脂汗を大量に流しながら、首元に添えられた鎌の刃を見てそう言う

？「ま、それもそうね。ミリ、鎌を降ろしましょう」

ミリ「……わかりました、姉さん」

帝「おい待て、ミリって……まさかあんたらの中の1人って、ミリ・アービターじゃないだろうな……？」

ミリ「な、なんで私のこと……!？」

？「なんでミリのことを知ってるわけ！もしかしてあんた……!」  
何を誤解してか、ミリと呼ばれた人の姉は、再度俺の首元に鎌を添えた

帝「違う違う！有らぬ誤解があるみたいだけど断じて違うから！」  
？「じゃあ誰だつて言うのよ！」

帝「……俺だよ。エミル、エミル・キャスタニエだ」  
？「う、嘘よ！だったらなんであんたの髪が白いわけ!？」

帝「前のは……ほらあれだ、認識阻害魔法で髪の色素を誤魔化してたんだよ。こつちが本当の色だ」

ミリ「ほ、本当に信じていいのですか……？」

帝「信じてくれ。いや、信じてくださいお願いします。じゃないと俺もやらないといけないことができない」

？「ふーん……そう、わかった、信じてあげる。でもその代わり、たつぷり土産話を聞かせなさい。いいわね？エミル」

ミリの姉はそう言うのと、俺の首から鎌を離した

帝「はいはい、ご所望とあらば何なりとお申し付け下さいな、アリスお嬢様？」

ミリの姉——アリスに向き合い、ニヤツと不敵な笑みを浮かべた

——  
アリス「しつかし本当久し振りね。どれくらい会ってなかったかしら？」

帝「だいたい俺は向こうに帰って3ヶ月くらいだけどこつちの日数換算にしたら90年くらい会ってないかな。つっても、だいたい180年くらいは一緒に過ごしてたんだから別にいいだろ？そんなこと

気にしなくても」

ミリ「それよりエミルさん、何か用事があったのでは？」

……しまった、思い出話？に花を咲かしてる場合じゃなかった

帝「ああ、そうだったそうだった。アリス、ミリ、この辺で隕石と湖がなかったりしないか？」

アリス「隕石ならあるわよ？私たちの家の裏に。湖ならミリが知っているわよ」

……えええ……

帝「……非常に申し訳ないんだが家と湖まで案内してくれないか……？今回はその2つの調査と回収のために来たんだが……」

アリス「いいんじゃない？別に」

ミリ「はい。正直な話、隕石が少し邪魔臭いです。それに湖も家からだいぶ近いので」

おお、ドストレートに言うなあ。偶に酷いこと言う辺りあんまし変わってないようでよかったよ

アリス「んじやつ、そう言うわけだから早速行くわよ！」

ミリ「転けたりしないでくださいね！」

帝「わ、わかったわかった！わかったから手エ引っ張るな！」

長い金の髪と薄紫の髪に鼻を少し擦られながら、2人に手を引かれて俺は小走り気味に歩きだした

—————

帝「お、そうそう。ここの問題はそうやってxに左の式を代入するだけなんだ」

美優「わあ、すつごくわかりやすいよお兄ちゃん！ありがとう！」

帝「気にすんなって。俺も教えることで理解が深まるからな。まあわかんなかったりする問題が有ったらいつでも言えよ？一応並の大学くらいまでなら教えられるからよ」

美優「流石、テストは毎回学年トップを獲ってるだけあるね。ありがと」

あの後、まず湖に連れて行ってもらい、その水と、アリス達の家  
の裏にあつた隕石を丸々貰った

今後の研究と、ある薬の調合のためにしばらく使うことになる。まあ目的だけ話せば次の対ヴェルフリート戦で確実に勝てるようにする為だが

ゼファイ【そんでミカド、結局どうすんの?】

ーどうすんのつて……何が?

シエル【決まってるでしょ、ジャンヌさんの告白についてよ】

いや、一応考えてるんだ。考えてはいるんだが……

ーどうにも、やつぱり3人と付き合うつてのは節操とか甲斐性がなさ過ぎるんだよなあ……

ゼファイ【いや、そんなの今更でしょ】

ーええ!?

ルアン【胸に手を当ててよく思い出せよ!このスケコマシ!】

ー何という酷い言われよう!?

でもまあ確かに、しっかりとジャンヌの気持ちに応えなければならぬ

でも俺の倫理観がそれを邪魔するわけで……うあああ!!!

……結局のところ打つ手はないのかよ……

美優「ねえ、お兄ちゃん」

帝「どうした?まだわからないとことかあるのか?」

美優「ち、ちがうよ?お兄ちゃんのお教え方すつごく上手だからわからないところなんて寧ろある方がおかしいよ!あ、そうじゃなくて、えつと、お兄ちゃん、前に何でも言うことを聞くつて言つてたでしょ?今思つたらお願い聞いてもらつてないなーつて」

まさかここで俺は食われるつても言うのかね?ヤだよ、俺まだ襲われてしかないのに

美優「だから今からお願いを言うね?………私を襲つて………?」

美優はそう言うつと、俺の手で胸を鷲掴みにさせ、自分が下になるように、俺が上になるように倒れた

帝「……いいのか?止まらなくなつちやうかもしんないぞ?」

美優「ううん、いいの。今はお兄ちゃんに求められたいの、優しく

して欲しいの、愛されたいの。だからお兄ちゃん……来て……」

ここまで言われると俺も黙ってはいられない。据え膳食わぬは何とやら、俺も今は美優のことだけを考えよう

帝「わかった。でもその代わりに、途中で根を上げるなよ？もう俺無しじゃ生きられないくらいまで愛してやるからな」

そうして俺は美優の誘いに乗り、どちらかが精根尽き果てて寝るまで愛し合うのだった

To be continued.

## 目覚める災厄 失われし命

帝 side

カタカタとキーボードを叩く音が、部屋の中に木霊する

俺は今、昨日に貫つて帰つてきたアルケイデス隕石を暇だからという理由だけで家の地下に作った研究施設で解析していた

帝「……ふう、まだ星文字アスタリスクが消えてなくてよかった。それも珍しく星文字アルストロメリア式魔法まで残ってるし、属性は破壊ときた。今回は大収穫だな」

現存する星文字アスタリスクと星文字アルストロメリア式魔法についての文献や資料を読み漁りながらも、研究を進めていたが、中々に興味深く、修行していた時に、これで1ヶ月無駄にしまったのは俺にとっては記憶に新しい

帝「ま、今日のところはここまでかな。籠りつきりつても良くないし、眼にも悪いし」

座っていたデスクチェアの背もたれに体重を預け、弓の弦のように体をピンと張って、伸びをする

昼間にカップ9分目くらいまで入れていたコーヒーも、残り1分となっていた

帝「……作業に没頭し過ぎるというのもよくないな」

そろそろ上に上がろうと思い、カップの中のコーヒーを飲み干し、集中する為にかけていた伊達眼鏡を外して、自動ドアの前へと歩みを進めた

帝「しかし、どうしたもんかねえ……首のコレをどうにかしない限り、あのクソ野郎ヴェルフリートともマトモに殺り合えねえ。最悪、いつそのこと首の皮だけを綺麗に？ぐつてのものもあるが……うええ……」

軽くグロテスクな光景を想像して思わず両腕を抱えて身震いを起こした

地上へと上がる階段を上りきり、そのまま俺は自室に直行し、いつもの無地の白いシャツに、藍色のズボン、黒い半袖のパーカーを着て、財布とケータイをポケットに入れた

そして部屋の外に出ると、向かい側の部屋をノックする

帝「リアスーいるかー?」

リアス「あらエミル、どうしたの?」

帝「えつとき、今日の料理当番って俺とリアスじゃん?食材も少し足りないし、もしよかったら一緒に買い物行かないか?」

リアス「そうね……いいわ、行きましよう。少し待っててくれるかしら?」

帝「了解。玄関で待ってるよ」

そして玄関で数分待っていると、リアスが準備を終えて、こちらに来たので、一緒に外へ出た

—————

リアス「……ねえエミル、ジャンヌからの告白……受けたりした……?」

帝「……受けた。つい最近に」

家を出てから数十分後に、唐突にリアスから聞かれた

リアス「そう、やつぱり……エミル、ジャンヌの告白、あなたさえ良ければけど……その……受けてあげて……?彼女、女の子として碌な人生を送れなかったし……独房に入れられていた時だって……その……性的な暴力も受けてみたいだし……本当の愛をあの子に教えてあげて欲しいの。相談を受けた者として、あの子の勇気は報われるべきだと思うの」

帝「……わかってる。どうであれ、俺みたいな奴に好意を寄せてくれたんだ。俺もできるだけ、ジャンヌの期待に応えたいと思ってる。それに普通の女の子みたいに生きて欲しいって言ったのは俺なんだ。それに、最終的な答えは2通りある。もう少しだけ考えても罰は当たらないと思うが」

それから、俺とリアスはなんだか気不味くなって黙り込んでしまった

帝「……ま、まあとにかく、この話は一旦ここまでにしよう!折角この世界最大のデパート、パルマコスタマーケットに来てんだし!」  
まあ、読んだままの通りなんだが、俺とリアスはパルマコスタに来ている



今晚のご飯は魚介類にしようと思い、漁業が盛んなパルマコスタに  
来た訳で、ロイドとかに聞くことによると、俺がこの世界を去る間際  
に、造られていたらしい

リアス「そ、そうね！それで今日はどんな魚を使うのかしら？」

帝「海鮮丼でも作ってみようかと思うんだけどどうかな？」

リアス「そうね、いいんじゃないかしら。じゃあ次は具材だけど、一  
般的に知れ渡っているような物にする？それとも新しい発見を求め  
て冒険する？」

帝「んー……そうだな……よし、皆には悪いが少し冒険をさせても  
らおう！

……え……？」

気が付いたら、俺の体は宙に浮いていた

後ろを振り返ると、俺たちを赤い地獄が襲った

帝「リアス……リアス……リアス！」

名前を呼んでも、返事が返ってこない。しかし、動こうにも火が視  
界を妨げるせいで全く見えない

帝「チツ！クソつたれがああ!!!」

咆哮を上げ、手元にリベレーターを呼び、それを振るって剣圧で火を消し飛ばす

そしてその先に見えたのは、立ち揺らめく炎の中であろうとも目立つ紅の髪

帝「リ、リアス!!」

慌ててリアスの元へと駆け寄り、乗っかっていた瓦礫を押し退け、一応他の生存者がいないか、微粒子レベルの細かい魔力をこの建物内全域に飛ばした

う、嘘……だろ……!?

帝「生存者……無し……!!??」

この魔力は息をする時の僅かな動きでも読み取れる。でもそれが読み取れない……つまり……!?

リアス「エ、エミ……ル……」

帝「リアス！喋るんじゃない！傷口が開くぞー！」

急いで腰に手を回すが、今は私服であるため、腰にポーチなどはなかった

帝「クツソツがツ!!!!なんだってこんな時に限って!」

リアス「ごめん……なさい……場違いだとは……思う……けど……なんだか少し……眠く……なつて……来たの……」

頭から血を流しながら、リアスは弱々しくそう呟いた

帝「おい……や、やめろ！まだ……まだ生きれるだろー！」

リアス「ごめん……なさい……本当に……ごめんな……さ……さい……」  
そう言つて、リアスはゆっくりと眼を閉じる

帝「……おい……起きろよ……リアス……起きろよ……リアス……  
なあ……！俺たち……まだやってないこと……たくさんあるだろ……！クリスマスだつて一緒に過ごしてないし、バレンタインチョコだつて貰ってない……！ホワイトデーだつて絶対に返すよ……！それに、まだ……まだ……まだ俺たち、結婚だつてしてないだろー！なあ、起きてくれ！頼む……頼むよ！他の人がどうなろうと……世界がどうなつたつていい……！だから……神……様……リアスは……リア

スだけは……せめてリアスだけは救ってくださいッッ!!なんだろうと差し出します!能力であろうと、記憶であろうと、命だろうと!だから……だから……!!」

柄にもなく涙をボロボロと落としながら、嘆き、叫んだ

帝「だからもう……僕から……大切な人を……奪わないで……!!」  
「クハッハハハハハハハハハハ!!!!どうだ!我からの贈り物は気に入ったか? 奴隷よ」

聞き覚えのある、憎くて憎くて仕方がない声が響いた

ヴェル「おっと、その様子だと、恋人を亡くしたのか? クツクツクツ、それはご愁傷様だなッ!!?」

ヴェルフリートがそう言っただとに、途轍もない衝撃音がヴェルフリートの足元から響いた。俺の飛ばした神淵剣だ。その速さは光をも超え、最早眼に見えない速度にまで至っていた

帝「……た……え……うのか……」

赤黒いオーラを身に纏い、ゆっくりと立ち上がる

帝「また……お前は奪うのか……自身の勝手な理由で……何の罪もない人間を……俺の仲間を!!」

瞬間、俺の姿は消え、一瞬にしてヴェルフリートの腸を拳で抉った

ヴェル「グブツ……アツ……!?!」

帝「おら、立てよ……まだ命は腐るほどあるんだろ! なあ!」

ヴェルフリートの髪を掴み、上に引っ張ることで強制的に立たせる  
帝「ほらどうした、それでも仮に元精霊神サマの半身だったのか!?

おい!!」

ヴェルフリートを思いっきり殴り飛ばし、壁に衝突させた

ヴェル「ク、ククククク……まだ終わりだと思っな……これで終わりだ!」

ヴェルフリートはそう言うと、幾重にも魔法陣を展開させ、それを重複させると、リアスの元へ放った

そしてそのあとに、巨大な爆風が俺の元にも届いた

帝「な……な……な……」

また……俺は守れなかった……

現在の状況に絶望していると、ふと、頭の中に声と呪詛が聞こえた  
へ力が欲しいか？憎き敵を討ち滅ぼす力が

ああ、欲しい、欲しい！

へじゃあこの呪文を唱えて？そうすれば君は……

へ全てを代償にしてあの敵を討ち滅ぼす力を手に入れることができ  
るのであろう!!

殺すんだ……殺すんだ……殺すんだ殺すんだ殺すんだ殺すんだ殺  
すんだ殺すんだ殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺  
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す  
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス  
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス  
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス  
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス  
シテコロス!!!!

帝「……我、目覚めるは……」

今この時を以って、災厄が再びこの世界に舞い降りた

To be continued.

!!!!!!







ギル「……貴様のその姿は幾度となく見ていた弊害か……その土下座とやらも安く見えてくるな。……面を上げることが許す。我が今興を向けておるのはあの狂犬と化した雑種だ。貴様はとつとと雑種共を滅ぼす計画とやらを進めるために帰るがいい」

リエル「ギル様ありがとー！さあ行きましようヴェルフリート様！あんまりモタモタしてるとまた帝君が襲って来ますよ！ほら、ダンテも急いで！」

ダンテは苛つきながらも、空間を斬り、自分達の住処へと帰って行った

ギル「……さて、雑種よ、精々この我を愉しませるがいい！フハハハハハ!!」

その頃一方数分前に遡るー

一誠 side

ドライグ「!!??相棒！どこかでお前の兄が覇龍と化しているぞ!!」

一誠「んえ？兄貴が覇龍に？」

ドライグ「そんな呑気にしておる場合か！今こうしている間にもお前の兄は命を刻一刻と削られているのだぞ!!」

一誠「はあっ!?!ち、ちよつと待てどういふことだよドライグ！」

何言ってるんだドライグのヤロウ！兄貴があんなもんに手を出すはずないだろ！精々リア姉が殺されたり、俺らのうちの誰かが殺されない限り……待てよ？今日確か兄貴とリア姉は出かけて……

そう思うと俺の行動は早かった。まず、みゆ姉に知らせ、次に朱乃さんにも知らせ、アザゼル先生に召集をかけてもらった

木場「何があつたんだい!?!イツセー君！」

1番最後にやって来た木場が慌て気味に俺に聞いた

一誠「みんな聞いてくれ！兄貴が今覇龍を使ってる！このままじゃ兄貴の命が危ない！」

俺の言葉に反応し、覇龍の危険性を知っている人は、顔を顰め、深刻そうな顔付きになり、覇龍というワードに、頭の上に？を浮かべている人もいた

アザゼル「オイオイマジかよっ!?!クツソ！場所はどこだ！イツセー



！」

イツセー「多分パルマコスタつてとこだと思う！兄貴とリア姉がそこに行くって言った！」

マルタ「パルマコスタね！なら私がみんなを連れて行くわー！」

アザゼル「よしわかった！全員、5分後にはここを出る！それまで各自装備品の整備、点検、確認を済ませておけ！では解散！」

クソ兄貴……！死んでたら許さねえからな!!

一誠side out

帝side

あれ……体が動かない……それに……何で下に落ちてんだ……？

あの後……そうだ、確かりアスが死んで、それから抑えきれないぐらいに怒りが湧いてきてそれから……???

帝「ちよつとイブくううううん!!?!?!?!」

俺が叫んだのは、イスラム教における悪魔王、イブリースの愛称？だった

そう、実は俺、転生者でありながらイブリースの生まれ変わりだったりするのです……今思い出したけど……

まあ生まれ変わりというか魂がほしいほいとやって来て俺の体に入り込んでしまったという緩い感じの理由なんだけど

話を戻すが、イブリースはユダヤ教で言うサタン、キリスト教で言うルシファーに相当する力を持つ悪魔なわけで、俺の素のスペックの高さの半分以上はイブリース……ええい面倒くさい！もうイブくんがいいよね……ええ、イブくんのお陰だったりする

ん？もう色々とキャラ盛り過ぎだつて……？……ええやんけ……まあそんなイブくんとの関係だが……はつきり言つて最悪だね。現在進行形で

しかも恐ろしいことに隙あらば自我を乗っ取つてこようとしてくるからヤなんだよね……今回みたいに

帝「つて説明してる場合かっ!？」

ゼファイ「もういいかなーミカドー。あーゆーおーけー?」

帝「I, m O.K.で、どしたん?」

ゼファイ【発音良すぎてなんかムカつく……じゃなくって、ミカド、早くそのイブくとやらをしばかないと君ずつと意識乗っ取られたままなんじゃない?】

帝「ああいや、今覇龍使ってる状態だからな……こうなりやまた魂ごと俺に屈服させる他ないんだよな……あ……そうだいいこと考えた。ゼファイ、ちよつと耳貸せ」

ゼファイ【何々?……うん……うん……うん……うん……ミカド……それ、君の属性的に1番やつちやいけないやつだから!?わかってるよね!?お願いだからわかかってるって言って!】

帝「贅沢言つてんじゃねえぞゼファイ……要は勝ちやいいんだよ、勝ちや」

ゼファイ【それ1番言つちやいけないやつ!!】  
つというわけでイブくんを少しコロコロしてきたわけで……

え? 戦闘シーンなんていらねえよ。ゼファイがイブくんを羽交い締めして俺がイブくんにかなり強めの腹パン何十本かいたらイブくん白旗上げちやつたし

ゲスいい? はっはっは、何とでもいい給え

帝「あれ……全然治んないんすけど……」

ラタ【あれじゃね? お前の精神になんか突っ掛かってるのか。例えばヴェルフリート怖がったり、仲間失うのが怖かったり】

帝「ううん……否定はできんな……あ、茶柱立ってる」  
きつといいことがあるよね……うん……

ドライグ【待てええええいお前ら! そんな茶を飲んで話をするな! せめてもう少しシリアスなムードくらい作れえ!!】

帝・ラタ【うるせえぞマダオ】

ドライグ【アツ、ハイ……】

帝「まあ確かにヴェルフリートに対する恐怖はまだあるし仲間も失いたくない気持ちはあるな……まあそこは仲間を守り切る意志が足りなかったってことで、これからはもっと仲間を守って行きまっしよい」

すると、俺の体が光り出した

帝「えええ……ちよつとお……解放される理由シヨボいし緩すぎないか作者あ……ヌグアツ!? イイツ→タイ←眼ガアア!?!?」

黙れ小僧と頭の中に声が響いてきた。理不尽でおじやる

帝「あぁー……んじやとつあんまつたなぁー!」

『最後ぐらい真面目にやれ!!!』

帝「グホウアツ! お前ら……自分の事棚に上g」

言い切る前に視界がシャットダウンした

帝「痛たたた……嘘、何で精神世界で受けたダメージがこつちにも反映されてんの!?!」

鼻を押さえて周りを見回すと、衝撃の光景が広がっていた

帝「なんか、筋肉マッスルと筋肉マッスルがいるんですけど」

思わず目を引き攣らせた俺は多分普通なんだと思う

To be continued.

## 覇を越えし龍神

帝 side

帝「ぬうおおおおおおおうっ!!」

黒い筋肉が振り下ろした斧剣を受け流し、その刃の進行方向を地面へと変えた

「っつかこいつなんてパワー持ってんだ!? 受け流したのに腕がビリビリ来ただけど!」

「ハハハハハ！叛逆を！圧制に叛逆を！」

帝「お前はお前でウザい！しつこい！気持ち悪い！」

飛びかかってきた金髪の筋肉を躡し、横腹を蹴って遠くへと飛ばした

帝「あー！もう面倒くさい！令呪を以って命ずる！我がサーヴァント達よ、我が元に集え！」

そう唱えると、俺の足元から5本の光柱が立った

沖田「ご無事ですか!? マスター！」

帝「ご無事じゃない全然ご無事じゃない！ってそうしてる間にまた来てるううう！」

今度は斧剣を横一閃に剣を振って受け止め、鏢迫り合いの状態に持ち込んだ

クー「マスター！そこ退きやがれええ！」

帝「りよお……かいつ!!」

無理矢理に、力を入れにくい体勢まで押し込み黒筋肉の腹を蹴飛ばし、横に飛んだ

クー「その心臓、貰い受ける！刺し穿つ死棘の槍ツ!!!!!!」

その瞬間に、体の中から魔力が持つて行かれた

アニキは、黒筋肉から刺した槍を抜いてこちらに歩み寄ってきた

クー「なんだ、随分と呆気なかったな」

帝「というより、アニキが強いだけだと思っただが？」

クー「おいおい、そりや嫌味か？」

帝「失礼な……俺は思った事を言っただが」



きるなら俺を巻き込まないで!!

イブ【……ボク女の子なんだけど……】

ー……はっはっは……寝言は寝ていい給え……

イブ【本当だつてー！普段はさらし巻いてるだけで脱いだらこうなんだよ?】

ーおいやめっ!

うわっ、以外と胸がデカ……って!

ーやめなさいこのバカちん!

イブ【あうっ!?酷いご主人様!女の子に手を上げたね!】

心の中でイブくんの頭にハリセンを叩き込んだ

ーああ、確かに俺は女の子の手に手は絶対に上げない。ただしそれは有事の際には破つていいことになってんだよ

イブ【なんとという横暴な!】

ーあーもう面倒くさい、力借りんぞ!

イブ【せめて話の脈絡をもう少ししっかりしてよー!】

あれ?ちよつと待て?イブくんが実は女の子だったつてことはイブちゃんになるのかな……はっはああん……何で俺の周りの女の子って人外だらけなわけ!?

帝「ー悪逆なる悪魔の王よ、その力、その技、その叡智、一条の流星すら斬り裂く剣と成りて、我にその力を貸し与え給え!ー」【魔剣イブリース!】ちよつとそこ!セリフ奪わないで!

胸に手を当て、詠唱をし、ちよつとカツコよく決めようと思ったらすぐこれだよ!

萎えた気持ちで取り出したのは、無の聖剣と同じ形ではあるものの、カラーリングが違っていた。刃は銀で、装飾は金となっていた。すると、黒筋肉は、何を察知してか、俺に攻撃を仕掛けてきた

帝「うおおつと……へえ、この剣の危険性に気付いたか……本能がそれを告げてるのかな?」

横薙ぎに払われた剣を、左右に持つ剣をクロスにして防いだ

それにしても驚いたな、まさか真つ先に俺を潰しにかかってくるとは……

沖田「あの、マスター……その剣は一体何なんですか……？ 激しいくらいに禍々しいオーラは見て取れますが……」

帝「へえ、総司も理解したか、この剣の危険性を。こいつはな、絶望を相手に与えることができるんだよ。もつと具体的に言えば、相手の生身に傷を与えることで、相手の精神も削り取る。そしてその削り取られた部分に絶望という感情を埋め込む。そして何より、こいつから受けた傷は絶対に治らないんだ」

沖田「絶対に……ランサーさんのゲイ・ボルクの槍のと同じようですか？」

帝「おおよそは当ってる。こいつは、傷つけた場所の細胞ですら絶望を与え、自然治癒能力を完全に殺す。だからってそういう呪いが掛かってるわけじゃないからな!? 所有者の意思で消すことは可能だからな!」

って何でここで言い訳してんのさ!? 別に言い訳などせんでも良からうに……

「ヘレクレスさーんそこどいてー!」

誰かが叫び、黒筋肉……もといヘレクレスは後ろへと下がった

帝「んなつ!? ヘレクレスってあの12の試練を乗り越え、人の身でありながら神になったあの!」

それだけで俺が驚くには十二分だった。相手はギリシヤ最強の英雄。そしてそれを相手取るとなると、男として滾らないわけがない「そーなんだけど、今は僕が相手かな!」

帝「げっ! リエル……」

上から落ちてきたリエルの斬撃を、両方の剣を使って受け止めるリエル「ウソ……げってなんなのげって!? それはそれとしてさつきぶりだね、帝君。どうやら覇龍を自力で解いたみたいだね」

さつき何か呟いてたようだが、なんて言ってたんだ?

リエル「恋人さんとお別れ、しなくていいの? それくらいは待つてあげるよ?」

帝「……なんかスマン……」

敵である筈の存在に負い目を感じてしまった……まああの道具を丁度使えるようになってるみたいだしあれかければ生き返るか

リアスのもとへ歩き、リアスの横に跪き、片手でリアスの頭を支えるように抱えた。もう片方の手に、魔法陣を展開し、ある一つの瓶を取り出した

……  
どんな君を見ていても、自然と頬が緩んでしまう。けど、やっぱり

リアス「……エ……エ……ミ……ル……？」

帝「うん、君のエミル・キャスタニエだよ」

リアス「……エミル……エミル……エミル！怖かった！あなたを残して死にたくなかった！もう……！もう！」

俺の名前を連呼すると同時に、勢いよく抱きついてきた。危うくバランスを崩しかけたが、なんとか持ち堪え、俺もリアスを抱きしめ、頭をゆつくりと撫でた

帝「大丈夫。もう大丈夫だよ」

そうやって、泣いたり、怒ったり、笑ったり、楽しそうにしてる君が俺はもつと見たいよ

それからしばらくして、リアスに現状を説明した

リアス「そう……うん、行って、エミル。そして、勝ってちょうだい」

帝「わかった。絶対勝って帰ってくるよ」

リアスの額にキスを落とすし、剣を構え、戻った

リエル「もう終わりかな？」

帝「ああ、もういいぜ。それと、悪いな。勝って戻る約束してんだ。

初っ端からクライマックスでいくぞ！ドライグ！ゼノン！」

ドライグ・ゼノン「「応ッ!!」」

左手を天に翳し、手に魔力を溜めながら、詠唱を始めた

帝「――我、目覚めるは

――覇の真髄を追い求め、覇の極みへと至りし龍神帝王なり！

――無双に憧れ、夢想に焦がれる

――我、万物を浄化せし破邪の光を以って

――汝、光輝く夢想の世界へと導こう！」

背からは鋭角フォルムの8枚の翼が生え、腰からは同じように、鋭



角フォルムの尾のような触手が、8本現れ、1本1本、8つの宝玉の  
ような球が埋められている。腕には、薄い籠手、足には薄い具足が装  
着されていた

帝「待たせたな、リエル。こいつが、ジャガーノート・エーテル・ドライフ覇龍を越えた最終形態、  
カーデイナル・エッジ・ドラゴンメイル覇煌龍、咎を拒絶す劍神の龍鎧だ！」  
左右の剣を構えて、キメポーズを取った

決まったZE☆

To be continued.

このスケコマシツ!!! by 帝の中の人達

帝 side

帝「はっ! どうしたよりエル! お前の実力はそんなもんだったか!」

縦横無尽に駆け回り、リエルに次々と傷を入れて行く

リエル「グツ! コレは……マズイね、ヴェルフリート様と同格か……!」

ギル「リエル! まさかこの我がいることを忘れていたわけではあるまいな!」

リエル「そんなわけないよ! ギル様! ごめんなさいだけどお願い!」

ギル「フン! はなからそう言っておけばよかろうに……まあ良い、行くぞ雑種! 精々意地汚く足掻くことだな!」

金鎧の男がそう叫ぶと、周りに黄金の波紋が広がり、そこから、武器の一部が顔を出していた

帝「んなの当たるかよ! フォームチェンジ! ストライカー!」

そう叫び、尾を全て分離させ、64ものビットへと変形させ、宙に浮かべる

ビットから黄金の波紋目掛けてレーザーを乱射し、黄金の武器を四散させた

ギル「ほう、面白い。ならばこれはどうだ!」

今度は、さっきの倍以上の波紋が広がった

ビットも使い、次々と叩き落とすが、無限に続くために反応が遅れた

帝「ツ! 捌き……切れっ!」

ジャンヌ「我が神はここにありて!!!」

眼を瞑ってしまったが、ジャンヌが宝具を展開させたことにより、武器は次々と逸れて行く

ジャンヌ「エミルくん、私たちがいるというのに、何故頼ってくれないんですか?」

帝「いや……ただお前らを危険な目に合わせたくなかっただけ……」

ジャンヌ「それは傲慢です。いつかあなた1人だと、限界が来ます。でも、1人でできないことも、2人ならできることだっていっぱいあるんです。ですから、もつと頼ってください、一緒に戦ってください」

帝「……へいへい、わかったわかった、わかりましたよ。そんなじゃ、一緒に戦ってくれるか？ジャンヌ」

ジャンヌ「はい！でもまずは、立ち上がってください」

差し出された手を掴み、起き上がった

沖田「何やら熱い展開になってきましたね！不肖ながら、この沖田も助力させていただきます！」

邪ンヌ「そろそろ私も暴れたくなってきたわ。別に今なら好きなかっけやってもいいのよね？」

クー「……いい、一応俺もまだ行けるぜ……！」

帝「どこが行けるぜだどこが」

水の属性のビットの回復レーザーをアニキに当て、剣を構える

帝「さて、最終決戦と行こうか！俺は次の一撃で終わらせる！アニキは先陣を切って時間を稼いでくれ！邪ンヌと総司はアニキのサポート！ジャンヌはここで待機して俺のサポートを頼む！いいな！」

『了解！』

全員が指定された命令に従って解散した

左右に持った剣をクロスさせ、地面へと突き刺した

帝「さて、チャージ開始としますかね！ジャンヌ、頼むぞ

——数多の星の命よ、神なる光と成りてこの剣に宿り給え

——今この時を以って、この刃は天を廻る光と成る」

覇煌龍の時にのみ使える神力を無の聖剣に流しつつ、光の精霊魔法と自然から得られるマナも流す

遠目から見れば、ギルガメッシュとかなんとか聞こえるがあの金鎧ヤロウの真名か？

帝「——月夜に浮かぶ朧なる闇よ、絶望すら呑み込むその力をこの剣に宿し給え



ギル「……開闢の星!!!」

帝「闇黒に煌めく神なる刃!!!!」

互いの技がぶつかり合う!!!!

ギル「どうした!!それが貴様の全力か!!」

帝「ぐうっ!……くっ!……!」

嵐が俺の目の前へと迫る

自然と手に力が入った

帝「まだ……まだ……うおおおおおおお

らあああああああ!!!」

ギル「何ッ!?!」

帝「つのままあ……朽ち果てろおおおおお!!!」

俺の斬撃が赤い嵐を押し戻し、ギルガメツシユへと肉迫し!!」

ギル「グッ!ぐおおおおおおあああああ!!!」

巨大な爆発を起こし、ギルガメツシユはその爆音と共に散りてい

た

帝「ハア……ハア……ハハハ……力が入んねえよ……もう……無理

……」

誰かが俺の名を叫んだのを聞き、俺は意識を落とした

……

息を吐くだけで、その息が白く見えるようになった

あの一撃の時の余波が、季節にまで影響したらしく、本来は夏であ

る筈が、すっかり冬のような寒さとなっていた

吐息が白く見えるのもその所為。ましてや、雪国であるフラノール

までくれば尚更だった

帝「つて、季節にまで影響与えるって、どんだけ威力やばかったん

だよ……」

フラノールの教会の前の高台から街の景色を苦笑しながら見渡し

た

それはそうと、英雄王とぶつかり合って数日後、エミヤが体をボロ

ボロにして帰ってきた。霊体化して帰ってくればよかつただろと言

うと、何故か霊体化ができなくなっていたらしい

アニキや総司達も試したが、てんでダメなようで、エミヤが覚醒したマスターの魔力が私達に影響を与え、受肉した状態になってしまったと結論付けた

今は、エミヤもアニキも、ジャンヌ姉妹に総司ら、サーヴァントのみんなは、この地に根を下ろす者として生活を楽しんでいる

ジャンヌ「あ、エミルくん、どうされたんですか？こんなところで」

帝「……いや、ここんところドタバタしててゆっくりできてないなーって」

ジャンヌ「ア、アハハ……でも確かにそうですね。少しばかり私も魔力が……」

ジャンヌは足元をふらつかせ、俺の方にもたれかかってきた

帝「ん〜……そうだ、ジャンヌ、少しこっちに顔向けてくれるか？」

ジャンヌ「は、はい。なんですか……んむっ!？」

ジャンヌがこちらに顔を向けたと同時に、ジャンヌの唇を奪った

帝「んっ……ちゅう……じゅる……じゅる……んぢゅ……ちゅる

……ぷはあ……」

ジャンヌ「ぷあ……エミル……くん……何を……」

帝「……サーヴァントとマスターとの粘膜接触による魔力供給だよ……言わせんな、恥ずかしい……」

恍惚とした表情のジャンヌを見て、自分の行動があんまりに恥ずかしくなって顔を背けてそう答えた

帝「……あの……さ、ジャンヌ。前、俺のことが好きって言ったろ？そのことだけど……まあ、受けてやらんでもないが……」

ジャンヌ「え……ほ、本当ですか!？」

帝「おう、本当だ。前に言っただろ？俺はジャンヌに幸せになって欲しいって」

ジャンヌ「はい、言ってみましたね」

帝「俺の個人的な見解が多数入ってるんだけどさ、本当の幸せってのは、好きだけ生きて、好きだけ遊んで、好きだけ笑って、好きだけ食べて……んで、好きだけ誰かに恋して、結ばれてさ。そ

うやつて、当たり前前のことを好きなようにできるってのは人間に与えられた特権だと思うんだ。それを精一杯活かして、楽しむってのが幸せの意味だと思うんだ。それに、一途なものではないけど、愛を向けることぐらいはできると思うぞ?」

そう言つて、ジャンヌを優しく抱きしめる

ジャンヌ「本当に……私でいいんですか?」

帝「おう、誰がお前を否定なんてするか」

ジャンヌ「私、結構面倒くさい女ですよ? 純粋な愛を向けて欲しいって言うかもしれませんよ?」

帝「そんなもん気にするはずないだろ。しっかりお前に愛を向けてやるよ。だからそんなに泣きそうな顔すんなって」

ジャンヌ「本当に私が幸せになつていいんですか?」

帝「いいに決まつてる。お前の幸せを否定する奴なんかみんなぶん殴つてやる」

ジャンヌ「……そうですか……私、あなたに愛されていいんですね……」

ジャンヌはそう言うと、俺の体に手を回した程なくして、俺の頬に白い塊が落ちた

帝「……おお……見ろよジャンヌ、雪だぞ」

ジャンヌ「わあ……綺麗……ひぷしっ!」

帝「おいおい、大丈夫かよ……えつと、ほら、マフラー。手袋はーつと……」

ジャンヌ「いえ……その……えつと、マフラーはこう着けて……」

ジャンヌは俺の首をマフラーを巻くと、自分の首にもマフラーを巻いた。そのあと、俺に手袋の片方を渡してきたが、ダメだと返そうとすると、何故か怒られたので、仕方なく右手につけることに

帝「えつとそれで……左手はどうしたらいい?」

ジャンヌ「こうするんです」

俺の指と自分の指を絡めるように握り、俺のコートのポケットに入れて

帝「ああ……成る程……」

ジャンヌ「さ、帰りましょう」  
手と手、腕と腕を絡め、暖をとるべく帰路につくのだった

へこのスケコマシツツ!!!!!!  
∠

ーんなもん言われなくてもわかってるわ  
はあ、頭が痛くなってきた……  
!!!!!!!!!!

To be continued.



## 着せ替え人形帝ちゃん

帝 side

帝「どおわっ!?ちよっ!え、燕青助けて!」

投擲される無数の槍を躲し、黒髪的美男子に助けを請うた

燕青「いやあー、人外同士の訓練に水を差すのもどうかと思うんでスルーさせていただくぜ」

帝「んな殺生なことを!?というか今さらつと俺も人外呼ばわりしたな!?それにお前も人のこと言えないからな!」

「どうした!貴様の本領はまだこんなものではなからうて!」

帝「アニキイ!なんとかしてくれえ!!」

クー「すまんな……師匠には逆らえん」

帝「だあーくっそおお!!どうしてこうなったあああ!!!」

—————

帝「あだだ……スカサハさんめ……アニキよくあのケルト式ブーツキャンプを生きて帰って来たな……」

男湯、混浴、女湯と書かれた暖簾のうちの、混浴に入る

別に男湯でもいいのだが、混浴の方が比較的に広い

俺が今一番欲しいのはリラックスできる空間なのだ

因みに混浴にはよくイツセーが入り浸っているらしいが、あいつが入ってる時間帯は不思議な事に女性陣のみんなは基本入ってないんだよな……まあ思いつきり笑ってやったからいいけど

帝「あー……コートもボロボロじゃねえかよ……」

新たに新調した装備の、縁に黄色いラインが入っていて、その真ん中に黒いラインが入った青いコートを見て眩く

オリハルコン製繊維の糸と賢者の石製繊維の糸を使っているから防御力と魔法系防御、耐久性もめちゃくちゃなぐらい高いんだけどな……まあ破れてないからいいけど、もし破れてたらエミヤオカンに怒られるふと、上を脱いだ後に自分の腹を見てみる

帝「大分筋肉ついたな……割れてるし……地味に硬い……その癖あんま無駄なんもついてないし……もしかして俺って着痩せするタイ

プ？」

ルアン【結構着痩せするタイプじゃないー？】

帝「さ、どうだかねー。さつて、そんなことよりおつ風呂ーおつ風呂ー♪」

タオルを肩に担いでドアを開けた

バタンツ!!!!

全開にしたところで勢いよく閉めた

帝「あ、あれえー……おかしいな、疲れてんのかな……こんな時間にジャンヌが風呂入ってるわけないもんなー……」

チラツと備え付けの時計を見たが、時計は寸分違わずに、午前7時を指していた

もう一度確認すべくドアをゆっくり開け……

ガタンツ!!!!

また閉めた

帝「……そうだ、こう考えればいいんだ……風呂にジャンヌなど居ないと」

一応の保険の為に腰にタオルを巻いて、再度入室した

ジャンヌ「……／＼／＼」

帝「!!!!……チクショウやっぱ見間違いないじゃなかった!!!!」

or!!!!ってると、足音が聞こえてきた

どうせ!!!!ジャンヌだろ。わかってますよーだ

ジャンヌ「……あの……その……」

帝「……えつと、どうした？」

ジャンヌ「え、えつと……だから……その……一緒に風呂に……入りませんか……？」

頬を赤らめ、もじもじしながら上目遣いで言われた

そりゃ反則っすわー……

帝「……はい……」

見てるこつちもなんだか恥ずかしくなって、無意識にそっぽ向いたとりあえずそのあとは髪、体の順に洗い、湯船にゆつくりと浸かつ

た。そして遅れてジャンヌが入ってきて、背中あわせにして入ることに

ジャンヌ「えっと、エミルくんはこんな時間にどうしてお風呂に……？」

帝「あれだよ、スカサハさんが俺に突き穿つ死翔の槍……投げボルクを覚えさせようっていうあれで……そんで汗とか埃とかが体中についたから」

ジャンヌ「ああ、成る程。因みに覚えられたんですか？」

帝「覚えちまったよチクショー！鬼畜すぎるわあの人！途中殺されたからな！あんなの命がいくつあっても足りねーよ！！燕青もアニキも助けてくれないしエミヤとオルタは逃げ回る俺見て笑ってたし、アルトリアさんだつてマスターならできますつてまるで獅子……いや、獅子王が崖から騎士を落とすかのようなこと言うし総司は頑張ってくださいの一点張りだしもうやってらんねーよ！！！」

ジャンヌ「でも満更でもないように見えますよ？」

帝「ハア……ハア……まあ……楽しくないわけが……ないからな……仲間は多いに越したことはない…………楽しき事は良き事なりつてな」

ジャンヌ「ふふつ、そうですね」

ジャンヌはそう言つて、俺の背中に抱きついてきた

あつちよつ!? お、おっ!! お、おば、お、おっ ぱい

があああああああああああ!!!

帝「あの、じゃ、ジャンヌ!?!?!」

ジャンヌ「こうやって平穩で楽しい日々が暮らせるのも、全部あなたのおかげです。ありがとうございます」

帝「な、何を今更……別に、俺はただお前らを護るために力を振るうだけだ。今も、昔も、そしてこれからもだ！それに、ただの自己満足のためにやってるだけだ！勘違いすんじゃないぞ!?!」

ジャンヌ「それでもいいです。結果的にそうして私達を守ってくれてるんですから」

さらに腕に力を入れて、さつきよりも密着度が高くなる

わああああああ!!!おっぱいがああああああああ!!!!!!  
おっぱいがががががが!!!おっぱいがががががが!!!もうホント勘弁してください!!  
元気になりすぎて痛いです!!!何とは言わないけど!!!

この後小1時間、ジャンヌの放つ色気と俺の理性との勝負が続いた

~~~~~  
さて、先ほどから出ている新しい人達の紹介と、召喚された理由でも語ろうか

まず、召喚された理由だが、二週間ほど前、ニブルヘイムへ小屋や召喚の術式を消す為に行ったのだが、いちいち解体するのが面倒くさくて、大分前に吸収して使ったつきり一度も使っていなかった滅びの魔力で小屋を消していたわけなんだが、魔力の密度というか濃度が高く、その魔力に反応して出てきてしまった

ここまで言えばもうみんなもわかるであろう

俺のせいじゃん!

さて、愚痴も程々に一人一人の簡潔な紹介でもしよう

燕青「おお……マスター、かなり似合ってたぜ。正直惚れたわ」

まずは燕青

彼は中国の小説である、水滸伝に無頼漢として描かれた人物だ
天巧星の生まれ変わりと言われ、小柄で細身の絶世の美男子である
中国拳法のうちの1つ、燕青拳の開祖と言われているらしいが、そう呼ばれるのも納得の腕を持っている。とは言え架空の人物だが、英霊の中にはそんなやつもいるらしい

結構絡み易く、気前のいいやつで、よく俺の相手をしてくれる、俺にとつての近所の親しいお兄さんのなポジションである

因みに燕青からは、素手の格闘術を教えてもらってる

スカサハ「む……これはこれで中々そそられるものが……」

次にスカサハさん

彼女はまあわかる通り、アニキの師匠で、アニキにゲイボルクを渡した張本人だ

こつちではスカアハと呼ばれているがそこはご愛嬌ってことで

彼女は影の国の女王で、死すら超越した神殺しである

根はいい人なんだが……彼女主催のケルト式ブーツキャンプははつきり言って死ぬ

アニキの持ちネタの死亡もあそこから来たのかと思ってしまったほどにだ

彼女からは槍術を教えてもらっていて、冒頭のあれは突き穿つ死翔の槍こと投げボルクを教えてもらっていた

アル「な、なぜでしょう……なんかこう……湧いてはいけないものがじわじわと湧いてきて……じゆるり……」

次にアルトリアさん

なんと彼女はかの有名な騎士王、アーサーだったりするのだ。流石に男でなかったことになり驚いてしまったが……

彼女は、クラスとしてはランサーとして現界。武器は、カムランの戦いで、叛逆の騎士、モルドレットとの一騎打ちで使用された槍、ロングミニアド。

当然ながらエクスカリバーは持っていないわけなんだが、俺はこう思った。もしアルトリアさんが7つに分かれたエクスカリバーを見たらどうなるんだろうと

まあ恐ろしいこと限りないからそんなことはしないが。というかそれをする度胸も無いし

彼女からは馬術を教えてもらっている

帝「……なあ……」

エミヤ「す、すまないマスター……あ、あまりに似合いすぎて……

ぷくくくく……」

帝「……なあってば……」

ジャンヌ「沖田さん！カメラの用意は!!」

沖田「バツチリです！なるべく多く撮れるようにここの家中を漁ってきましたから！」

帝「……なあ……!」

邪ンヌ「あつはははははは!!!!そ、その格好実に似合っていますよ!!いつそのことその格好が一番似合う性別になればいいのではあり

聖処女なんて嘘だったんだ（遠い目）by帝

帝「ぐっ！あ”あ”…………!!」

右腕を必死に押さえつけ、苦しみに帝は悶えた

形は腕として残っているものの、外見は酷く醜いものとなっていた
リアス「んう…………エミ…………ル…………!!その腕!？」

寝起きのリアスも、その異常な光景を見ると、すぐに目を覚ました。
いや、覚まさざるを得なかった

帝「!?ああ、なんだリアスカ驚かせるなよ」

リアス「どうしたのその腕!?!、一体いつから…………!!」

帝「いや…………これは生まれつきだ…………これはまあ右腕の神の結晶とあるもんが同化…………というよりかは、在るべき姿に戻ろうとしているだけだな」

リアス「在るべき…………姿…………?」

帝「そうだ。本来の姿ってやつだな…………あ”つづあ!!!」

おうむ返しに聞いたリアスに、帝はそう答える

帝「でもリアス、できるだけ皆には…………これな?」

帝は、人差し指を口の前でぴつと立てて止めた

その直後、悲鳴に似た絶叫が響き渡った

帝side

「いえああああああああ?!!?」

帝「おおうなんだあ!?!」

声が聞こえてきた方向に足を向けて走る

そしてたどり着いたその先には…………

帝「…………あの…………さ、何やってんのゼロス…………」

何故か怒っている邪ンヌとその邪ンヌに何度も蹴られている赤髪の美青年（笑）である、前の旅の仲間であるゼロスがいた

ゼロス「し、知るか！俺様はただオルタちゃんをデートに誘っただけで………… 帝「すまん皆、うちのバカが迷惑かけた」 ちよつとお!？」

帝「いやお前え…………自業自得って言葉知ってる?」

形式としては、今までに習った漢字の総復習で、これを二時間ほどかけてやった

結果はさつきも言った通りの満点だ

そして俺は劳いの意味を込めて、ジャンヌの頭をできるだけ優しく撫でた

ジャンヌ「ではその……ご褒美を……」

帝「……やっぱ足りないか……わかった。ほら、目、閉じて」

あの時の魔力供給以来、ジャンヌはすっかりキスにはまってしまったらしくご褒美と称してこうやってキスを求めるキス魔となつてしまった

いやまあ半分くらいは俺のせいなんだろうけど

互いについばむようなキスを何度もし、最後の一回で、少し長くジャンヌの唇に自分の唇を押し付けた

ジャンヌ「ん……ぱあ……これで勉強も終わり……ですね」

帝「ああ、漢字はな」

そう言うと、ジャンヌはえつ？と言いたそうな表情になった

帝「勉強と言ってもそれは一くくりのもんだ。例えば数学、化学と物理と地学、現代社会や日本史に世界史、英文法に実践英語、ついでに芸術科と家庭と保健体育。幸いまだ時間はあるんだ。頑張つて全部……とは言わんが、全体の4分の3は終わらせないと。まあ喜べジャンヌ、またご褒美と言って俺にキスをねだれるぞ」

ジャンヌ「そ、そういうわけでは……」

帝「の割には随分と表情と目には期待の感情が読めたんだがなあ……まったく、とんだむつつり性女様だな」

ジャンヌ「で、ですから違います!」

帝「……そっかあ、違うんだ……じゃ、次からはキスはしないようにするよ」

ジャンヌ「えっ、いやっそのっ、そっ、そうじゃなくて……ですから、えとえと……」

慌てるジャンヌが可愛くてついいじめたくなる俺は悪くないはず

帝「あれ、俺とキスしたくないんじゃないの?」

やはり自分のものが自分のものでなくなるのは怖いし、死ぬのも怖い。体を得体の知れないものに蝕まれるのも怖い本当にこの先が不安になってしまう

そんな事を考えてしまうくらい、精神が弱っていた

自然に涙が漏れ出してきたが、気にも留めなかった。じわじわと少しずつ湧いてくる恐怖心を押さえ込むのに必死だった

ははっ、涙を流せるくらい人間性はまだ残ってたか

そのまま現実を受けきれずに現実逃避を始めてしまった

少なくとも仲間内では自分が一番強いとは自覚している

だが、弱さを見せれば皆が弱気になると思うと、どうしても言葉にできないものがある

帝「もう、嫌だよ……誰か……助けて……」

一人だからこそ言える言葉

それを皆に言えるときがくるのは多分一生来ないだろう

To be continued.

元凶討伐？

帝 side

しまった、赤ペンをジャンヌの部屋に置き忘れてしまった
かといってあの状態のジャンヌの部屋に行くのは虎のいる檻のな
かにステーキを置くようなもんだし……

まだ余っていないかと机の引き出しの中を除いたが、掠れてもうイ
ンクが出ない物ばかりだった

書斎から直接俺の部屋にドアを潜り抜けて入り、筆記用具用の引き
出しを見ても同じような感じだった

帝「……仕方ない、気配遮断して行くか……」

それから少し歩いてジャンヌの部屋の前に着いた。最悪ダイナ
ミック入店して目的をさっさと済ませるか

帝「……まだ抵抗感が……ええい！赤ペンをとらなければ！」

あまり音を立てないように素早く開け、サツと扉を閉めた

「あなたはエミル様を見るとどんどんエツチな気分になる……あな
たはエミル様を見るとー」

帝「……………」

手早くジャンヌだけを包み込まないように防音結界を張る

というかこの声すごーく聞いたことあるんだが……聞き覚えバリ
バリあるんだが……

思わず天を手で仰いでそのまま顔を覆った

暫く時間を置いて少し息を吸い、一拍置いて叫んだ

帝「なああああ に や っ て !! ン だ テ メ エ エ エ

エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ エ !!」

「おや、これはエミル様ではありませんか。一体どうなさいました？」

声の主の正体は、俺の眷属精霊のテネブラエだった。またの名を陰
険ジブラエ

帝「いっやだから何やってんだって聞いてんだけど!」

テネ「いえ、ただ少し催眠をかけてるだけでして」

帝「は？でもジャンヌには対魔力の能力があったはずだが……」

すぎるエミル様がすみません調子乗ってましたので真顔でかまぼこ板を構えないでくださいおねがいします」

帝「……つたく、少しの時間なら待ってやる。どれくらいかりそうだ？」

流石に半年とかだったら俺怒るからな。死ぬからな……多分

テネ「私の全力を以てしても、精々1ヶ月……いえ、半月ぐらいが限度でしょうか」

帝「いい、それなら十分だ」

テネ「ではエミル様、ここらで私は失礼をば……」

テネブラエが帰還用の魔法陣を空气中に発生させ、そこへと向かって行った

帝「……スケベシスベシフオーウ!!」

テネ「あふあっ!!」

ボールを相手のゴールにシュウウウ!!超☆エキサイティン!!

ドロップキックでテネブラエの背中を蹴って、魔法陣の中に叩き込んだ

帝「ふうう……さて、寝るか」

そそくさと赤ペンを回収し、部屋を出ると同時に防音結界を解くのも忘れずに

—————

帝・ラタ「……………」

鏡を見て唾然とする俺とラタ

帝「なあラタ、俺の言いたいことわかるよな……」

ラタ「わかってる……」

帝「オッドアイとか厨二心擦るなあオイ!」

あ、ありのままに起きたことを話すぜ。朝起きて鏡見たら左目がラタと同じ赤目になってたんだ。何言ってるかわかんないと思うが夢とか(r y

帝「マジかよおいこんな下らねえことは一度つきりにしてほしいんだが!」

どうしてくれようか、この目……

ラタ【取ろう!】

帝「悪鬼外道か貴様ア!？」

不意にポタポタと液体が落ちる音が近くで聞こえた

周りを見渡すが、何も見えない。辺りを見回し、洗面台に目を向けると、赤い液体が池のように貯まっていた

指で掬い取り、少しだけ舌を使って舐める

生臭さと鉄の味、少しドロツとしたような味が口の中に広がる
血?でもなんで……

鏡に視線を戻すと、そこには、左目から血をポタポタと垂れ流す俺の姿があった

帝「……は……?どう……いう……」

状況が理解できずに脳内が混乱し、呆然と立ち尽くす

帝「ツ!？」

じわじわと酷くなってきていた痛みが急に、余計に酷くなった

ラタ【あー、そういうパティーンね】

なぜかラタは自分で納得し自己解決していた

帝「痛あ……で、そういうパティーンってどういうパティーンなんだ?」

ラタ【回復早つ!?さつきまでスゲー痛そうにしてたじゃねえかよ!?!あれは嘘か!?!演技だったのか!?!】

帝「いやもーなんかね、こういう痛み慣れた。という訳で説明プリーズ」

ラタ【雑いというか軽いというか……まああれだ、お前の体が俺の魂が宿るのに適正な肉体ってのは知ってるだろ?その適正度合いが更に上がってお前の体が俺の元々の肉体に近いものになっていつている。それに耐えきれずに目から血液ブシャーッなわけだ】

帝「思ったよりぎっくりしてたー!まあ取り敢えず血はなんとか止まったし下に降りても大丈夫かな」

ラタ【目から血をドバドバ流しながら平然としてる奴見たら誰だってパニックと思うけどな】

帝「ははははは……そりゃあ違いねえ……」

乾いた笑い声を出して思わず苦笑いしてしまった
自分のこと言われてるみたいでまともに笑えねえ

いつもの如く、ダンスの中から適当なTシャツを取り出し、下も
ジャージに着替えた

エミヤ「おはよう、マスター。ずいぶんと騒がしかったが何かあつ
たのか？」

下に降りて、最早エプロン姿が定番となつてしまったエミヤに心配
そうな口調で聞かれた

帝「いや、特にないよ。また走り込み行ってくるから朝飯は頼んだ」
エミヤ「ああ、任された。それはそうとマスター、そんな服装で大
丈夫か？」

帝「大丈夫だ、問題ない。じゃ、行ってくる」

霸道という大きな二文字を背中に携えて俺は一步踏み出した

余談だが、間違えて部屋着を着てしまつていたことに、シャワーを
浴びる時に気づいてしまい、一人脱衣場で悶絶しているところ、偶々
来た女性陣の皆様方に見られてしまった。

To be continued.

開幕シリアス？何を言ってやがるんだね君は。そんなもの、当の昔に俺が殺したよ（by帝

帝side

さて、今日は実体化させたラタと共に迷いの森まで来ている

帝「見て見てーラター！天啓ロソクと極光キヌスの槍拾ってきたよー！」

ラタ「わああああああああ！！！！なんてもん拾ってきたんだバ
カアアアアアアア！！！！」

はい、怒られた☆

ラタ「なんでその槍拾ってきてんの!?ここの湖の底に突き刺さってたんじやなかったの!?」

帝「いやなんか浮いてた」

ラタ「もうちよつと深く突き刺しとこうよおおおおお！！！！！！」

ラタはそう叫んで、両膝と両手を地面につけた

帝「まあいいじゃん、これ選ばれたやつにしか扱えないらしいし。ところでちよつと緋天穿つ閃光の槍も一緒に持つてみたんだけどさ、あと腕を二本生やさないといけないという使命感が出てきた」

ルアン【誰か喜びの歌かけろおおお！！！！】

ラタ「それは止めろおおお！！！！お前はフォースイ○パクトでも起こすつもりかあああああ！！！！」

帝「ハハハ、安心したまえ。俺が人類を滅ぼすわけないじゃないか」

……多分

ラタ「おい待て!?今多分とか心んなかで付け足したろ!?絶対付け足しただろ!?」

帝「チツ……君のような勘のいいガキは嫌いだよ……」

ラタ「そこはせめて嘘でもいいから否定して欲しかったなあああああ！！！！」

帝「ラタちよ!とうるさい」

ラタ「こいつ……!」

ラタがもんの凄い顔で俺を恨みがましく見つめる

その視線に俺は

帝「おいつ、ちよつ、そんな見つめんなし／＼／」

ラタ「ちつげえよ！バカか!?さてはオメエバカだな!」

敢えて恥ずかしがった

帝「さ、とつとと行くぞ」

ラタ「ぐぬぬぬぬぬ……手のひらの上で踊らされてる感がスゲエする……!」

ラタトスク君のぐぬぬ顔マジワロス

さて、そんな茶番劇はさて置いて、そろそろ本題に入ろうか

帝「じゃ、そろそろ真面目に戻ろう」

ラタ「ハア……ハア……最初っからそうしてろっての……」

帝「どうした、発情したか?」

ラタ「してねえわ!お前はどこまで俺を疲れさせる気だ!?!そろそろ休ませてくれ!!!」

帝「お、おう」

そろそろ可哀想になつてきたのでやめておこう

そう思い緋天穿つ閃光の槍を元の十字架の首飾りに戻す

ラタ「……ところで、ミリとアリスに挨拶はしておかないのか?」

帝「いや、解呪のほう優先度が高い。帰るときに顔くらい出してくが。よし、天啓ロシキと極光キョウカスの槍も回収したし、ジャンヌ達の所に戻んぞ」

ラタ「ってかその槍拾う必要あったのか?」

帝「いやまあ、一応この槍、竜滅の力持つてるし、何より魔に属するものに絶大な威力を誇るからな。こいつならいつでも魔龍を相手取れる。取つといて損はないと思うぞ?つても、仮にこいつを握ることができなかつたら神淵剣に竜滅の概念を付与して飛ばしまくるつもりだったんだが」

ラタ「お前、それやりすぎたら戦闘中に魔力切れでぶつ倒れるからな?」

帝「大丈夫だ。ミラクルグミ駆け回りながら食うから。ドジ踏んじまったら舌噛んじゃまうがな」

ラタ「……心配だなあ……」

帝「そう言われてもねえ……どうだった？ ジャンヌ」

ジャンヌ「特に問題はありませんでした。 エミルくんはどうでしたか？」

帝「無事に回収できた。 少し休憩したらまた出ようか……ほいッ！」

近くの茂みに砂埃が少し立つ程度に力を入れて投げた

代わりに聞こえたのは肉に突き刺さる音が聞こえた

帝「何々……げっ人面牛かよ……！」

ジャンヌ「どうしたんですか？ きやつ！ な、なんなんですかこの生き物!？」

俺の横からひよっこりと顔を出したジャンヌが人面牛に驚いて俺の腕に抱きついた

帝「ま、フツはそういう反応するわな……コイツは人面牛。 ミノタウロスの逆バージョンだな。 厄介なのは作物や家畜に被害を出すこと。 あと……」

ジャンヌ「あと？」

帝「……こいつ殺した時の罪悪感が人間殺した時みたいで半端ないんだよなあ……しかも今回は年取ってる牛と来た。 くそう、罪悪感で胃が押し潰されそう」

そんなわけで、頭だけを切り落とす

ジャンヌ「って何に使う気ですか!？」

帝「食用だよ食用」

ジャンヌ「だからってそんな得体の知れない生物を……」

帝「食えりやいいんだよ、食えりや」(真顔)

ジャンヌ「アツ、ハイ」

ラタ「おーいエミルー！ 何があっただんだー？」

帝「気にするなー！ ただの牛だー！」

少し距離があるので、声を大きくして話していた

帝「で、あんまり見てなかったがオルタはゲームか……」

邪ンヌ「何よ……してちゃ悪い？」

帝「いや別に？ ただ最近よくゼノヴィアとゲームやってるから何

やっつてんのかなーって」

邪ンヌ「……モンハ〇よ」

帝「あつるええええ!?なんで〇ンハンこの世界にあるのおおおお!?誰か俺以外にあつちの世界に住みながらこつちの世界に移動できる奴でもいるのかああああ!?」

おつかしいなあと思いつながら、簡易的な調理場を作り、食べれる部分は一口サイズに切り分け、食べられない部分は近くの茂みにスパークィング

薪に火をつけて薪にし、一つ一つを木の枝に突き刺し、薪の火に当たるように地面に突き刺す。一応この枝は消毒済みなので衛星的には安全だと思う

しばらくは、焼いた肉を片手に、今回の目的の再確認と、最近のことを話しあつたりした

途中、ジャンヌと俺が会話や最近一緒にやっていたことなどに限定してオルタは羨めしそうな目で俺とジャンヌを見ていた

恐らく楽しそうに聞こえたんだろう。今度誘ってみるか

肉も無くなり、薪の火も、間もなく消えそうになっていた

帝「ふう……間食にしては随分と重かったが、まあそれは腹ごなしの運動でチャラにするか!」

いつの間にか迫っていた魔物に近づき、脳天に二又の紅槍を一刺。槍を抜くと、脳の破損と大量の出血によりその魔物は絶命した

見ればその姿はフェンリル。しかもその群れだ。少し冷や汗が垂れた

この迷いの森に住む魔物はどういうわけか、外に出歩いている魔物より、三倍ほど強い。下手すれば、この森の最弱モンスターであろうと、外の魔物の上位のものとならば互角に戦える程

ジャンヌ達に攻撃が向かないかと心配もするが、なかなかどうしてか、強敵を前にすると滾ってくるのは、自分でも治せないらしい

自分に若干呆れながらも、迫り来る凶爪をいなし、石突きを横腹に叩きつけて吹き飛ばす

背後に迫っていたフェンリルの牙を、槍を半回転させ、石突きで顎

に一撃。顎を打たれた衝撃で仰け反ったことで隙ができたところを、心臓に抉り、振り込むように一刺

しかし、先ほどまで慢心していたのか、背後からの殺気に遅れて気づく

振り返り、目に映るは、巨大な口。腕を噛まれる覚悟で、口内から脳に目掛けて突き刺す

帝「ツ!? っらよっ!!」

予想通りか、突き刺す際に、左腕に牙が食い込んだ

先ほど吹き飛ばしたフェンリルが戻って来たのを視認すると、槍を振り抜いて動かぬ巨体を投げ飛ばし、全力で槍を投擲し、死体諸ともフェンリルを貫いた

帝「つてええ……! さすがに神をも喰らう牙を持ちし魔物だな……! っそのこと魔物じゃなくて魔獣に改名しろよ……!」

万能の回復薬ことスペシャルグミを口に含み、傷口を押さえながら槍を回収する

ラタ「お疲れ。お前ちよつと慢心してただろ」

帰還して早々、ラタから悪評を頂いた

流石の悪辣ぶりに思わず俺も苦笑い

まあ事実なので肯定するしかないが

帝「うん……正直たかが魔物に遅れを取る筈がないって油断してた」

ラタ「その結果がそれだ。……ったく、もう少し用心しろ」

帝「へーい」

気のない返事を返しながら、怪我を魔法で治す

なんだかんだ言ってるけどやっぱラタはツンデレだった

ラタ「お前も人のこと言えんからな。めちやくちや恥ずかしくなつたときお前ツンデレになつてるからな」

帝「じゃあかましい! あとさらつと心読むな!」

おのれラタトスクめ! ユルサン!

そして道中、ジャンヌに心配されながらも、目的地についた

帝「着いた、これが崩呪ほうじゆの析石きせきだ」

女神像のような石が、壁に埋め込まれた場所に到着する
帝「さて、ジャンヌ、オルタ、こつから仕事だ。頼んだ」
ジャンヌ「はい、お任せください！」

邪んぬ「何で私までやらなくちやいけないのよ……」

それから二人は、祈りを捧げる体制になった

暫く経ち、祈りも終わる

最後に、俺は星文字魔法アストロメリアを発動するための詠唱に入った

帝「――是は忌むべき世界の果てに在るもの

――万象を恨み、憎み、妬み、嫉み……

――其は世界を拒絶せし物

――其は世界より拒絶されし物

――全ては只の偽善なり

――其の言の葉の根元たるは悪

――其の正体たるは破壊

――破壊の我欲を、叡智を以て抑制す

――破壊を示す星の息吹きよ、我が声に答うるならば、今ここにそ

の意を示すがいい

Done of use to end
破壊は既に、完了した」

詠唱を終えると、まるでガラスの割れた音が周りに響く

ラタ「……痣は消えている。体の調子はどうか？」

帝「心なしか、体が軽い。成功……かな」

「フオウキュキュウ」

帝「なんだこれ？」

猫だかりスだか犬だかよく分からない生物が足元にすり寄って来たので、持ち上げてみる

「フオウ？」

ラタ「おい待てエミル！そいつ！」

帝「なんか可愛らしいな……わぶっ!？」

突然、俺の手をすり抜け、頭の上に乗ってきた

「フオウきーん！どこに居ますかー？」

ラタ「……エミル、今すぐそいつから離れたほうがいい」

帝「え？なんで？可愛いのに……」

ラタ「いやまあ確かに可愛いと思うよ？でもまじでやめとけ。そいつは魔猫キヤスパリーグと言って、気性がだいぶ荒いねk「あー！いきました！」……………」

急に現れた少女によって、ラタの言葉は遮られてしまった。哀れなり

帝「えーつと、君はこいつの飼い主？かな？」

「飼い主……みたいだと思います。さあフオウさん、こちらへどうぞ」

少女は腕を軽く広げ、俺の頭に乗った白い生物ー少女が呼ぶフオウを受け止める体制になったが、なぜか俺の頭から動かない

「……どうやら懐かれてしまったようですね。えつと……」

帝「？……ああ、皇 帝だ。エミル・キヤスタニエとも名乗ってる。嬢ちゃんは？」

「それが……わからないんです。マシユ・キリエライトという名前以外が……」

帝「……あちゃー……記憶障害……或いは記憶喪失か……」

また大波乱が起きそうな気がする……

To be continued.

実は朝滅茶苦茶体が怠かったり重かったり……by
帝

帝side

いつもと同じように、ベッドから起き、軽く欠伸をする

寝惚け目を擦りながら、横に置いてある棚の上のタッチパネル式の
ケータイを手に取り、時刻を確認した

しかし急に違和感を感じる。よくよく見れば、ホーム画面の日付
が、俺の記憶がある日付より、一週間経っている

帝「ん？何だこの手帳？」

枕のすぐ横に置いてあった手帳を取り、表紙を見る

題名は、監禁性活（誤字に非ず）日誌

帝「何!?!何なの監禁性活って!?!誤字に非ずってなんなの!?!」

大声でツツコミを入れ、試しに1ページ目をさっと流し読みし、途
中で閉じた

帝「ダメだコレ……自主規制必須だわ……」

全部一応読み、深いため息を吐いた

内容を要約すると、一週間ジャンヌに監禁され、一日中こつてり搾
られて死を覚悟したというものだ

帝「……うん、思い出した……もう女体は懲り懲りだ……」

まあジャンヌはテネブラエからかけられた催眠があったから許そ
う

だがテネブラエ、テメエは後で殴る

元凶はテネブラエなんだし別に殴っても悪くないよね
さて、それよりもだ……っっておい待て

あることが頭に浮かび、急いで手帳を開く

帝「……やっぱり生でやってたあああああああ!!!」

手帳を床に叩きつけ、壁に頭を何度も打ち付けた

帝「バカヤロオ……学生のうちに親になるとか笑えねえぞ……」
あんまりのことに、膝から崩れ落ちる

帝「……仕方ない、俺も男だ。腹括って親になろう。金は……まだ悪魔になつて契約で稼ぐか……?」

とにかくマジで仕事探した方がいいかもしれない
いやそりゃあ、リアスと美優とやるときはいつもコンドーさん着けてますよ?でも今回無しで一週間だからね!?妊娠しちゃってる可能性は大いにあるよ!うわあああああ!!!マジでどうすんだよコレエエエエ!!!

頭を抱えて、床を転げ回り、地上に打ち上げられた魚のようにビクンビクンと跳び跳ねる

そんな中、部屋に轟く程大きな腹の音が鳴った

帝「……そういや、飲まず食わずだったな……なんかテキトーに作るか」

部屋着姿のまま、階段を降り、居間にたどり着いた

エミヤ「おや、もう歩いて大丈夫なのか?マスター」

真っ先に声をかけてきたのは言わずもがな、エミヤである

というかも居間に着くといつもエミヤが一番最初に口を開いているような……

エミヤ「当然だ。マスターを見かけたら挨拶をするのは使い魔として当たり前なことだ」

何ツ!?貴様、いつ読心術をツ!?

エミヤ「フツ、読心術はサーヴァントにとっては必須スキルさ」

帝「とか言ってるけど本当は?」

エミヤ「念話のパスを一方的に無理やり開いて心の声を聞いているだけさ」

帝「なんという恐ろしい奴……!って、そうじゃなかった。エミヤ、なんかテキトーに作ってくれるか?腹減って……」

エミヤ「了解した。だが一ついいか?」

帝「ん?どうした、言ってみ?」

エミヤ「一週間ぶりのまともな食事なのだから、少し豪勢に作ってしまつても構わんのだろう?」

帝「宜しく頼む、料理長」

珍しく即答してしまった。そんなに腹が減ってるのだろうか？
そして次々と出された料理を、貪るように食べ尽くした
エミヤも本気の料理ができたのだろうか、調理中の顔が輝いてた気がする

帝「くふっ……朝から肉というのもキツイな……」

エミヤ「すまん……少し調子に乗りすぎた……」

帝「いや……美味かったからいい……」

エミヤ「そうか……せめてもの詫びとして、紅茶でも飲んでリラック
クスしていてくれ」

帝「ん、サンキュ」

食器を洗う音をBGMにして、紅茶を飲んで一息つく

暫くして、洗い物が終わったのか、エミヤが向かいの席に座る

エミヤ「……マスター、ジャンヌとは何か進展はあったか？」

帝「ツ!?ゲホッ!ゲホッ!ゲファツ!!」

神妙な面持ちで、聞かれた質問に驚き、気管に紅茶を詰まらせてしま
まった

エミヤ「ほう、その反応……つまりは……」

すると途端にニヤニヤしてこちらを愉しげに見るエミヤ

帝「な、なんだよ!?別に進展があった訳じゃ……」

ふと脳裏に一週間の記憶が過る

帝「あつた訳じゃ……」

どう考えても一歩どころか三歩四歩ぐらい進展してんじゃねえか
よバカタレエエエエエ!!!

帝「……アツタワケジャナイヨ……?」

エミヤ「そこまで白々しく言われてもな……もうどうせ私にはバレ
てるのだから思いきって吐け」

帝「言わねえぞ!?絶対言わないからな!?!」

スカサハ「ほう、病み上がりだから少し心配していたが、どうやら
杞憂だったようだな」

帝「うへっ、スカサハさんかよ……ビツクリしたな……」

スカサハ「ん?女に対しての口の聞き方がなっていないようだな?」

帝「す、すみません……」

スカサハ「まあ、少しでも申し訳ないと思っっているのならいいだろう。それと少し話は変わるが、一週間前に私が言ったこと、覚えているな？今日の昼だぞ」

帝「……わかりました。多分宝具の嵐になると思うんで瓶詰めの人數分用意しておきます」

あれ？待って、九人分だよ？貧血にならないよね？出血多量で死なないよね？

少し顔を青ざめさせながら、部屋への階段を上った

—————

時刻は変わって昼時、地下の訓練室では激しく鉄同士がぶつかり合う音が響く

帝「チツ！意地でも覇煌龍の詠唱をさせないつもりかっ！」

実はこの訓練、かなり実践に近い感じでやっている

つまり詠唱も待ってくれない。慈悲はないようだ

今訓練に参加してるサーヴァントは八人。ジャンヌは俺を見る度に顔を真っ赤にするので、訓練にならないとスカサハさんが外したん？一人多い？まあその一人は後々判明するとして、ジャンヌは部屋の隅でこちらをじっと見てるよ。特に俺を

正直視線が気になってやりにくい……

因みにマシユも見学したいとのことで、ジャンヌの隣でちょこんと座っている

クー「オラオラ！どうした、手の動きが鈍ってるぞ！」

帝「うっせ！こっちにも対応力の限界ってもんがあんだよ！」

片手に槍、片手に剣を構えながら、エミヤの放つ剣とアニキの神速の槍を防ぐ

沖田「ハッ！」

総司が持ち前の敏捷性を用いて、俺の胴に鋭い突きを放った

それを剣で進行方向を反らし、刀ごと総司を弾き飛ばした

続いて振るわれた槍の薙ぎ払いを跳んで回避。そのまま宙で体を一回転させ、遠心力を乗せた蹴りをアニキに放ち、吹き飛ばした

間隔を入れず突っ込んできたスカサハさんとアルトリアさんを牽制するように地面から俺を囲むようにして大量の神淵剣を出現させる

帝「よし、今なら……！」

――我、目覚めるは……

覇の真髓を追い求め、覇の極みへと至りし龍神帝王なり……

――無双に憧れ、夢想に焦がれる

――我、万物を浄化せし破邪の光を以て

――汝、光輝く夢想の世界へと導こう！」

詠唱が完成し、再びあの姿へとなる

覇龍化の余波で周りの剣は砕け散った

帝「あい不意を突かないよ燕青の旦那ア！」

背後から放たれた拳をすんでのところで受け止める

燕青「嘘だろ!?アサシンの気配遮断使ったのに!?マスターあんたも

うマジで軽く人間辞めてんじゃねえかよ！」

帝「残念！元が人間じゃないから非人間扱いしても無駄なんだよね！」

言ってるのかなしくなってくるな……あれ、おかしいな、眼から汗が……

燕青「ま、いいさ！後は頼むぜ！アルトリアの姉御！」

帝「あつ、嘘?!」

いつの間にか拘束を逃れ、逆に俺の腕を掴んで投げ飛ばした

アルトリア「マスター、ご覚悟を！」

アルトリアさんが燕青を通り過ぎて此方に肉薄する

帝「やっぱやるしかないのね！」

体を無理やり動かし、一回目の着地で足の裏を床につける

しかしそれだけでは飛ばされた勢いを殺し切れないので、後ろに滑りながら回転する

アルトリア「ツハアアツ！」

アルトリアさんの槍の距離範囲内に入ると、強烈な風を纏った一突きが放たれた

俺はそれを上半身を後ろに倒して回避。その勢いのまま床に手を
つけ、カポエラの要領で槍を蹴り、触手を一つに束ねて壁へと叩きつ
けた

帝「ぐうつふにゅっ!？」

完璧に止まったところで、ある大男が大剣を俺に向かって振るった
「くっ、地味に気の抜ける声を出すのは止めてくれるか、マスター」

帝「ちよつとぐらい手加減してくれてもいいと思うよ!? ジークフ
リート! 一応俺龍の血が流れてる訳だからその大剣の一撃が俺に
とって致命傷と同等なくらいのダメージになるんよ! わかる!？」

ジーク「……すまない……だがこれも訓練だ。我慢してくれ、マス
ター」

帝「畜生! 説得失敗!」

叫びながらジークフリートを押し戻し、大剣を弾いて横腹を押すよ
うに蹴り、距離を取る

クー・エミヤ・スカサハ「ゲ突き穿イつ死ゴ翔ルの槍ク!!!」

帝「え? あつちよつ、どわあああああああああああああああ
少し息を整えている所で放たれ、回避するも、着地点が爆発ウ!!!、思
いっきり吹き飛ばされ、壁に強く頭を打ち、気絶してしまった!!!」

訓練はこうして不完全燃焼な状態で終わった

To be continued.

酷いわ作者ツ浮気はしないって言ってたのに！そんなに私のことが嫌いなもの？教えてくれたら頑張って直すか（ry by帝

帝side

思考は目の前に広がる星の海のように広く深く落ちていた

その考えは、最早掌返しと言ってもいいほどに今までの俺の思いからは矛盾していた

「……ハア……どうにも、アイツの行動理由はもつと別にあるように見えるが、根拠が分からない以上は何とも言えんか……」

自問自答を繰り返しながら、再び絶対悪サエルに近き悪フリートについて考えた

「まあ、このまま考えても埒が明かないか」

俺からすればアイツは悪だ。それでもアイツは恐らく自分の行為を善……正義と考えているだろう。もしその行動理念が己の為でなく誰かの為のものであるとすれば……

俺の耳には自分の声が届いていなかったらしい

—————

「よし、もういいぞ帝」

アザゼルは計測を終え、透明な扉を開けた

「やつと終わったか……」

体中に貼り付けられた計測器を外した

最初は冷たくひんやりとして心地よかったそれも、膨大な熱を帯びていた

「あづつ!?!……火傷した……」

「おいおい大丈夫かよ……どうしたんだ？いつもは自分から外したりしねえ癖に」

「いや、なんだか胸騒ぎというか嫌な予感というかな……で、それで？

覇煌龍と禁手第二段階の同時併用の調子は？」

「おう、同調率98%だ。後は維持に必要な魔力と体力だが、正直魔力はそうでもないだろ。別に戦闘に使う分には構わんが、それは奥の手

にして短期決戦で望め。長引けば長引く程お前の不利になる。最悪体が耐えきれずに身体の機能を無くすからな」

「わかってるよ、それぐらい。それより早く体力剤くれ……スゲー疲れてんだよ……」

「おっと、そうだったな。ほらよ、グリゴリ印の疲労回復剤入りの体力回復剤だ」

「……大丈夫だよなこれ……？前みたいに精力剤入れてないよな？」

「ん？入れてるが？」

「よし一発殴らせろ」

殴るといふ言葉とは一切関係ない剣を取り出した

「わ、わかったわかった！わかったからその剣を降ろせ！異形殺しの概念が付いた剣で切られたらいくら俺でも死ぬからな」

「え？死ねばいいじゃん。どうせ生きてても面倒事しか起こさないくせに」

「おいテメエこの状況でそれを言うか!?俺だって多少は役に立ってるだろー!」

あつげらかんと答える俺にアザゼルは猛反撃した

「ふーん、例えば？あ、これは無しで」

「ち、ちびちびマシーン一号君とか……」

「アレのどが役に立つんだ!?ええ!?言ってみ!」

「ほ、ほら使えるだろ?そういうプレイとかに……」

「使えるかバカヤロオオオオ!!!……他には……?」

「精力剤とか……」

「アホかつ!」

「***とか……」

「誰か規制掛けろおおお!!!」

「全自動性欲処理機とか……」

「なんだそれ!?初めて聞いたわ!」

「腕相撲に勝てる神器とか……」

「これに至っては論外ッ!」

「あとは……」

「もういい、わかった……」

まだ続けようとするアザゼルの言葉を手を出して遮った

「……………お前下半身に関わるモノしか作ってないな!？」

最後に至っては使う用途がねえだろ!? さっき言ってたのは嘘か!?

なんか言えよこの脳内ドピンク万年発情期未婚総督!!!

一閃光と暗黒の龍絶刀《ブレイザーシャイニング・オア・ダークネスサムライブレード》総督!!!

女の尻揉んで墮天したというのは伊達じゃないね! 墮天使だけに

「オイそれどこで知りやがったああああ!!!」

「企業秘密じゃああああ!!! って突っ込むとこそそこお!?」

ゼエゼエハアハアと互いに切らした荒い息を整える

「アザゼル、これ以上やっても不毛な言い争いだと俺は思うんだが……………」

「よ、よし、ここは一時休戦だ……………」

「ああ、そうしよう……………」

アザゼルから受け取った体力回復剤を原液で飲んだ。しかし、普段は発動しない俺のうっかりが発動した

「……………」

下半身に膨大な熱を感じ、思わず前屈みとなった

「……………どうした……………まさか飲んだのか……………」

「……………そのまさかだ……………」

認識障害の魔方陣を即座に下半身に組み込み、俺以外の人物からは見えないようにした

アザゼルは見たくもないものを見てしまったというような表情だった

「お前のって結構でかいのな……………!!」

「言うなあああああああああ!!!」

「ぐわぶうっ!？」

アザゼルの顔を殴り飛ばして、目元に腕を当ててその場から逃亡した

あれ、なんだろう……………人殺しして怖くなってその場から逃げ出した

犯人みたいな心境……

程なくして居間にたどり着いた

はい、ここで問題です。居間には上気した表情の女性陣の方々がいます。近くにはリアス、美優、ジャンヌがいます。この後俺はどうなるでしょう

A. 捕まります

「あ、エミルくちよつとこつち来てえく」

リアスは俺の手首を掴み

「ほら、エミルくん早くう、無くなつちやいますよお？」

ジャンヌは腕に抱き付き

「お兄ちゃんも一緒に食べようよお、美味しいよお？」

美優は俺の背後から抱きつく

おい待て!? 美優お前いつの間にバックとりやがった!? 全然気づかなかつただけど!?

「アハハハハハ! ちきしょう! 離れるおおおおおおおお!!!」

勿論俺は抵抗した。だってね……ぼくのつるぎがかたくなってるんだもの……知られるわけにはいかないっ!! というか最早痛いっ!! しがみついてきたやつらからは、微かにアルコールの匂いが漂っていた

「まさかお前ら、来客用のウイスキーボンボン食ったな!? 畜生やつてられるか! 去らばでござるっドローン!」

ここで炸裂したのは俺の新技、シャドウダイヴである

補足説明をすると、自信の体内で形成した闇の魔力を影として表面に出し、瞬間的に自分の体を影とする技である

魔力消費も少なく、回避には結構重宝できるので、これから先お世話になるかも

まあ弱点らしい弱点と言えば光や聖なる力には弱いってところなんだけど……っていうか影がない場所だと使えない……あれ？結構致命的な弱点が多い……？

そんなこんなで拘束から逃れた俺は現在キャスタニエ邸を疾走中
眼前から迫る朱乃さんを壁キックで回避

後で壁の汚れは落とすとして、追っ手からの視界から外れた俺は、近場の部屋に潜伏させていただくことにした

あ、ここってアルトリアさんの部屋じゃねえか……

退散しようとドアノブに手をかけると同時に、俺の手首を何者かが掴んだ

「ふふふ、どこに行こうというのですか？マスター」

部屋の照明がつくと同時に暗闇から浮かび上がったのは、満面の笑みでニコニコと笑うアルトリアさんだった

その目は、まるで獲物を見つけた獅子のようだ。……いや訂正。獅子である

「……僅かながらに漂う逞しい雄の匂い……もしかしなくても……マスター、私でよければお相手しますが……？」

「結構ですつ!!!」

シャドウダイヴの応用で今度は肘から先の腕だけを影とし、微かに空いたドアの隙間から、体を影にして通り抜け、廊下を駆け抜ける

「アハハハハ！もう死んじやえよミカド！」

「う、うるさい黙れえ！今捕まったら本気で死ぬからあ!!」

【ご主人様ご主人様あくボクでよかったですらー】

「結・構・デス!!!」

「……………もう諦めて捕まっちゃえよ、ミカド……………」

「ゼフィいいいい!!?さっきの話聞いてたかあ!!?捕まったら俺死ぬから

!!あの人達明らか獣の目してたから!!皆さん頭のネジぶっ壊れてるから!!腹上死とか笑えないから!!俺は諦めんぞ!!絶対!!何があるうと!!」

「女の子には勝てなかったよ」

「何処の即落ち2コマだああああ!!!楽しげに言うなシエル!マジで現実になったらどうする気だ!!!」

心の声で喋れるがそれをできないくらい焦りっぷり……わかります?

閲覧者の方々脳内フレンズに問いかけて……待つてなんか今変なルビ入ったあ!?

全力疾走の末、とうとう自分の部屋にたどり着いた

「よ、よおし、鍵かけてっ……」

腕で汗を拭い、ガチャリと音が鳴つたのを確認して前を見ると、あらビックリ、目前には邪ンヌちゃんがいるではありませんか

じゃあ何、あれか?焦りすぎて邪ンヌの部屋と俺の部屋を間違えたと?……あり得るね。一応お隣の部屋なわけだし、疲れて距離感覚が麻痺ってきてるのもあるだろうし

「……………なんでアンタ来てんのよ……………」

「えっと……………」

どうすべきか脳をフル回転させ、悩みに悩んだ末導き出したのは……………

「お願いします邪ンヌ様、どうかこの私めを暫しの間匿ってくださいませ」

端から見ればキレイな土下座だろう?惚れ惚れするぜ

あん?男のプライド?……なんだねそれは(錯乱

To be continued.